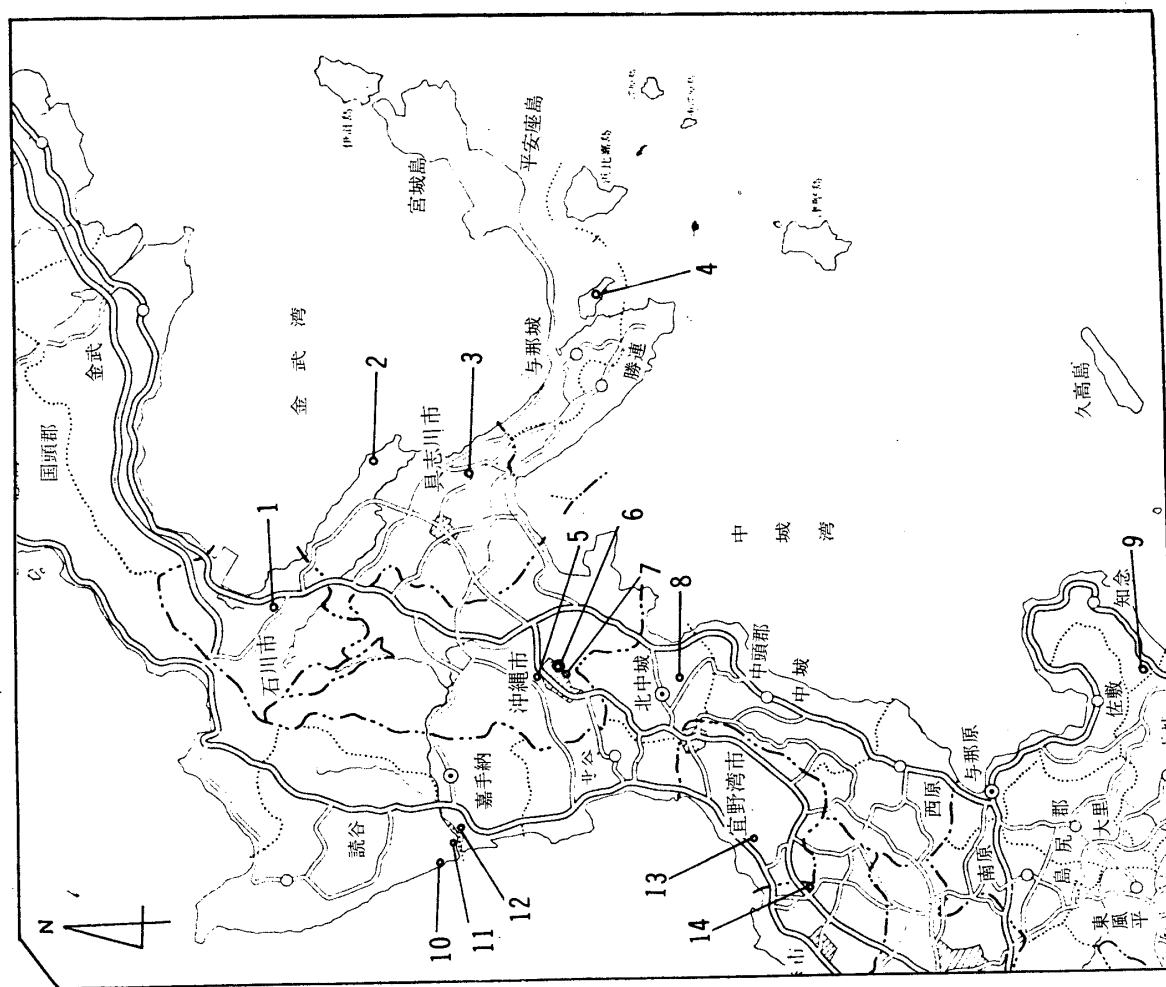


- | | |
|------------|--------------|
| 1. 伊波貝塚 | 8. 荻堂貝塚 |
| 2. 隅原遺跡 | 9. 熱田原貝塚 |
| 3. 地荒原貝塚 | 10. 渡具知木綿原遺跡 |
| 4. ヤブチ洞穴遺跡 | 11. 渡具知東原遺跡 |
| 5. 八重島貝塚 | 12. 嘉手納貝塚 |
| 6. 室川貝塚 | 13. 大山貝塚 |
| 7. 仲宗根貝塚 | 14. 浦添貝塚 |

第1図 室川貝塚の位置



凡

例

1. 本報告は過去室川貝塚において実施した第1～5次発掘調査のうち、第3～5次発掘調査（Tトレンチ）の概要である。
2. 報告書の作成にあたり、遺物の整理や実測図の作成および執筆を下記の両名が担当し、文章は高宮が補筆した。

山 内 勝 美

下 地 安 広

3. 写真は上地正勝氏が担当した。
4. 石質や獣魚骨の一部および貝類の同定については下記の方々にお世話になった。記して感謝申し上げる次第である。

石 質 木崎甲子郎博士（琉球大学）

獣 魚 骨 長谷川善和博士（横浜国立大学）

貝 類 天野鉄夫氏

5. 本文の編年は第91表に従った。
6. なお、調査に際しては沖縄市教育委員会の山城清輝委員長、幸地清裕課長のほか、新城長助係長、仲本朝彦主事にお世話になった。併せて衷心より感謝申し上げたい。

沖国大考古第5号 正誤表

A) 文章の部

頁	欄	行	誤	正	備考
3	右	8	認め [・] れたが	認め [・] られたが	
19	右	25	整 [・] 品	製 [・] 品	
20	左	22	整 [・] 品	製 [・] 品	
23	右	27	よい [・] であろう。	よい [・] であろう。	
25	右	28	T-8第3層	T-8第11層	
87	左	14	口唇 [・] の	口縁 [・] の	
"	"	37	口唇外縁部	肥厚部外面	
95	右	20	頸部の上下に2条	肥厚部外面と頸部に各1条	
101	右	最下行	2条1組 [・] の	2条1組 [・]	
121	左	12	6点	5点	
127	左	第21表	Aは室川A期、Bは室川B期	Aは室川上層A期、Bは室川上層B期	(注)の訂正
129	左	2	～18センチ	～17.9センチ	
"	"	"	～13センチ	～12.9センチ	
134	右	17	366点	336点	
135	左	28	17点	16点	
137	右	6	他の5	他の6	
145	右	7	第8層	第6層	
裏表紙			ka [・] tumi YAMAUCHI	ka [・] tsumi YAMAUCHI	

B) 表の部

頁	表	誤	正
8	第1表	5 648 8 4 324 853 35 25 166 2063	5 648 8 5 324 853 35 25 166 2064
		8 22 1 11 13 1 48	8 22 11 13 1 47
		10 8 1 5 10 26 1 3 53	10 8 1 5 10 26 1 3 54
		11 192 6 10 22 26 3 48 305	11 192 6 10 22 26 3 48 307
		13 6 2 1 2 3 1 3 19	13 6 2 1 2 3 1 3 18
12	第3表	5 2 1 1 4	5 3 1 1 5
		8 1 1	8 1 1
47	第21表	3 1 4 1 5 11	3 1 4 1 3 9
		12 2 1 1 4	12 2 1 1 2 6

室川貝塚 T トレンチ発掘調査概報

I はじめに

本トレンチの調査は室川貝塚の第3次調査（1976）よりはじめ、第5次（1978）まで3年間にわたって実施した。

本トレンチの調査目的は本誌第3号（註1）に記したように、Sトレンチに現われた焼土層の性格解明を目的としたものであった。すなわちSトレンチの第2次発掘調査（1975）において、第5層に焼土面が現われ、住居床面とみるべきかどうか問題になった。Sトレンチは2m×6mの試掘坑であったが、同トレンチのほぼ全面に焼土層が認められた。ただ、この焼土層は南から北の方へ10°ないし30°の角度で傾斜しており住居床面とは考え難かったが、念のため第2次発掘調査では焼土層以下の発掘調査を保留し、周辺へ発掘区を拡張、焼土層の性格を確めた上で、掘り下げることにした。

上記の目的にそって拡張したのが本トレンチで、まずSトレンチに東接して2m×4mの発掘区を設定した。発掘は1976年7月5日より開始した。T-9の南壁側では焼土層は比較的浅い位置で確認され、Sトレンチと同様北の方へやや急角度で傾斜しており、T-8の北壁では第3層を70cm掘り下げても焼土層に達しなかった。以上の状況から、焼土層を住居床面あるいは何らかの遺構の一部と見做すことはできないと考えたので、前年、発掘を保留したSトレンチの焼土層以下の発掘を進めることにした。

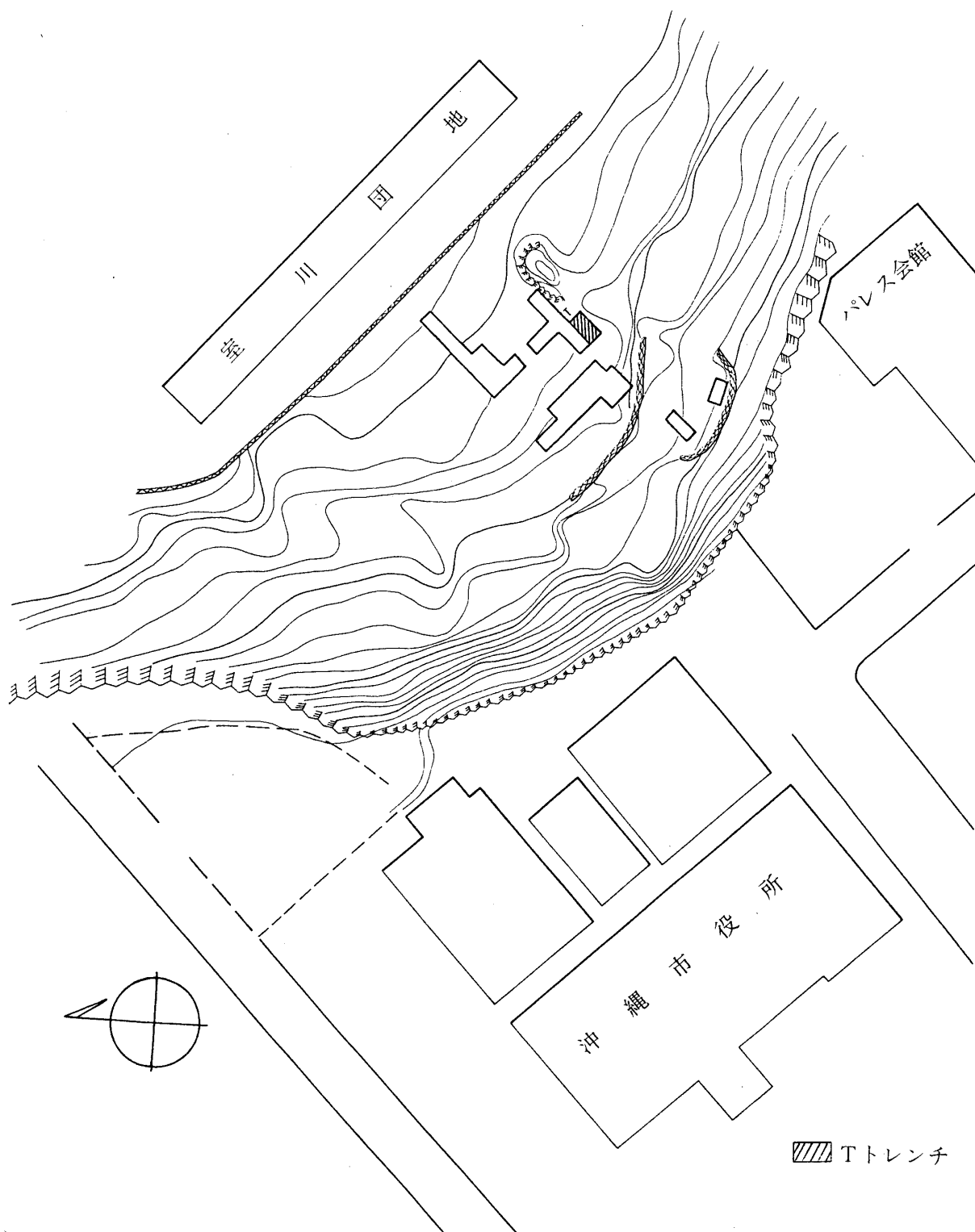
調査初年度はT-8・9の両区とも焼土面の露出に力を注いだ（第1図版B）。そのた

め調査は第3層でとまらざるを得なかったが、先にも記したようにT-8北壁側では同層を70cm掘り下げても焼土面に達せず、初年度の調査は一応、この面で中止した。

人工遺物では宇佐浜式土器の口縁破片が目立ったが、その他石斧もわずかながら出土を見た。特に刮目に値するものは第3層出土の石鏃である。石鏃は第2次大戦前、城岳貝塚でも数点検出されている。しかし、出土層位が今一つ明確でなかった。本層出土の石鏃は沖縄諸島における層位的出土の第1号といえる。これにより、石鏃の使用時期の1点をおさえることができたわけである。その後、隣りの具志川市地荒原遺跡でも石鏃の出土があり、使用時期が次第に明確になってきた。

本トレンチの第2次（室川全体からすれば第4次）発掘調査は1977年8月2日から同月20日までの19日間実施した。層は全体的にT-9（南）からT-8（北）へ傾斜し焼土層も同様の傾斜を示していて、それを追っていくとT-8中央で切れ、以北にみられない。第2次調査は焼土層の地域を一時保留し、T-8北半の部分に重点をおき、同地区を最下層まで掘り下げた。

次項で詳述するように、この地区では何枚もの薄い貝層が重なり合って複雑な堆積状況を示していたが、それらに含まれる土器に大きな時期差は認められず、短期間に堆積したものと解された。T-8北半の地区は大山期後半（第21図126のカヤウチバンタ式は大山期後半のものとみられる）から室川期のころ



第3図 室川貝塚地形図

人為的攪乱を受けたものと推察される。すなわち焼土層はTトレンチにおいてもおそらく全面に広がっていたであろう。しかし何らかの理由で上記の時期に掘り止められ、その後、大山後半以降の資料が堆積していったものと考えられた。前回報告したSトレンチの7・8両区でも焼土層に穴の開いた箇所が数ヶ所あり、われわれが「落ち込み」とした部分であるが、おそらくT-8北半の状況と一致するものと思われる。

本トレンチの第3次発掘調査は、貝層の堆積状況をもう少し具体的におさえる必要が生じたため実施したもので、1977年の冬、約9日間（12月22日～30日）行った。調査はT-8北半に限定し、同区の北壁を約50センチ北へ延長して掘り下げた。しかし、期間が短

かった上、雨の日が多く、第6層（混貝土層）を露出した段階で終わった。

本トレンチの第4次発掘調査（本遺跡全体からすれば第5次）は1978年8月8日から翌9月4日まで行った。第3次の際、掘り残した部分の調査である。最下部は東西両壁から石灰岩が迫り、石灰岩礫の隙間にも混貝土層が認められたが、時間がなく調査を打ち切った。

以上が本トレンチの調査経過である。本地区では、過去4回にわたって発掘調査を行ったが、T-8区における複雑な混貝土層の重なりにより時間をとられ、T-9区は焼土面で止めたままになっているが、いずれ機会をみて、同区の調査を実施したいと考えている。

II 層 序

本トレンチの層序は最下層の地山を含めると18枚である。ただし、この18枚はT-8区の層相であって、上方（南側）のT-9区には中央区から延びる焼土層（第4層）が広がっており、そのため焼土層以下の発掘を控えたが（第4・5図）、もし、焼土層以下が未攪乱であれば、T-8区とは別の、むしろ、西接するSトレンチと同様の層相になるものと思われる。

T-8区は前項でもふれたように、大山期の終末ごろから室川期のころにかけて攪乱を受けており、したがって焼土層は認められなかった。そこで同区では試掘を続行したわけだが、第13層より上の層は攪乱後の堆積とみてよいであろう。第14層出土の伊波式および荻堂式土器は攪乱を免れた部分の遺物とみる

ことができ、Sトレンチの第6あるいは第7層に連続する層と解される。

次に各層の特徴について略述する。

第1層

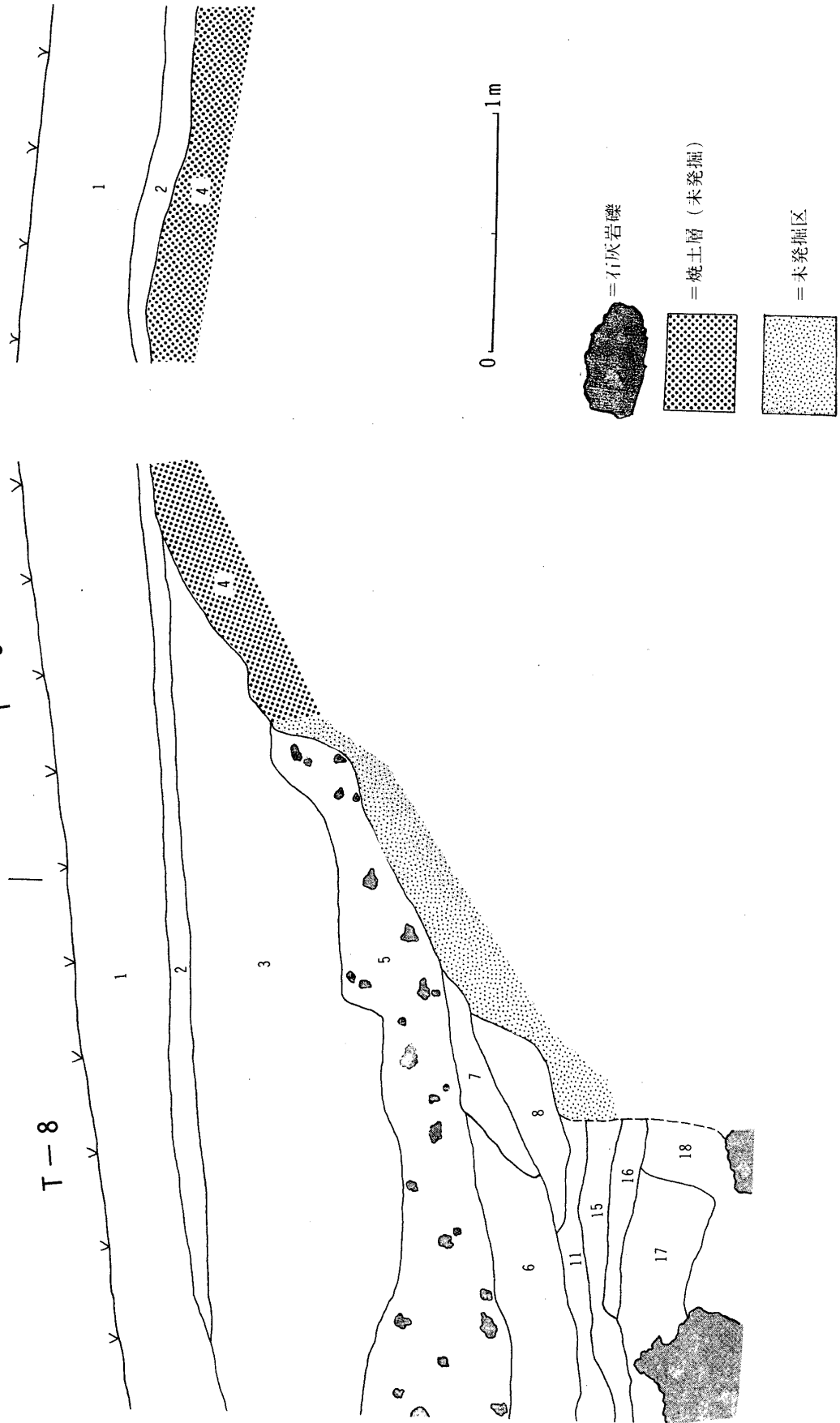
暗黄色の耕土で、遺跡のほぼ全面に広がっている。厚さは30～50センチ。全体的に南側から北へ傾斜する。耕土であるから攪乱を受けており、先史土器片のほか後世の物質などを含む。

第2層

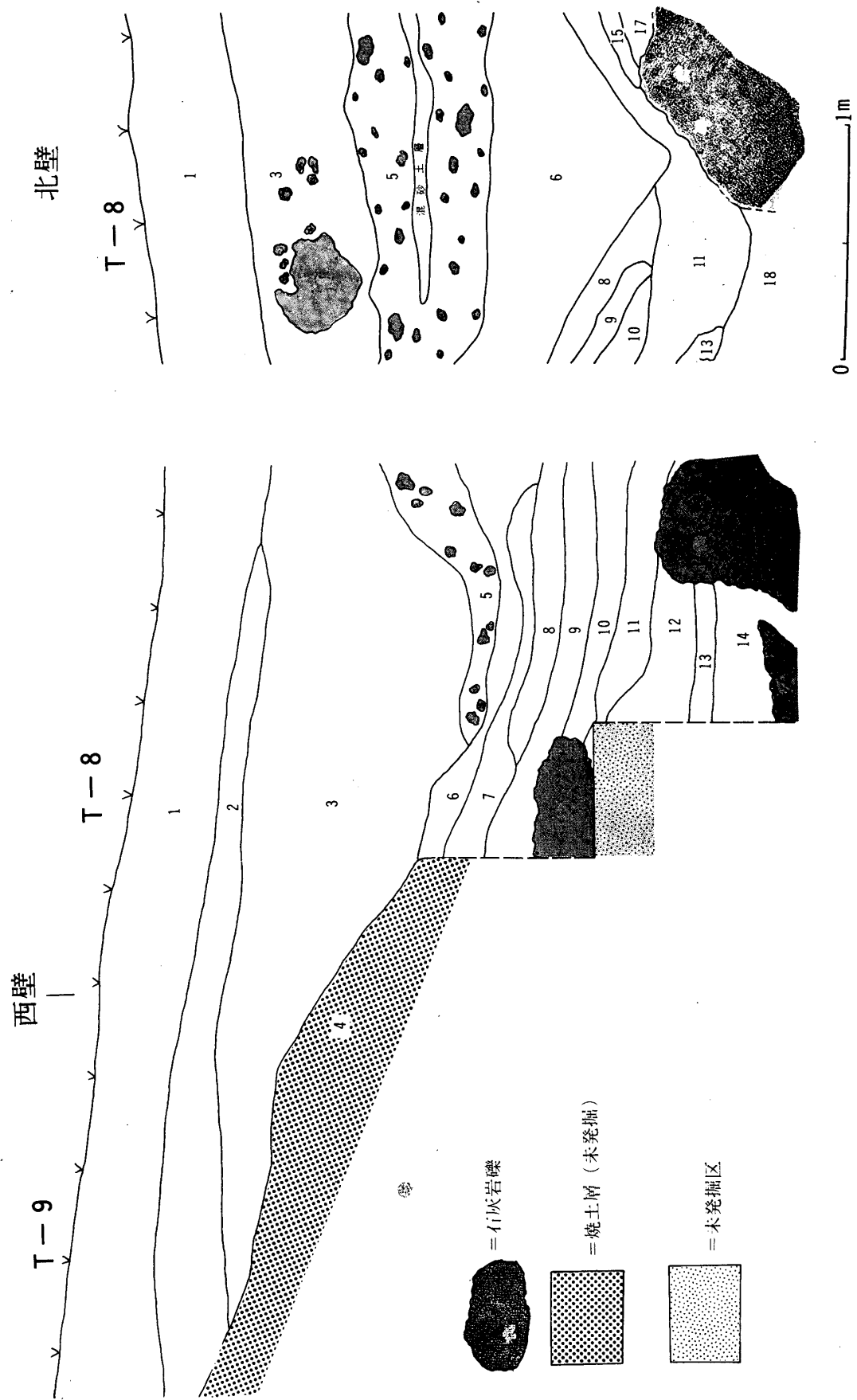
暗緑黄色の土層で、厚さは10～15センチ。第1層の底部にそって南から北へ傾斜しながらほぼ帯状の分布を示す。本層はT-8区の北壁近くで消滅する。大山式のほか室川上層

東壁

T-9 南壁



第4図 側壁図(東壁・南壁)



第5图 侧壁图(西壁·北壁)

式や宇佐浜式などが出土したが、後者（縄文晩期相当）が圧倒的に多い。本層では貝塚期以後の後代の製品は見受けられなかった。

第3層

黒褐色の土層であるが、赤い粒子（焼土の粉末か？）を比較的多量に含み、そのため赤黒くみえる土層である。この層は本遺跡のほぼ全体に広がっており、本トレンチは、そのほぼ東北端部にあたる。この層も南から北へ傾斜し、北へ厚さを増し、最厚部は約1メートルもあるが、南壁には及ばず、その手前で切れている。貝は見受けられなかった。しかし、獣魚骨は多かった。土器は伊波式から宇佐浜式まで、各種の土器が検出された。そして新しい型式ほど出土量は多く、その中には特に室川上層式や宇佐浜式が目立った。

第4層

中央区から延びる焼土層で、本トレンチのほぼ中央で止まり、T-8区では欠けていた。これは前述のようにT-8区が当時何らかの理由で攪乱を受けたためと考えられる。本層も南から北へ、やや急角度で傾斜する。南壁側では本層は第2層と接するが、他は第3層の下位にくる。発掘は本層の上面で止めたので、遺物の採集はなく、また、層厚も不明である。

第5層

第3層と同じく赤黒の土層であるが、石灰岩の小礫を多量含むので、第3層から区別した。本層はT-8区だけにみられ、北へ傾斜し、層も北へ厚さを増す。土器は伊波式から宇佐浜式までみられるが、胴部の破片も含めると室川式が優位を占める。

第6層

黒色の混貝土層で、前記第3・5層のように比較的固い土層である。T-8区のほぼ全面に広がっているが、東壁の南側では欠除している。この層も北へ傾斜し、北壁の箇所以最も厚い。貝は西壁側で少く、北・東壁側へ多くなる。土器は伊波式から宇佐浜式までの諸型式が採集されたが、室川式が相対的に多い。

第7層

黄褐色の土層で、層厚は薄く、南から北へゆるやかに傾斜する。層は南壁側で厚い。貝は見受けられない。この層はT-8区のほぼ南半部に広がり、北壁でみると西壁側にわずかに及ぶ程度で、東北側では欠けている。土器は荻堂式や室川式などが検出されているが、宇佐浜式とみられる胴部の破片も3点発見されている。

第8層

黄褐色の混貝土層で、土の色は第7層と同じ。層は薄く、南から北へ傾斜する。この層もほぼ南半部に広がり、東北部では欠けている。土器はカヤウチバンタ式や室川式などが採集されている。

第9層

黒色の薄い混貝土層で、南から北へ傾斜する。層厚は南壁側で若干厚い。東北側では第6層によって切られ、したがって側壁図には現われない。土器は大山期や室川期とみられる胴部破片が数点得られただけである。出土量は少ない。

第10層

第8層と同色の混貝土層で、層厚は薄く、南から北へ傾斜する。この層は西南側に分布し、東北隅へ及ばない。土器は萩堂式のほか室川式も若干採集されたが、出土量は極めて少い。

第11層

黒色の混貝土層で、層相は第9層に類似。この層も南から北へ傾斜し、北壁側で最も厚い。T-8区の全面に認められる。この層は東壁側では最後の混貝土層となる。土器は比較的豊富で、伊波式から室川式までの各タイプが得られたが、若い方では室川上層式の破片も数点見受けられた。しかし、後者は混入の疑いが強い（結語参照）。

第12層

土の色は第10層に近いが、いくらか茶褐色を帯びている。この層は西南部に分布する小さな土層で、東北部には及ばない。他の層と同じく南から北へゆるやかに傾斜し、南側に若干厚い。小範囲の土層であるが、土器は比較的豊富であった。伊波式から室川式までの各タイプが出土している。

第13層

黄褐色の混貝土層で、層厚は薄く、やや水平方向の堆積を示す。分布は西壁側の一部に限られ、東半部に及ばない。土器の出土量も少く、カヤウチバンタ式や室川式などが数点出土しただけである。北壁面における最下位の混貝土層である。

第14層

暗褐色の混貝土層で、西壁側に分布する。同層の下部は石灰岩礫の間に落ち込み、発掘

が困難で、今回は途中で打切った。本層の土器は伊波・萩堂期のものに限られ、そのことから攪乱を免れた最下位の文化層とみることができる。おそらくSトレンチの第6あるいは第7層に続くものであろう。

第15層

暗黄色の混貝土層で、層は薄く、南から北へゆるやかに傾斜する。東壁側にのみ分布。貝の量は少い。地山への移行層で、伊波～大山期のものとみられる胴部破片も1点出土。貝や土器片は上層からの陥入であろう。

第16層

暗黄色の土層で、地山への移行層である。土層は第15層と同じだが、貝の混入がみられないので、区別した。東南隅の限られた範囲に分布し、人工品も見受けられなかった。

第17層

地山の黄色土と上位（第16層）の暗黄色土の混り合った部分で、色は第16層より明るくなり、地山の色へ近づく。これも地山への移行層である。第16層の下部とみても差支えないであろう。人工品は検出されていない。この層は東北隅にのみ分布。

第18層

地山の黄色土層で、北壁から東壁側にみられた。大小の石灰岩礫を含む。この層はSトレンチでは室川下層式を含む層であるが、本トレンチでは、試掘範囲が狭かったせいか、室川下層式は検出できなかった。

さて、上記のように、わずか3メートルの深さに17枚の層（人工遺物は第15層まで）が重なっているわけだが、特に第5～13層は大

山期後半から室川式の最盛期のころのものと考えられ、だとすると短期間に9層堆積したことになる。この堆積状況が当時の人びとの季節的な活動の証跡になりうるかどうか、これについては、今後、同層に含まれる貝や獣魚骨等の詳細な検討により、結論を得たいと思う。

また、第13層より上の層に含まれる伊波式や荻堂式は、当時、焼土層以下の層が何らかの理由で掘りおこされた際、上方へ移動させられたと考えられるもので、その後、浸蝕やその他の原因で、他の後世の土器と一緒に混入したものであろう。したがって、第13層以

上で出土した伊波・荻堂両型式の土器は、これらの層の年代資料としては使えないが、下位の第14層は、前述のように攪乱を免かれた部分とみることができ、Sトレンチ同様、現時点における本地区最古の文化層とみていいだろう。

なお、T-8区は完掘する予定であったが、時間の都合で、できなかった。未発掘区は東壁図（第4図）および南壁図（第5図）にみられるように、同区の南半部である。いずれ、機会をみて発掘したいと思う。

Ⅲ 出土遺物

本トレンチの出土遺物は自然遺物と人工遺物に分けられる。まず自然遺物について記述する。

A) 自然遺物

貝類、獣魚骨、自然礫などがあり、第3層から第7層の中位の層に比較的多かった（第1表）。そのうち、同定を終えたものについてみると、獣骨では猪が最も多く、他にヘビ類、ケナガネズミなどがあり、魚骨ではブダイ科、ベラ科、フエフキダイ科のもの等がみられる。また、貝類ではアラスジケマンガイ、サルボウ、チョウセンハマグリ等が比較的多い。自然礫については11種類認められ、出土量は第2表の通りであった。未同定の資料については、同定のすみ次第報告したい。

第1表 Tトレンチの出土遺物

種 層 序	人 工 遺 物					自 然 遺 物					合 計
	土 器	石 器	骨 器	貝 器	後 世 遺 物	獣 骨	魚 骨	カ メ の 甲	カ ツ ニ の め	自 然 礫	
表面採集	50		1								51
層不明				10							10
第1層	58		1		23	14	10	1		18	125
2	94					20	34	4		1	153
3	2,149	32	1			780	1,042	81	10	151	4,246
4											
5	648	8	4			324	853	35	25	166	2,063
6	141	4	1	10		129	342	33	38	95	793
7	46	3				15	45	2	7	13	131
8	22		1			11	13			1	48
9	8					2	21		1	1	33
10	8	1		5		10	26	1		3	53
11	192	6		10		22	26	3		48	305
12	135	1		1		7	37	1	1	11	194
13	6	2		1		2	3		1	3	19
14	6	1									7
15	1										1
16											
17											
18											
計	3,564	58	9	37	23	1,336	2,452	161	83	511	8,234

第 2 表 T ト レ ン チ 出 土 の 自 然 礫 (除 石 灰 岩)

層 序	石 質	輝 (名 護 層) 岩		黒 (名 護 層) 岩		千 輝 (名 護 層) 岩		砂 (名 護 層) 岩		砂 (嘉 陽 層) 岩		砂 (名 護 層) 岩		チ (本 部 層) ト		ヒ ソ 岩		石		第 三 紀 砂 岩		シ ル ト 岩		合 計	
		重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数
第 1 層										259	2	65	2							101	2	354	12	779	18
2										10.75	1													10.75	1
3				68.72	3	182.47	8			1277.12	33	6272	23	1.5	1	115	3	115	5	1470	53	304	22	9805.81	151
4																									
5		149	1	1.0	1	87.39	6	162	1	388.22	36	695	27					202.52	4	2054.5	66	838	24	4577.63	166
6				224	1	173.0	2	256	3	2158.4	18	913	27			565	1	8.0	1	1087	35	911	7	6073.64	95
7				324	1	12.0	1			99	2	72	1			460	1			196	7			842.24	13
8																				8	1			8	1
9																				23	1			23	1
10																				38	2			48	3
11						173.0	3			398	9	635	14							2361	18	11	4	3578	48
12		51	1							10.88	2	130	2							596	6			787.88	11
13																				171	3			171	3
14																									
15																									
16																									
17																									
18																									
合 計		200	2	75.2	6	627.86	20	418	4	4601.37	103	8792	97	1.5	1	1140	5	325.52	10	8105.5	194	2418	69	26704.95	511

※ 重さの単位はグラム

B) 人工遺物

土器、石器のほか貝製品、骨製品も少量得られた。以下、各項目について紹介する。

イ. 骨製品

本トレンチ発見の骨製品は9点（第3表）で、実用品と装飾品に分けられる。出土量は前者が多かった。

a. 実用品

骨 錐

実用品で最も多いのは骨錐で、5点（第6図1～5・第3図版1～5）得られた。いずれも猪の尺骨を利用したものである。第6図1（第3図版1）は完形品で全面よく研磨が施されている。同図左側では斜め方向の、右側では横方向の擦痕が見受けられる。加工は打欠調整のあと先端だけを研磨している。先端は鋭利である。第5層20～30センチ・レベルの出土で、長さは約8.5センチ。

同図2（第3図版2）も、打欠調整のあと研磨を加えているが、上部には、まだ打欠痕も残っている。研磨部では斜め、あるいは横方向の過擦痕がわずかながら認められる。長さは約9.1センチで、第5層20～30センチ・レベルの出土。

同図3（第3図版3）は、遠位端部の欠けたものであるが、中央の破損部付近には研磨痕が残っており、錐の破損品とみていいだろう。長さ7.5センチ。第1層よりの出土。

同図4（第3図版4）は、頭部の欠失した標品で、先端はまず打欠によって粗く整形し、次に研磨を加えて先端を研ぎ出す。前後両側からの加工によってポイントを作り出している点は他と異っている。擦痕は見受けられない。上端の部分は火熱を受けて焦げている。第5層30～40センチ・レベルの出土で、長さ

は約7.3センチ。

同図5（第3図版5）は、先端と頭部をとくに欠くが、先端側には研磨痕も認められ、骨錐の破損品であることは間違いない。前面の研磨部には横位の擦痕も見受けられる。本標品も火熱を受けて黒くなっている。しかし、全面手馴れ様の光沢を有する。表採品で、長さは3.5センチ。

骨 針

第6図6（第3図版6）は頭部を欠失するが、その形状から骨針と考えられるもので、鋭利な先端を残す。先端は丹念に研磨され、擦痕は認められない。長さ約6センチ。第5層10～20センチ・レベルよりの出土。

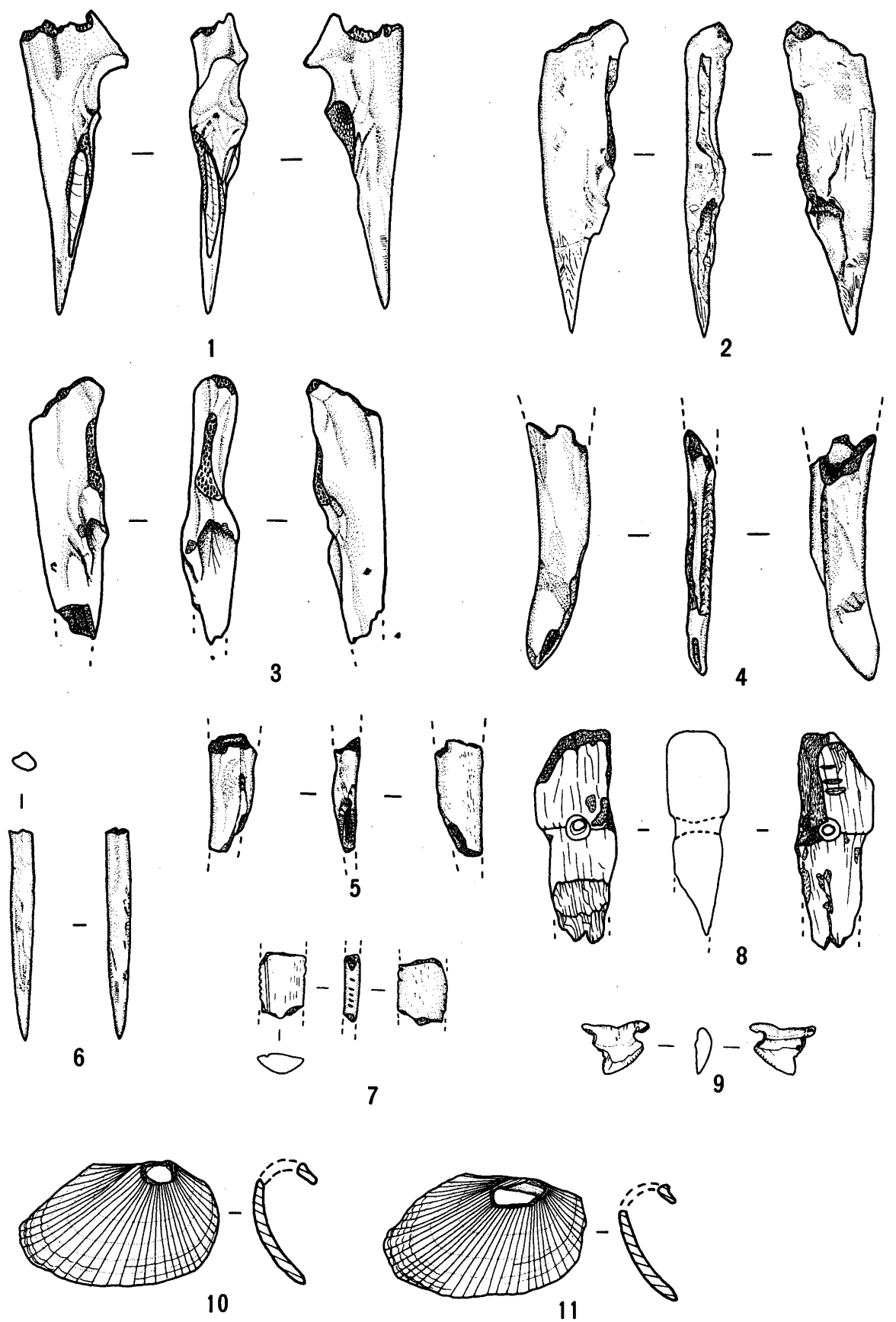
鋸歯状刀子

同図7（第3図版8）は扁平な肋骨の両端に刻みを施す製品で、刻みは図の左端では密であるが、右端は疎である。先端と頭部を欠くものの、前記の特徴から鋸歯状刀子の身の部分と考えられる。表面の平坦面には片方の側縁にそって浅い溝が1条設けられている。このような溝はこれまでの室川例（註2、3）にはなかったものである。第5層0～10センチ・レベルよりの出土。現資料は長さ2センチ、幅1.4センチ。

b. 装飾品

装飾品と考えられるのは第6図8、9（第3図版7、9）の2点である。

8は上部に孔を両面から穿ち、この孔を境いに、頭部と胴部に分けて整形しているが、破損が著しいため全体の形状や大きさは不明。しかし、現存部の形状は大山貝塚出土の骨製簪（註4）に類似しており、大山例よりやや厚みはあるが、簪の一種かと考えられる。摩耗して光沢は消え失せている。現存部の長さ



0 5 cm

第6図 骨製および貝製品

は約6.1センチ。第6層0～10センチ・レベルの出土。

同図9は、イタチザメの歯を利用したもので、骨質部に2孔を穿っている。骨質部は両端とも破損しているが、孔の一部が残っている。

ることから2孔穿ったことは間違いなく、また、いずれも両面から穿ったものと考えられる。歯冠は摩耗し、鋸歯は鋭さを失っている。第3層70～80センチ・レベルの出土。

第3表 骨製および貝製品の出土状況

種 類 序	骨 製 品					貝 製 品								合 計
	実 用 品			装 飾 品		実 用 品					装 飾 品			
	骨 錐	骨 針	鋸 歯 状 刀 子	簪 類 似 品	サ メ の 歯 製 品	貝 刃	貝 錘	斧 刃 状 製 品	貝 サ ジ 状 製 品	用 途 不 明	ペ ン ダ ン ト	貝 輪	用 途 不 明	
表 面 採 集	1													1
第 1 層	1													1
2														
3					1									1
4														
5	2	1	1											4
6				1		5			1	3	1			11
7														
8	1													1
9														
10						4					1			5
11						6	1					1	2	10
12							1							1
13								1						1
14														
15														
16														
17														
18														
層 序 不 明						9							1	10
合 計	5	1	1	1	1	24	2	1	1	3	2	1	3	46
	7			2		31					6			
	9					37								

ロ. 貝製品

本トレンチでは37点の貝製品が得られた。これらは実用品と装飾品に大別されるが、用途不明のものもある。出土量は実用品が圧倒的に多かった。以下、実用品から順に記述していく。

a. 実用品

貝刃

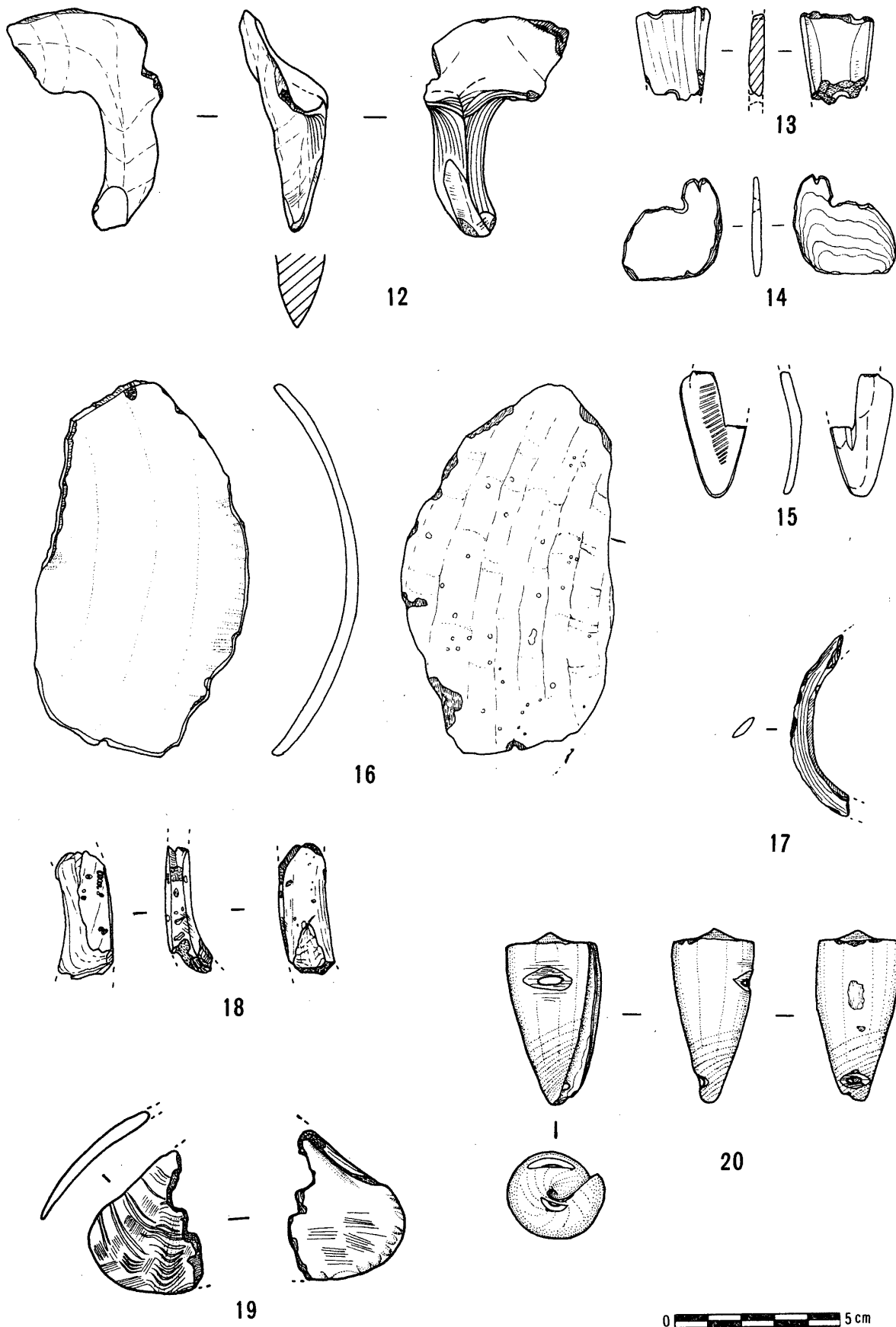
実用品で最も多く出土したのは貝刃（第8図23～26、第9図27～30、第10図31～38、第11図39～46・第5図版3～6、第6図版1～4、第7図版1～8、第8図版1～8）で、

チョウセンハマグリの腹縁部に押圧剥離を加え、刃部を整形したもので、類例はヤブチ洞窟遺跡（註5）、下田原貝塚（註6）、仲間第二貝塚（註6）などで知られ、最近の例では渡喜仁浜原貝塚（註7）でも多量に発見されており、今後注目すべき製品かとみられる。

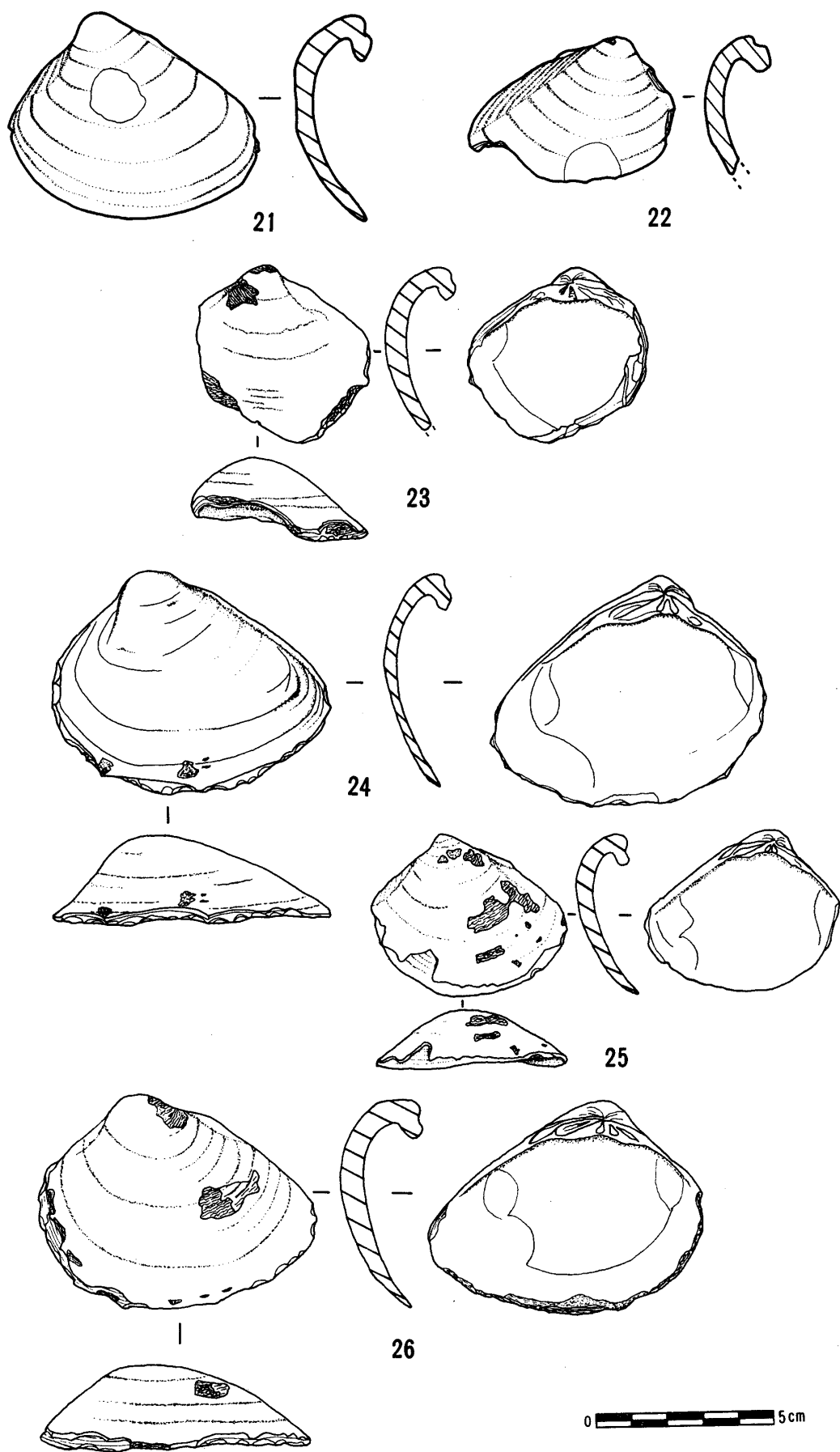
資料は24個（第4表）出土しているが、層位的には第6層で5点、第10層で4点、第11層で6点、その他に層序不明のものが9点ある。この層序不明のものは第6層以下の出土であることは間違いないが、整理時のミスにより層位確認ができなくなったものである。

第4表 貝刃に使用された貝の種類および加工状況

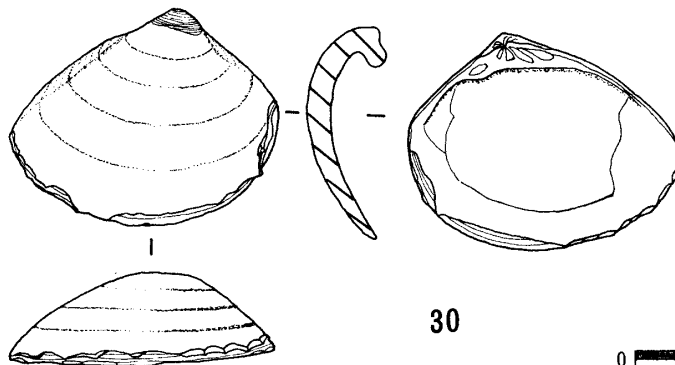
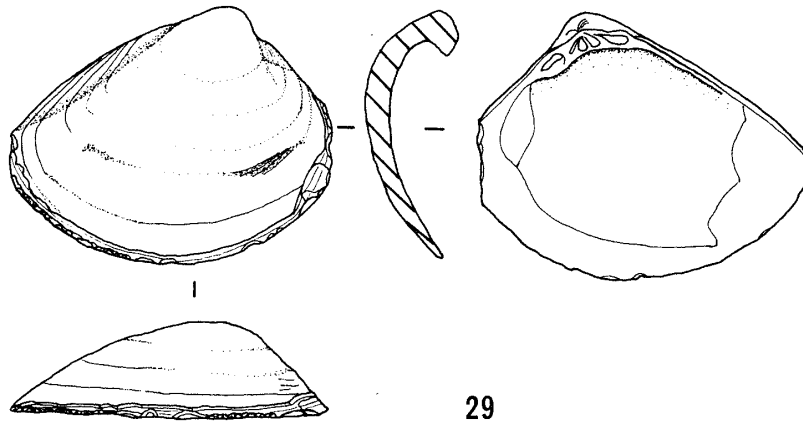
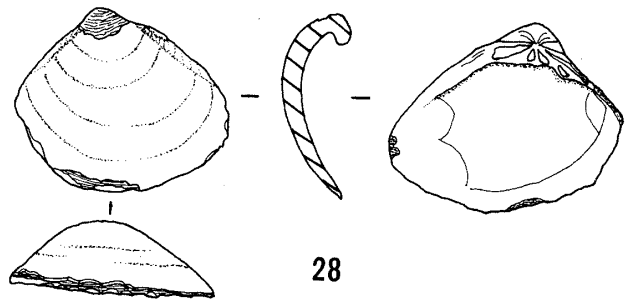
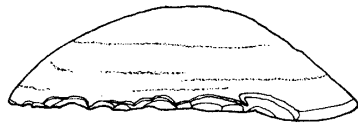
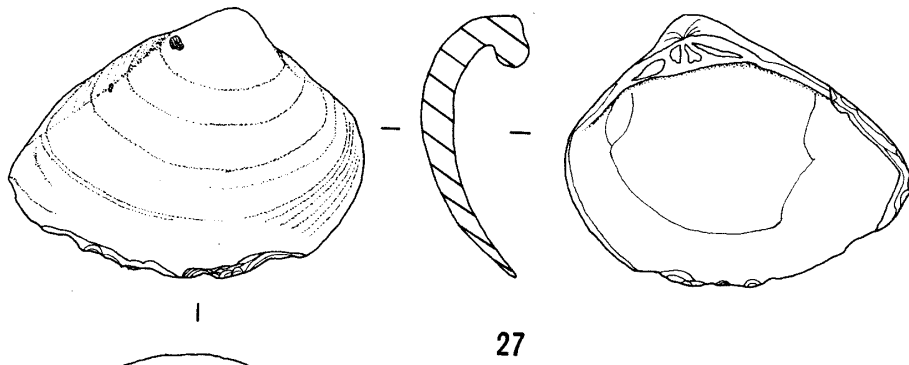
	図版番号	貝種	殻長 (現長・cm)	殻高 (現高・cm)	刃先	加工の状況	出土層
1	第8図23 (第5図版3)	チョウセンハマグリ(右)	5.0	5.0	細	一部破損のため不明	第11層
2	" 24 (" 4)	" (左)	7.7	6.3	"	腹縁の全周に及ぶ	"
3	" 25 (" 5)	" (左)	5.5	4.5	粗	" (水摩を受けている)	第6層
4	" 26 (" 6)	" (左)	8.0	6.0	"	"	不明
5	第9図27 (第6図版1)	" (右)	8.2	6.1	細	左半部	第6層
6	" 28 (" 2)	" (左)	5.0	4.3	"	腹縁の全周に及ぶ	不明
7	" 29 (" 3)	" (右)	7.6	6.1	"	"	第11層
8	" 30 (" 4)	" (右)	6.3	5.0	粗	"	"
9	第10図31 (第7図版1)	" (右)	5.7	4.3	"	"	不明
10	" 32 (" 2)	" (左)	4.5	4.1	細	"	第6層
11	" 33 (" 3)	" (右)	6.2	5.0	"	"	"
12	" 34 (" 4)	" (左)	5.0	4.5	"	"	第10層
13	" 35 (" 5)	" (左)	5.0	4.4	粗	"	不明
14	" 36 (" 6)	" (左)	5.6	4.7	細	"	第10層
15	" 37 (" 7)	" (左)	5.6	4.7	粗	"	不明
16	" 38 (" 8)	" (右)	4.6	4.0	細	"	"
17	第11図39 (第8図版1)	" (左)	6.1	4.8	"	"	"
18	" 40 (" 2)	" (左)	5.4	4.4	粗	"	"
19	" 41 (" 3)	" (右)	6.1	4.9	細	"	第11層
20	" 42 (" 5)	"	破片のため不明		粗	破片のため不明	不明
21	" 43 (" 4)	" (右)	5.6	4.8	細	腹縁の全周に及ぶ	第10層
22	" 44 (" 6)	"	破片のため不明		"	破片のため不明	"
23	" 45 (" 7)	"	"		粗	"	第6層
24	" 46 (" 8)	"	"		細	"	第11層



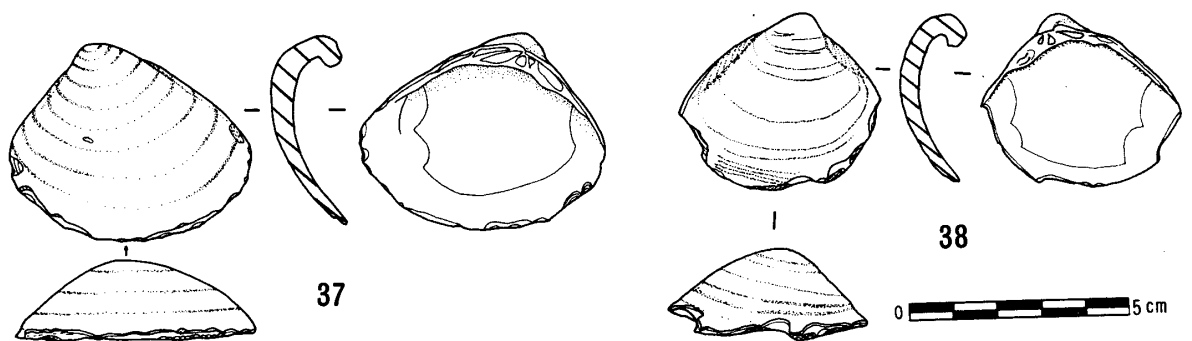
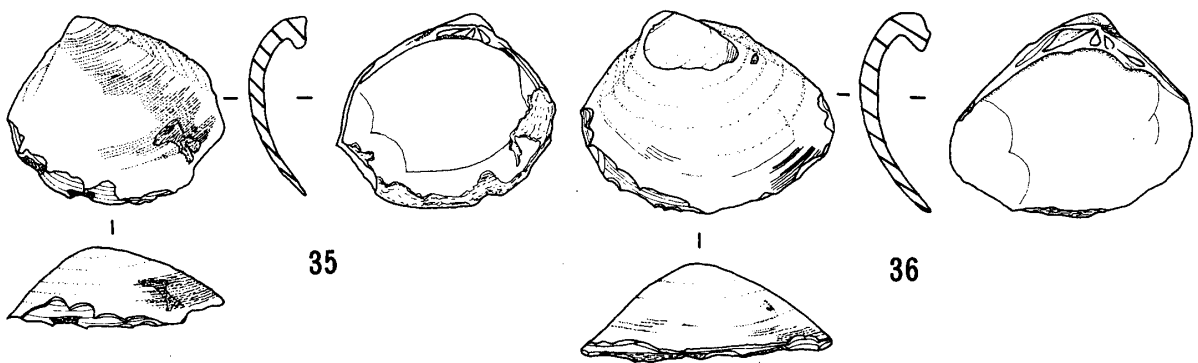
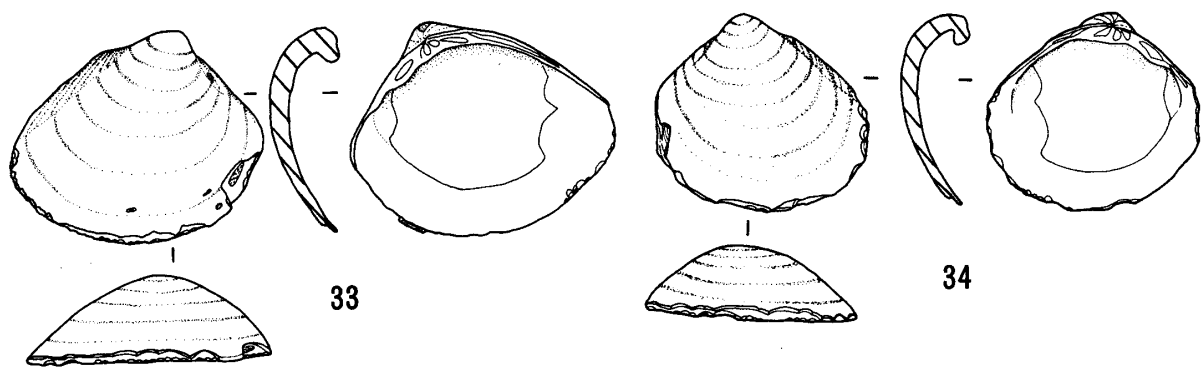
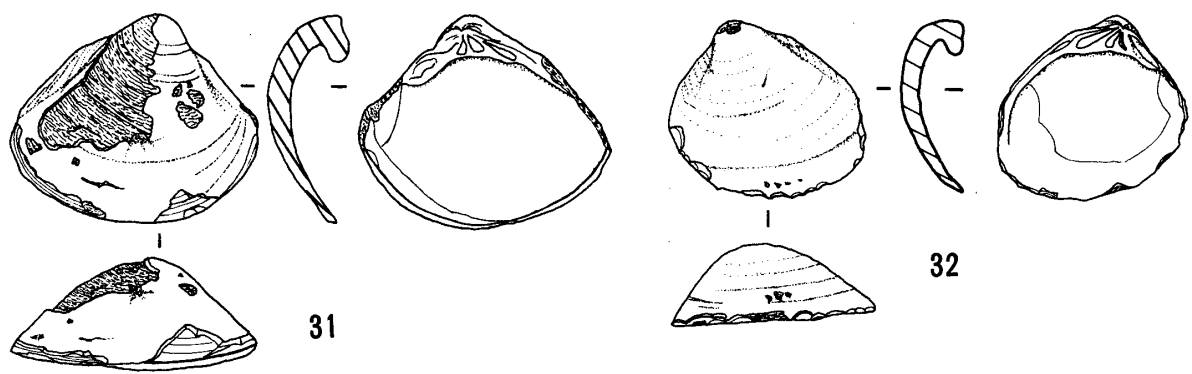
第7図 貝 製 品



第8図 貝製品および貝刃

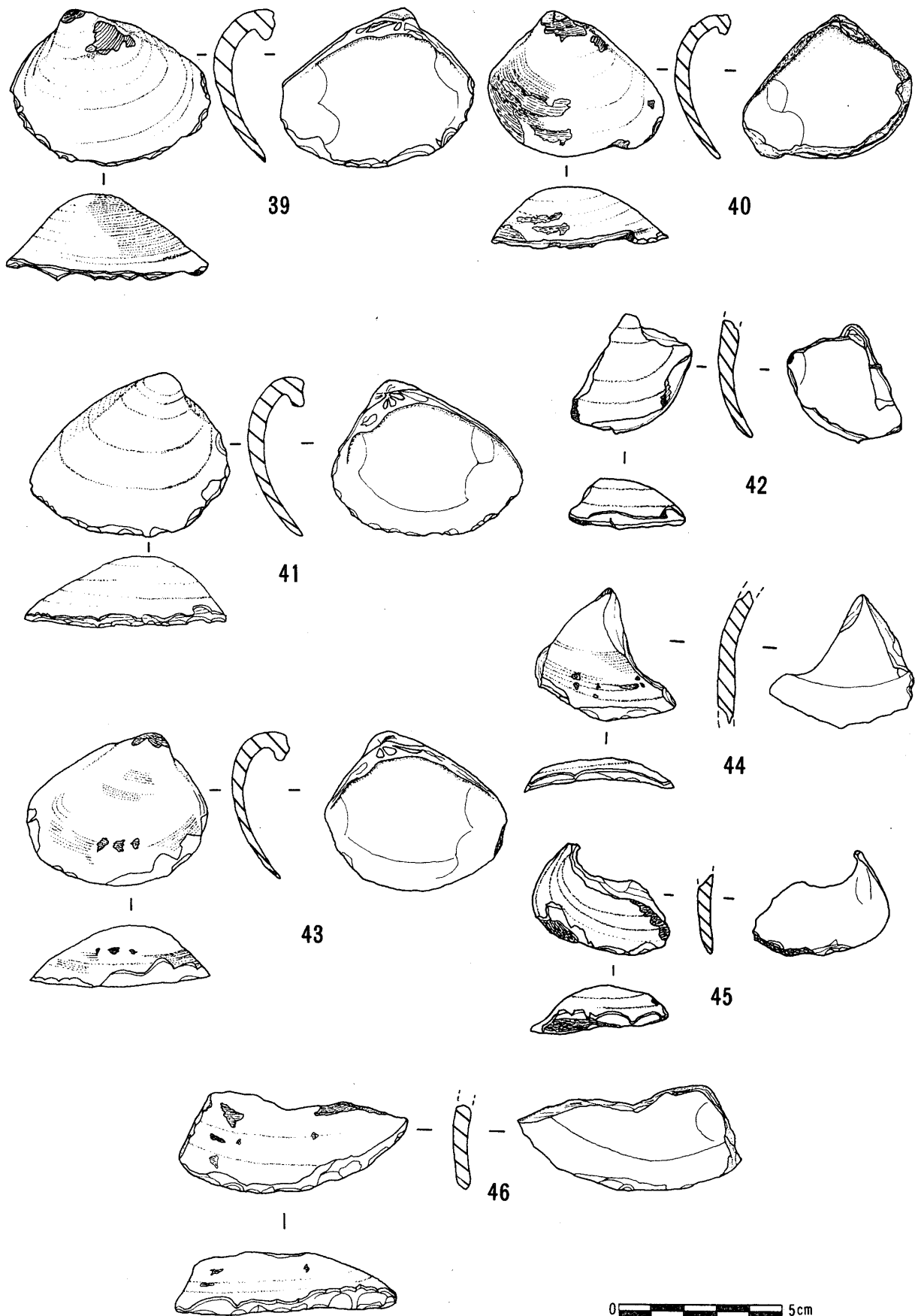


0 5 cm



第10図 貝

刃



第11図 貝 刃

この貝刃の刃部を観察してみると、まず整形箇所は、腹縁部だけを加工するものが24個中15個で圧倒的に多く、前背縁や後背縁にも及ぶものも3個ある。加工範囲の不明のものは6個である。又、刃部の整形方法をみると、粗く打ち欠いたあと細部調整を行ったものもあるが、加工は表面に限られており、内面から加工したものは見当たらない。刃部の剝離の細かなものは15点、粗いものは9点であった。大きさの平均値は殻長 5.9 センチ、殻高 4.8 センチである。

貝錘

第6図10、11（第3図版10、11）は貝錘と考えられるもので、ともにリュウキュウサルボウの殻長部に粗孔を穿ったものであるが、孔周縁の仕上げは雑である。10の孔は長径約 1.1 センチ、短径 0.9 センチ。第11層よりの出土で 14.4 g。11の孔は長径約 1.5 センチ、短径約 1.1 センチ。第12層よりの出土で 11.5 g。

斧刃状製品

第7図12（第4図版1）は、スイジガイのトゲ状突起の先端を両面から研磨加工して、斧刃状に整形したもので、研磨は刃部を含む一帯に限られている。刃部は太部破損しているが、鋭利な刃を有していたものと思われる。これに類するものは、地荒原貝塚（註8）、木綿原貝塚（註9）、兼久原貝塚（註10）、キガ浜貝塚（註11）、本貝塚のSトレンチ（註3）などで報告されている。第13層よりの出土。

貝匙状製品

第7図16（第4図版4）は、ホラガイ（？）の体層部を切り取って貝匙状に整形したもの

で、周縁は粗く打ち欠かれており、貝匙の未成品であろう。内外両面ともに風化が進み軟弱となり、原形は失われている。長径11センチ、短径 6.3 センチ。第6層30～40センチ・レベルの出土。

用途不明のもの

実用品と思われるが破損が大きく、その形状、用途を把握しえないものをここで扱う。

第7図15（第4図版6）は破損品で全形は窺えない。イモガイ科の体層部を利用したもので、平面形は三角形を呈していたかと思われる。側縁の一つは外唇を利用しており、研磨によって同部を平滑にする。先端は丸味を帯び、尖らない。また、中央部では長軸にそって沈線を刻む。この沈線は破損部では裏面に達していることから、刻線の中央部は表裏に貫通していたものと考えられる。そのことから網の補修に用いる針のような用途も考えられないことはない。しかし、確実なことは今後の資料を待つことにする。現存部の長さは 3.7 センチ、重さ約 1.4 g。第6層30～40センチ・レベルの出土。

同図18（第4図版8）はシャコガイを利用した整品だが破損が著しい。外面と腹縁側を入念に研磨したもので、研磨面は平滑である。裏面は自然面のままである。小破片のため形状、用途ともに不明。第6層0～10センチ・レベルよりの出土。

同図19（第4図版9）はヒメジャコの加工品である。腹縁にそって一部研磨を施しているが、研磨は徹底せず、随所に自然面を残す。本標品も破片が小さく、その用途を推定し得ないが、碗や皿などの実用的機能も考えられる。第6層0～10センチ・レベルよりの出土。

b. 装飾品

装飾品と思われるものは6点あり、その中にはペンダントや貝輪もみられるが、形状不明のものも含まれている。

ペンダント

第7図13(第4図版2)は上下端を欠く破損品で、したがって全形は窺えないが、破損部ではそれぞれ穿孔の痕が1ヶ所ずつ認められる。孔はいずれも上下両面から穿たれている。左右の両側縁は下端へ向って接近し、上端は開き気味であることから、原形は三角形あるいはそれに近い平面形を有していたかと思う。種は不明だが、イモガイ科の体層部を利用したものである。第6層30~40センチ・レベルよりの出土。

同図14(第4図版3)も著しく破損し、全形を窺うことのできない標品であるが、中央部には径0.3センチの孔が一方から穿たれており、また、図の上端には両面から加工した小さな刻みが認められる。以上の状況からペンダントのような性格をもつ整品であったかと考えている。貝はアコヤガイを利用している。第10層の出土である。

貝輪

第7図17(第4図版5)は貝輪とみられる製品の一部である。ツタノハガイ科に属する貝の殻頂部を打ち欠き、加工面を研磨したもので、研磨はそれほど入念ではない。外縁部は自然面のままである。幅は約0.8センチで、第11層よりの出土。

用途不明のもの

以上に含まれないものをここで取り扱うが、第8図21・22(第5図版1・2)はともにチョウセンハマグリの中央部を

研磨し、円形状の平坦面をつくるもので、径はともに1センチ前後である。それ以外に加工痕は認められない。本貝塚のT-16・17区においても類例が出土している(註1)。用途は現在のところ不明。21は第11層よりの出土。22は破損品で、出土層位は不明。

第7図20(第4図版7)はイモガイの前溝、に近い体層部に、長径5ミリ、短径2.5ミリの孔を、また、背面の体層下部に長径7.5ミリ、短径3ミリの孔を穿つ製品で、孔の周縁は両方とも入念に研磨されている。装身具の一種かとみられる。殻長5.2センチ、最大径2.8センチ。第11層の出土。

ハ. 石 器

本トレンチの石器は、用途不明の小破片も含めると58点の出土である。そのうち用途の判明するものは石斧(8点)、石鏃(1点)、磨石(5点)、石皿(4点)の4種(18点)である。その他、用途は不明だが、扁平方形の磨製石製品も1点出土をみた。石器の種類とその層位的出土状況および用材との関係を第5・6表に示した。以下、用途別に略述する。

a. 石 斧

石斧は8点検出された。いずれも第3~7層の間で発見され、第8層以下の出土はなかった。完形はなく、すべて破損品である。これを製法の上でみると磨製、局部磨製、敲打調整を行ったもの、の3種に分つことができ、磨製は6点、他はそれぞれ1点の出土であった。次に出土量の少ない方から記述する。

第12図47(第9図版3)は刃部を残す半欠品で、したがって全体的な製法上の特徴を知ることにはできないが、残存部より局部磨製に分類できると考えられるものである。上面は

第5表 石器の種類と層位的出土状況

種類 層序	石 斧	石 鏃	磨 石	石 皿	その 他の 石器	用不 途明	計
表面採集							
第1層							
2							
3	4	1	3	3	2	19	32
4							
5	3					5	8
6						4	4
7	1					2	3
8							
9							
10						1	1
11			1	1		4	6
12						1	1
13			1			1	2
14						1	1
15							
16							
17							
18							
計	8	1	5	4	2	38	58

刃部とその上方2～3センチの間を研磨しているが、中央部と片方の側縁には打欠痕が明瞭である。背面は刃縁にそって2～5ミリの部分を研磨し、他は敲打調整により、やや平坦に仕上げている。また、両側縁にも部分的に研磨を加えている。敲打調整の箇所では手馴れ様の滑沢がほぼ全面に認められる。最大幅は刃部にあり、刃縁は弧状を呈する。横断面は背面が平坦、上面がやや丸味を帯びているが、全体的に扁平で、土掘り具と考えられるものである。しかし、刃部に擦痕様の使用痕は見受けられない。縦断面でみる刃形は必ずしも全体的に左右対称とはなっていないが、

一応、両刃に含めてよいであろう。現存長4.8センチ、幅4.8センチ、厚さ1センチ前後、重量37.13g、千枚岩質輝緑凝灰岩製で、第5層の出土。

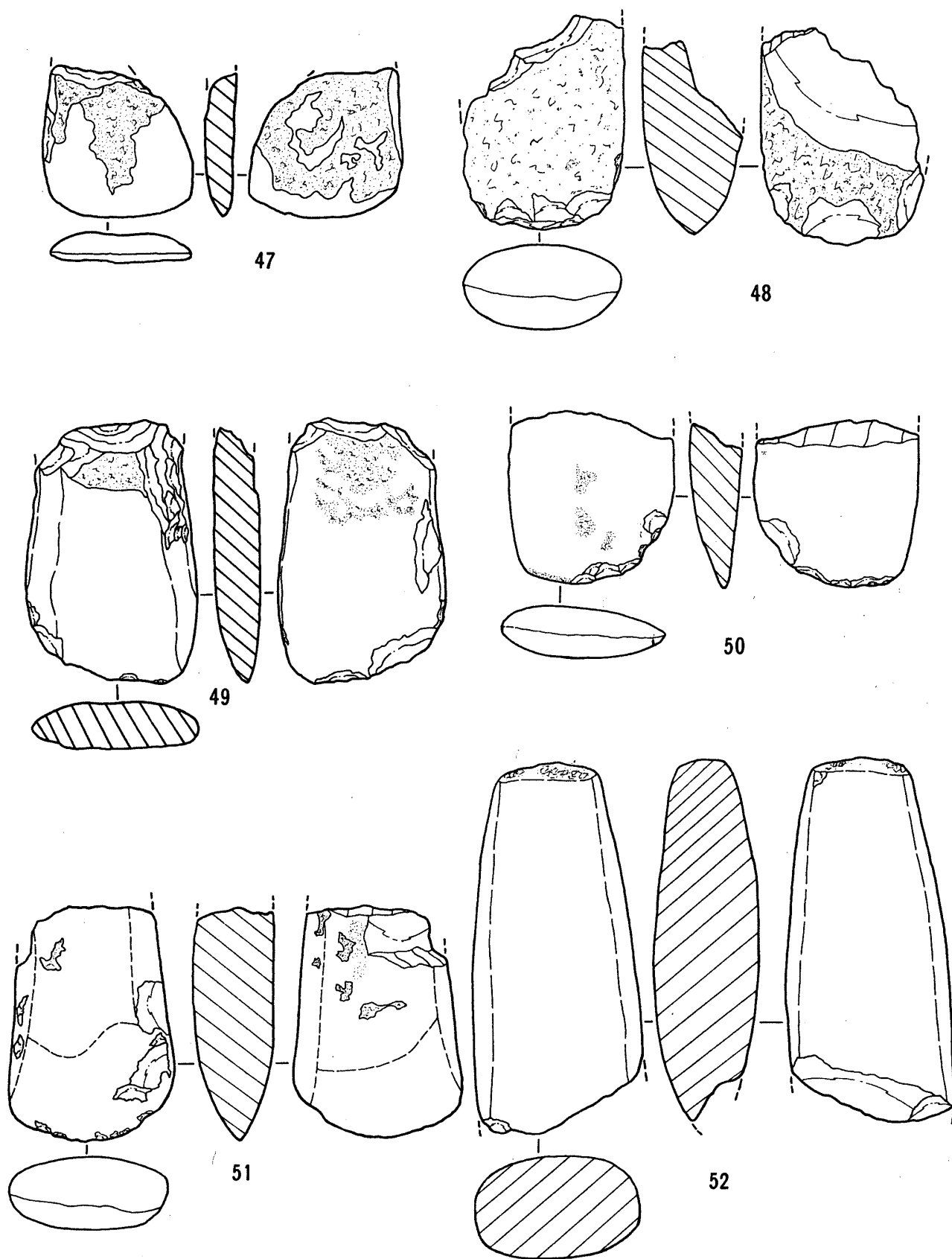
第6表 石器の種類と石質の関係

種類 石質	砂 岩	輝 緑 岩	ヒ ン 岩	粗 粒 角 閃 岩	粗 粒 玄 武 岩	千 枚 質 砂 岩	千 枚 質 輝 緑 凝 灰 岩	第 3 紀 砂 岩	チャ ート	計
石斧	1	2		3			2			8
石鏃									1	1
磨石	3							2		5
石皿	4									4
その他の 石器	1						1			2
用途不 明	15	4	1	1	1	3	1	12		38
計	24	6	1	4	1	3	4	14	1	58

同図48（第10図版4）は両刃の刃部破片で、一部は調整剥離を施し、他の大部分は敲打調整を行ったままで、研磨は認められず、したがって未成品かと考えられるものである。上面は刃部にそって調整剥離を施し、他は敲打調整を行っている。裏面はすべて調整剥離のままとなっている。いわゆる乳棒状石斧の場合、敲打調整が身の大半を占めるにしても、刃部に磨痕を有するものが普通であり、そのことから本標品は乳棒状石斧の未成品かと考えるものである。現存長6.9センチ、幅5.2センチ、厚さ3.2センチの輝緑岩製で、やや重量感（123g）のある石器である。第7層の出土。

以上の2点は打製あるいは局部磨製のものであるが、次に最も出土量の多かった磨製石斧について述べる。

第12図49（第9図版1）は両刃石斧で、頭部と刃縁の大半を欠く。研磨は刃面では入念



第12図 石

斧

で、滑沢を有する。上面は調整剝離部を除いて、ほぼ全面研磨が施され、背面は中央から刃部にかけて研磨、他は頭部へかけて敲打調整を行っている。後者の部分は手馴れ様の滑沢が認められる。側縁の1つは研磨がやや入念であるが、打欠痕も残っている。横断面でみると背面はやや平坦、上面は丸味を帯びているが、全体的に扁平である。短冊形に近い器形で、最大幅は刃部に近い位置にある。刃部破損のため、同部の詳細は不明。研磨の施された刃面には擦痕などの使用痕は認められない。現存長 8.4 センチ、幅 5.5 センチ、厚さ 1.5 センチ、重量 109 g。千枚岩質輝緑凝灰岩製で、T-9 第3層の出土。

同図50（第9図版2）は石斧の刃部破片で、全面砥磨を施しており、滑面を形成する部分は見受けられない。横断面は扁楕円形で、刃縁はほとんど欠けているが、原形に近いと考えられるところから、偏刃に属する資料かとみられる。上下両面の刃縁への傾斜はやや直線的で、他の資料にみられるような刃面の脹らみはみられない。片刃に分類していいであろう。用材が軟質の砂岩であり、実用に供されたとすれば極めて効率の悪い石斧であったと思われる。現存長 5.5 センチ、幅 5.4 センチ、厚さ 1.6 センチ、重量 57 g。T-8 第5層の出土。

同図51（第9図版4）も刃部を含む半欠品である。刃面の一部と側縁の一部には若干調整剝離痕も残っているが、研磨はほぼ全面におよぶ。刃縁は刃こぼれがみられるものの、ほぼ原形を保つ。両刃の石斧で、刃縁は弧状を呈す。平面の最大幅は刃部にあり、横断面は楕円形である。刃縁にその部分に擦痕様の使用痕は見受けられない。現存長 7.6 センチ、最大幅 5.3 センチ、最大厚 2.7 センチ、重量 169 g。慶良間島産の粗粒角閃岩を利用した

もので、T-8 第5層の出土。

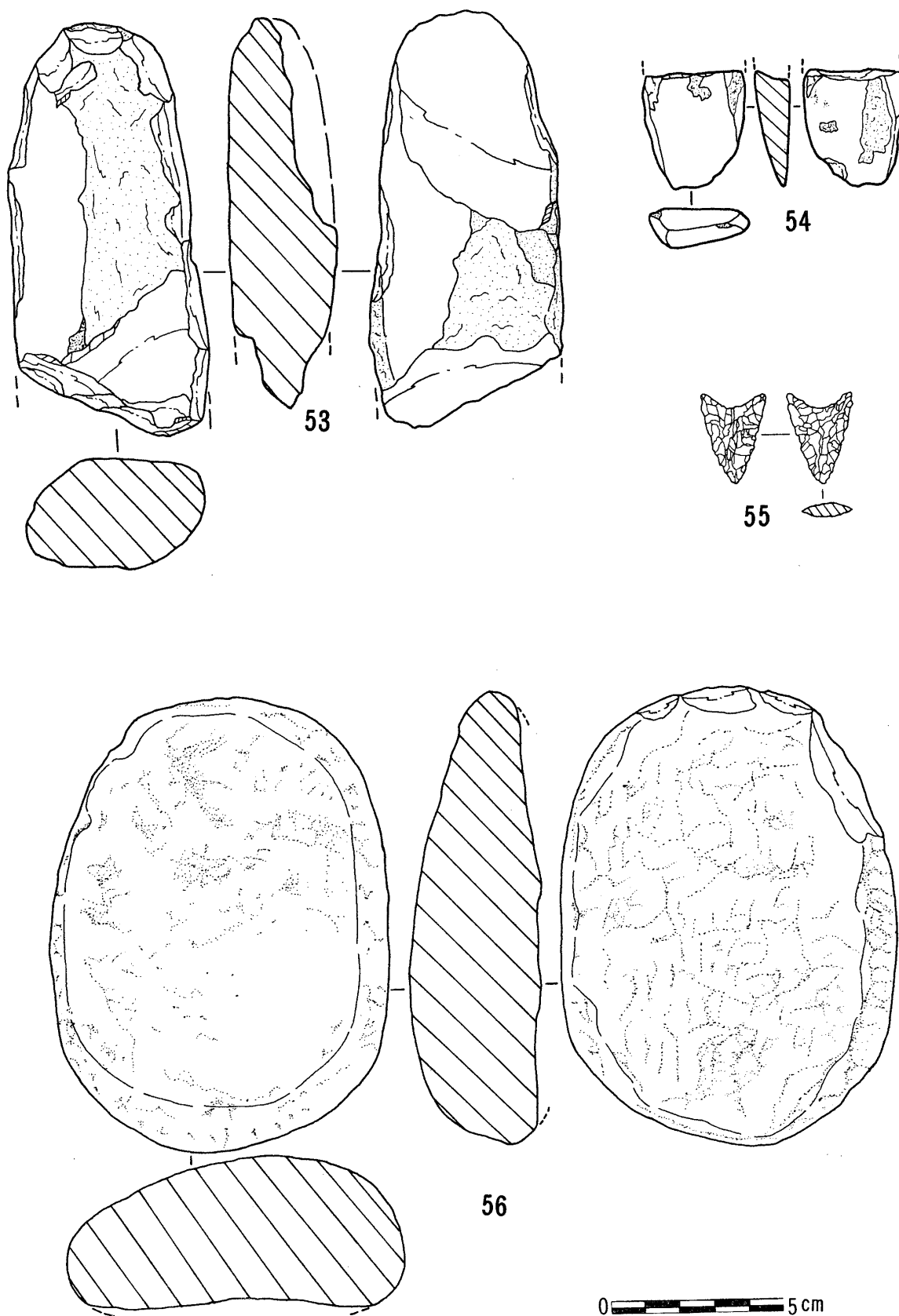
同図52（第9図版5）は刃部を欠く破損品だが、おそらく両刃に属する資料であろう。重量感のある石斧で、頭部の基端面を除けば研磨は全面におよび、入念で、滑面を呈する。刃部欠損のため刃形の詳細は不明だが、両刃に属するであろうことは先述の通りである。身の横断面は楕円形である。現存長 11.7 センチ、最大幅 5.5 センチ、最大厚 3.3 センチ、重量 345 g。これも慶良間島産の粗粒角閃岩を素材としている。T-9 第3層の出土。

第13図53（第10図版1）も刃部を欠き、かつ裏面も破損が著しい。上下両面とも一方の側縁にそって砥磨を施す部分が残っている。他は大部分が破損面であるが、敲打調整の製法も一部に見受けられる。刃形は不明。本標品は砥磨痕を有することから本項で取り扱うことにした。現存長 11.2 センチ、最大幅 5.6 センチ、最大厚 3.1 センチ、重量 283 g。角閃岩製で、T-8 第3層の出土。

同図54（第10図版3）は刃縁の幅が急に小さくなる特異なタイプの石斧である。刃部だけの破片であるから全長は不明だが、現存部における背面は平坦で、そのまま刃部へのび上面はやや丸味をもって刃縁へ移行する。したがって縦断面でみるとアッズ的である。刃縁は直刃に含めてよいであろう。未だ鋭利な刃を残している。上面、背面とも研磨は丹念だが、調整剝離痕を残す部分もある。側縁の一つには研磨が施されているが、他は打欠調整のままである。現存長 3.3 センチ、最大幅 2.9 センチ、最大厚 1.1 センチ、重量 12.8 g。輝緑岩製で、T-8 第3層の出土。

b. 石 鏃

第13図55（第11図版1・2）に示す1点で、完形品である。チャート製の打製石鏃で、本



第13図 石斧 (53・54) および石鎌 (55)・磨石 (56)

貝塚では本標品を含めて二点検出されている。形態は三角形で底辺より側辺が長い。底辺は凹部を作る。横断面はレンズ状を呈する。長さ約 2.7 センチ。最大幅約 2 センチ。最厚部は約 0.5 センチ。石鏃は長さ 2～3 センチのものが一般的であるといわれているが、本標品もこの部類に属するものである。第 3 層の出土。本標品は沖縄における最初の層位的出土例（発見 1976 年 7 月 11 日）であり、これによって使用時期の一端をおさえることができた。第 3 層は室川上層式や宇佐浜式土器が多く検出されていることから、前 V 期に属する資料とみていい。

c. 磨石

完形の出土はなく、すべて破損品で、中には辛じてその用途を推察しうるような小破片も何点か含まれている。

第 13 図 56（第 12 図版 1）は平面形、石鱗状を呈する磨石で、片面は原形を保持するものの、他面は破損面を再加工したもので、破損面は図にみるように凹面を形成し、また、全面に浅い凹凸がみられる。したがって、この面は磨面にはなり得ない。縦断面でみるとこの石器は一方にやや尖り気味で、この部分では物を叩いたためにできたような打欠痕も見受けられ、破損後は叩石にも用いられたかと思う。破損面の再加工が雑なのは、叩石に使用する際の最小限の加工かもしれない。長さ 13.3 センチ、幅 10 センチ、厚さ 4.3 センチ、重量 715 g。砂岩製で、T-8 第 3 層の出土。

第 14 図 57（第 10 図版 7）は平面の一部と側面の一部を残す小破片であるが、現存の形状から磨石の破片と考えられるものである。平面はおそらく石鱗状を呈していたであろう。砂岩製で現存部の重量は 40 g。T-8 第 3 層

の出土。

同図 58（第 12 図版 4）は平面形が石鱗状を呈する磨石の半欠品と考えられるもので、平面の一つは凸面を形成し、他は凹面をつくるという珍しいタイプの磨石である。凸面は研磨が徹底し、滑面となっている。凹面も研磨を加えているが、凸面ほどではない。この凹面の中央部には径 1.5 センチ前後の浅い凹みがあり、この石器は凸面を磨石に、凹面を凹石に使用した例かもしれない。側面も大部分研磨を加えているが、敲打痕を残す箇所もわずかながら見受けられる。現存の重量は 530 g、砂岩製で、T-8 第 13 層の出土。

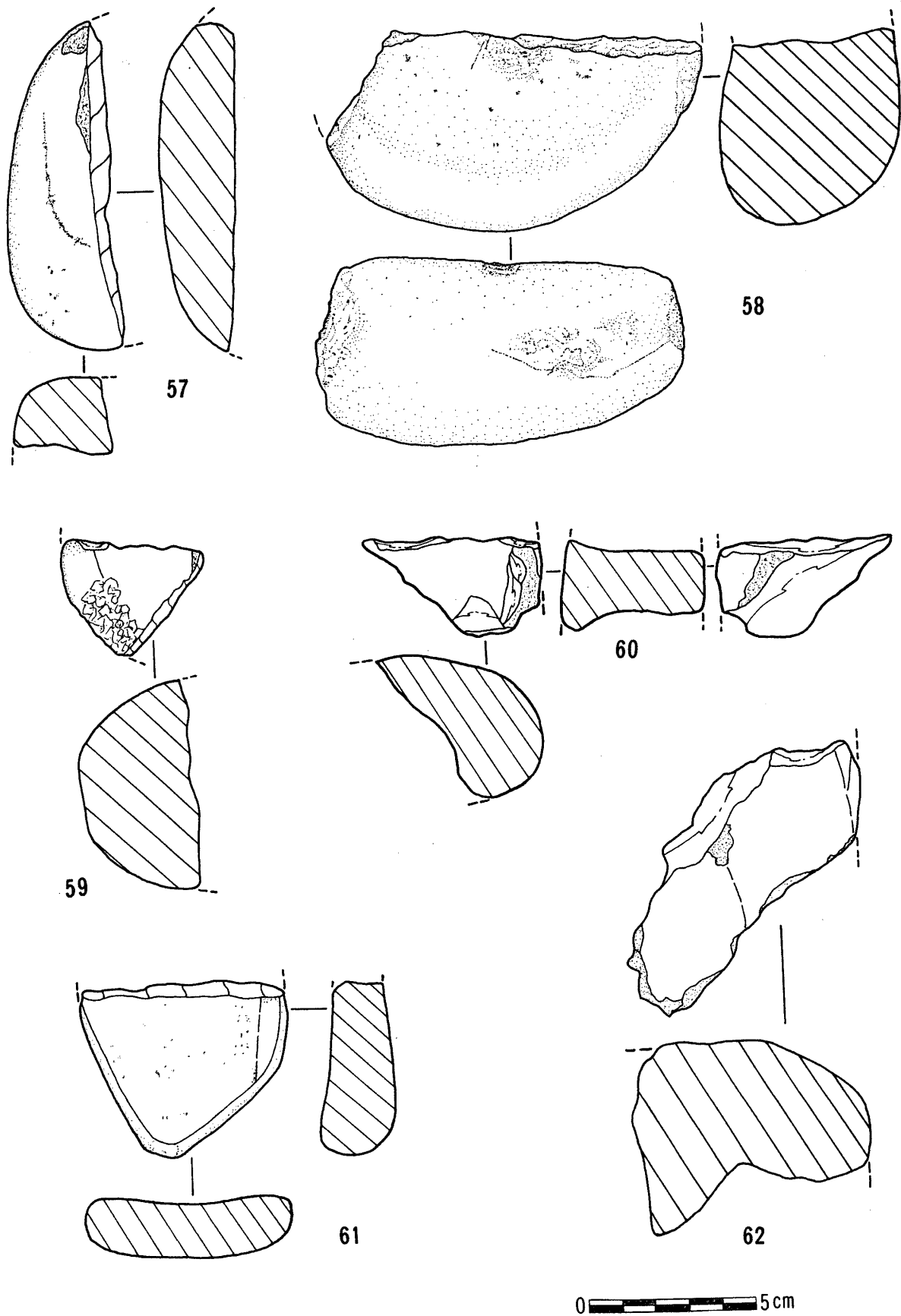
同図 59（第 12 図版 2）は破損の著しいもので、上下両面と側面の一部を残す資料であるが、残存部の形状から磨石と考えられるものである。小破片のため平面形、サイズ等詳らかにし得ない。上下両面の研磨は比較的に入念である。側面では敲打痕も見受けられる。砂岩製で、現存部の重量は 109 g。T-8 第 3 層の出土。

同図 60（第 13 図版 1）も磨石の破片とみられるものである。上下両面は研磨の徹底した磨面を残す。側面は破損のため器面調整の方法は窺えないが、隣接する上下両面の調整法からすると、一部に研磨を施した部分もあったかと推察される。形状、大きさ等不明。砂岩製で、現存部の重量は 43 g。T-8 第 3 層の出土。

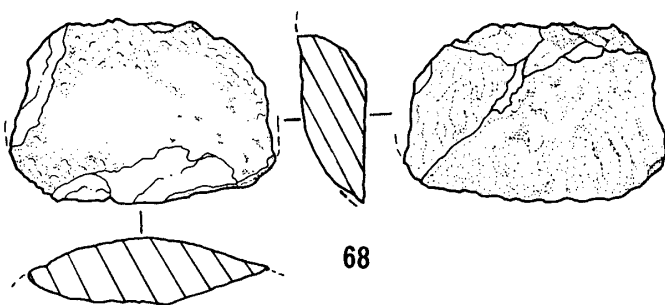
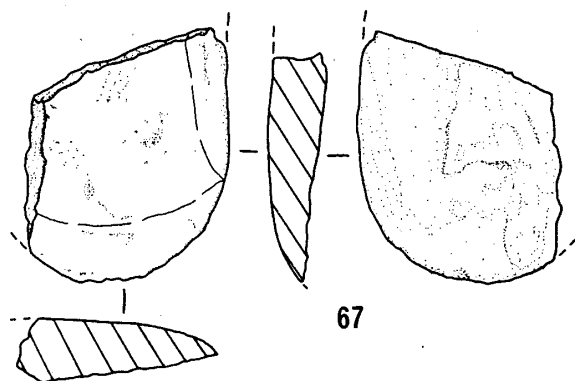
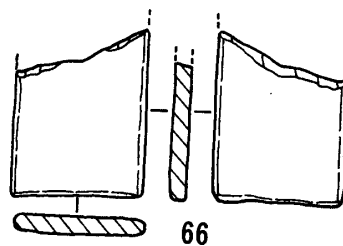
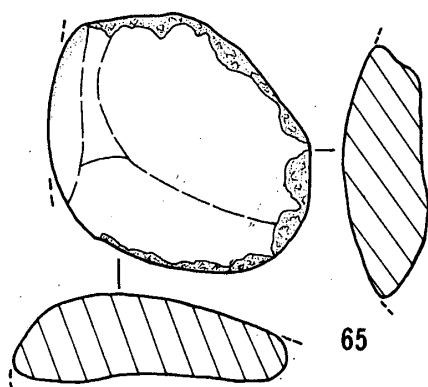
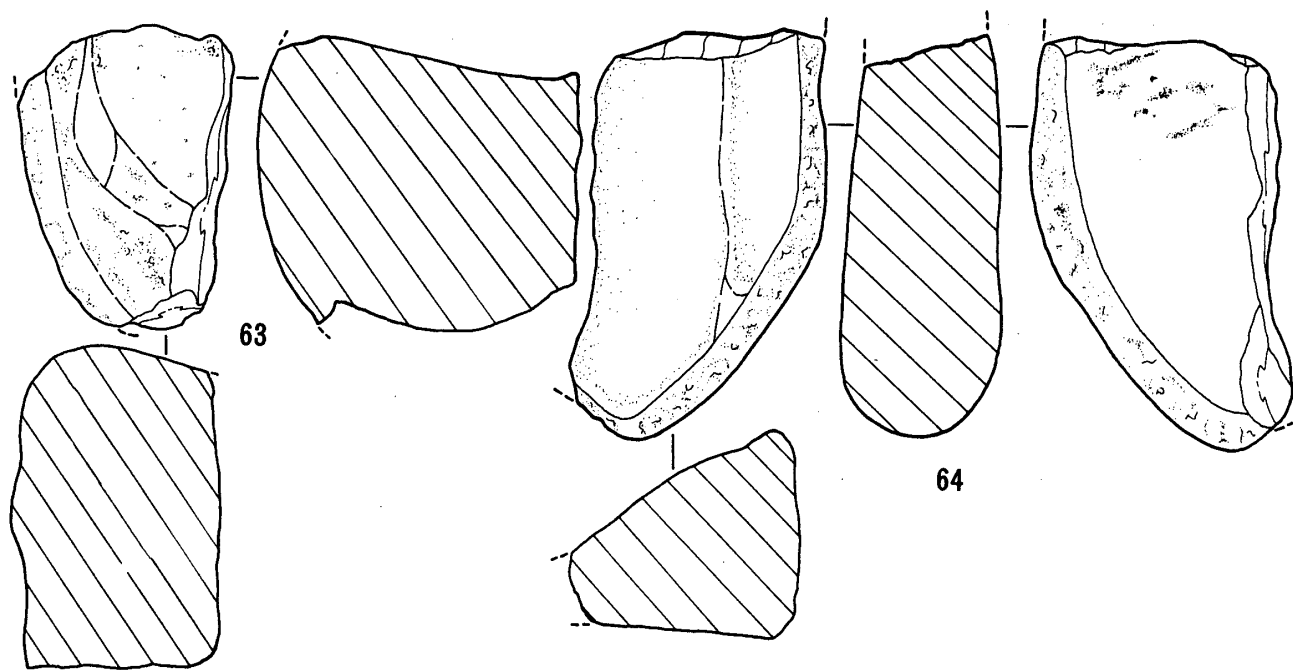
d. 石皿

石皿は破片が 4 点検出された。後述の、用途不明とした小破片の中にも石皿の破片かとみられるものがないではないが、確信がもてる程のものではないので、本項では外すことにした。

第 14 図 61（第 9 図版 7）は 2 側縁を残す縁



第14図 磨石 (57~60) および石皿 (61・62)



0 5 cm

第15図 石皿 (63・64) とその他の石器 (65～68)

端部の小破片で、中央部が欠け、したがって全体の形状やサイズ等は不明であるが、上面は凹面を形成し、裏面は自然面のままで、凹面の形状から石皿の破片と見做されるものである。砂岩製で、現存部の重量は77 g。T-8 第3層の出土。

同図62（第10図版2）も大破した石器の小破片で、平坦な磨面の認められることから、石皿の破片とみられるもので、現存部の厚さは5センチあり、原形においては比較的厚手の石皿に属する資料であったと推察される。砂岩製で、現存部の重量は235 g。T-8 第11層の出土。

第15図63（第12図版3）も上面と側面の一部を残す小破片だが、上面は平滑で中央部へ向って傾斜しており、石皿の磨面と考えられるものである。サイズや形態は不明であるが、現存部は7.5センチの厚さを有しており、この標品も厚手の石皿に属するであろう。砂岩製で、現存部の重量は275 g。T-9 第3層の出土。

同図64（第13図版2）は今回採集の石皿の破片では比較的大きいもので、磨面、側面、底面の一部を残す資料である。底面は自然面となっており、使用痕は認められない。側面の一部は円くなっていることから、隅丸方形の形態が推定される。磨面は2段の傾斜を示している。側面の最大厚は約4センチ、磨面中央部の最も薄い箇所は1.5センチであることから、かなり頻繁に使用されたものであろう。砂岩製で、現存部の重量は273 g。T-9 第3層の出土。

e. その他の石器

ここで取り扱う石器は厳密には次項と同じく用途不明の資料であるが、一定の形状の窺えることから、次項と区別し、本項を設ける

ことにした。

第15図65（第9図版6）は磨石の破片を利用したとみられるもので、平面と側面の1部に磨石の形態が窺え、裏面の破損面を再加工したものである。裏面は周縁部を打欠によって整えているが、刃縁を形成するほどの鋭さはみられない。裏面は全体的に著しく磨耗し、その点円形石斧とも異なるように思われる。一応、本項に記録し、今後の資料を待つことにする。砂岩製で、現存部の重量は40 g。T-8 第3層の出土。

同図66（第10図版5）は破損品であるが、現存部は方形を呈し、両平面および側面に入念な研磨を加えている。厚さは5ミリ、全体に扁平な石製品である。破損部の形状が纏めず、したがって用途を推察し得ない。千枚岩質輝緑凝灰岩製で、現存部の重量は9.73 g。T-8 第3層の出土。

f. 石器の小破片

小破片のため、その原形を知り得ず、したがって用途も推察し得ないようなものが38点採集されている。第15図67・68（第10図版6・第13図版3）に示すような資料で、この2点は石斧か磨石か、いずれかに属するものであろう。その他の資料はさらに小さく、本文では実測図を省略した。

二. 土 器

1976年以來の3次にわたる調査で3,564点の土器片を採集した。土器片はほとんどが小破片で、完全に復元しうるものはないが、推定復元の可能なものは10点ある。それらは大山式1点、カヤウチバンタ式2点、室川式2点、室川上層式5点である。本トレンチで検出された沖縄現地の土器は7型式で、そのほかに奄美系と考えられる土器も3点採集さ

れている。前記7型式の中ではカヤウチバンタ式、室川式、室川上層式などが相対的に多い。次に各型式について記述する。

第7表 各型式の出土状況

層 序	型 式	伊 波 式	荻 堂 式	大 山 式	カ ヤ ウ チ バ ン タ 式	室 川 A 式	室 川 B 式	室 川 上 層 A 式	室 川 上 層 B 式	宇 佐 浜 式	奄 美 系	計
表 面 集 録		1	1		2	1						5
第1層		1							1			2
2				1					3	1		5
3		8	5	7	13	4	3	10	50	35	2	137
4												
5		4	2	2	5	17	11	1	1	5		48
6		1	1	2	5	9	2		1	1		22
7			1		3	4						8
8					2	1						3
9												
10			1									1
11		1	6	1	8	4	1					21
12		1	1	3	11	2						18
13					1	1					1	3
14		2	1									3
15												
16												
17												
18												
計		19	19	16	50	43	17	11	56	42	3	276

注、室川式および室川上層式はA・Bに細分

a. 伊波式土器

本トレンチ出土の伊波式土器は第16図69～87（第14図版1～19）の19点で、そのうち13点は口縁部、他の6点は胴部の破片である。

器形を推定しうる大型の口縁破片についてみると、壺形は見当らず、すべて深鉢形であ

る。口径の推算可能なものが4点あり、それぞれ約18、17、14、10センチである。また、大型の口縁破片についてみると、大部分は外反を示すが、直口に近いものも含まれている。

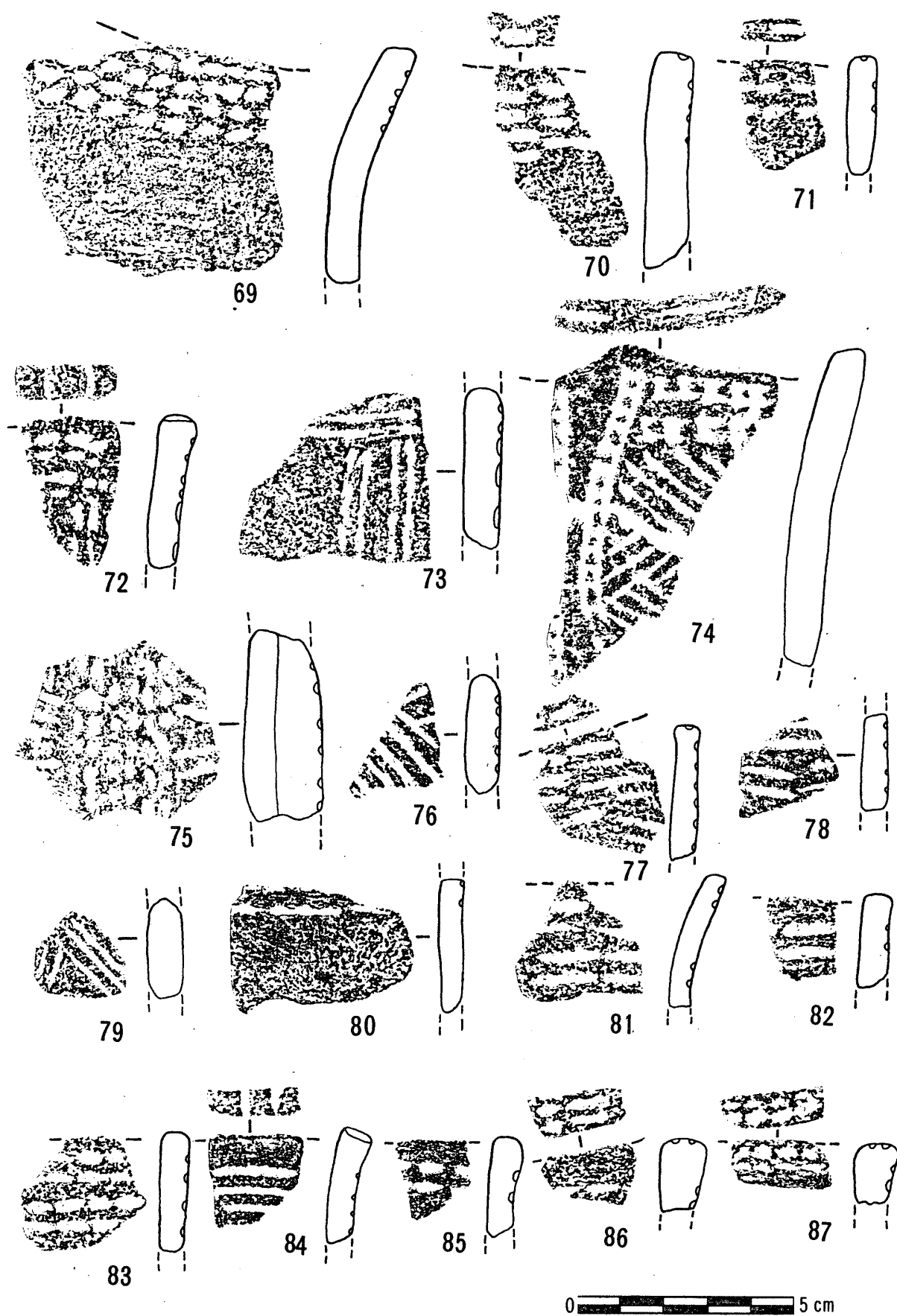
次に、本誌第2号に示した分類基準に多少修正を加えながら、文様について説明したい。

第1種

口縁部（上段）および胴上部（下段）に、叉状工具による文様を水平方向に施し、両者の中間、つまり頸部（中段）を無文のまま放置するグループで、確実な資料はないが、第16図69～71（第14図版1～3）はこれにあたるかと思う。

同図69（第14図版1）は山形口縁の破片で、口縁部にそって2条1組の点刻文を2組、左から右の方向へ施文する。その下方に文様は認められないが、これまでの例からすると上記文様だけに終始する例はないので、胴上部（下段）にも同種の文様を施文したものと思われる。本標品の左端は山形頂部に近く、また右端は中央凹部附近で欠けており、この両端に縦位区画文のみられないことから、第1種に含めてはほぼ間違いないかと考える。口唇部は平坦に整形されているが、施文の対象とはなっていない。表面の一部に擦痕がわずかに認められるものの、他はナデによって調整されている。裏面もナデ調整である。焼成は比較的良好、石英やチャートを混入する。器色は外面は暗褐色。内面は赤褐色。口径は推算18.4センチ。第14層（暗褐色混貝土）からの出土であり、本トレンチでは最古の土器といえる。

同図70（第14図版2）も口縁部の破片で、口縁には叉状工具による2組の点刻文が施されているが、以下は無文である。本標品も前記69に類似するところから本項に含めるが、第2種Iの可能性も否定できない。口唇は平



第16図 伊波式土器

第8表 伊波式土器の各種別出土状況

種別 層序	第1種	第2種							第3種	種不明	計
		I	II	III	IV	V	VI	VII			
表 採 面 集										1	1
第1層						1					1
2											
3	1	1			2	1				3	8
4											
5	1				1					2	4
6										1	1
7											
8											
9											
10											
11						1					1
12		1									1
13											
14	1									1	2
15											
16											
17											
18											
計	3	2			3	3				8	19

坦に仕上げられ、刻文を横位に施しているものの破損のため文様は不鮮明。裏面はナデ調整、表面は擦痕を施したあと文様帯の部分をナデ消している。したがって頸部では一部に擦痕も見受けられる。器色は表裏とも茶褐色。焼成は比較的良い。石英を混入。第5層の出土。

同図71（第14図版3）は口縁にそって1組の点刻文を施すもので、以下、文様は見られない。これも第2種Ⅰの可能性のあるものである。口唇上には短沈線を横方向に施文する。器色は両面とも黄褐色。器面摩耗のため擦痕

の有無など不明で、表面の文様も消えかかっている。焼成は不良で脆弱。石英を混入。第3層の出土。

第2種

上段と下段にはさまる部分、つまり中段（頸部）を数種の文様で埋めるグループである。中段の文様は現在のところ下記の7種に細分できる。第2種Ⅰは前回まで第1種に含めていたものを、今回、本項に改めたものである。

- I 縦位区画文のみ
- II 縦位沈線文
- III 組帯文（含類似文様）
- IV 羽状（綾杉）文
- V 鋸齒文
- VI 斜行文
- VII 上段省略の文様

本トレンチでは第16図72～79（第14図版4～11）に示した8点がこれに属し、数種の文様を含む。

第16図72（第14図版4）は口縁の破片で口縁にそって2条1組の点刻文を2組施し、右端には縦位の点刻文を刻む。縦位区画文の本数は不明。その左側は無文空白部を形成するものと思われ、第2種Ⅰの口縁資料とみていだろう。前回までは第1種に含めていたものである。この縦位区画文は山形頂部から外れており、中央凹部附近に施文する例かとみられる。平坦に整形された口唇には縦位の刻文が口縁に直角に施されている。器面は両面ともナデ調整を行っている。焼成は普通で石英・チャートを含む。器色は内外面とも茶褐色。第3層の出土。

同図73（第14図版5）も第2種Ⅰに属する頸部の破片で、上方には1組の横位の連点文、

右側では縦位に2組認められ、縦位文様の左側は無文となっている。連点文は伊波式の特徴を示し、浅くかつ長く引いている。また、第2文様帯のスペースも大きく、伊波式の特徴をそなえている。本標品も前回の第1種から本項に移したものである。表面は摩耗のため擦痕の有無は不明だが、裏面はナデによって調整されている。焼成は普通。石英を混入。器色は外面は暗褐色、内面は赤褐色。第12層の出土。

第9表 伊波式土器に使用された施文工具と文様の関係

施文工具 文様 層序	又 状 工 具						計
	点 刻 文	短 沈 線	点 刻 文	綾 杉 文	短 鋸 歯 文	連 鋸 歯 文	
表面採集						1	1
第1層					1		1
2							
3	4	1	1			1	8
4							
5	2	1	①				4
6		1					1
7							
8							
9							
10							
11				①			1
12	1						1
13							
14	2						2
15							
16							
17							
18							
計	9	3	2	2	2	1	19

注 ○のものは綾杉状文・鋸歯文の一方が認められた。
○表採の1点は連点文のみ認められた。

同図74(第14図版6)は山形口縁の破片である。山形は左右が不均衡なことから双頭タイプに属する資料と思われる。口縁は外反する。口径は推算17センチ。文様は単篋で押し

引き文を口縁にそって2条施し、左側には縦位の押し引きが2条みられ、山形直下のものは弧状を呈する。中段は叉状工具で綾杉状の文様を施文し、3段の斜線が認められる。下段の文様は破損のため不明であるが、上段の文様と同種のもので施文されていたと考える。口唇は山の部分でやや丸く、他は平坦に整形されている。口唇部には図のようなやや長めの単沈線を施文する。器面はすべてナデ調整を行っており、器色は両面とも赤褐色。焼成は普通で、石英を混入する。第3層の出土。同一個体に属すると思われる破片が本貝塚のR-9の第5b層で出土している。

同図75(第14図版7)は頸部の破片で、破損のため上・下段の文様を欠く。中段の文様は、器面に残る文様の一部からすると、綾杉文を構成していたように考えられる。この標品は断面半円状の凸帯を縦に貼付し、凸帯上とその両側に点刻文をそれぞれ1条施している。表面は摩耗のため擦痕の有無は不明だが、裏面では擦痕を横位に施している。器色は表面は暗褐色、内面は茶褐色。焼成は普通。石英・チャートを含む。第3層の出土。

同図76(第14図版8)は表面は茶褐色、裏面は赤褐色を呈するもので、綾杉文か組帯文とみられる文様を施文する。表裏面ともナデ調整を行っている。焼成は普通で石英を混入する。第5層の出土。

同図77(第14図版9)は山形頂部に近い部分の破片で、口縁にそって2条1組の短沈線を2組施し、その下方には同種工具による鋸歯文の一部がみられる。口唇にも列点文様の文様を施している。器色は両面とも赤褐色。石英・チャートを混入。器面摩耗のため擦痕の有無は不明で、文様も不鮮明。焼成は普通。第1層の出土。第2種Vのグループに属するものであろう。

同図78（第14図版10）は胴部の破片で、又状工具による連点文が横位に一組認められ、その下方には同種の施文具による鋸歯文を描いている。連点文が伊波的であることから、ここに含めたが、荻堂式の可能性もある。表裏面ともナデ調整を行っており、器色は赤褐色。焼成は良い。石英やチャートを混入する。第3層の出土。

同図79（第14図版11）は頸部の破片で、鋸歯状の文様を施文する。鋸歯状としたのは、伊波式や荻堂式にみられる鋸歯文と異なるからである。つまり、数本を単位とする沈線で鋸歯文を描くのである。奄美の土器とみるべき資料かもしれない。施文は浅い。両面とも赤褐色を呈する。表面はナデ調整が認められるが、裏面は石灰分付着のため不明。石英を混入。この標品は薄手の焼成の良い土器で、胎土は細かい。第11層の出土。

分類不能の小破片

第16図80～87（第14図版12～19）の8点は小破片のため、3文様帯のうち2つの文様帯が不明で、細分ができないものである。

同図80（第14図版12）は胴上部の破片で、文様帯最下段に点刻文の一部を残している。点刻文は部分的に連点状を呈するところもあり、典型的な伊波式に比べると若干矮小化している。この土器は上記文様特徴のほか、薄手で胎土が細かい点、奄美の土器に共通する要素も見受けられる。表面では一部擦痕もみられるが、裏面は石灰分の付着のため不明。焼成は良好。器色は暗褐色。石英混入。第14層の出土。

同図81（第14図版13）は口縁の破片で口縁は外反する。文様は又状工具による短沈線を口縁にそって2組、間隔をおいて施文している。表面は摩耗のため器面調整の方法は不明

第10表 伊波式土器の口唇部の文様

施文具 文様 層序	又状 工具	単篋工具		計
	点刻文	刻文	短沈 線文	
表面採集				
第1層		1		1
2				
3	2	1	2	5
4				
5		2		2
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
計	2	4	2	8

だが、裏面ではナデが認められる。文様は不鮮明。口唇は無文。表面は赤褐色。裏面は黄褐色で焼成はやや悪い。第3層の出土。

同図82・83・84（第14図版14・15・16）の3点も口縁破片で、施文具に又状工具を用いている。82は口縁にそって短沈線を施すもので、1組認められる。口唇は平坦に整形しているが文様は認められない。表裏ともナデ調整を行っている。色調は表面の一部は暗褐色だが、他は両面とも茶褐色である。焼成は普通。石英を多量混入する。第6層の出土。83

は連点文が口縁にそって2組認められ、施文方向は左から右である。連点文の特徴から、伊波式に含めることにした。口唇に文様は見られない。器面は表裏ともナデ調整を行っている。表裏とも暗褐色。焼成はやや悪い。石英を混入。表面採集品。84は沈線が2組、口縁にそって認められるもので、口唇にも押し引きに近い縦型の刻文を単篋で施文する。両面ともナデ調整を行っており、焼成は良好。表面は暗褐色。裏面は赤褐色。石英を混入する。第5層の出土。

同図85（第14図版17）は口縁の破片で、口縁上端にそって点刻が1組認められる。文様は比較的鮮明である。口唇上は無文。器面は両面ともナデによる調整。器色は暗褐色で石英・チャートを混入する。焼成は普通。第5層の出土。

同図86・87（第14図版18・19）も口縁の破片で、86は山形口縁の左半部の資料である。両標品とも口唇部および口縁部に点刻文を施す。器色は茶褐色ないし暗褐色で、胎土には石英を混入。焼成は普通。第3層の出土。

以上、本トレンチの伊波式土器について記述した。文様の判明するものについてみると

第11表 伊波式土器に使用された施文具・施文部位および文様の関係

口唇部 口頸部	又 口唇部	又 状 具			計
		点刻文	刻文	短沈線	
又 状 工 具	点刻文	2	2	1	5
	短沈線		1		1
	点刻文 綾杉状文				
	短沈線 鋸歯文		1		1
	連点文 鋸歯文				
半截竹管 + 単篋工具		押し引き 綾杉状文		1	1
計		2	4	2	8

注：口唇部に文様が見られるもの8点に限定した。

2つのグループに大別され、その中では第2種が比較的多く、第1種は3点の出土であった。無文の伊波式土器は見受けられなかった。

施文部位については小破片が多く、施文範囲を明確に示しうる標品は1例もないが、従来の資料から判断すると口唇部と口頸部が施文の対象となったと思われる。口縁内面に施文する例は見受けられなかった。第16図74（第14図版6）は文様帯の幅の最も大きいもので、施文は胴の最大径の位置を越えて下方に及んだとみられる資料である。しかし、文様帯の下端は底部近くに及ぶことはなく、前記最大径の直下あたりで止っていたものと思われる。

器面はナデ調整を行ったものと擦痕を施すものが見受けられた。擦痕を両面に施すものではなく、外面のみのもの3点、内面のみのもの1点の計4点であるが、いずれも全面に施すものではなく、破片のごく1部に認められたに過ぎない。他はすべてナデ調整を行っている。

第12表 伊波式土器の擦痕の残存状況

擦痕の状況 種類	両面 あり	外面 のみ	内面 のみ	両面 なし	計
第1種		2		1	3
2			1	7	8
3					
不明		1		7	8
計		3	1	15	19

本トレンチの伊波式土器も胎土はやや粗く、石英やチャートを含むが、混入量は前者が圧倒的に多い。焼成は普通で脆弱なものが多い。しかし、中には堅緻なものも若干見受けられる。器色は暗褐色のものが多く、茶褐色のも

のがこれに次ぎ、明るい褐色のものも1例見受けられた。

伊波式土器は第8表にみられるように、T-8においては、おおよそ3か所に集中して検出された。すなわち、第6層以上の部分と、第11・12層そして第14層の3か所である。T-8の土器は伊波・萩堂両型式を除くと第13層以上の層で発見され、大山期の末か室川期に攪乱を受け、その後に再堆積したものと考えられるが、その際、攪乱の及ばなかった部分が、第14層であろう。同層は隣接するS-8の第6あるいは7層に接続するものと思われる、第16図69・80の2点はT-8における最古の土器とみることができる。他の伊波式土器は攪乱を受けた時、上位に持ち上げられたものであろう。

b. 萩堂式土器

本トレンチで検出された萩堂式土器は第17図88～100・第18図101～106（第15図版1～13・第16図版1～6）に示す19点で、完形品はなく、すべて破片で、そのうち口縁は7点、他の12点は胴部の破片である。

器種・器形

器種を推定しうる大型の口縁破片についてみると、壺形は見当らず、すべて深鉢形に属する。口径の推算できるものが2例あり、それぞれ11センチと13センチである。

深鉢形の器形は胴上部から口縁へかけてすぼまるタイプが一般的で、第17図88（第15図版1）や98（同図版11）はこのタイプに属する資料とみられるが、他は小破片のため確実なことを知り得ない。また、山形口縁の頂部外面に瘤状の突起をつけるのも萩堂式の特徴の一つであるが、今回はこの種の口縁は検出されていない。第17図88（第15図版1）の山

形口縁は頂部左右の傾斜が非相称で、右方は凹状の傾斜をつくるという不均衡な山形であるが、この種の山形は知花遺跡（註12）でも知られており、萩堂式のヴァライアティーの一つとみてよい。

本トレンチでは萩堂式の底部と認定できる資料は得られなかったが、従来の資料からすると本トレンチの萩堂式の底部も平底とみていいだろう。

文 様

萩堂式の文様は、本誌第2号において5種に細分されており、本文もこれに従って記述するが、本トレンチでは第4・5種の2種は検出されていない。施文具は叉状工具（13点）、単篋工具（4点）、半截竹管状工具（2点）の3種が認められ、叉状工具が一般的である。施文部位が確実におさえられる資料はないが、口唇部と口頸部に限られたようで、口縁内面に施文する例は見受けられない。

第13表 萩堂式土器の擦痕の残存状況

種類	擦痕の状況	両面あり	外面のみ	内面のみ	両面なし	計
第1種		2	1		5	8
2					2	2
3				1	5	6
4						
5						
不明					3	3
計		2	1	1	15	19

擦痕の残存状況を口縁部と有文胴部の19点について観察した。19点のうち、両面に擦痕が認められるものは2点、外面のみに認められるもの1点、内面のみに認められるものも1点で、残りの15点は両面ともナデ調整が施され、擦痕は見られなかった。擦痕は外面の文様帯の部分では一般にナデ消され、胴部の

無文部あるいは内面に残るケースが多いが、第17図88（第15図版1）は文様帯にも明瞭な擦痕を残している。施文は文様帯の部分をナデたあと行うのが普通である。

次に前記細分に従って記述する。

第1種

横位の沈線や連点文などと鋸歯文を組み合わせるもので、鋸歯文の施文部位により次の(イ)～(イ)の3種に細分される。

- (イ) 文様帯の中間にのみ鋸歯文を施すもの。
- (ロ) 文様帯の中央部および最下段に鋸歯文を施すもの。
- (ハ) 文様帯の最下段のみに鋸歯文を施すもの。

鋸歯文の認められるものは第17図88～95（第15図版1～8）の8例であるが、ほとん

どが口頸部の小破片で、そのため全景がつかめず、上記3種への細分の困難なものが多い。

第17図88（第15図版1）は3条の横位連点文の下方に、2条1組の沈線による鋸歯文を施す資料である。中段の鋸歯文が上下の連点文に挟まれる場合、上下の連点文はそれぞれ2条というのが一般的である。他方、鋸歯文が最下段のみに来る場合は上位の第1文様帯は3条の横位文様を施すことが多い。以上の事例および本標品の鋸歯文の下方に若干空白部の認められることから、本標品は(イ)の資料とみなすことが可能であろう。口唇部には点刻文を施文する。施文はすべて左から右の方向である。口径は推算11センチ、第3層の出土である。

第17図90～92・94（第15図版3～5・7）の4点は最下段に鋸歯文を施す例で、(ロ)、(ハ)のいずれかの資料であろう。94は単篋を使用

第14表 荻堂式土器の文様別出土状況

層序	種 類 工 具	第 1 種		第 2 種		第 3 種				第 4 種		第 5 種		種不明		計	
		イ～ハ				イ		ロ									
		又状	単篋	又状	単篋	又状	単篋	半截	又状	単篋	又状	単篋	又状	単篋	又状		半截
表面採集			1													1	
第 1 層																	
2																	
3		2		1											1	1	5
4																	
5						1									1		2
6						1											1
7			1														1
8																	
9																	
10		1															1
11		3		1			1			1							6
12								1									1
13																	
14						1											1
15																	
16																	
17																	
18																	
計		6	2	2		3	1	1		1					2	1	19

注、第1種は3つに細分されるが、明確なものは出土していない。

しているが、他は叉状工具による施文である。90と94の施文は浅く、91・92の2点は力強く描かれている。90～92は第11層、94は表採品である。

同図89・93の2点は鋸歯文の認められる資料ではあるが、鋸歯文の位置が中段か最下段か決定できないものである。89は叉状工具を用いて描き、93は単篋で描いているが、いずれも施文は浅く、文様は不鮮明。89は第10層、93は第7層の出土である。

同図95（第15図版8）は鋸歯文が上下に2組認められる。中段（第2文様帯）に鋸歯文を二重に施す例は若干知られているが、最下段に二重に施す例は室川貝塚に1例推定資料があるだけである。本標品は頸部の資料とみられることから、第2文様帯の資料かと考えられる。つまり、(イ)、(ロ)のいずれかに属するものであろう。器面は摩耗し、文様は消えかかっている。第3層の出土。

第2種

横線や連点文など横位文様で構成される第1文様帯の下方に斜行の文様を配するもので後者が第2文様帯となる。これに属する明確な資料は今回は発見されていない。ただ、第17図96・97（第15図版9・10）の2点はこれに近い資料かと考えられるが、斜線の間隔が異状なほど大きく、従来の資料とは大分異っている。

96は頸下半部の資料で、横位沈線の下方に斜沈線の一部が認められる。横位沈線は5本認められ、叉状工具を用いていることから3組あるいはそれ以上の横線を施文したものである。下方の斜沈線も叉状工具で描かれたものであろう。この斜線は斜行文か鋸歯文の一部であろう。上方の横位沈線が3組以上と考えられることと合わせて、本資料は第1

種いか第2種のいずれかに属するものと推察される。第3層の出土。

97は横位沈線文の下方に右傾の沈線の一部が認められるもので、横位沈線は叉状工具を用いているが、下方は定かでない。しかし、沈線の特徴は上方の横線と一致しており、同一工具の片方を用いて描いたかとも考えられる。斜行文の左側は無文空白部となっており、従来知られている第2種の斜行文とも異っている。したがって第2種と決定するわけにもいかず、本文ではこういう資料もあるという紹介にとどめておく。第11層の出土である。

第3種

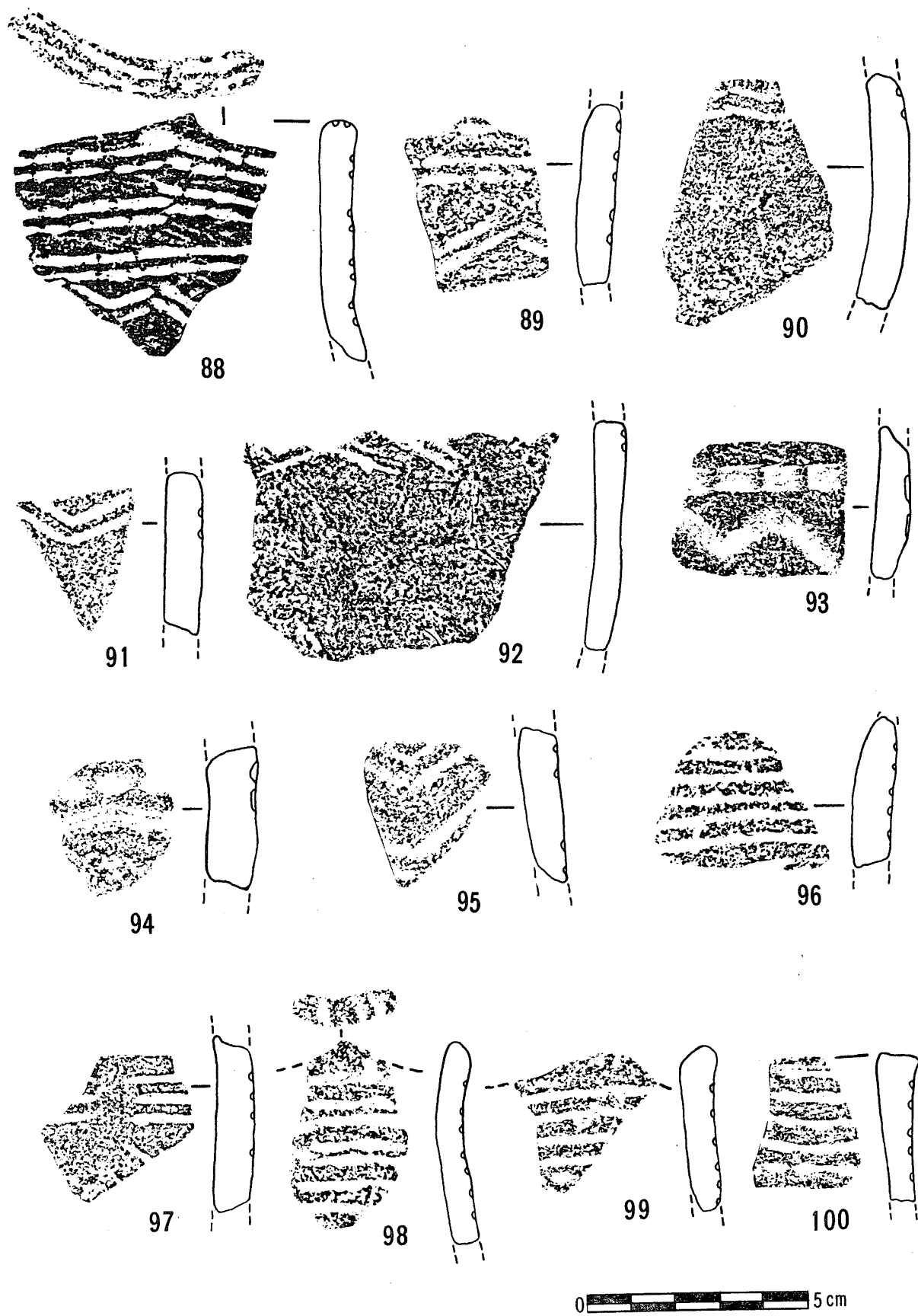
口縁の文様が水平方向の平行線文や連点文などに終始するもので、下記の2種に大別される。

- (イ) 文様の上下の間隔が密なもの。
- (ロ) 上記の文様を一定の間隔をおいて等間隔に施すもの。

本トレンチではこれに属する明確なものは検出されていないが、第18図104～106（第16図版4～6）の3点はこれに含めてよい資料かと考える。

第18図104（第16図版4）は口縁の破片で単篋による2条の押し引きが認められ、上下の文様の間に一定の間隔（1センチ）がみられる。施文は浅く、文様は不鮮明であるが、第3種(ロ)の資料かとみられる。第11層の出土。

同図105（第16図版5）は山形口縁左側の破片で、横捺刻文を4条施す。上位の2組は押し引き手法に近い。下位の2組は純然たる横捺刻文である。施文はいずれも深く、その点は大山式に近い。文様帯下位に若干の無文



第17图 荻堂式土器

空白部の認められることから、第3種の可能性の最も強いものである。だとすれば、前記細分の(イ)に属する資料ということになる。同図106(第16図版6)は文様帯下半部の資料で、半截竹管状工具による押し引き文が2条認められる。最下段の押し引き文は若干弧状を呈する。第3種の(イ)に含めてよいかと思われる。105は第11層、106は第12層の出土である。

第17図98～100(第15図版11～13)の3点も本項の可能性のあるものである。

98は山形口縁の破片で、連点文が4組認められる。力強く施文され、かつ密であることから、文様形態は前記(イ)に属する可能性がある。99も山形口縁の破片で、横位の連点文が3組認められる。施文は浅い。しかし、密に施していることから、これも(イ)の資料かと考えられる。100も口縁の破片で、3組の横位連点文が認められる。施文は浅い。これも前記の細分でいけば(イ)の可能性のあるものである。しかし、この3点は連点文が3組以上に及ぶ可能性もあり、そのことから第1種の(イ)か第2種あるいは第3種の可能性も残されている。98は第6層、99は第14層、100は第5層の出土である。

細分不能の資料

荻堂式に属するものの、小破片のため文様の展開状況が掴めず、細分不可能なものがある。第18図101～103(第16図版1～3)の3点がそれで、101と102は半截竹管状工具103は叉状工具で施文する。101は山形口縁の破片で押し引き文が2条認められる。第3種(ロ)の可能性もある。第3層の出土。102・103は胴部の破片で、102は押し引き文、103は連点文がそれぞれ3組認められ、以下は無文となっており、第3種(イ)の可能性が

第15表 荻堂式土器の口頸部の文様とその層位的出土状況

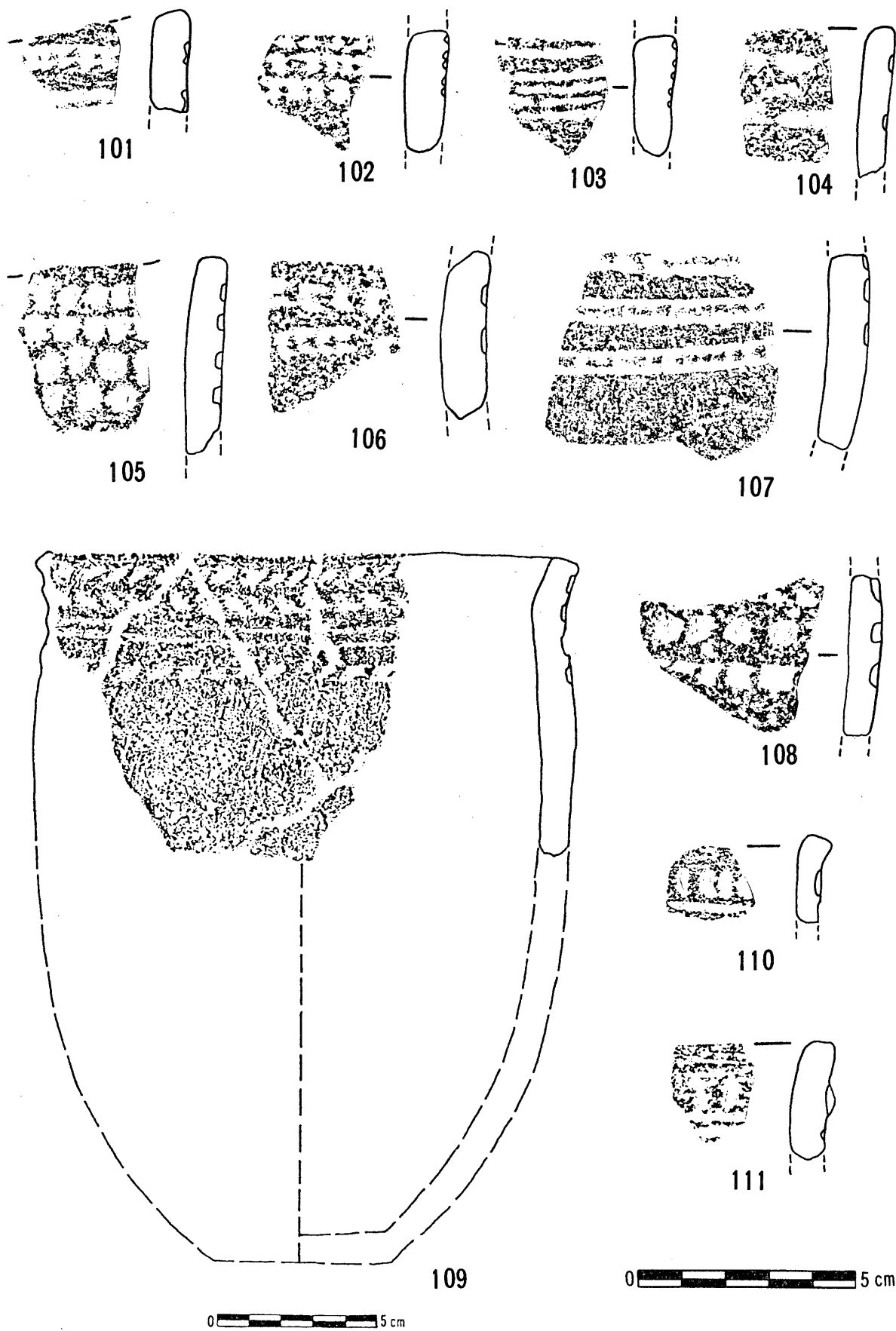
文 様 層 序	連 点 文	押 捺 刻 文	鋸 歯 文	連 鋸 点 文 +文	押 し 鋸 引 き 歯 文 +文	長 斜 線 文 +文	斜 線 文 +文	計
表 面 集					1			1
第1層								
2								
3	2		1	1			1	5
4								
5	2							2
6	1							1
7					1			1
8								
9								
10				1				1
11		1	3		①	1		6
12					①			1
13								
14	1							1
15								
16								
17								
18								
計	-6	1	4	2	4	1	1	19

注、○で囲んだものは押し引き文のみのもの

考えられる。施文はいずれも浅い。102は第3層、103は第5層の出土である。

胎土および混入物

本トレンチ出土の荻堂式土器は他の遺跡同様、胎土のやや粗いものが多い。混入物は石英の砂粒を主体にチャートを少量混じるものが一般的である。混入物の大きさは1～3ミリのものが多いが、3～5ミリほどの角張っ



第18図 萩堂式土器(101～106)と大山式土器

た石英やチャートを含むものも稀にはある。混入量は一般的に多く、肉眼観察が可能である。

焼成・器色

焼成は不良で脆弱なものが一般的であり、器面の摩耗したものも多い。しかし、第17図88（第15図版1）のように焼成の良いものもわずかながら認められる。

器色は暗褐色・茶褐色を呈するものが多く、赤褐色を呈するものも比較的多い。中には第17図96（第15図版9）のように灰色を帯びたものも認められた。

出土層位

荻堂式として明確なものは19点である。そのうち第17図99（第15図版12）の1点は第14層の出土であり、前項伊波式と同じくT-8区では最古の土器といえる。他の18点は第12層以上の層で出土しており、これらはカヤウチバンタ期末か室川式のころ攪乱によって上位に移動したものであろう。

c. 大山式土器

本トレンチでは16点の大山式土器（第18図107～111、第19図112～122 および第16図版7～11、第17図版1～11）が検出された。完形品はなく、すべて破片であるが、そのうち1点（第18図109・第16図版9）は図上復元を試みた。破片16点のうち11点が口縁部で、残りの5点は頸部あるいは胴上部の破片である。

器種・器形

器種の推定できる大型の口縁破片についてみると、壺形は見当らず、すべて深鉢形である。口縁は平口縁で、山形口縁は認められな

かった。

口径と胴径の関係を知りうる資料は第18図109（第16図版9）の推定復元を試みた1点だけである。この土器は口径と胴径のほぼ等しいものである。この資料は頸部でしまり、口縁が軽く外反する。このように外反する例は他にも見受けられるが、中には直口かとみられるものも数点含まれている。

底部は完形品が得られなかったので明言できないが、類例遺跡の資料を参考にとすると、立ち上りの部分が外彎状のカーブを示す平底であろう。

大きさ

完形あるいは推定復元の可能な資料が皆無に等しいので、サイズを一般化して提示することはできないが、口径については推算可能なものが3点ある。第18図109（第16図版9）は口径推算17.5センチ、高さ約22センチ。第19図113（第17図版3）は口径推算12センチ、同図115（第17図版4）は推算13.6センチで、第18図109は中型の大きい方に属し、第19図113・115は小型の大きい部類に入る。

文様

文様は大山式においては普通、口頸部に施文される。施文具は単篋工具や半截竹管状工具などが使用されるが、今回の資料には後者は含まれていない。施文の方向はすべて左から右の方向である。

文様には押捺刻文、押し引き文、沈線文、凸帯文の4種が見受けられる。最も多い文様は、押捺刻文と押し引き文で沈線文と凸帯文がそれに次ぐ。大山式は押捺刻文や押し引き文を横位に2条ないし3条めぐらすのが一般的であるが、ほかに横位沈線文、凸帯文などと組み合わせる例も何種類かみられた。文様

の種類は、本誌第3号に報告されたQ・R-7区の資料から外れる資料は見られないので、前号に従って分類する。念のため前号の文様分類を再記するが、本トレンチでは第3・4種は未発見であった。

- 第1種 押捺刻文か押し引き文に終始するもの。
 第2種 第1種に横位沈線文を加えるもの。
 第3種 第1種に斜行文を加えるもの。
 第4種 第1種に羽状文または綾杉文を加えるもの。
 第5種 第1種に凸帯文を加えるもの。

次に、各グループごとに記述する。

第1種

第1種の完全な資料は採集されていないが、第18図107・108（第16図版7・8）の2点は本項に含めてよいと思われる。

第18図107（第16図版7）は胴上部の破片で、押し引き文が3条認められる。文様帯下端の資料で、以下空白となっていることから、押し引き文に終始する文様とみられる。押し引きは浅いが連続的に施文され、その部分は凹線状に凹み、押し引きと押し引きの間は若干盛り上って凸帯を形成しているかのようである。このような施文手法は大山式の主要な特徴の一つに数えられる。第6層の出土。

同図108（第16図版8）も文様帯下半部の資料で、3条の文様が認められる。現資料の1番上と最下段は押し引き文、中段は押捺刻文となっている。押し引き文は浅く、押捺刻文は施文が深い。文様帯の下方に無文空白部がわずかに見受けられることから、これも第1種と認めてよいと思う。第3層の出土。

第16表 大山式土器の文様別出土状況

種類 層序	第1種	第2種	第3種	第4種	第5種	不明	計
表面採集							
第1層							
2						1	1
3	1	1			2	3	7
4							
5						2	2
6	1					1	2
7							
8							
9							
10							
11						1	1
12		1			1	1	3
13							
14							
15							
16							
17							
18							
計	2	2			3	9	16

第2種

第1種の文様に横位沈線文を加えるもので、本トレンチでは2点検出された。うち1点（第18図109・第16図版9）については図上復元を試みた。

第18図109は先端が偏刃状の単篋を用いて文様を描いたもので、1段目と2段目に傾斜の異なる押し引き文を施文し、両者を組み合わせると羽状文となる。3段目は同種の施文具で凹線文を繞し、4段目は1段目と同種の押し引き文を施文している。押し引き文は比較的力強く描かれているが、横線は浅い。以

下は無文である。第12層の出土。

同図 110 (第16図版11) は口縁の破片で先端が弧状を呈する単篋を用いて、爪形状の文様を1条口縁にそって施文し、下方に沈線を繞らす。沈線の幅は明確でないが、おそらく爪形文と同じ施文具を用いて描いたものと思われる。爪形文は深く、横線は浅く描いている。本標品の横線以下の文様は不明であるが、第2種に含めてよい資料と思われる。第3層の出土。

第5種

第1種の文様に凸帯文を加えたもので、本トレンチでは3点検出された。

第18図 111 (第17図版2) は口縁の約1センチ下方に、断面やや円形の凸帯文を水平に貼り付けたもので、凸帯は厚みが薄く、その上にやや深く刻文を描く。そのため文様は器面に近い位置まで刻まれることになる。凸帯下方に文様が施文されていたかどうかは不明である。第3層の出土。

第19図 112 (第17図版1) は凸帯の上方(頸部)を欠失する胴部の破片である。断面やや円形の凸帯に、刺突に近い押捺刻文を凸帯の中央と両側縁に深く施文する。凸帯下方に文様は描かれていないが、凸帯より上方に文様が施されていたかどうかは不明。器色等からして大山期でも後半のものと考えられる。第12層の出土。

同図 113 (第17図版3) は口縁から5～6ミリ下方に、幅8～9ミリ、厚さ3～4ミリの凸帯文を横位に貼り付け、凸帯外面に押捺刻文を施文する。凸帯下方における文様の有無は不明。第3層の出土。

細分不能の資料

第19図 114～122 (第16図版10・第17図版4

～11) の9点は押捺刻文あるいは押し引き文を施文するものの、その文様のみに終始したかどうか不明のものである。

第19図 114 (第16図版10) は先端が不揃いの単篋を用いて押し引き文を描くもので、現資料には1条認められる。施文は浅い。押し引き文の下方は無文空白部を形成するが、上方の文様が不明である。第3層の出土。

第19図 115・120～122 (第17図版4・9～11) の4点は押し引き文、他は押捺刻文を施す。施文は深く刻むものと浅めのものがある。同図 115・117・119・121・122 (第17図版4・6・8・10・11) の5点は浅めで、他は力強く施文されている。

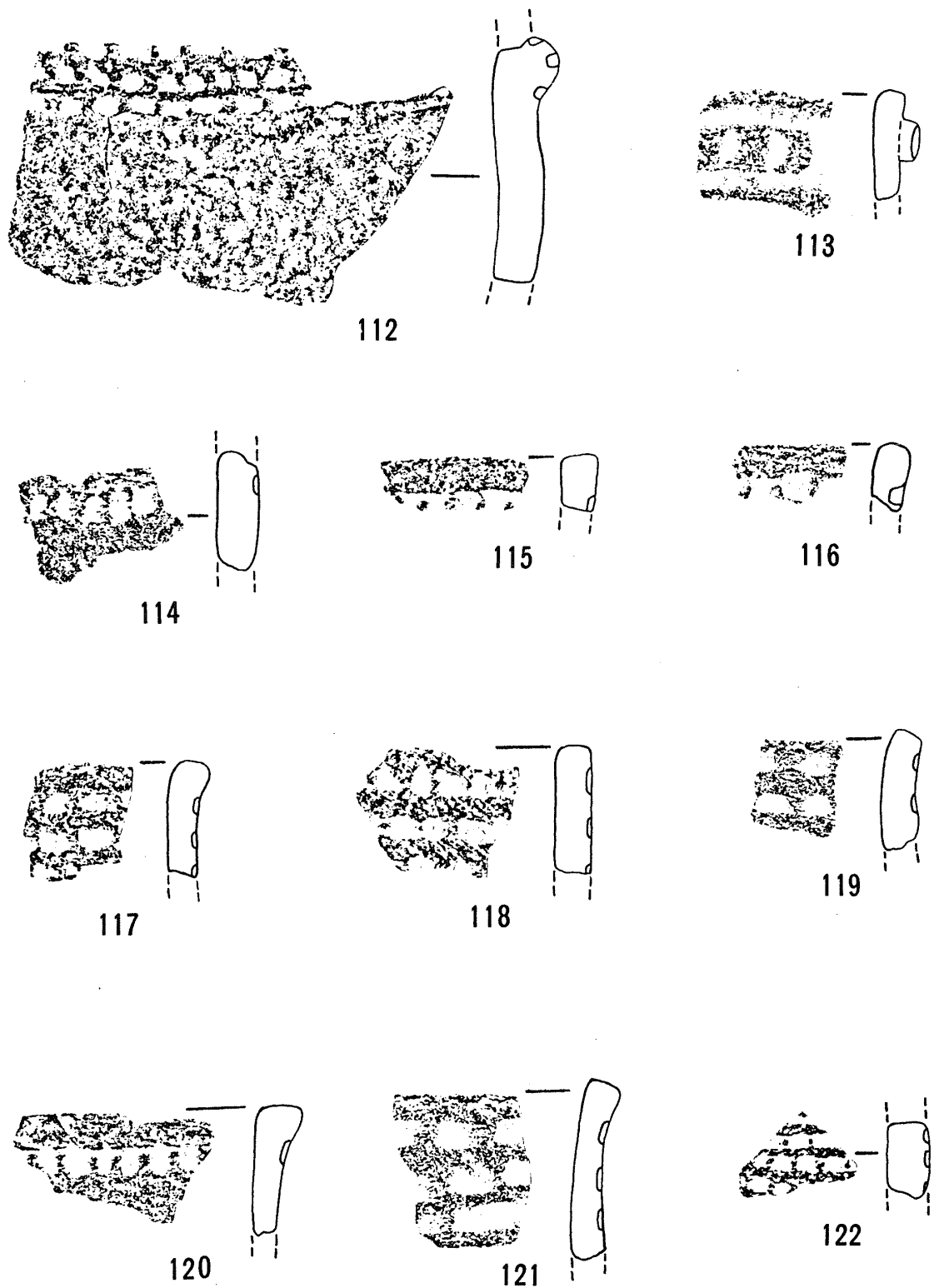
同図 119は第2層、同図 116・122は第3層、同図 120・121は第5層、同図 115は第6層、同図 117は第11層、同図 118は第12層の出土である。

第17表 大山式土器に含まれる混入物の種類

種類 混入物	第1種	第2種	第3種	第4種	第5種	不明	計
石英のみ	2	1			2	6	11
石英 磁鉄鉱						3	3
石灰質砂粒 石英		1					1
石英 角閃石					1		1
計	2	2			3	9	16

胎土および混入物

胎土は他の遺跡同様、やや粗いものが主であるが、第19図 119・120の2点は胎土が細かく泥質に近い。混入物は第17・18表に示すように、①石英、②石英>磁鉄鉱、③石灰質砂粒>石英、④石英>角閃石の4種が認められ、石英のみを含んだものが最も多い。角閃



第19図 大山式土器

第18表 大山式土器に含まれる混入物の種類とその出土状況

混入物 層序	石英のみ	石英 磁鉄鉱	石英 石灰質砂粒	石英 角閃石	計
表面集					
第1層					
2		1			1
3	5	2			7
4					
5	2				2
6	2				2
7					
8					
9					
10					
11	1				1
12	1		1	1	3
13					
14					
15					
16					
17					
18					
計	11	3	1	1	16

石を混入するものは第19図 112の1点だけである。

混入量は伊波・荻堂式土器とほぼ同じで、肉眼観察は容易である。しかし、第19図 112・120・122の3点は他の13点からみると混入量が非常に少ない。

焼成・器色

本トレンチ出土の16点についてみると、焼成は普通か、不良のものがほとんどで、したがって、脆い土器ということになる。器色は赤褐色・茶褐色を呈するものが多く、中には黒褐色・

黄褐色を呈すものもわずかながら見受けられた。

第19表 大山式土器における擦痕の残存状況

残存状況 種類	両面あり	外面のみ	内面のみ	両面なし	計
第1種				2	2
2		1		1	2
3					
4					
5	1	1	1		3
不明		3		6	9
計	1	5	1	9	16

器面調整

本トレンチ出土の大山式の口縁部および有文胴部における擦痕の残存状況を調べてみた。両面に擦痕が見られるものは1点、外面のみのもの5点、内面のみのもの1点、他の9点は擦痕が見られず、両面にナデが施されていた。外面のみに擦痕がみられるもののうち、第18図 109の1点は文様帯の部分をナデで調整し、それ以下に縦位の擦痕を施文する。

出土状況

本トレンチの大山式土器の出土層位はほぼ2か所に集中している。つまり、第2層～第6層の上位グループと第11・12層の下位グループである。

ところで、各種ごとの出土層位をみてみると、第1種は第3・6層、第2種と第5種はそれぞれ第3・12層で検出され、バラツキがあり、先後関係をおさえることはできなかった。

d. カヤウチバンタ式土器

本トレンチ出土のカヤウチバンタ式土器は50点で、完形の出土はなく、すべて破片である。そのうち比較的大きな口縁破片2点につ

いては、推定復元を試みた。

これらの土器は、それぞれの特徴から大山期、室川期、室川上層期、宇佐浜期の4期に分けられ、出土量はそれぞれ大山期25点、室川期21点、室川上層期3点、宇佐浜期1点であった(第20表参照)。

以下、大山期のものより記述することにする。

イ、大山期のカヤウチバンタ式土器

大山期のカヤウチバンタ式土器は25点で、そのうち有文は8点、他は無文であった。

器 形

推定復元を試みた1点(第20図123・第18図版1)および器形の窺える口縁破片でみると本トレンチの大山期のカヤウチバンタ式は概ね3種に分けることができる(第21表)。すなわち、(A)底部から口縁へ向ってやや直線的に開く器形、(B)胴部が若干ふくらみ、頸部でしまり、口縁が外反を示す器形で、径の最大が口縁にあるもの、(C)器形は上記とほぼ同じだが、径の最大が胴部にあって、口縁へ次第に径を減ずるタイプ、の3種である。

第20表 カヤウチバンタ式土器の出土状況

時期 文様の有無 層序	大山期		室川期				室川上層期				宇佐浜期		計
			Aタイプ		Bタイプ		Aタイプ		Bタイプ				
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集	1		1										2
第 1 層													
2													
3	1	8						1	1	1	1		13
4													
5	1		2	1	1								5
6			2	2	1								5
7		2			1								3
8				1	1								2
9													
10													
11	1	4		1	1	1							8
12	3	3	3	2									11
13	1												1
14													
15													
16													
17													
18													
計	8	17	8	7	5	1		1	1	1	1		50
			15		6		1		2				
	25			21			3			1			

上記分類の(A)に属するものは2点で、第20図123(第18図版1)は口縁へ向ってやや直線的に開く器形に属し、第21図131(第19図版7)は直口に近いがこれに含めてよいであろう。頸部でしまり、口縁が外反するもの、つまり(B)のタイプであるが、確実なものは検出されていない。しかし、第21図125(第19図版1)や同図126(第19図版2)はこれ

に含めてよいと思われる。(C)に属するものは最も多かった。第22図136(第20図版5)のように肥厚部の断面が典型的なカヤウチバンタ式に属するものもあるが、第23図141～146(第21図版2～7)のように口縁肥厚部の断面が長方形あるいは正方形の形態をとるものに多いようである。

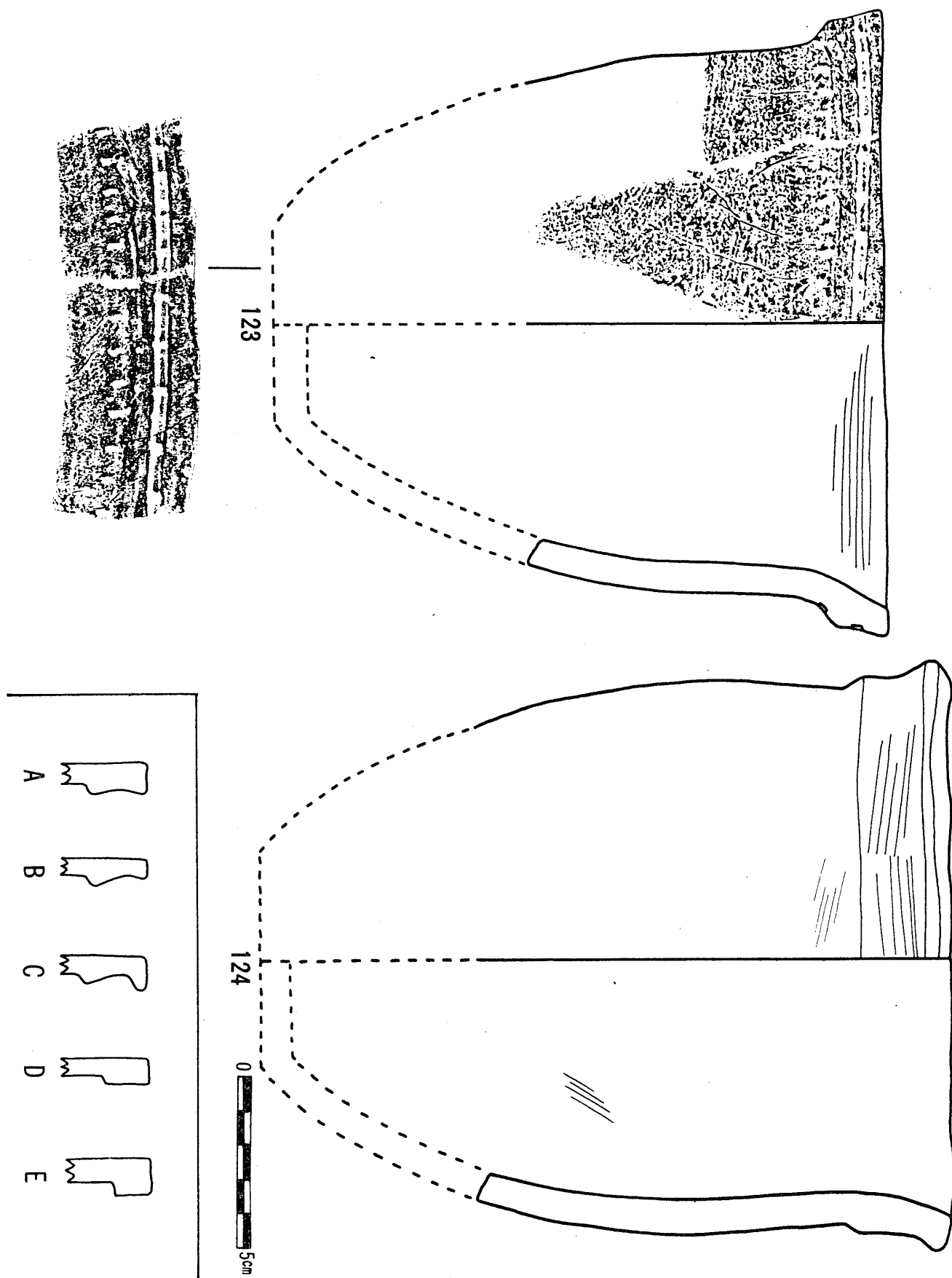
第21表 大山期のカヤウチバンタ式土器(器形別出土状況)

タイプ 層序	Aタイプ		Bタイプ		Cタイプ		不 明		計
	有 文	無 文	有 文	無 文	有 文	無 文	有 文	無 文	
表 面 採 集			1						1
第 1 層									
2									
3				1		4	1	5	11
4									
5							1		1
6									
7						2			2
8									
9									
10									
11				1	1	2		1	5
12	2				1	1			4
13			1						1
14									
15									
16									
17									
18									
計	2		2	2	2	9	2	6	25
	2		4		11		8		

文様との関係でみると、(A)の2点は有文、(B)のうち2点は有文、(C)も有文は2点で、いずれに施文する例が多いかということは今回は擧げなかった。

口縁の肥厚帯にはいろいろの大きさのものがみられる。肥厚帯上端(口唇)の厚さ、肥

厚帯の幅(上下の長さ)、および同下端部の厚さを計測し、その比率を調べてみた。肥厚帯上端(口唇)の厚さを1とした場合の前記各部との比率は第22・23表の通りで、肥厚帯の幅が口唇の1.0～2.9倍というものが最も多く、また、下端の厚さが口唇より大きいもの



第20図 大山期のカヤウチバンタ式(123)および室川 A 期のカヤウチバンタ式土器(124)とカヤウチバンタ式の口縁断面形態模式図 (A～E)

第22表 カヤウチバンタ式土器における肥厚の形態

	図 版 番 号	口唇部・肥厚帯の長さ ・肥厚帯下端の長さ	口唇を1とした 場合の比率	断面形態	文 様	時 期
1	第20図 123 (第18図版1)	0.7 : 1.6 : 1.2	1 : 2.2 : 1.7	A	有	大 山 期
2	" 124 (" 2)	1.1 : 2.6 : 1.2	1 : 2.3 : 1.1	D	無	室 川 A 期
3	第21図 125 (第19図版1)	1.1 : 3.6 : 1.1	1 : 3.2 : 1	A	有	大 山 期
4	" 126 (" 2)	0.6 : 2.8 : 1.0	1 : 4.7 : 1.7	"	"	"
5	" 127 (" 3)	0.8 : 1.9 : 0.9	1 : 2.4 : 1.1	"	"	"
6	" 128 (" 4)	1.0 : 1.6 : 1.0	1 : 1.6 : 1	"	"	"
7	" 129 (" 5)	? : ? : 1.2	?	?	"	"
8	" 130 (" 6)	0.9 : 2.3 : 1.1	1 : 2.5 : 1.2	A	"	"
9	" 131 (" 7)	? : ? : 1.0	?	?	"	"
10	第22図 132 (第20図版1)	1.3 : 3.2 : 1.4	1 : 2.5 : 1.1	A	無	"
11	" 133 (" 2)	1.7 : 3.2 : 1.4	1 : 1.9 : 0.8	"	"	"
12	" 134 (" 3)	1.0 : 2.2 : 1.2	1 : 2.2 : 1.2	"	"	"
13	" 135 (" 4)	1.4 : 1.9 : 1.4	1 : 1.3 : 1	"	"	"
14	" 136 (" 5)	1.1 : 2.8 : 0.9	1 : 2.5 : 0.8	"	"	"
15	" 137 (" 6)	0.6 : 3.6 : 0.7	1 : 6 : 1.3	"	"	"
16	" 138 (" 7)	0.7 : 2.1 : 1.3	1 : 3 : 1.7	B	"	"
17	" 139 (" 8)	0.7 : 2.1 : 1.0	1 : 3 : 1.4	"	"	"
18	第23図 140 (第21図版1)	0.9 : 2.1 : 1.2	1 : 2.3 : 1.3	D	"	"
19	" 141 (" 2)	1.1 : 1.8 : 1.0	1 : 1.6 : 0.9	"	"	"
20	" 142 (" 3)	1.2 : 1.4 : 1.0	1 : 1.2 : 0.8	"	"	"
21	" 143 (" 4)	1.1 : 1.3 : 1.0	1 : 1.2 : 0.9	"	"	"
22	" 144 (" 5)	1.2 : 1.2 : 1.0	1 : 1 : 0.8	E	"	"
23	" 145 (" 6)	1.1 : 1.1 : 1.3	1 : 1 : 1.3	"	"	"
24	" 146 (" 7)	1.2 : 1.0 : 1.1	1 : 0.8 : 0.8	"	"	"
25	" 147 (" 8)	? : ? : ?	?	?	?	"
26	" 148 (" 9)	? : ? : 1.0	?	?	無	"
27	" 149 (" 10)	0.7 : 2.0 : 0.8	1 : 2.85 : 1.1	A	有	室 川 A 期
28	" 150 (" 11)	0.6 : 2.7 : 0.7	1 : 4.5 : 1.1	"	"	"
29	" 151 (" 12)	0.7 : 2.6 : 1.0	1 : 3.7 : 1.4	B	"	"
30	第24図 152 (第22図版1)	0.9 : 3.2 : 1.2	1 : 3.5 : 1.3	"	"	"
31	" 153 (" 2)	0.6 : 3.2 : 1.0	1 : 5.3 : 1.7	C	"	"
32	" 154 (" 3)	1.2 : 3.2 : 1.0	1 : 2.7 : 0.8	"	"	"
33	" 155 (" 4)	1.0 : 3.0 : 1.3	1 : 3 : 1.3	"	"	"
34	" 156 (" 5)	? : ? : 1.0	?	?	"	"
35	" 157 (" 6)	1.0 : 2.6 : 0.8	1 : 2.6 : 0.8	E	無	"
36	" 158 (" 7)	1.1 : 2.0 : 1.0	1 : 0.8 : 0.9	A	"	"
37	" 159 (" 8)	0.9 : 2.5 : 0.9	1 : 2.8 : 1	"	"	"
38	" 160 (" 9)	1.4 : 1.5 : 1.2	1 : 1.1 : 0.8	E	"	"
39	" 161 (" 10)	? : ? : 1.2	?	?	"	"
40	" 162 (" 11)	0.9 : 3.0 : 1.2	1 : 3.3 : 1.3	A	"	"
41	第25図 163 (第23図版1)	1.1 : 2.4 : 1.2	1 : 2.2 : 1.1	"	有	室 川 B 期
42	" 164 (" 2)	1.0 : 2.1 : 1.0	1 : 2.1 : 1	"	"	"
43	" 165 (" 3)	1.2 : 1.6 : 1.1	1 : 1.3 : 0.9	D	"	"
44	" 166 (" 4)	? : ? : 0.8	?	?	"	"
45	" 167 (" 5)	? : ? : 1.1	?	?	"	"
46	" 168 (" 6)	1.0 : 2.3 : 0.9	1 : 2.3 : 0.9	A	無	"
47	" 169 (" 7)	0.5 : 1.1 : 0.5	1 : 2.2 : 1	"	有	室川上層期
48	" 170 (" 8)	1.2 : 3.0 : 1.1	1 : 2.5 : 0.9	"	無	"
49	" 171 (" 9)	0.7 : 3.9 : 0.9	1 : 5.6 : 1.2	"	"	"
50	" 172 (" 10)	? : ? : ?	?	?	有	宇 佐 浜 期

が約2倍もあり、これが一般的な形態といえるであろう。また、上記の分類と施文例の関係について調べてみた。出土量が少なく、肥

厚の形態と施文例の関係を掘むことはできなかったが、肥厚帯の幅の大きいものに施文するものが多いように見受けられた。

第23表 大山期のカヤウチバンタ式の肥厚形態〔口唇の幅（肥厚带上端の厚さ）を1とした場合の肥厚部の長さ、および肥厚帯下端の厚さの比率〕

口唇の幅を1とした場合の肥厚部の長さ	肥厚帯下端の厚さ		0.5～0.9		1.0～1.5		1.6～2.0		合 計	
	文様の有無		有 文	無 文	有 文	無 文	有 文	無 文	有 文	無 文
1: 0.5～0.9			1						1	
1: 1.0～1.9				5	1	2			1	7
1: 2.0～2.9				1	2	3	1		3	4
1: 3.0～3.9					1	1		1	1	2
1: 4.0～4.9							1		1	
1: 5.0～5.9										
1: 6.0 以上						1				1
合 計			1	6	4	7	2	1	7	14
			7		11		3		21	

※ 大山期のカヤウチバンタ式25個中、口唇部欠損のため、計測不可能のもの4点を除く。

第24表 大山期のカヤウチバンタ式土器における口縁断面形態とその出土状況

断面形態 層 序	A		B		C		D		E		不 明		合 計
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集	1												1
第 1 層													
2													
3		1		2				2		1	1	2	9
4													
5	1												1
6													
7		1						1					2
8													
9													
10													
11	1	2								2			5
12	2	2						1			1		6
13	1												1
14													
15													
16													
17													
18													
合 計	6	6		2				4		3	2	2	25
	12		2				4		3		4		

次に肥厚帯の縦断面の形態を分類してみると、およそ5種に分つことができた。第20図A～Eはその特徴を模式化したものである。そのうち文様の認められたものはA～Dの4種であった。

次にそれぞれの特徴を簡単に説明する。

- A 肥厚帯の上端と下端の厚さがほぼ同じで、外面は凹面を形成し、歯ブラシの側面観様の肥厚を示すもの。
- B 肥厚帯の上端と下端の厚さは後者が若干大きいのが一般的であるが、特にそれが目立つようなものをBとする。
- C 肥厚帯の上端、つまり口唇が著しく強調されるもの。
- D 肥厚部の断面が長方形を呈するもので、外面は凹面とはならない。
- E 肥厚部の断面が正方形に近いもの。これも外面は凹面を形成しない。

大体、以上の5種であるが、出土量は第24表の通りで、Aが最も多く、他はそれぞれ数点の出土であった。しかし、Cタイプは検出されていない。これは後述の室川期の特徴であり、したがって、大山期のタイプにはみられないということになる。

大きさ

完形品がないので確実な資料を呈示し得ないが、復元を試みた1点（第20図123・第18図版1）についてみると、口径は推算17.5センチ、器高は約18センチで、中等の大きさといえる。器高の推測できるのはこの1点だけである。しかし、口径の推算可能なものは9点ある。最小は推算16.6センチ、最大は約20センチで、18センチ前後のものが最も多い。このことから中型の中でも大きい方のサイズ

が一般的であったかと推測している。個々の推計を第25表に記しておく。

第25表 カヤウチバンタ式土器の推算口径 (単位: cm)

	図版番号	推算口径	時期
1	第20図123 (第18図版1)	17.8	大山期
2	(" 124 2)	17.0	室川A期
3	第21図125 (第19図版1)	19.6	大山期
4	(" 126 2)	16.6	"
5	(" 130 6)	17.3	"
6	(" 131 7)	18.8	"
7	第22図132 (第20図版1)	19.0	"
8	(" 133 2)	20.6	"
9	(" 134 3)	18.0	"
10	(" 136 5)	16.8	"
11	第24図154 (第22図版3)	18.2	室川A期
12	(" 155 4)	17.5	"
13	(" 157 6)	20.0	"

文様

大山期のカヤウチバンタ式土器25点のうち文様を施す例は8点であった。本期のカヤウチバンタ式土器の施文部位は次の2ヶ所で、口唇上に施文するものはない。

- ㊦ 肥厚部外面にのみ施文するもの。
- ㊧ 肥厚部外面およびその直下に施文するもの。

㊦が最も多く6点で、㊧は2点であった（第26表）。

第26表 大山期のカヤウチバンタ式土器における施文部位とその出土状況

施文部位 層 序	肥厚部のみ	肥厚部及び その直下	合 計
表面採集	1		1
第 1 層			
2			
3	1		1
4			
5		1	1
6			
7			
8			
9			
10			
11	1		1
12	2	1	3
13	1		1
14			
15			
16			
17			
18			
合 計	6	2	8

本トレンチ出土のカヤウチバンタ式土器に使用された施文具は次の3種である。

- ㊐ 叉状工具
- ㊑ 単筥工具
- ㊒ 棒状工具

大山期のものについてみると単筥工具のみを使用している。文様はそれぞれa) 横捺刻文、b) 横位押し引き文、c) 凹線文を基調とするグループに分けられ、これを細分すると次の6種類となる。(第27・28表)

a) 横捺刻文のグループ

- イ) 横捺刻文のみ
- ロ) 横捺刻文+斜沈線文

b) 横位押し引き文のグループ

- イ) 横位押し引き文のみ
- ロ) 横位押し引き文+斜位押し引き文
- ハ) 横位押し引き文+横位刺突文

c) 凹線文のグループ

- イ) 横位・斜位の凹線文

第27表 大山期のカヤウチバンタ式土器に使用された施文具及び文様別出土状況

文 層 序	a			b					c	合 計
	横 捺 刻 文	横 捺 刻 文	斜 沈 線 文	横 位 の 押 し 引 き 文	横 位 の 押 し 引 き 文	斜 位 の 押 し 引 き 文	横 位 の 押 し 引 き 文	横 位 の 刺 突 文	横 位 の 凹 線 文	斜 位 の 凹 線 文
表面採集	1									1
第1層										
2										
3		1								1
4										
5	1									1
6										
7										
8										
9										
10										
11				1						1
12					1		1		1	3
13				1						1
14										
15										
16										
17										
18										
合 計	2	1		2	1		1		1	8

第28表 大山期のカヤウチバンタ式
土器における施文具・文様・
施文部位の関係

文 様 施文部位	a			b				c	合 計
	横 捺 刻 文	横 捺 + 刻 文	斜 沈 線 文	横 位 の 押 し 引 き 文	横 位 の 押 し 引 き 文	斜 位 の 押 し 引 き 文	横 位 の 押 し 引 き 文	横 位 の 刺 突 文	斜 位 の 凹 線 文
肥厚部 のみ	1	1	2	1				1	6
肥厚部 + 肥厚 部直下	1						※ 1		2
合 計	2	1	2	1		1		1	8

※の1点は肥厚部外面に押し引き文・同直下に刺突文を施す。

a) 横捺刻文グループ

これに属するものは2種で、イ) 横捺刻文に終始するものと、ロ) 横捺刻文に斜沈線を加えるものである。

横捺刻文のみを施文するものは2点である。

第21図125(第19図版1)は肥厚部外面に3条の横捺刻文を施文する。刻文は深く、かつ密である。施文の方向は左から右である。施文は擦痕をナデ消したあとに行っているが、消え切っていない。擦痕はやや粗めのものが表裏に見受けられる。肥厚部の下方は施文の対象となっていない。表面採集品である。

同図128(第19図版4)は肥厚部外面に2条、同直下でも同種の文様を認めることができるが、破損のため肥厚部下方における施文の範囲を明らかにし得ない。肥厚部の文様はやや深く、かつ密である。施文は左から右の方向でなされている。施文具は先端の幅約3ミリのものを使用している。第5層0～10センチ・レベルの出土。

横捺刻文に斜沈線を加えるものは第21図129(第19図版5)の1例だけである。文様は肥厚部に

み施され、以下は施文の対象となっていない。口唇部を欠き、文様は肥厚部下半部に残っているだけで、全体の展開状況を知り得ない。したがって、斜沈線が羽状文の一部なのかどうか言及できない。沈線はシャープである。下方の横捺刻文も深く刻まれ文様は鮮明である。このような斜沈線の加わるのは、大山期でも後半の頃かと推察している。この土器は第3層0～10センチ・レベルの出土であり、かつ胎土に石英、石灰質砂粒、磁鉄鉱などを混入していることから、大山期でも新しい時期のものかと考えている。

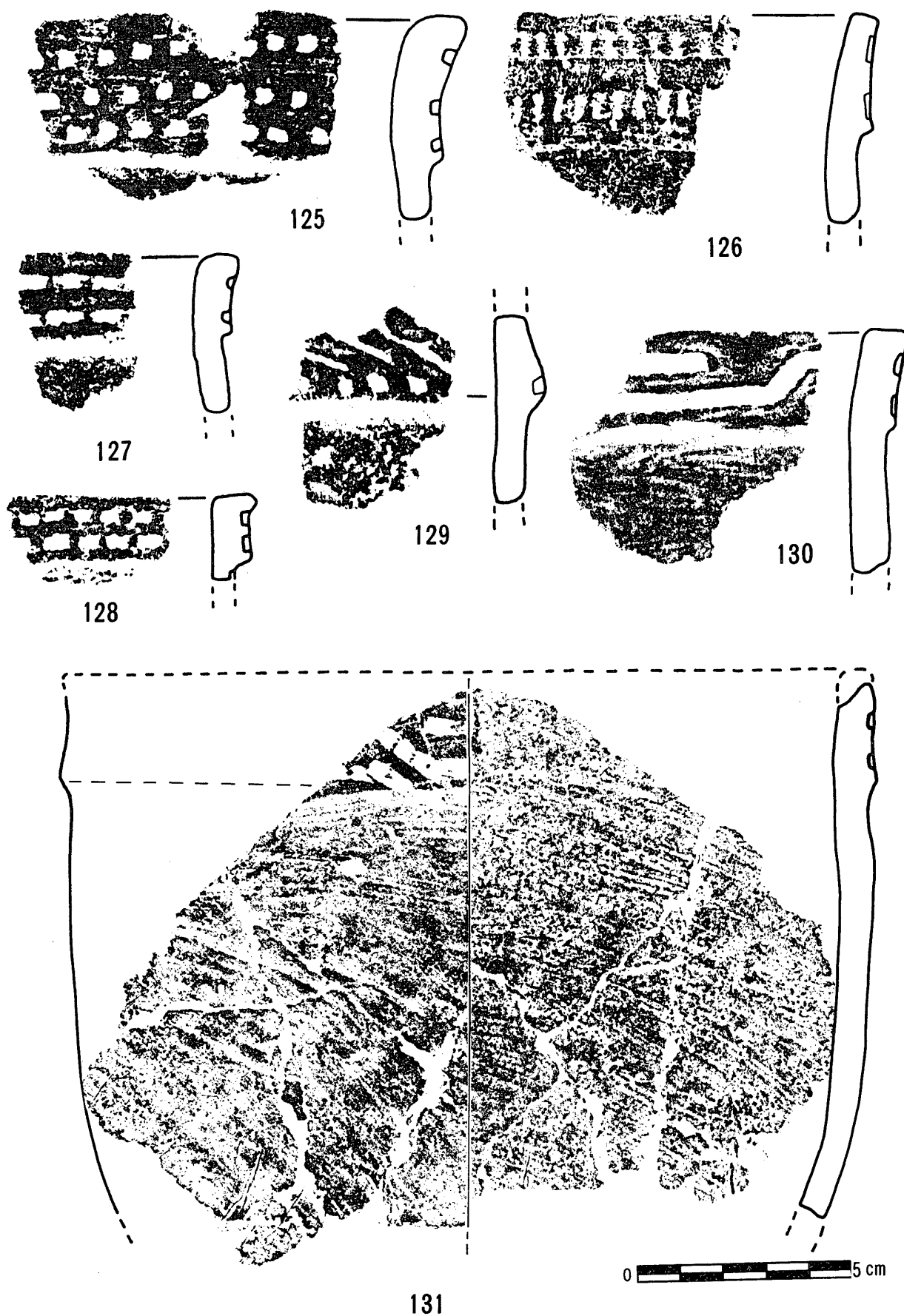
b) 横位押し引き文のグループ

これに属するものは4点で、3種類の文様を施文する。

横位押し引き文に終始するものは2点である。第21図126(第19図版2)は肥厚部に2条の押し引き文を施文する例である。篋幅約6ミリの単篋を用いて密に施文する。施文の方向は左から右で、浅く描かれている。器面は両面ともナデ調整を行っている。第13層の出土。

同図127(第19図版3)は肥厚部に2条の押し引き文を横走させる。文様は比較的力強く描かれ、施文は左から右の方向である。施文具の先端の幅は狭く、約2ミリである。第11層の出土。

押し引き文を横位・斜位に配置するものは第21図131(第19図版7)に示す1例で、肥厚部に施文し、頸部以下は無文である。口縁上端は破損していて文様構図の全景を示すことはできないが、一部にステップ状の屈折が見受けられ、同図130(第19図版6)類似の文様を施文したものと思われる。文様はすべて押し引き手法を用いている。施文は深く、左から右の方向で描かれている。器面は全体



第21図 大山期のカヤウチバンタ式土器

にナデられているが、一部に擦痕も見受けられる。第12層の出土。

押し引き文と刺突文を組み合わせるものは第20図123（第18図版1・下段は文様の拡大）の1点である。肥厚部外面に押し引き文を1条横走させ、肥厚部直下の頸部に刺突文を1条圍繞させる。押し引き文は1センチ前後の間隔で左から右の方向で浅く描いている。刺突文は同一工具を用い、0.7センチ前後の間隔でこれも左から右の方向で描いている。施文部位が肥厚部下端に接しているため、正面からはちょっと見にくい位置になっている。肥厚部と同直下および裏面はナデ調整を行い、表面の胴部では擦痕がやや顕著である。第12層の出土。

c) 凹線による文様

これに属するものは1種類だけで、横線の

みに終始する例は今回は未発見であった。

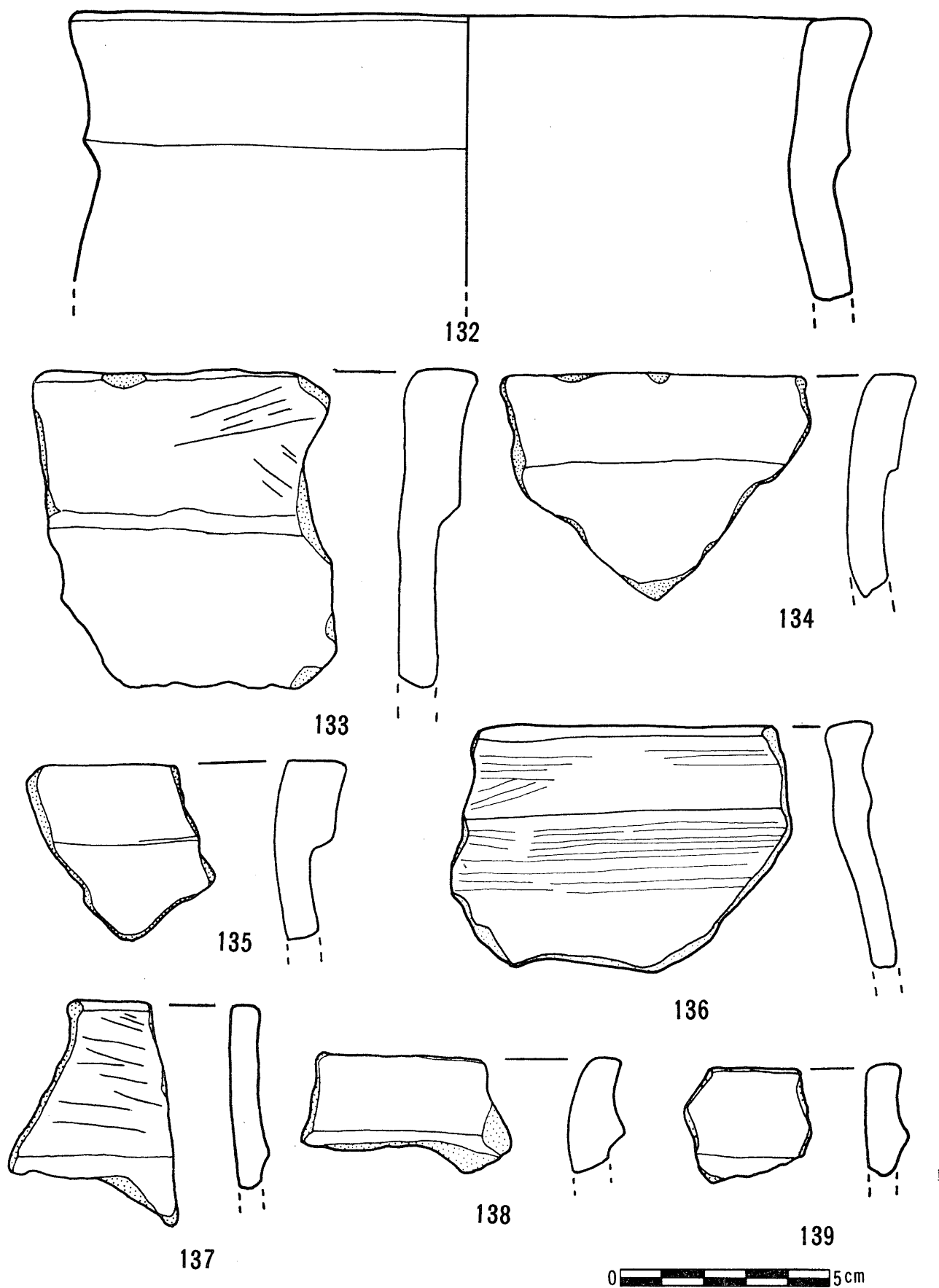
第21図130（第19図版6）に示す1点がこれで、文様は肥厚部にのみ施文され、左から右へ浅く描いている。下端の沈線は破片の右端で、ステップ状の上昇を示す。同図131（第19図版7）と同じ文様に属するものと思われる。器面は両面ともナデ調整を行っているが、一部には擦痕も見受けられる。第12層の出土である。

大山期の無文のカヤウチバンタ式土器

無文の資料は第22図132～139（第20図版1～8）、第23図140～148（第21図版1～9）の17点であった。肥厚部の断面形態は第24表の通りで、A・B・D・Eの4種認められた。有文の場合と同様Aが最も多く、これが大山期の典型的な形状かと考えられる。第23図141～144、146（第21図版2～5、

第29表 大山期のカヤウチバンタ式土器における擦痕の残存状況

層序	擦痕残存部 文様の有無		両面あり		外面のみ		内面のみ		両面なし		不明		合計
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集	1												1
第1層													
2													
3		3		4					1			1	9
4													
5											1		1
6													
7				2									2
8													
9													
10													
11		3							1	1			5
12	2	3	1										6
13							1						1
14													
15													
16													
17													
18													
合計	3	9	1	6	1				2	1	1	1	25
	12		7		1		3		2				



第22図 大山期のカヤウチバンタ式土器

7) は胴部が著しく脹る器形に属し、また、これらは肥厚部の断面形が正形状のものが多く、今後、注目すべき資料かと思われる。第23図 147 (第21図版 8) は肥厚帯、同図 148 (同図版 9) は口唇部を欠いており、それぞれ断面形態は不明。

第23図 147は第3層 0～10、第22図 133・第23図 143・144 は同層 10～20、第22図 139・第23図 148は同層 20～30、第23図 140は同層 30～40、第22図 138 は同層 50～60、第22図 134・第23図 141は第7層、第22図 132・137・第23図 145・146は第11層、第22図 135・136・第23図 142は第12層よりの出土である。

器面調整

器面調整の方法については前項でも若干ふれたが、本項では一般的傾向について簡単に

述べることにする。

器面調整の方法としてはナデと擦痕の2種が観察される。しかし、いずれか1つに終始する例は極めて少なく、大抵の場合、両者を併用している。

擦痕の観察される例を第29表に記した。大多数の破片に擦痕が観察されるわけであるが、前述のように擦痕に終始するケースはほとんどない。器面調整の一般的方法是ナデで、擦痕が器面の大部分を占めることは稀であって、むしろ一部に観察される例が多い。また、外面に残る擦痕についてみると、肥厚部よりも下方の胴部に施す例が多いようである。

胎土混入物

今回観察された混入物は石英・チャート・磁鉄鉱・石灰質砂粒の4種類で、実際上は下記のような組み合わせで混入している。

第30表 大山期のカヤウチバンタ式土器の混入物とその出土状況

混入物 文様 層序	石英>チャート >磁鉄鉱		石英>石灰質砂 粒>磁鉄鉱		石英>石灰 質砂粒		石灰質砂粒>石 英>磁鉄鉱		石灰質砂粒 (稀に石英)		合 計
	有 文	無 文	有 文	無 文	有 文	無 文	有 文	無 文	有 文	無 文	
表面採集	1										1
第 1 層											
2											
3			1	6		2					9
4											
5							1				1
6											
7				1						1	2
8											
9											
10											
11			1	1				2		1	5
12						1	3			2	6
13			1								1
14											
15											
16											
17											
18											
合 計	1		3	8		3	4	2		4	25
	1		11		3		6		4		

- ① 石英>チャート>磁鉄鉱
- ② 石英>石灰質砂粒>磁鉄鉱
- ③ 石英>石灰質砂粒
- ④ 石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱
- ⑤ 石灰質砂粒

伊波式や荻堂式土器においては、石英を主体とし、それに少量のチャートを混ぜるものが一般的であるが、今回採集のカウチバンタ式土器には石英を主体とするものは見当らず、他方、磁鉄鉱や石灰質砂粒の混入している点に特徴があるといえるが、中でも特に石灰質砂粒を混入するものが増加していることは今後、注意する必要があると思う。

混入物の種類（その組み合わせ）および層位的出土状況を第30表に記した。第21図125は石英やチャートを主体とし、それに少量の磁鉄鉱を混入する。そのような混入物のあり方と文様、施文手法、器色等からみて古式のカウチバンタ式に属するとみられるが、残念ながら表採品であって、正確な時期比定ができない。この1点を除くと、他は第3層以下の出土である。そして、下層出土のものは多かれ少なかれ石灰質砂粒を混入する。石灰質砂粒を混入する土器がいつ出現するか、現在のところ、その上限はおさえられていないけれども、大山期の後半あたりではなかろうかと考えている。この考えが正しいとすれば、本トレンチ出土のカウチバンタ式土器は大山期後半ということになり、第13層という深さにもかかわらず、隣接のSトレンチの最下層（第7層）より新しいということになる。

器色および焼成

器色は暗褐色および茶褐色が一般的である。焼成についてみると第22図133（第20図版2）の1点は極めてよく堅緻である。他方、同図

138（同図版7）は不良の方に属する。他は普通であるが、どちらかといえば脆い方に属する。したがって、焼成が良いとはいえない。

ロ. 室川期のカウチバンタ式土器

本トレンチにおいて室川期の製品と思われるカウチバンタ式土器は21点である。

室川式土器の胎土混入物の大きな特徴は石灰質の砂粒を含むことで、従来の報告では、粒子の比較的細かなもの(A)と、粗いもの(B)の2種に大別されている（註1）。この基準は本期のカウチバンタ式にも適用できる。これによるとA期のカウチバンタ式に属するものは15点で、B期に属するものは6点であった（第20表）。

本文では、A期のものからその特徴をみていくことにする。

室川A期のカウチバンタ式土器

このタイプに属するものは、第20図124（第18図版2）、第23図149～151（第21図版10～12）、第24図152～162（第22図版1～11）の15点である。そのうち8点は有文で、他は無文である。

器形

すべて破片で完形がなく、したがって確実な資料を提示できないが、大型の口縁破片1点については推定復元を試みたので、それと他の破片から、一応の器形を推定してみたい。

立面図でみると、3つのタイプを認めることができる。すなわち、(a)径の最大が口縁にあり底部から口縁へ徐々に開くような概形をもつもの、(b)直口状のものおよび(c)胴に最大径があり口径へすばまるもの、の3タイプである。口縁形態の判断できるのは5点だけである。

(a)に属するものは第20図124（第18図版2）

の1点で、胴部がわずかに脹らみ、頸部でしまり、口縁がわずかに外反する器形で、底部から口縁へ向けての開き具合は顕著ではないが、径の最大が口縁にあるので、これに分類した。

(b)に属するものは第24図 161 (第22図版10)の1点である。口唇部を欠くが口頸部の形態は垂直の方向をとる。この標品ほど確実ではないが、同図 154 (第22図版 3) もこれに属する資料かとみられる。

(c)に属するものは同図 155、157、162(第22図版 4、6、11) の3点である。155と157の2点は胴部の脹りがややはっきりしているが、162は不明瞭で、直口に近い形状をとる。上記の3点ほどはっきりしないが、同図 158、160 (同図版 7、9) の2点もこれに属する資料かとみられる。

以上のうち形態の確実なもの5点について、出土層位を調べてみた。157は第5層、161は第11層、124・155・162の3点は第12層の出土である。資料の少いせいもあって、各サブ・タイプ間の層位上の変化をとらえることは困難であり、今回はその傾向すらつかめなかった。

口縁肥厚部の形状を、口唇部の厚さ、肥厚帯の幅、肥厚部下端の厚さなどの関係で調べてみた。口唇部の厚さを1とした場合の、それぞれの比率は第22・31表の通りである。対象となったのは13点である。

肥厚帯の幅が口唇の厚さより小さいものは見受けられなかった。幅の最小は口唇の厚さの約1.1倍(第24図 160・第22図版 9)で、最大は5.3倍(第24図 153・第22図版 2)であった。肥厚部上端(口唇)と下端の厚さの比についてみると、口唇より小さいものは4点、大きいものは9点であるが、1.6倍以上のものは見受けられなかった。文様は肥厚帯

第31表 室川A期のカヤウチバンタ式土器の肥厚形態〔口唇の幅(肥厚部上端の厚さ)を1とした場合の肥厚部の長さおよび肥厚部下端の厚さの比率〕

肥厚部下端の厚さ 口唇の幅を1とした場合の肥厚部の長さ	0.5～0.9		1.0～1.5		合 計	
	有文	無文	有文	無文	有文	無文
1: 0.5～0.9						
1: 1.0～1.9		2				2
1: 2.0～2.9	1	1	1	2	2	3
1: 3.0～3.9			3	1	3	1
1: 4.0～4.9			1		1	
1: 5.0～5.9			1		1	
1: 6 以上						
合 計	1	3	6	3	7	6
	4		9		13	

※ 口唇部欠失の2点を除く。

の幅が口唇の2倍以上のものに認められた。

肥厚部の断面形態を第20図A～Eに従って分類(第32表)してみると、Cが7点で最も多く、Aが4点、Bが2点、不明2点となり、DとEに該当するものは見当らなかった。

Aの形態は第23図 149、150(第21図版10、11)および第24図 159、162(第22図版 8、11)の4点で、カヤウチバンタ式の典型的な形態であり、それが室川期のものに引継がれた例といえよう。上記4点のうち150の口唇には微弱ながら室川式の影響も見受けられ、Cのタイプに移すべきかと考えたが、形質が不明瞭であるので、とりあえず本項で取扱うことにした。149と150の2点は有文、他の2点は無文である。162の断面はBにも近い。

Bに属するものは第23図 151(第21図版12)と第24図 152(第22図版 1)の2点である。いずれも肥厚部上端(口唇)の厚さが下端のそれより目立って小さいものである。前者は肥厚部外面に、後者は肥厚部直下に施文する。

第32表 室川A期のカヤウチバンタ式土器の口縁断面形態別出土状況

断面形態 文様の有無 層序	A		B		C		D		E		不 明		合 計	
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文		
表面採集	1												1	
第 1 層														
2														
3														
4														
5			1			1					1		3	
6	1	1			1	1							4	
7														
8						1							1	
9														
10														
11												1	1	
12		1	1		2	1							5	
13														
14														
15														
16														
17														
18														
合 計	2	2	2		3	4						1	1	15
	4		2		7						2			

Cに属するものは第20図124（第18図版2）第24図153～155、157、158、160（第22図版2～4、6、7、9）の7点である。口唇を強調するグループで、その点では一部、室川式と特徴を共有する。典型的なものは第24図155、160などであるが、残りの標品にも同種の傾向を認めることができる。153～155の3点は有文、他は無文である。

さて、次に上記サブ・タイプの層位的出土状況についてみると、Aのうち149は表採、150と159は第6層、162は第12層となっていて、それぞれ下層と中位での出土というこ

とになる。Bについてみると151は第5層、152は第12層で、これも中位と下位でそれぞれ1点の出土ということになる。以上のように各サブ・タイプとも中位と下位で出土し、いずれが古く、いずれが新しいかという、三者間の先後関係は掴めなかった。

大きさ

すべて破片で、確実な資料に欠けるが、推定復元を試みた1点（第20図124・第18図版2）についてみると、口径は推算17センチ、器高は約20センチであった。この土器は中型

の中では最大のグループに属する大きさである。

口径を推算しうるものは、上記の他に3点ある(第25表)。第24図154(第22図版3)は約18センチ、155(第22図版4)は約17センチ、157(第22図版6)は約20センチで、同図161(第22図版10)は口唇を欠くが肥厚帯下端の径は推算17センチあり、それに近い口径を有していたものと思われる。

以上の5点は17～20センチの範囲内にあり、口径の大きさについてみると中型の大きい方から大型の中位ぐらいのサイズということになる。また、時間の経過とともに口径は大きくなるのか、あるいは小さくなるかという点についても注意したが、資料が少なく結論を導き出すには至らなかった。

底 部

口縁から底部につながる資料がないために、本型式の確実な底部資料を提出することはできないが、後述の室川式と分類した底部資料の中にあるいは含まれているかもしれない。これについては今後の資料を待つことにする。

文 様

先述のように有文は15点のうち8点である。施文は下記の2ヶ所に認められた。また、破損が著しく施文部位の確認できないものが数点あり、これを「不明」の欄に記した。

- ① 肥厚部のみ
- ② 肥厚部直下のみ
- ③ 不明

出土量についてみると①が2点(第23図151・第21図版12と第24図154・第22図版3)、②が1点(第24図152・第22図版1)で、不明

は5点(第23図149、150・第21図版10、11、第24図153、155、156・第22図版3、4、5)であった。不明の5点の中には肥厚部外面と同直下に施文するものも含まれるかと思うが、今回は確認できなかった(第33表)。

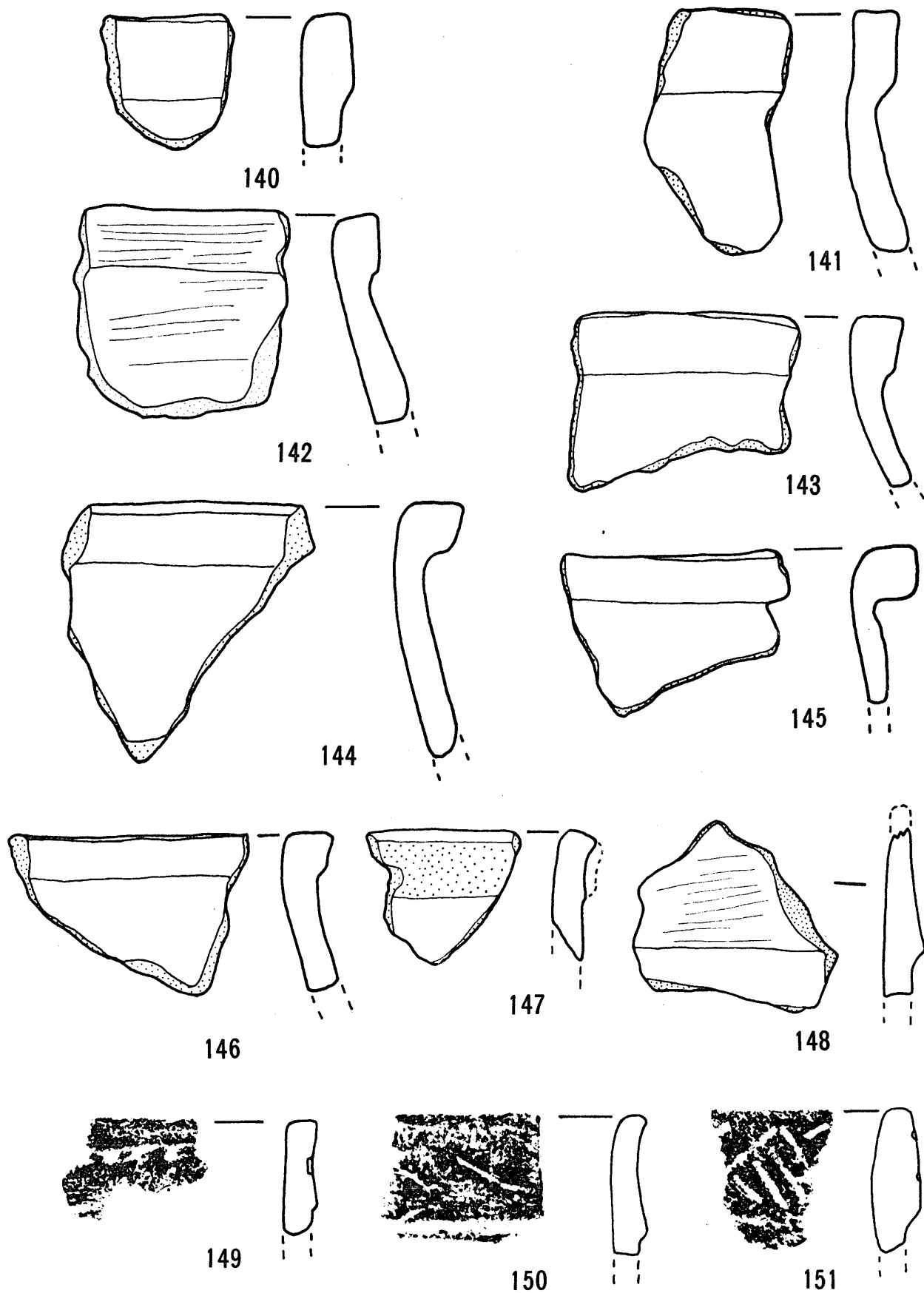
第33表 室川A期のカヤウチバンタ式土器における施文部位とその出土状況

施文部位 層 序	肥厚部 の み	肥 厚 部 直下のみ	不 明	合 計
表面 採 集			1	1
第 1 層				
2				
3				
4				
5	1		1	2
6	1		1	2
7				
8				
9				
10				
11				
12		1	2	3
13				
14				
15				
16				
17				
18				
合 計	2	1	5	8

次に施文具についてみると(第34・35表)、下記の3種を認めることができた。

- ④ 叉状工具
- ⑤ 単篋工具
- ⑥ 棒状工具

上記2種のうち叉状工具を使用したものは1点だけで、6点は単篋工具による施文で、残りの1点は棒状工具を使用している。次に



第23図 大山期のカヤウチバンタ式 (140~148)
および室川A期のカヤウチバンタ式 (149~151)

使用工具に基準をおきながら、文様について述べることにする。

叉状工具を使用するものは、先述のように第24図 154（第22図版 3）に示す 1 点だけである。文様は肥厚部外面のみに施文され、口唇部および肥厚部下方は施文の対象となっていない。文様は 2 組の縦位点刻文と 1 組の横位点刻文が肥厚部下端に見受けられるが、同標品の左端上部にも同種の文様が見られるので、肥厚部の上下に横位の点刻文を施文していたものと思う。縦位点刻文が幾組施されていたかは不明である。施文は縦位のものは上から下へ、横位のものは左から右へ描いている。施文は深く鮮明である。第 6 層の出土。

第34表 室川A期のカヤウチバンタ式土器に使用された施文具および文様別出土状況

施文具 文 層序	叉状工具	単 筥 工 具				棒状工具	合 計
		点刻文	横捺刻文	横位の押し引き文	斜沈線文	斜沈線文	
表面採集				1			1
第 1 層							
2							
3							
4							
5					1	1	2
6	1				1		2
7							
8							
9							
10							
11							
12			2	1			3
13							
14							
15							
16							
17							
18							
合 計	1	2	2	2	2	1	8
		6					

単筥工具を使用するものは 6 点である。文様は下記の 3 種が見受けられた。出土量は第 34 表の通りである。

a) 横捺刻文

b) 押し引き文

c) 斜沈線文

横捺刻文を施すものは第24図 153（第22図版 2）と 155（同図版 4）の 2 点である。

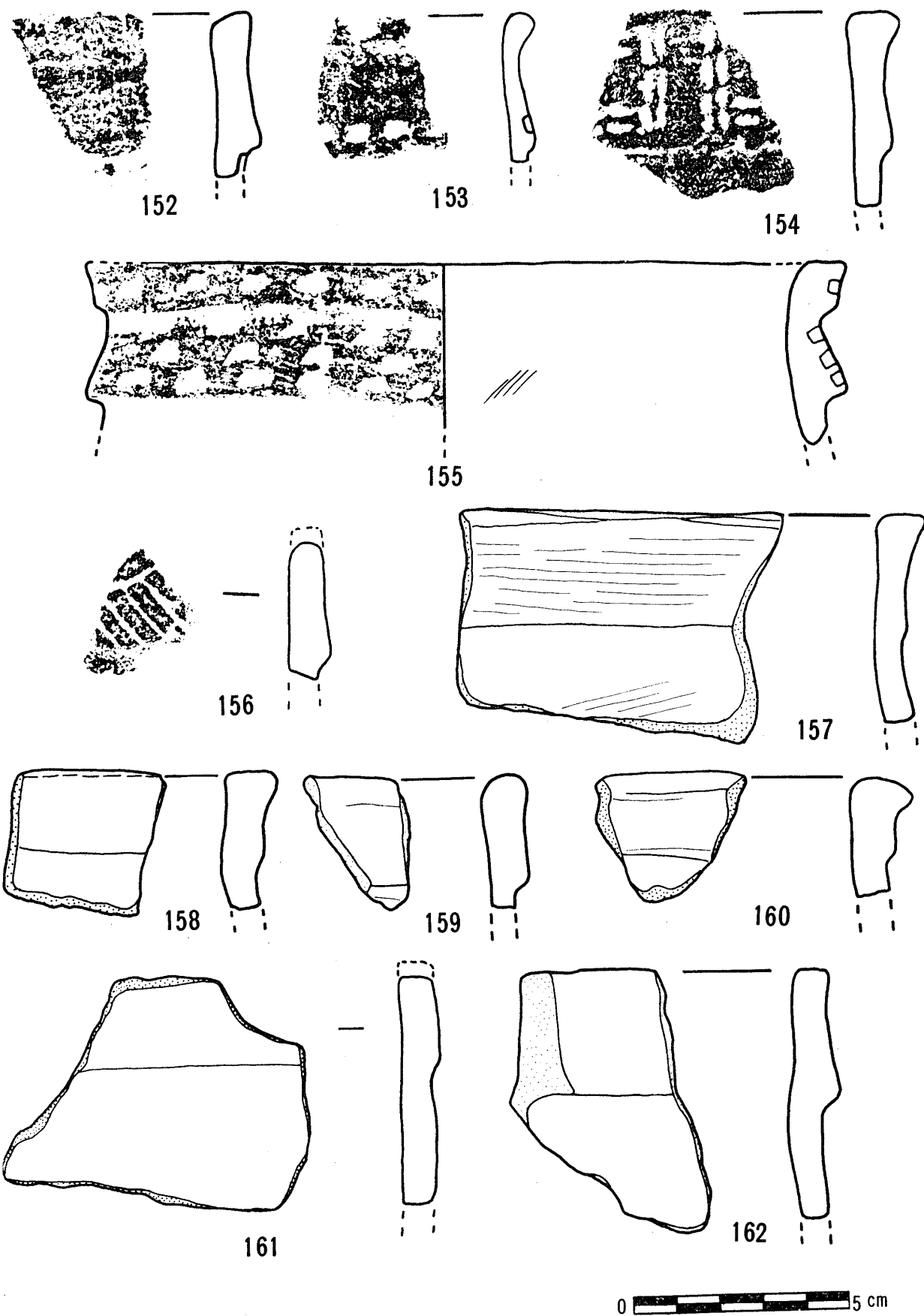
153 は肥厚部下端にそって横捺刻文を 1 条施す。施文は比較的深く右から左の方向へ描いている。肥厚部直下（頸部）が施文の対象になったかどうかは不明。この標品は口縁上端を折り曲げるように変化させており、室川期の特徴をよく示している。第12層の出土。

同図 155 も口縁上端を肥厚させるなど、室川期の特徴をよく表わしている。文様は肥厚部外面に施されているが、肥厚部直下が施文の対象になったかどうかは不明である。口唇上も施文の対象とはなっていない。肥厚部外面の文様についてみると、口縁上端の肥厚部に 1 列、下方の肥厚部に 3 列の横捺刻文を施す。横捺刻文は右から左の方向で描いている。刻文は深く、力強く描かれている。第12層の出土である。

押し引き文を施文するものは第23図 149（第21図版10）、第24図 152（第22図版 1）の 2 点である。

149 は肥厚部中央部に 1 条の押し引き文を横走させるもので、施文は浅く、左から右の方向へ描いている。口唇は無文である。肥厚部直下が施文の対象になったかどうかは不明。表面採集品である。

152 は肥厚部無文、同直下だけにのみ施文するという類例の少ない資料である。肥厚部直下の文様は押し引き文で、左から右の方向へ力強く描いている。ただし、この種の文様が幾組施されていたかは不明である。第12層の出土である。



第24図 室川A期のカヤウチバンタ式土器

第35表 室川A期のカヤウチバンタ式土器における施文具・文様・施文部位の関係

施文具	施文部位 文様	肥厚部のみ	肥厚部直下のみ	不明	合計
叉状工具	点刻文	1			1
単篋工具	横位の押し引き文		1	1	2
	横捺刻文			2	2
	斜沈線文			2	2
棒状工具	斜沈線文	1			1
合 計		2	1	5	8

斜沈線文による文様は2例（第23図150、第24図156・第21図版11、第22図版5）検出された。

第23図150（第21図版11）の肥厚部外面には斜沈線が2本認められる。沈線の長さは約1.5センチで、肥厚部のほぼ中央に1.5センチ前後の間隔で施文する。沈線はシャープである。口唇は無文だが、肥厚部直下にも施文したかどうかは不明。第6層の出土である。

第24図156（第22図版5）は組帯文を肥厚部外面に施文する。文様は先端の細い単篋で描かれ、シャープである。文様の切合関係から施文は左から右の方向になされていたことがわかる。口唇と肥厚部直下は破損しているため、同部が施文の対象になったかどうかは不明。第5層の出土。

棒状工具を使用したのは、第23図151（第21図版12）の1点で、肥厚部外面にのみ施文する。文様は三角形組み合わせ文の内部を斜沈線で埋めるもので、斜沈線の方法も隣接する三角形ごとに異る、いわゆる組帯文に属している。文様は先端の幅1.5ミリ前後の棒状工具で、浅く描かれている。施文の順序は不明。第5層の出土。

以上、8点の有文土器にふれたが、文様別の出土層位をみると横捺刻文の2点と押し引き文の1点は比較的下位の第12層より出土しており、本トレンチでは古い方の資料に属する。斜沈線文を施文する3点は第5・6層の二層で出土しており、本トレンチでは後出の文様に属している。また、点刻文は伊波式にみられる古い要素であるが、本トレンチでは第6層で出土しており、室川期にわずかに復活する文様要素のようである。

室川A期の無文のカヤウチバンタ式土器

無文の資料は第20図124（第18図版2）・第24図157～162（第22図版6～11）の7点である。肥厚の形態については前にもふれたが、概ね2種認められる。すなわち、口唇を幅広く造形するものと逆に縮小する2つのタイプである。破損による不明のもの1点を除くと、前者は5点、後者は1点となり、室川期の特徴をよく表現しているといえる。ただ、口唇を強調する5点についてみると第24図155（第22図版4）のように典型的なものはみられず、強調のし方はルーズである。同図162（同図版11）の1点は口唇を強調しないが、器色、焼成、混入物、その他の特徴から室川期に比定できるものである。

口唇は水平方向のものもあるが、若干外傾するのが一般的である。肥厚の形態は外面中央部が若干凹んで凹面を形成することから、カヤウチバンタ式の形態を保持しているといえる。つまり、大きくくずれたようなものは見当らない。

出土層位は124・162が第12層、161が第11層、160が第8層、158と159が第6層、157が第5層で若干中位に多い。

第36表 室川A期のカヤウチバンタ式土器における擦痕（口縁部）の残存状況

層序	擦痕残存部 文様の有無	両面あり		外面のみ		内面のみ		両面なし		不明		合 計
		有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表 面 採 集				1								1
第 1 層												
2												
3												
4												
5			1					1		1		3
6			1	1		1			1			4
7												
8									1			1
9												
10												
11					1							1
12		1	1			1		1			1	5
13												
14												
15												
16												
17												
18												
合 計		1	3	2	1	2		2	2	1	1	15
		4		3		2		4		2		

器面調整

器面調整はナデと擦痕の2通り観察される。しかし、主体はナデで、擦痕は部分的に見受けられる程度である（第36表）。

有文の8点についてみると第23図151（第21図版12）の外面は摩耗していて調整の方法は窺えないが、他の7点の外面はすべてナデ調整で、擦痕は第24図155（第22図版4）の裏面に斜め方向のものが、わずかに見受けられるだけである。

無文のものについてみると第20図124（第

18図版2）は肥厚部外面に横位の、同直下では斜位の擦痕がわずかに見受けられ、内面の胴下半部にも斜め方向の擦痕を施しているが、大部分はナデ仕上げである。第24図157（第22図版6）の肥厚部外面と胴の一部には横位の擦痕が施されている。裏面は篋調整の痕を止めているが、基本的にはナデ調整である。

以上の2点を除くと無文のものはほとんどがナデ調整を行っており、これが一般的な調整方法と推察されるのである。

第37表 室川A期のカヤウチバンタ式土器の混入物の種類とその出土状況

層序	石灰質砂粒>石英		石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱		石灰質砂粒>貝片		合計
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集	1						1
第1層							
2							
3							
4							
5	1	1	1				3
6			2	2			4
7							
8	1						1
9							
10							
11		1					1
12	1	2			1	1	5
13							
14							
15							
16							
17							
18							
合計	4	4	3	2	1	1	15
	8		5		2		

胎土混入物

胎土の混入物は石灰質砂粒を主体とし、それに他の物質を混えるが、その組み合わせは第37表のように3通り認められ、その中では①石灰質砂粒>石英のグループが最も多く、②石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱がそれに次ぎ、③石灰質砂粒>貝片を含むものが最も少なかった。

上記3種の組み合わせの層位的出土状況に

ついてみると磁鉄鉱を含むものは、中位より上の層で出る傾向がみられ、今後注意すべき項目の一つといえるであろう。

器色および焼成

器色は茶褐色のものが主体で他に赤褐色のものもみられた。焼成は普通で、特に良いというものは見当らない。したがって一般に脆く、若干吸水性の強い土器が多い。

室川B期のカヤウチバンタ式土器

これに属する標品は第25図 163～168（第23図版1～6）の6点で、うち5点は有文である（第20表）。

器形

資料が少なく、しかも小破片のため、器形の推定は難かしいが、破片をみるかぎり、すべて深鉢形のようなものである。第25図 166（第23図版4）は破片がやや大きく、直口状の器形が想定される。

口唇部の厚さ、肥厚帯の幅、肥厚帯下部の厚さを計測し、口唇部の厚さを1とした場合のそれぞれの比率を調べたのが、第22および第38表である。それよりすると肥厚帯の幅は口唇の2.0～2.9のものが多く、下位の厚さは1倍以下のものと、1.0～1.5倍のものが半々の出土となっている。

第38表 室川B期のカヤウチバンタ式土器の肥厚形態〔口唇の幅（肥厚帯上端の厚さ）を1とした場合の肥厚部の長さおよび肥厚帯下端の厚さの比率〕

肥厚帯下端の厚さ	0.5～0.9		1.0～1.5		合計
	有文	無文	有文	無文	
口唇の幅を1とした場合の肥厚部の長さ					
1: 1.0～1.9	1				1
1: 2.0～2.9		1	2		3
合計	1	1	2		4
	2		2		

※ 口唇部欠失の2点を除く。

肥厚帯の断面形態について第20図A～Eに従って分類すると、Aにあたるものは第25図164（第23図版2）の1点だけで、典型的なものに比べると凹面の形成はルーズである。断面がやや長方形に近いものは同図163、165、168（第23図版1、3、6）の3点で、形の

はっきりするものの中では、最も数が多い。第25図166（第23図版4）と同図167（同図版5）の2点は凹面が認められるものの、口唇を欠くために、形態分類ができない。おそらくA～Cのいずれかに属するものであろう（第39表）。

第39表 室川B期のカヤウチバンタ式土器の口縁断面形態とその出土状況

断面形態 文様の有無 層序	A		B		C		D		E		不 明		合 計
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集													
第 1 層													
2													
3													
4													
5							1						1
6	1												1
7											1		1
8							1						1
9													
10													
11								1			1		2
12													
13													
14													
15													
16													
17													
18													
計	1						2	1			2		6
	1						3				2		

大きさ

破片が小さく、口径の推算可能なものは2点だけであった。第25図163（第23図版1）は推算23センチ、同図165（同図版3）は約

16センチで、前者は大型、後者は中型に属するであろう。器高の推算可能なものはなかった。

文 様

先述のように有文の資料は5点である。

まず、施文箇所についてみると（第40表参照）、肥厚部にのみ施文するものは2点、肥厚部とその直下に施文するものは3点であった。

第40表 室川B期のカウチバンタ式土器における施文部位とその出土状況

施文部位 層 序	肥厚部 の み	肥厚部及び その直下	合 計
表面採集			
第 1 層			
2			
3			
4			
5		1	1
6		1	1
7	1		1
8	1		1
9			
10			
11		1	1
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
合 計	2	3	5

次に施文具の面からみてみると、すべて単篋工具による施文である。ただし文様は幅のある刻文や押し引き文と細沈線の2種に細分される（第41・42表）。

次に文様の種類について調べた結果、次の4つを認めることができた。

- a) 横位に押し引き文のみを施すもの
- b) 横捺刻文のみを施すもの
- c) 斜沈線文のみを施すもの
- d) 斜沈線文と押し引き文を併用するもの

横位の押し引き文を施すものは第25図 163・164（第23図版1・2）の2点である。

163は肥厚部と同直下に1条ずつ押し引き文を横走させる。肥厚部の押し引き文は力強く描かれているが、直下のものは浅めである。2種の篋を用いており、肥厚部のものは篋幅約7ミリ、同直下のものは5.5ミリである。第5層0～10センチ・レベルの出土。

同図 164は肥厚部外面に2条、同直下に1条の押し引き文を施す。肥厚部のものは力強く描かれているが、下方のものは浅めである。

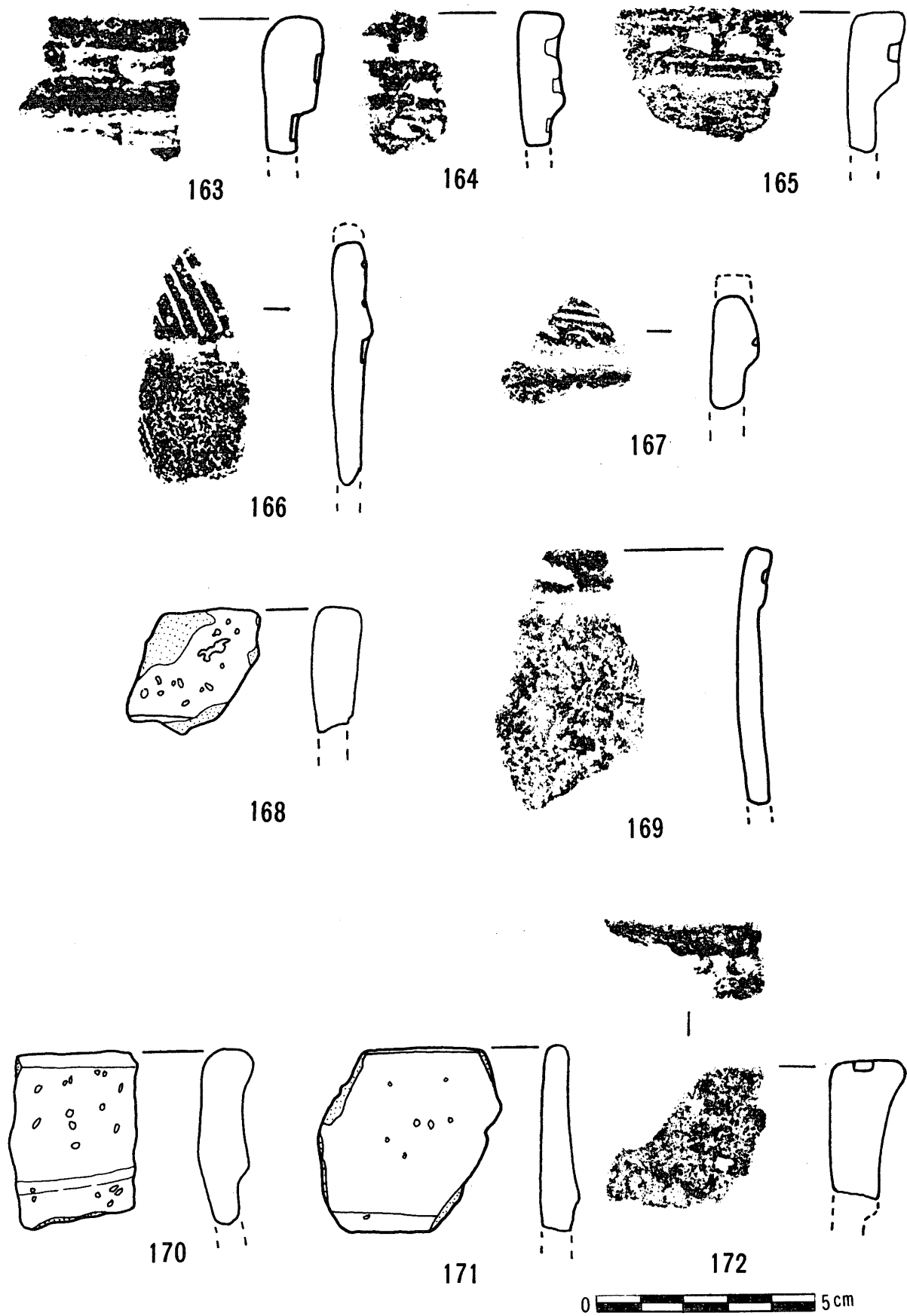
文様は同一施文具によって描かれている。

第6層10～20センチ・レベルの出土。

横捺刻文のみを施すものは、第25図 165（第23図版3）の1点である。肥厚部外面に横捺刻文を1条施す。施文は深い。第8層の出土。

第41表 室川B期のカウチバンタ式土器における文様の種類とその出土状況

文 様 層 序	横位の押 し 引 き 文	横 捺 刻 文	斜 沈 線 文	斜 沈 線 文 + 押 し 引 き 文	合 計
表面採集					
第 1 層					
2					
3					
4					
5	1				1
6	1				1
7			1		1
8		1			1
9					
10					
11				1	1
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
計	2	1	1	1	5



第25図 室川B期のカヤウチバンタ式 (163～168) および室川上層期のカヤウチバンタ式 (169～171) と宇佐浜期のカヤウチバンタ式土器 (172)

第42表 室川B期のカヤウチバンタ式土器における施文具・文様・施文部位の関係

施文具	施文部位 文様	肥厚部のみ	肥厚部直下	合計
単 箇 工 具	横位の押し引き文		2	2
	横捺刻文	1		1
	斜沈線文	1		1
	斜沈線文 + 押し引き文		1	1
合 計		2	3	5

第25図 167 (第23図版 5) の1点は沈線のみを施す資料と考えられるものである。本標品は口唇部を欠失する小破片で、肥厚部外面に斜位沈線文の下端部かとみられる文様が見受けられる。沈線は鋭く刻まれている。文様の展開状況は不明。第7層の出土。

第25図 166 (第23図版 4) の1点は細沈線文と押し引き文を組み合わせたものである。本標品は口唇部を欠失するが、前記2種の文様を認めることができる。すなわち肥厚部外面では斜沈線が平行に施され、下端では押し引き文を1条横走させる。沈線はシャープだが、押し引き文は浅めである。第11層の出土。

無文のものは第25図 168 (第23図版 6) の1点であった。器面にはテンパーの抜けた痕が粗くアバタ状を呈している。第11層よりの出土。

第43表 室川B期のカヤウチバンタ式土器における擦痕(口縁部)の残存状況

層 序	擦 痕 文 様	両面あり		外面のみ		内面のみ		両面なし		不 明		合 計
		有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表 面 採 集												
第 1 層												
2												
3												
4												
5		1										1
6		1										1
7		1										1
8				1								1
9												
10												
11		1									1	2
12												
13												
14												
15												
16												
17												
18												
合 計		4		1							1	6
		4		1						1		

器面調整

室川B期のカヤウチバンタ式土器について、擦痕の残存状況を調査したところ、第43表のような結果が得られた。

器面調整はナデが一般的であるが、擦痕をわずかに残すものもある。第25図 164（第23図版 2）は裏面に横位の擦痕、同図 165（同図版 3）は肥厚部外面に横位の擦痕を施す。また、同図 167（同図版 5）の肥厚部外面には条痕様のものが一部見受けられる。以上のほかはすべてナデ調整を行っている。

器色および焼成

器色についてみると赤褐色および黄褐色の明るい色が一般的であり、焼成は良好なものが多いが第25図 164や 168の様に不良なものも見受けられる。

第44表 室川B期のカヤウチバンタ式土器の混入物とその層位的出土状況

混入物 文様 層序	石灰質砂粒>石英		石灰質砂粒>石英 >磁鉄鉱		石灰質砂粒>貝片		合計
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集							
第1層							
2							
3							
4							
5	1						1
6					1		1
7	1						1
8					1		1
9							
10							
11		1	1				2
12							
13							
14							
15							
16							
17							
18							
合計	2	1	1		2		6
	3		1		2		

混入物

本トレンチ出土の室川B期のカヤウチバンタ式土器について、混入物を調べたところ、第44表のような結果が得られた。

石灰質砂粒が主体で石英を少量混入するもの3点、石灰質砂粒の他に石英・磁鉄鉱を少量混入するもの1点、石灰質砂粒と貝殻片を混入するもの2点で、いずれも石灰質砂粒を主体としている。

層位的出土状況

室川B期のカヤウチバンタ式土器について、その層位的出土状況を調べてみると、第5層1点、第6層1点、第7層1点、第8層1点、そして第11層から2点であった。

ハ、室川上層期のカヤウチバンタ式土器

本トレンチにおいて室川上層期のものは3点得られた。室川上層式土器はポーラスな器面を呈するのが大きな特徴で、胎土は泥胎質である。この特徴は同期のカヤウチバンタ式にも現われる。焼成の良好なもの(A)と、不良なもの(B)の2種に大別される(註1)。

器形

前記3点のカヤウチバンタ式土器はすべて小破片で、そのため器種の判別が困難であるが、3点とも深鉢形に属するものと思われる。第25図 169（第23図版 7）は直口に近いが、口径よりやや胴径の大きいタイプかとみられる。

同図 170（同図版 8）は若干胴の脹らむタイプであろう。同図 171（同図版 9）は推定が難しい。

肥厚部の形状について口唇部の厚さを1とした場合の肥厚部の長さ、肥厚部下端の厚さの比率を調査したのが第22表である。このグ

ループは肥厚部の長さがすべて口唇の2倍以上となっている。

肥厚部の断面形態を第20図A～Eの分類にあてはめると、Bが1点、Cが1点、Dが1点となる。第25図170（第23図版8）はCに属するが口唇の強調は微弱である。

大きさ

口径の推算可能なものがなく、したがってその大きさを知り得ないが、破片の感じからすると、3点とも口径は15センチを越すように思われる。

文様

施文例は第25図169（第23図版7）の1点のみであった。

肥厚部外面に右傾の凹線文が1条認められるが破損が大きいため文様の展開状況は不明。斜行文はやや深めに刻まれている。表裏面ともに黄褐色を呈し、一部灰色の部分も見受けられる。焼成は不良で、室川上層式の中ではBタイプに属する。胎土には石灰質砂粒を多量混入し、石英も少量見受けられる。器面のアバタは細かい。器厚は肥厚部で6ミリ、胴部5ミリ。第3層40～50センチ・レベルの出土。

無文の土器は第25図170、171（第23図版8、9）の2点である。

170は口唇部は丸味を帯び、幾分外側へ突出する。赤褐色を呈し、焼成は良好で室川上層A期に含めてよいであろう。胎土には石灰質砂粒、石英を混入。器面は多孔質を呈す。器厚は肥厚部で約12ミリ、胴部で約6ミリ。第3層40～50センチ・レベルの出土。

同図171（第23図版9）は、両面茶褐色を呈する土器で焼成は不良。室川上層B期の土器。胎土には石灰質砂粒、石英を混入。第3

層20～30センチ・レベルの出土。

器面調整

室川上層期のカウチバンタ式土器について擦痕の残存状況を調べてみた。第25図169（第23図版7）は外面摩耗、内面の一部にナデが観察される。同図170（同図版8）は両面ナデ調整である。同図171（同図版9）は器面摩耗のため、はっきりした調整法を知り得ないが、表面では一部、ナデも観察される。

混入物

本トレンチ出土の室川上層期のカウチバンタ式土器について、その混入物をみると、すべて石灰質砂粒を主体とし、その他石英を少量含むものもみられる。

二. 宇佐浜期のカウチバンタ式土器

胎土・混入物・焼成等よりみて、宇佐浜期のカウチバンタ式土器（第25図172・第23図版10）かとみられるものが1点ある。

本標品は粘土版を貼り合わせて口縁部をつくっているが、口唇が幅広く造形され、そのためカウチバンタ式肥厚口縁の下半部を欠く資料かと考えられるものである。幅広い口唇部には単篋工具による押し引き文が1条施されている。施文は浅く、文様は消えかかっている。器色は両面茶褐色を呈し、焼成は良好。胎土には石英・磁鉄鉱を混入する。器厚は口唇部で約1.7センチ、肥厚部下端で約1センチ。第3層30～40センチ・レベルの出土。

e 室川式土器

本トレンチ出土の室川式土器は60点で、完形の出土はなくすべて破片であった。そのうち比較的大きな口縁破片2点については推定復元を試みた。

室川式土器は混入物の特徴からA・Bの2種に細分されている(註1)。本トレンチにおける出土量はサブ・タイプのAが44点、Bが16点であった(第45表参照)。

以下、サブ・タイプのAより記述する。

第45表 室川式土器の出土状況

タイプ 種類 層序	A			B			合 計
	口 縁 部		有文 胴部	口 縁 部		有文 胴部	
	有文	無文		有文	無文		
表面採集	1						1
第 1 層							
2							
3	2		2		2	1	7
4							
5	9	5	4	6	3	1	28
6	5	3	1	1		1	11
7	2		2				4
8	1						1
9							
10							
11	3	1		1			5
12	2						2
13		1					1
14							
15							
16							
17							
18							
合 計	25	10	9	8	5	3	60
	44			16			

室川式土器サブ・タイプA

暗褐色の器色を有し、石灰質の微砂粒を含むものをサブ・タイプAとする。本トレンチでは44点検出され、そのうち口縁部は35点、他は有文の胴部破片である。

器 形

推定復元を試みた2点(第26図 173、174・

第24図版1、2)および器形の窺える口縁破片でみると、本トレンチのタイプAには2種の器形が認められる。すなわち(A)胴部が若干膨み、頸部でわずかにしまり、口縁が外反する器形で、径の最大が口縁にあるもの、(B)径の最大が胴部にあって口縁へ次第に径を減ずるタイプの2種である。

上記分類の(A)に属するものは6点で(第46表)、第26図 173(第24図版1)は、このタイプの代表的なものである。(B)に属するものは7点あり、第26図 174(第24図版2)はその典型的なタイプである。

第46表 室川A式土器の器形別出土状況

層 序 器 形	器 形			合 計
	A	B	不明	
表 面 採 集			1	1
第 1 層				
2				
3	1		1	2
4				
5	3	2	9	14
6		2	6	8
7			2	2
8			1	1
9				
10				
11	1	2	1	4
12	1	1		2
13			1	1
14				
15				
16				
17				
18				
合 計	6	7	22	35

※ 胴部破片9点を除く。

室川期の土器は口縁部の特徴から次のA～Cの3種に大別される。

Aは、口縁の断面形態がカヤウチバンタ式口縁に属するもので、前項の「カヤウチバンタ式土器」において取り扱った。

Bは、口縁部の断面形状が宇佐浜式の特徴を有するもので、これについては後述の「宇佐浜式土器」の項で取り扱うことにする。

Cは、上記2種とは異なる肥厚形態をとるもので、擬似肥厚を含む。本文でいう室川式土器とは、このCタイプを指す。

ところで、室川式土器の口縁部の形態にはいろいろのヴァリエーションがあり、本トレンチ出土のものは、第26図a～jのように10種に分類された。

次に各形態の特徴を簡単に説明する。

- a. 口唇が水平方向に幅広く造形されるもの。
- b. 幅広い口唇はやや鋭く内傾し、口唇外縁部が尖るもの。
- c. bと同様の内傾を示すが、口唇外縁部はやや厚みをもつ。
- d. 断面形態はcに類似するが、内傾の斜度がゆるやかなもの。
- e. 口唇は丸味のある肥厚形態に属し、外傾する。
- f. 口縁を「く」の字状に角度をもって屈折させるもの。
- g. 上記fと同様の屈折を示すが、屈折部が短小なもの。外見的に肥厚口縁に見える。
- h. 軽微な外反を示し、外見的には肥厚口縁にみえる。
- i. 口唇部をわずかに誇張するもの。
- j. 肥厚せず直口状のもの。

上記各形態の出土量は第47表の通りで、aが最も多く13点で、次にdの5点と続く。しかし、他はそれぞれ数点の出土であった。なお、サブ・タイプAにおいてはjは検出されず、タイプBにのみ見られた。

大きさ

完形品がないので確実な資料を呈示し得ないが、復元を試みた2点についてみると、第26図173は口径約20センチ、器高推算23センチ。同図174は口径約16.6センチ、器高推算28センチで、器高の推定できるのはこの2点だけである。

そのほか口径の推算可能なものが15点あり、最小は14.6センチ、最大は約21センチであった（第48表）。

第48表 室川A式土器の推算口径

	図 版 番 号	推算口径 (cm)
1	第26図 173(第24図版1)	20.0
2	" 174(" 2)	16.6
3	第27図 175(第25図版1)	17.5
4	" 176(" 2)	18.2
5	" 177(" 3)	21.2
6	" 179(" 5)	15.6
7	" 180(" 6)	18.8
8	第28図 181(第26図版1)	14.6
9	" 182(" 2)	16.0
10	" 184(" 4)	16.0
11	" 185(" 5)	15.4
12	第29図 191(第27図版3)	15.2
13	第30図 198(第28図版1)	16.0
14	" 203(" 6)	20.0
15	第31図 207(第29図版2)	20.0

第47表 室川A式土器の口縁断面形態別出土状況

断面形態 文様の有無 層序	a		b		c		d		e		f		g		h		i		j		合 計
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集					1																1
第 1 層																					
2																					
3	1																1				2
4																					
5	4	1		1			2	1			1		1			1	1	1			14
6	2		1		1								1	1	1						7
7							1						1								2
8	1																				1
9																					
10																					
11	3									1											4
12	1									1											2
13								1													1
14																					
15																					
16																					
17																					
18																					
合 計	12	1	1	1	2		3	2	1	1	1		2	1	1	2	2	1			34
	13		2		2		5		2		1		3		3		3				

※第28図184は除く。

文 様

サブ・タイプAの44点のうち文様を施す例は34点であった。

施文部位は口唇部、肥厚部外面、頸部、胴上部の4ヶ所で、それらの組み合わせは次の9通りであった（第49表）。

㊶ 口唇部にのみ施文

㊷ 肥厚部外面にのみ施文

㊸ 口唇部と肥厚部外面に施文

㊹ 口唇部と頸部に施文

㊺ 口唇部と肥厚部外面および頸部に施文

㊻ 肥厚部外面と頸部に施文

㊼ 肥厚部外面と頸部および胴上部に施文

㊽ 頸部のみに施文

㊾ 胴上部に凸帯文

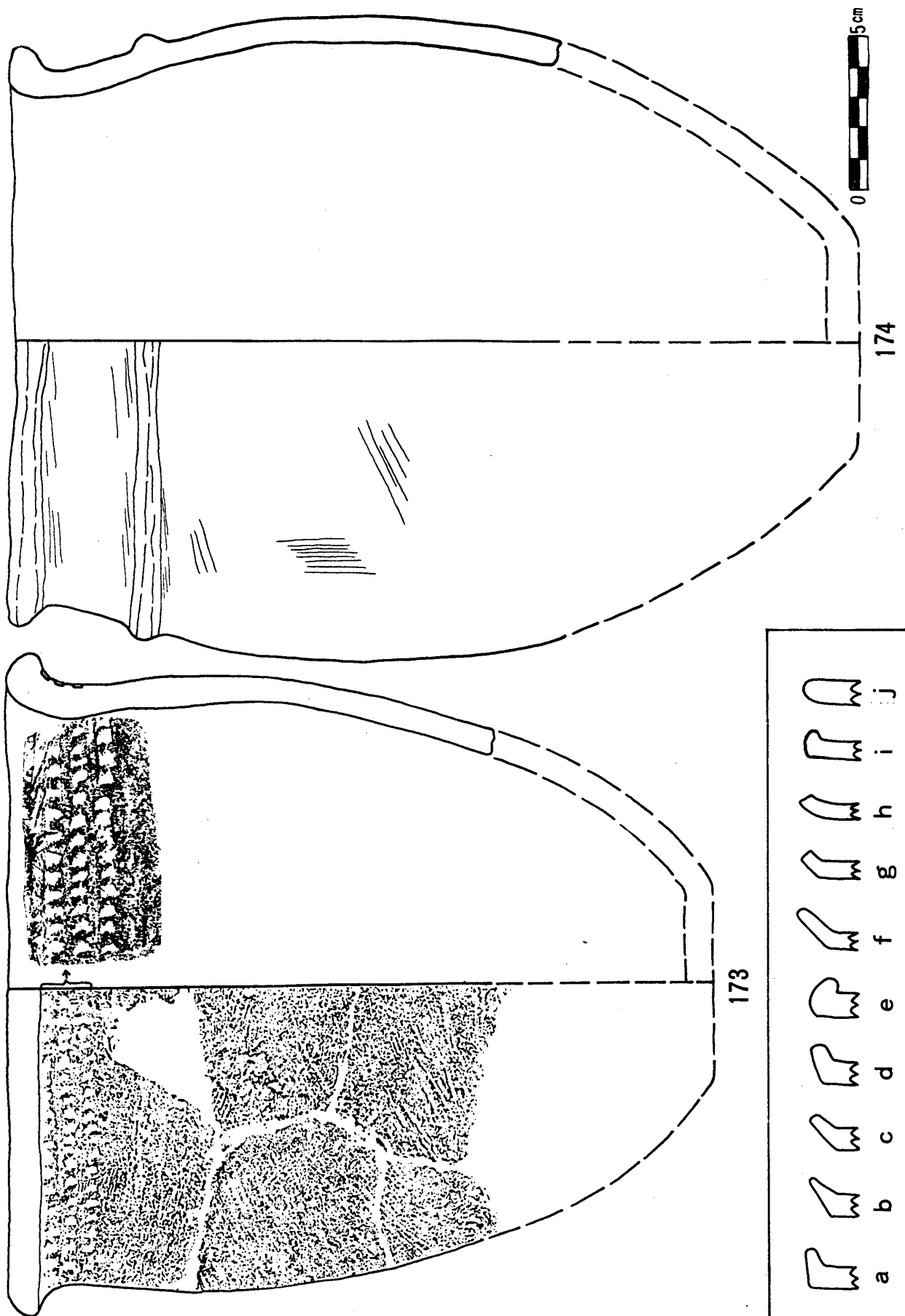
㊿ 破損による不明品（有文胴部）

第49表 室川A式土器の施文部位とその出土状況

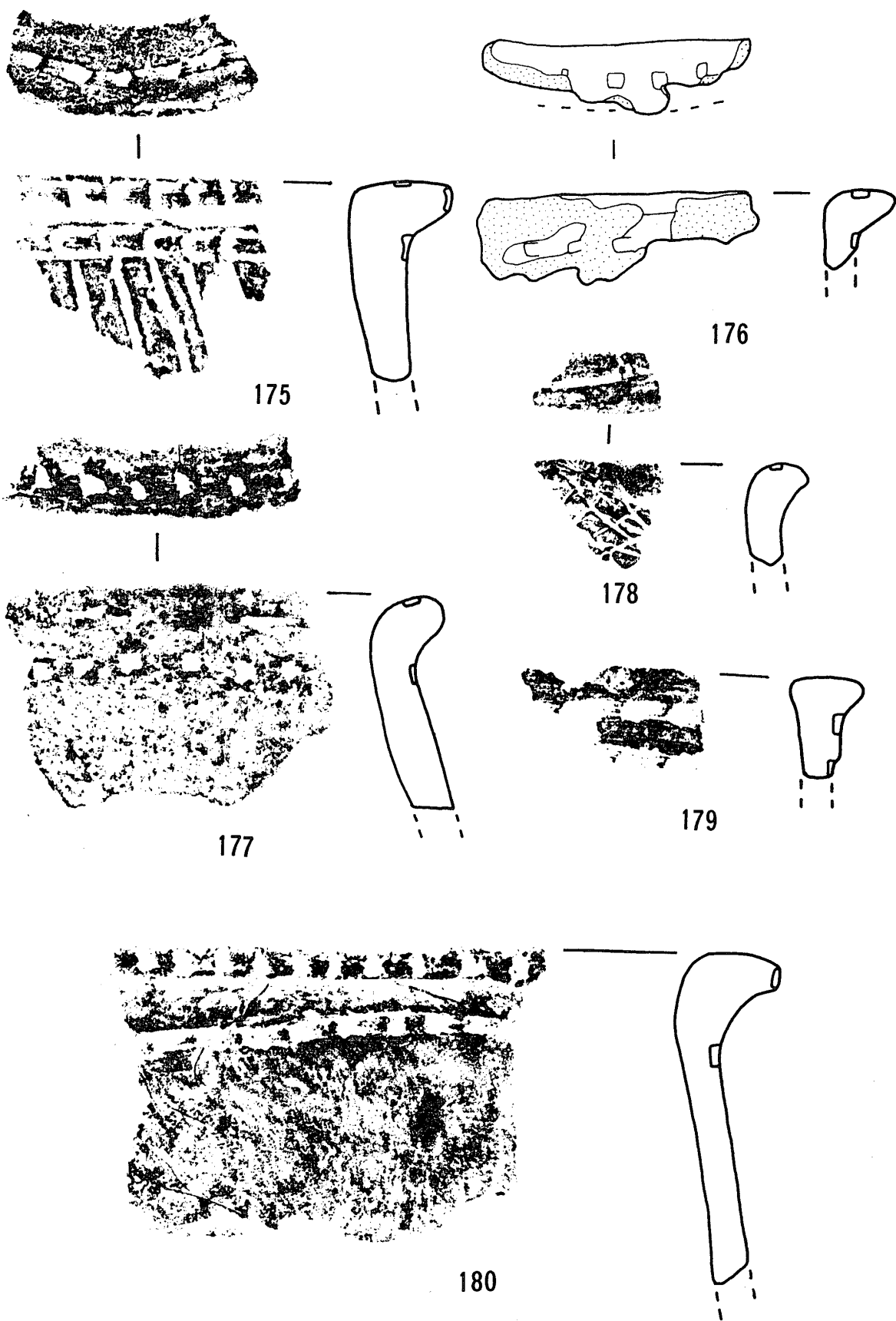
施文部位 層 序	(イ) 口唇部の み	(ロ) 肥厚部の み	(ハ) 口唇部+肥厚部 外面	(ニ) 口唇部+頸部	(ホ) 口唇部+肥厚部+頸部 外面	(ヘ) 肥厚部+頸部 外面	(ト) 肥厚部+頸部+胴上部	(チ) 頸部の み	(リ) 胴上部に 凸帯文	(ヌ) 有文胴部	合 計
表面採集						1					1
第 1 層											
2											
3				2						2	4
4											
5	1		1	3	1	1	1	1		4	13
6		1		3				1		1	6
7				1				1		2	4
8								1			1
9											
10											
11					2				1		3
12								1	1		2
13											
14											
15											
16											
17											
18											
合 計	1	1	1	9	3	2	1	5	2	9	34

第50表 室川A式土器に使用された施文具および文様別出土状況

施文具 層序	沈文										浮文			合計
	又状工具	又状工具 + 単筒工具	単筒工具				工 具				有孔土器	凸	帯	文
			横捺刻文 のみのみ	横捺刻文 + 沈線文	横捺刻文 + 凹線文	横捺刻文 + 凹線文	押し引き 文のみ	凹線文 + 沈線文	刺突文 のみ	不明				
表面採集														
第1層														
2														
3			2	1							1			4
4														
5	1	1	7		1		2		1					13
6			3	1				1		1				6
7			1	1						1	1			4
8										1				1
9														
10														
11			1							1		1		3
12									1			1		2
13														
14														
15														
16														
17														
18														
合計	1	1	14	3	1		2	1	2	3	1	2	1	34



第26図 室川A式土器 (173、174) および室川式の
口縁断面形態模式図 (a～j)



第27図 室川 A 式 土 器

最も多く検出されたのは㊦と㊧で、それぞれ9点、次に㊨が5点、㊩が3点と続き、他は2点以下の出土であった。

サブ・タイプAに施される文様は浮文と沈文に大別される。浮文は突帯を貼りつけたもので、沈文は施文具を用いて文様を施したものである。

沈文は施文具を基準に分類すると次の5種に分けられる。

- ㊦ 叉状工具を使用
- ㊨ 叉状工具と単篋工具の併用
- ㊩ 単篋工具を使用
- ㊪ 単篋工具と半截竹管の併用
- ㊫ 半截竹管を使用

上記5種の出土量(第50表)は、㊩が最も多く26点で、他は数点ずつの出土であった。

次に使用工具に基準をおきながら文様について述べることにする。

叉状工具を使用するものは、第29図191(第27図版3)の1点だけである。口唇の断面形態はdに属する。内傾の口唇部と肥厚部外面にそれぞれ1条の連点文を施す。頸部では連点文が2条認められる。連点文はいずれも左から右方向で描かれ、施文手法は伊波式に属する。下部欠損のため、頸胴部の文様が何条であったかは明らかでない。表裏面ともナデ調整を行っている。第5層0～10センチ・レベルの出土。

叉状工具と単篋工具を併用するものは、第31図215(第29図版10)の1点である。本標品は口唇部を欠失しており、したがってその断面形態は不明。単篋工具で羽状文を描き、その下方に叉状工具による連点を1条横走させる。連点文の施文の方向は左から右である。羽状文はシャープだが、連点文はやや雑である。第5層20～30センチ・レベルの出土。

単篋工具を使用するものは26点である。文様はa)横捺刻文を基調とするもの、b)押し引き文を基調とするグループ、c)凹線文と沈線文、d)刺突文、e)小破片のため不明のもの、の5種に分けられる。

a) 横捺刻文を基調とするグループ

このグループは18点検出されており、さらに下記の3種に細分される。

- イ) 横捺刻文のみ
- ロ) 横捺刻文+沈線文
- ハ) 横捺刻文+凹線文

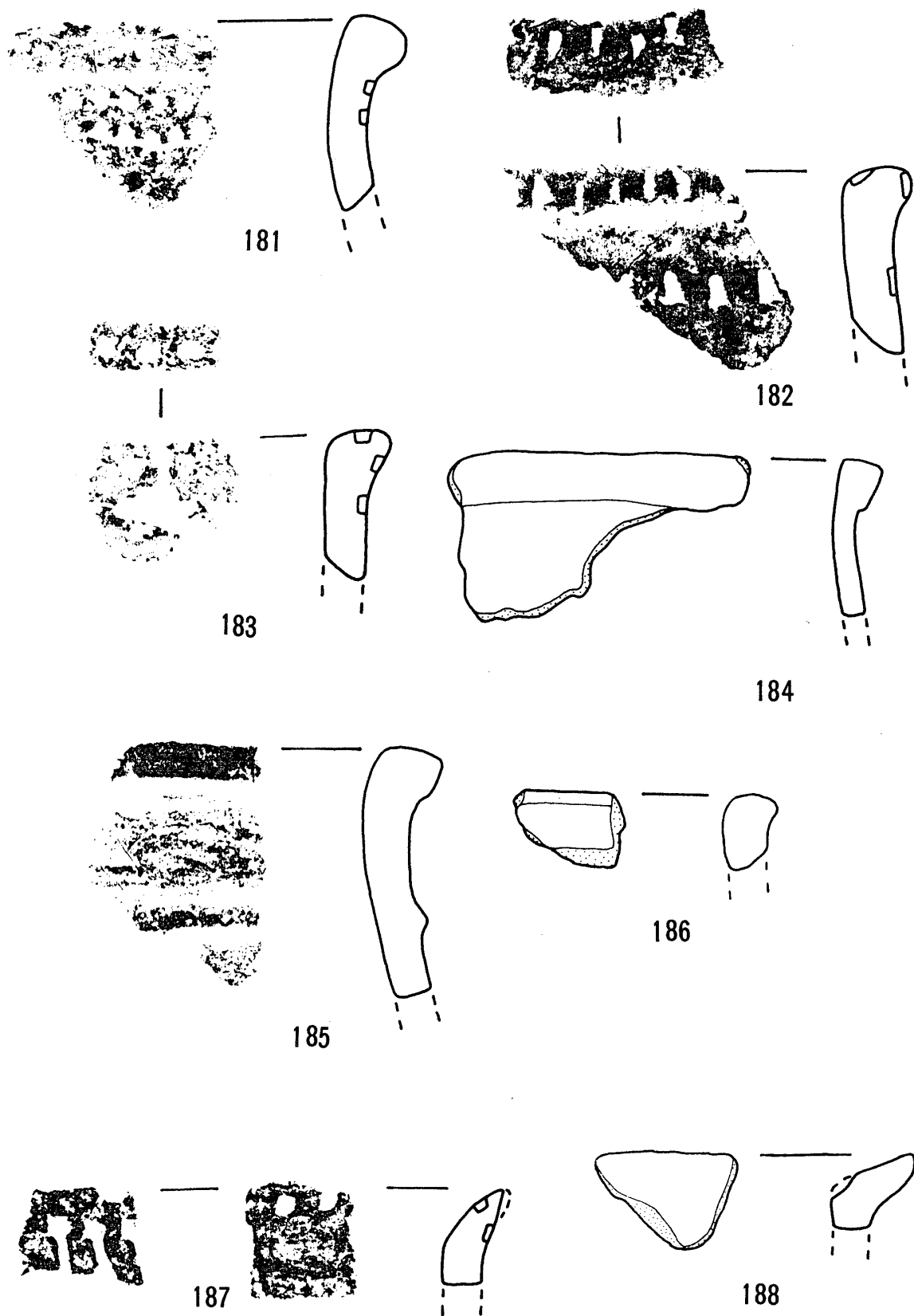
横捺刻文のみを施文するものは14点である(第27図176、177、第28図181～183、第29図190、192、193、第30図202、205、第31図206、209、210、213)。

第27図176・177(第25図版2・3)、第28図181～183(第26図版1～3)は口唇の断面形態がaに属するものである。

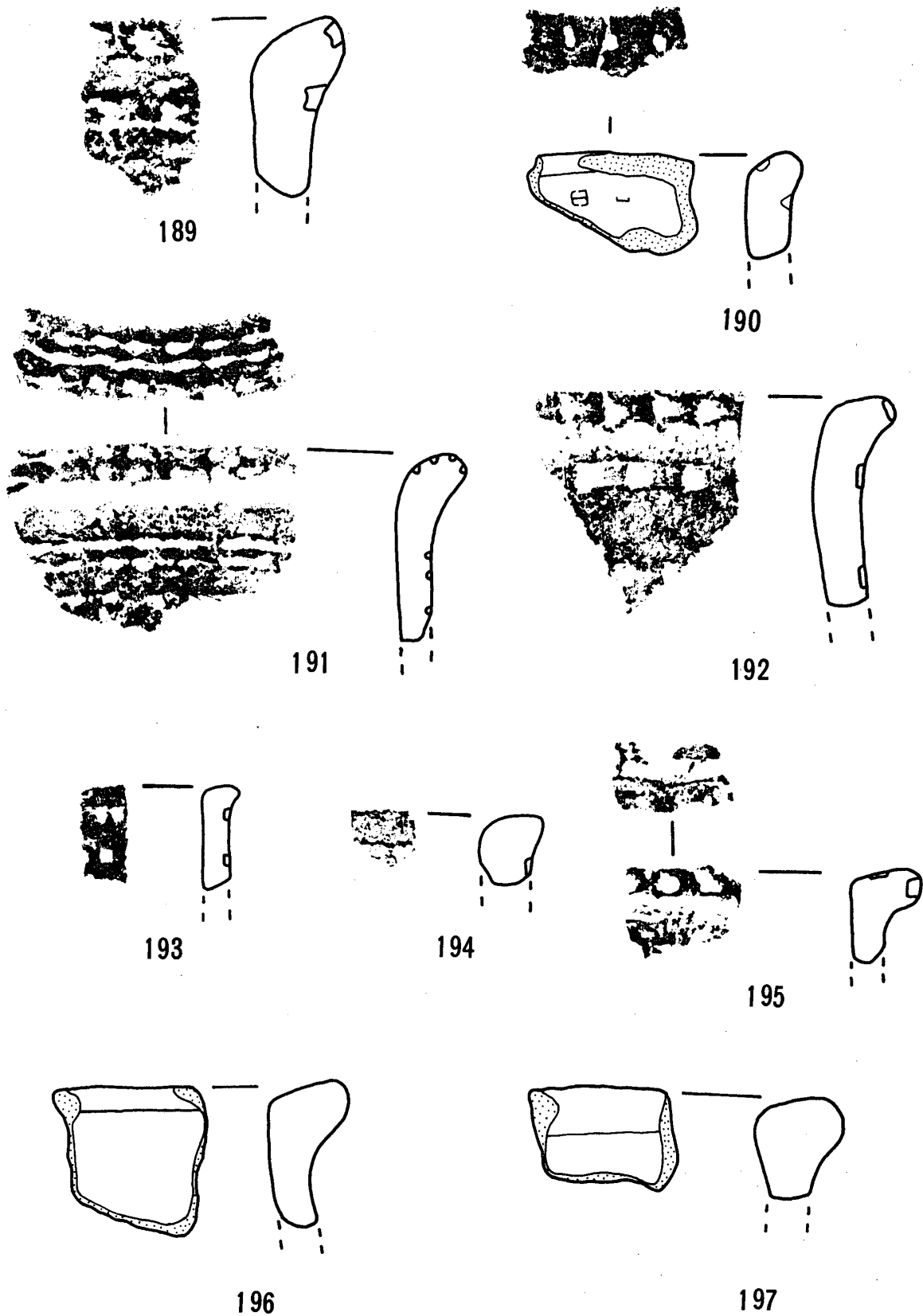
第27図176(第25図版2)と177(同図版3)は口唇部と頸部に横捺刻文がそれぞれ1条認められるが、176は破損が著しく頸胴部における確実な施文数は不明。しかし、177はやや大きな破片であり、施文数の確定できるものである。両者とも1センチ前後の間隔で施文している。施文は左から右の方向である。ともに第5層0～10センチ・レベルの出土。

第28図181(第26図版1)は頸部に2条の横捺刻文を施文する。下段の文様はゆるやかな波状を呈し、あるいは波状文を構成するかとも思われる(拓影では明瞭でない)が破片が小さいため、確言できない。器面の摩耗が著しい。第6層0～10センチ・レベルの出土。

同図182(第26図版2)は口唇部、肥厚部



第28図 室川 A 式 土 器



0 5 cm

第29図 室川 A 式土器

外面および頸部にそれぞれ1条横捺刻文を施文する。文様は7～10ミリの間隔で施されており、頸部の施文は左から右の方向である。口唇部と口唇外縁部の文様には一部に刺突文的な手法もうかがえるが、ここでは横捺刻文として取り扱うことにする。第11層の出土。

同図183（第26図版3）は口唇部に1条、頸部に2条の横捺刻文が認められるが、頸上段のものは1個のみであり破片も小さく、その上、著しく破損して文様の展開状況がおさえられない。口唇部は右から左の方向、頸部は左から右の方向で施文されている。第3層20～30センチ・レベルの出土。

第29図190（第27図版2）は口唇の断面形式がcに属するもので、内傾した口唇部と、頸部に横捺刻文を施す。頸胴部における施文数は不明。文様は1センチ前後の間隔で、左から右の方向へ施文されている。肥厚部外面は破損して、文様の有無を明らかにし得ない。第6層0～10センチ・レベルの出土。

同図192（第27図版4）は口唇の断面形式がaに属し、肥厚部外面、頸部および胴上部にそれぞれ1条、左から右方向へ約1センチ間隔で横捺刻文を施文する。施文は浅いが文様は鮮明。第5層40～50センチ・レベルの出土。

同図193（第27図版5）は非常に小さな破片であるが、口唇の断面形式はiに属し、頸部に2条の横捺刻文が施されている。刻文は小型で、左から右の方向で描かれ、施文は密である。第5層40～50センチ・レベルの出土。

第30図202（第28図版5）は、口唇の断面形式がhに属するもので、口縁部は軽く外反し、若干丸味を帯びた肥厚部外面に横捺刻文を1条施す。文様は5ミリ前後の間隔で密に施され、施文は深い。第6層30～40センチ・レベルの出土。

第30図205・第31図206（第28図版8・第29図版1）はともに口縁部を軽く屈折させるもので、口唇の断面形式はgに属する。

第30図205（第28図版8）は口唇部と頸部に1条ずつ、左から右方向へ横捺刻文を施す。施文は深い。第7層よりの出土。

第31図206（第29図版1）は口唇部にのみ横捺刻文を1条施す資料で、施文は刺突的で浅い。第5層20～30センチ・レベルよりの出土。なお、本トレンチ出土の室川式土器の中で、口唇部にのみ施文する例は両サブ・タイプを通じて、この一点だけであった。

第31図209、210（第29図版4、5）はともに胴部の破片で、209は1条、210は2条の横捺刻文が認められる。209は1センチ前後の間隔、210は5ミリ前後の間隔で施され、施文は深く、いずれも左から右の方向で描かれている。209は第3層20～30、210は第5層0～10センチ・レベルの出土。

第31図213（第29図版8）も胴部の破片で、横捺刻文が1列認められる。施文は左から右の方向で描かれている。第5層20～30センチ・レベルよりの出土。

横捺刻文と沈線文を組み合わせる例は第28図187（第26図版7）と第31図212、214（第29図版7、9）の3点である。

第28図187（第26図版7）は口唇の断面形式がbに属する土器で、口唇は広く造形され内傾し、外面は破損しているが、先端の尖る形態に属している。口唇部と頸上段にそれぞれ1条の横捺刻文を施し、頸部では横捺刻文の右端から下方へ斜沈線を描く。口唇上の刻文は1センチ前後、頸上段の刻文は5ミリ前後で描かれ、いずれも深く刺突されている。沈線もシャープである。文様帯下端の状況は不明。第6層0～10センチ・レベルの出土。

第31図214（第29図版9）は胴部の破片で、

1条の横捺刻文の上方には斜格子状の沈線文が見受けられる。横捺刻文は比較的密で、左から右の方向へ浅く描かれている。上方の斜沈線も施文は浅いが、文様はシャープである。上部欠損のため、口唇の断面形態は不明。第7層よりの出土。

同図212(第29図版7)は頸部破片で、方向の異なる斜沈線文を交互に組み合わせ格子状をつくり、その下方に横捺刻文を施す。この破片は横捺刻文の箇所では割れており、したがって横捺刻文を何列施文したかは不明である。斜格子文も横捺刻文も深く刻まれたと思うが、器面摩耗のため鋭さは感じられない。第3層70~80センチ・レベルの出土。

横捺刻文と凹線文を組み合わせる例は、第29図195(第27図版7)の1点のみである。この土器は幅広の口唇部がゆるやかに内傾し、断面形式がdに属する口縁で、口唇部に1条の凹線文を浅く施文し、肥厚部外面には横捺刻文を1列、8ミリ前後の間隔で力強く施文する。凹線の施文方向は不明だが横捺刻文は左から右の方向で描かれている。頸部下における文様の有無は不明。第5層0~10センチ・レベルの出土。

b) 押し引き文を基調とするグループ

このグループの土器は2点(第27図180・第30図199)得られており、2点とも押し引き文に終始するものと思われる。

第27図180(第25図版6)は口唇の断面形式がaに属するもので、その典型的なものである。肥厚部外面には押し引き手法に近い横捺刻文が、1センチ前後の間隔で力強く描かれ、頸部には押し引き文を1条施す。施文はいずれも左から右の方向である。第5層30~40センチ・レベルよりの出土。

第30図199(第28図版2)は口縁が「く」

の字状の屈折を示す標品で、断面形式がfに属する唯一の資料である。口唇部には5ミリ前後の間隔で押し引き文を力強く描き、頸部ではやや浅めに1条描いているが、文様はいずれも鮮明で、かつ左から右の方向へ描いている。第5層0~10センチ・レベルよりの出土。

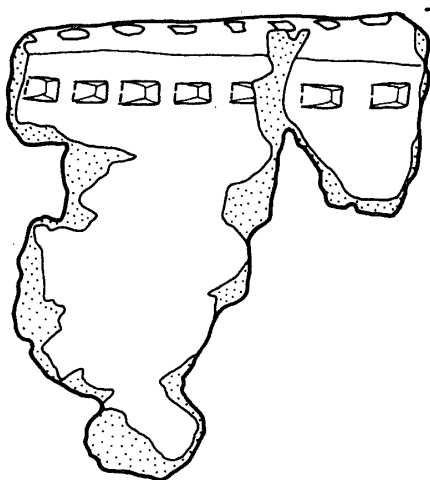
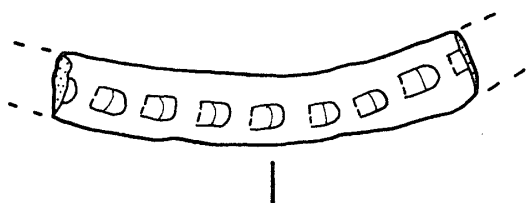
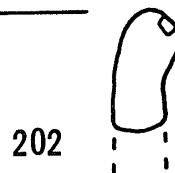
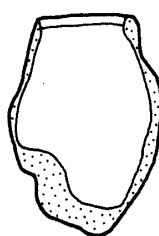
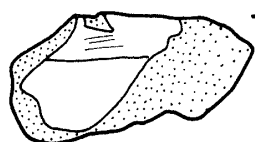
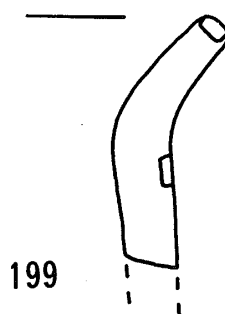
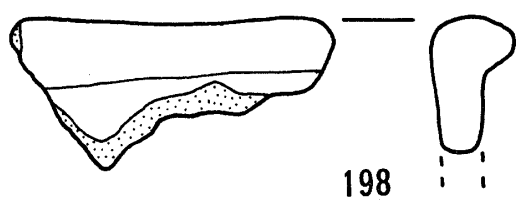
c) 凹線文と沈線文

凹線文と細沈線文を組み合わせる例は、第27図178(第25図版4)の1点である。本標品は口唇の断面形式がaに属する土器で、口唇部に1条の凹線文を浅く描き、頸部には斜沈線文を組み合わせ格子状の文様をつくる。斜格子文はシャープである。この文様の下端は欠失しているから、厳密に扱うとすれば不明の項へ移すべきであろう。第6層10~20センチ・レベルの出土。

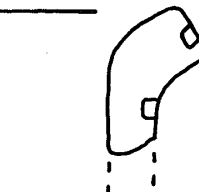
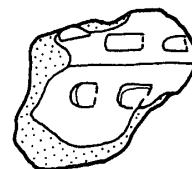
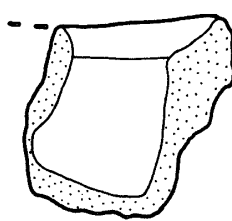
d) 刺突文

刺突文のみという例は第26図173(第24図版1)と第31図211(第29図版6)の2点である。

第26図173(第24図版1)は、比較的まとまった破片が得られたので、推定復元を試みた。口径は推算20.0センチ、器高約23センチ。口唇部は丸味をもちながら外傾し(断面形式e)、頸部で幾分しまり、胴部でわずかにふくらむ。そして底部へはゆるやかなカーブで移行するものと思われる。文様は頸上部に単篋工具によって刺突文を3条圍繞する。刺突文は爪形で左から右へ浅く描かれている(同図内面の箇所の文様は表面のものを拡大したものである)。外面では擦痕が明瞭に認められるが、文様帯の箇所はナデ消されている。内面ではへうによる調整痕も一部見受けられる。第12層よりの出土。



203



第30図 室川 A 式土器

第31図 211（第29図版 6）は頸胴部の破片で、その境い目に横位の刺突文が 1 列認められる。刺突文は先端の幅の狭い単篋を使用し、比較的深く突き刺しながら左から右へと施文する。外面では擦痕が明瞭である。第 5 層 0～10センチ・レベルの出土。

e) 不 明

破片が小さく、文様の全体像のつかめないのが 3 点ある。（第27図 179・第29図 194・第31図 208、第25図版 5・第27図版 6・第29図版 3）。

第27図 179（第25図版 5）は頸部に 2 条の押し引き文が認められる標品であるが、この種の文様に終始したかどうかは不明。口唇の断面形態は a に属し、押し引き文は左から右の方向へ力強く描かれ、その間隔は 1 センチ前後である。第 8 層の出土である。

第29図 194（第27図版 6）は極めて小さな破片で、断面形式は d に属し、頸部に 1 条の押し引き文を左から右の方向へ浅く描いている。第 7 層よりの出土。

第31図 208（第29図版 3）は胴部破片で、押し引き文が 1 条認められ、左から右方向へ描いている。施文は浅く、1 センチ前後の間隔で描かれている。第 6 層 30～40センチ・レベルよりの出土。

単篋工具と半截竹管を併用する例は第27図 175（第25図版 1）の 1 点である。

本標品は口縁の断面形式が a に属するもので、口唇部は約 2.3 センチの幅を有し、水平方向に整形されている。文様は口唇部に単篋工具による押し引き文を浅く 1 条描き、肥厚部外面および頸上部には半截竹管による押し引き文をそれぞれ 1 条施し、それ以下に斜行沈線文を配している。口唇上の押し引き文は右から左の方向、口唇外縁部および頸上部の

押し引き文は左から右の方向で力強く描かれている。斜沈線文も鋭い。第 11 層の出土。

半截竹管のみを用いて施文する確実な例は、第30図 203（第28図版 6）の 1 点で、第29図 189（第27図版 1）もこれに属する資料かとみられる。

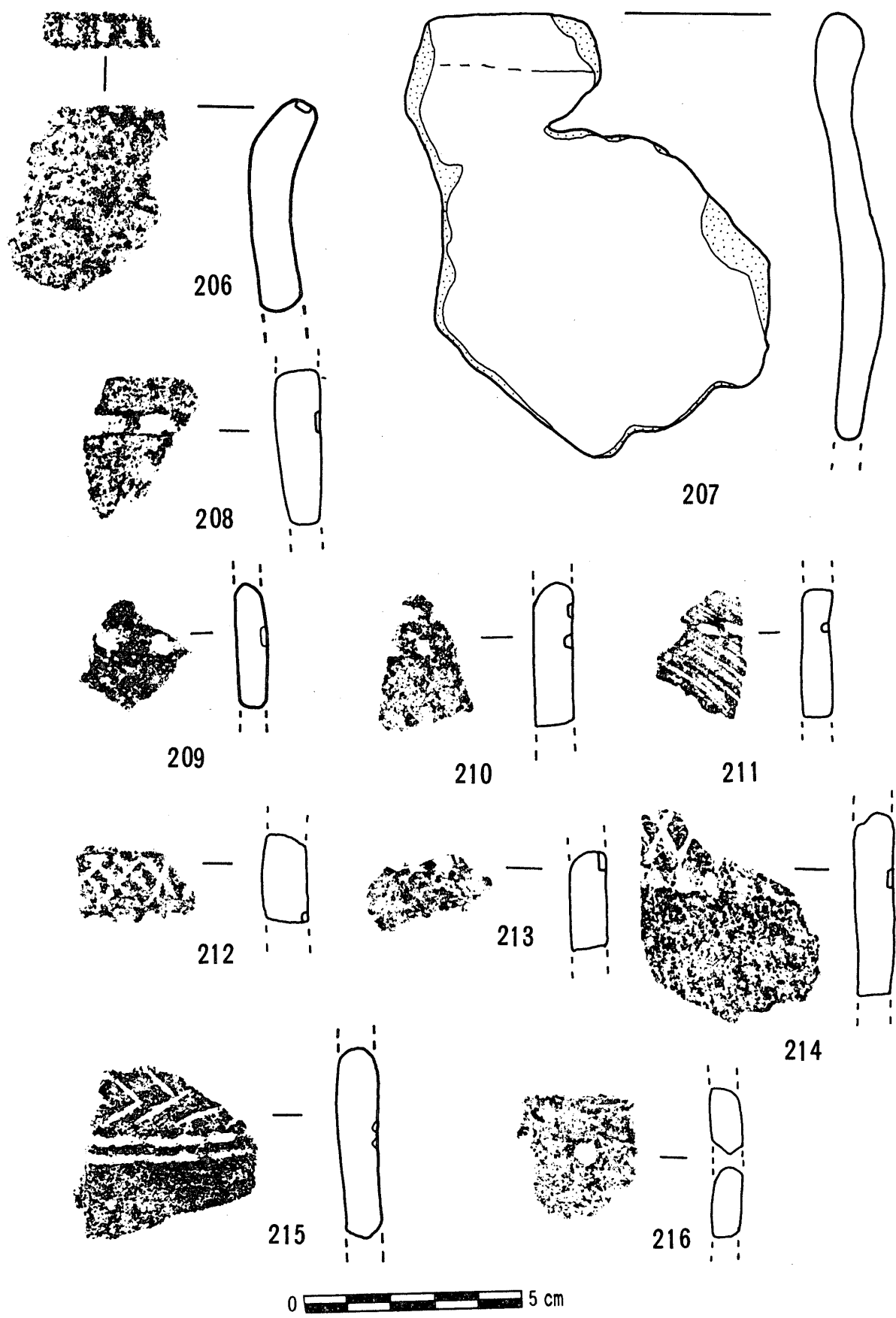
第30図 203（第28図版 6）は、口唇部をわずかに強調する標品で、口唇の断面形式は i に属する。口唇部と頸部にはそれぞれ 1 条、右から左の方向へ横捺刻文が施されている。施文は比較的深い。第 3 層 70～80センチ・レベルの出土。

第29図 189（第27図版 1）は文様の全景が撮めるわけではないが、一応、本項に含めてよい資料かと考えられる。口唇部は著しく内傾しており、断面形式 c の典型的なものである。肥厚部外面と頸部に半截竹管による横捺刻文を左から右方向へ描く。いずれも力強く、深く施文されている。表面採集品。

第31図 216（第29図版 11）は有孔の胴部破片である。孔は表裏両面より穿たれているが、内面をより多く加工している。したがって、径は内面で 1 センチ前後、外面で 5 ミリ前後となっている。中央の孔径は約 3 ミリである。孔周辺に特別の加工痕あるいは使用痕は見受けられない。両面にわずかながら擦痕が認められる。第 7 層よりの出土。

次に、室川式サブ・タイプ A のうち浮文の施こされた資料について記述する。2 点（第26図 174・第28図 185、第24図版 2・第26図版 5）検出された。

第26図 174（第24図版 2）は、推定復元を試みたもので、口径推算 16.6 センチ、器高約 28 センチ。器形は口縁部がしまり、胴部の脹む器形で、器の最大径は胴部にある。口唇の断面形式は a に属し、口唇部は広くかつ水平方向で、断面は方形状の肥厚を示す。胴上



第31図 室川 A 式 土 器

部に断面半円形の凸帯を1条圍繞させる。第12層よりの出土。

第28図185（第26図版5）は、口唇の断面形態がaに属するもので、断面方形の凸帯を貼付することによって肥厚帯をつくる。口唇は若干外傾する。そして、頸胴部の境い目に断面三角形の低平な凸帯を1本繞らす。やや胴の張る深鉢形の土器で、器色は暗褐色、焼成は若干よい。第11層よりの出土。

次に無文の資料についてみていく（第28図184、186、188、第29図196、197、第30図198、200、201、204、第31図207など）。

第28図184（第26図版4）は口縁に凸帯を貼付することによって肥厚口縁をつくるもので、肥厚部の断面形状は、カヤウチバンタ式や宇佐浜式のそれとは異なり、また、室川式の前記肥厚形態からも外れるが、サブ・タイプのAに属することは間違いないので本項に含めておく。第6層0～10センチ・レベルの出土。

同図186（第26図版6）は口唇の形態がiに属するもので、第5層20～30センチ・レベルの出土品である。小破片のため器形を推察し得ない。

同図188（第26図版8）は口唇部が鋭く内傾し、先端は部分的に尖るところもある。断面形式bかcに属するものであろう。第5層30～40センチ・レベルよりの出土。

第29図196、197（第27図版8、9）は、ともに断面形式dに属する土器で内傾の斜度のゆるやかなものである。dの典型的な例とみてよいであろう。196は第5層30～40センチ・レベル、197は第13層よりの出土。

第30図198（第28図版1）は、口唇部が丸味を帯びながら外傾する断面形式eに属する資料である。しかし、外傾の斜度は第26図173

（第24図版1）より弱い。第11層よりの出土。

第30図200（第28図版3）は、口縁部が「く」の字状に小さく屈折する土器で、口縁の断面形式はgに属する。両面とも一部に明瞭な擦痕を残す。第6層0～10センチ・レベルの出土。

同図201（第28図版4）は、口唇の断面形式がhに属するもので、口唇の肥厚は痕跡をとどめる程度である。第6層0～10センチ・レベルの出土。

同図204（第28図版7）は、口唇にやや厚みのある土器で、口唇の断面形式はaの変形ともみられる。山形口縁の左半部の資料である。第5層20～30センチ・レベルの出土である。

第31図207（第29図版2）は口縁部が軽く外反する資料で、口唇の断面形式はhに属し、口唇部は丸味をもっている。表面はナデ調整を行っているが、内面には擦痕が著しい。第5層40～50センチ・レベルの資料。

第51表 室川A式土器における擦痕（口縁部）の残存状況

擦痕残存部 層序	両面あり	外面のみ	内面のみ	両面なし	不明	合計
表面採集					1	1
第1層						
2						
3				1	3	4
4						
5	3	4	2	3	6	18
6	3	1		2	3	9
7	1	1	1		1	4
8		1				1
9						
10						
11	1	2	1			4
12	1	1				2
13					1	1
14						
15						
16						
17						
18						
合計	9	10	4	6	15	44

器面調整

本トレンチの室川式サブ・タイプAについて器面調整の方法を観察した結果、ナデと擦痕を併用するのが一般的であった。

擦痕の残存状況を第51表に記した。多数の破片に擦痕が認められるが、全面施す例はほとんどない。一般にナデが多く使用され、擦痕が器面の大部分を占めるというのも稀であり、一部に観察されるという例が多い。

胎土混入物

サブ・タイプAに認められる混入物およびそれらの組み合わせは下記の通りである。特に貝片の目立つものは石灰質砂粒から分離して「貝片」とした。

- ㉑ 石灰質砂粒＞石英＞磁鉄鉱
- ㉒ 石灰質砂粒＞貝片＞石英＞磁鉄鉱
- ㉓ 石灰質砂粒＞貝片＞石英
- ㉔ 石灰質砂粒＞石英
- ㉕ 石灰質砂粒＞貝片
- ㉖ 石灰質砂粒のみ

上記各項の層位的出土状況を調べたのが第52表である。その中では㉑が16点と圧倒的に多く、すべて第5層以下の出土であった。次に㉓が10点、㉕が7点検出されている。㉓は第5層以下に、㉕は第6層以上にみられた。いずれにしても石灰質砂粒を主体としていることは本型式土器の大きな特徴の一つである。

第52表 室川A式土器の混入物とその出土状況

混入物 層 序	石灰質砂粒 ＞石英 ＞磁鉄鉱	石灰質砂粒 ＞貝片＞石 英＞磁鉄鉱	石灰質砂粒 ＞貝片＞石 英	石灰質砂粒 ＞石英	石灰質砂粒 ＞貝片	石灰質砂粒 のみ	合 計
表面採集						1	1
第 1 層							
2							
3				2		2	4
4							
5	6		6	2	1	3	18
6	3		1	1	3	1	9
7	2		2				4
8		1					1
9							
10							
11	3		1				4
12	2						2
13		1					1
14							
15							
16							
17							
18							
合 計	16	2	10	5	4	7	44

器色・焼成

室川式サブ・タイプAの器色は暗褐色のものが最も多く、半数以上を占めており、他に茶褐色、赤褐色といった資料も見受けられるが、大山期の土器に類似する暗褐色（あるいは茶褐色）がやはり一般的といえる。

次に焼成についてみると、良好といえる資料は少なく、大部分は普通あるいは不良の部類に属する。

室川式サブ・タイプB

これに属するものは16点検出され、そのうち口縁部は13点、他は有文胴部の破片である。（第45表参照）。

器 形

復元して全形を示しうるような資料は得られなかった。器形の推測できる破片よりみると、壺形は見受けられず、すべて深鉢形に属する。後者についてみると頸部が若干しまり、口縁部はわずかに外反する器形が一般的のようで、第32図223（第30図版7）のように直口に近い器形も見受けられた。口径と胴径の関係、つまり、いずれに最大の径がくるか調べてみたが、それを示しうる資料に今回は恵まれなかった。

口縁部の形状を、第26図a～jの分類にしたがって観察したところ、第53表のような結果が得られた。すなわち、タイプBにおいては、a・b・c・e・f・gの形状は見当らず、d・h・i・jの4種の形状に限られた。中でもjタイプ（3点）は、タイプAにおいては、1点も検出されておらず、今後注意すべき資料かと思われる。

大きさ

復元して大きさの窺えるような資料が得ら

れず、破片より推測せざるを得ないが、器高については困難な面が多いので、ここでは推算口径を中心に、大きさについて述べたい。

第54表 室川B式土器の推算口径

	図 版 番 号	推算口径
1	第32図 217（第30図版1）	12.0
2	“ 221（ “ 5）	20.0
3	“ 222（ “ 6）	14.0
4	第42図 302（第40図版4）	23.0

〔単位：cm〕

口径の推算可能なものは4点あり（第54表）、最小は約12センチ、最大は約23センチであった。ただ、現存の破片よりすると15～17センチぐらいのものが多く見受けられる。

文 様

今回採集した16点のうち、文様の施された標品は11点であった。施文部位は次の5ヶ所である（第55表）。

- ㊶ 口唇部と頸部
- ㊷ 口唇部と口唇外縁部および頸部
- ㊸ 肥厚部外面と頸部
- ㊹ 肥厚部外面のみ
- ㊺ 口唇部と頸部および胴部
- ㊻ 不明（口唇・頸部の欠失した有文の胴部破片）

今回の出土量は㊷が3点、㊶が2点で、他は1点ずつの出土で、不明が3点あった。

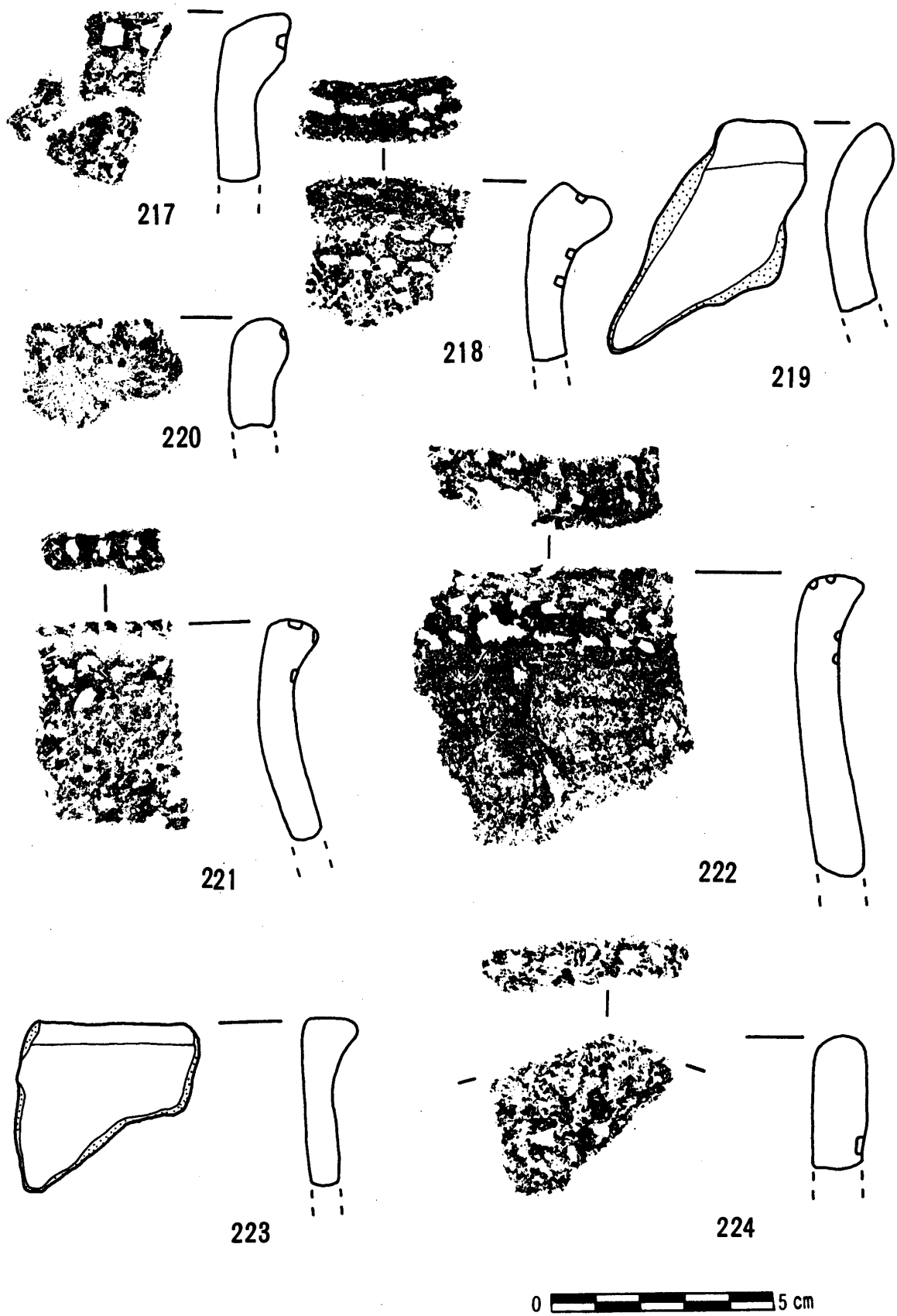
施文具は㊸叉状工具と㊹単篋工具の2種認められ、半截竹管使用のものは見受けられなかった。それぞれの出土量は㊹が10点、㊸は1点であった。

これを文様の種類によって分類すると、第56表のような結果がでた。

以下、施文具に中心をおきながら、文様に

第53表 室川B式土器の口縁断面形態別出土状況

層序	断面形態 文様の有無	a		b		c		d		e		f		g		h		i		j		合計
		有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集																						
第1層																						
2																						
3																		1			1	2
4																						
5								1								1	4	2	1			9
6																			1		1	1
7																						
8																						
9																						
10																						
11																1						1
12																						
13																						
14																						
15																						
16																						
17																						
18																						
合計								1									1	5	3	2	1	13
								1									1	8		3		



第32図 室川 B 式 土 器

第55表 室川B式土器の施文部位とその出土状況

施文部位 出土状況	① 口唇部 + 頸部	② 口唇部 + 外縁部 + 頸部	③ 肥厚部外面 + 頸部	④ 肥厚部外面のみ	⑤ 口唇部 + 頸部 + 胴部	⑥ 有文胴部	合計
表面採集							
第1層							
2							
3						1	1
4							
5	2	1		2	1	1	7
6			1			1	2
7							
8							
9							
10							
11				1			1
12							
13							
14							
15							
16							
17							
18							
合計	2	1	1	3	1	3	11

について述べることにする。

又状工具の使用例は第32図 222（第30図版6）の1点だけである。この土器は口唇の断面形態がⅰに属するもので、平らな口唇部と頸上部にそれぞれ1条、又状工具による点刻文を施す。工具の先端の幅は9ミリ前後で、伊波・荻堂期のものに比べると若干幅が広い。口唇部のものは右から左方向へ浅く描き、頸部のものは左から右方向へ力強く施文する。第5層0～10センチ・レベルの出土。

単篋工具を使用する例は10点である。これらを文様によって分類すると下記の3通りとなる。

- a) 横捺刻文のみ
- b) 横捺刻文と沈線文の組み合わせ
- c) 横捺刻文と沈線文および凸帯文

出土量についてみるとa) が最も多く7点、b) が2点、c) が1点であった。以下、a) より記述する。

横捺刻文のみ施文する例は7点(第32図217、220、221、224、第33図225、231、第42図302)である。

第56表 室川B式土器に使用された施文具および文様別出土状況

施文具 文様 層序	叉状工具 点刻文	単 簡 工 具			合 計
		横捺刻文のみ	横捺刻文+沈線文	横捺刻文+沈線文+凸帯	
表面採集					
第1層					
2					
3			1		1
4					
5	1	5	1		7
6		1		1	2
7					
8					
9					
10					
11		1			1
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
合 計	1	7	2	1	11
		10			

第32図217(第30図版1)は口唇部の断面形式がdに属するもので、口唇の斜度はゆるやかである。肥厚部外面は平坦面を形成し、この部分に横捺刻文を1条施す。施文は深い。第5層30~40センチ・レベルよりの出土。

同図220(第30図版4)と第42図302(第40図版4)は、共に肥厚部外面をわずかに強調したもので、口唇の断面形式はiの変形とみていいだろう。両者とも横捺刻文を1条、肥厚部外面に施す。器面摩耗のため、文様は消えかかっている。第32図220は第5層10~20センチ・レベル、第42図302は第11層の出土。

同図221(第30図版5)は口唇の断面形式がiに属するもので口唇部と口唇外縁部そして頸部に、幅約2.5ミリの単簡工具により横捺刻文をそれぞれ1条施文する。施文は浅く、特に口唇外縁部のものは器面の摩耗していることもあって、辛うじて認めうる状態である。この土器は頸上部ですばまり、したがって胴に最大径のくるタイプとみられる。第5層0~10センチ・レベルよりの出土。

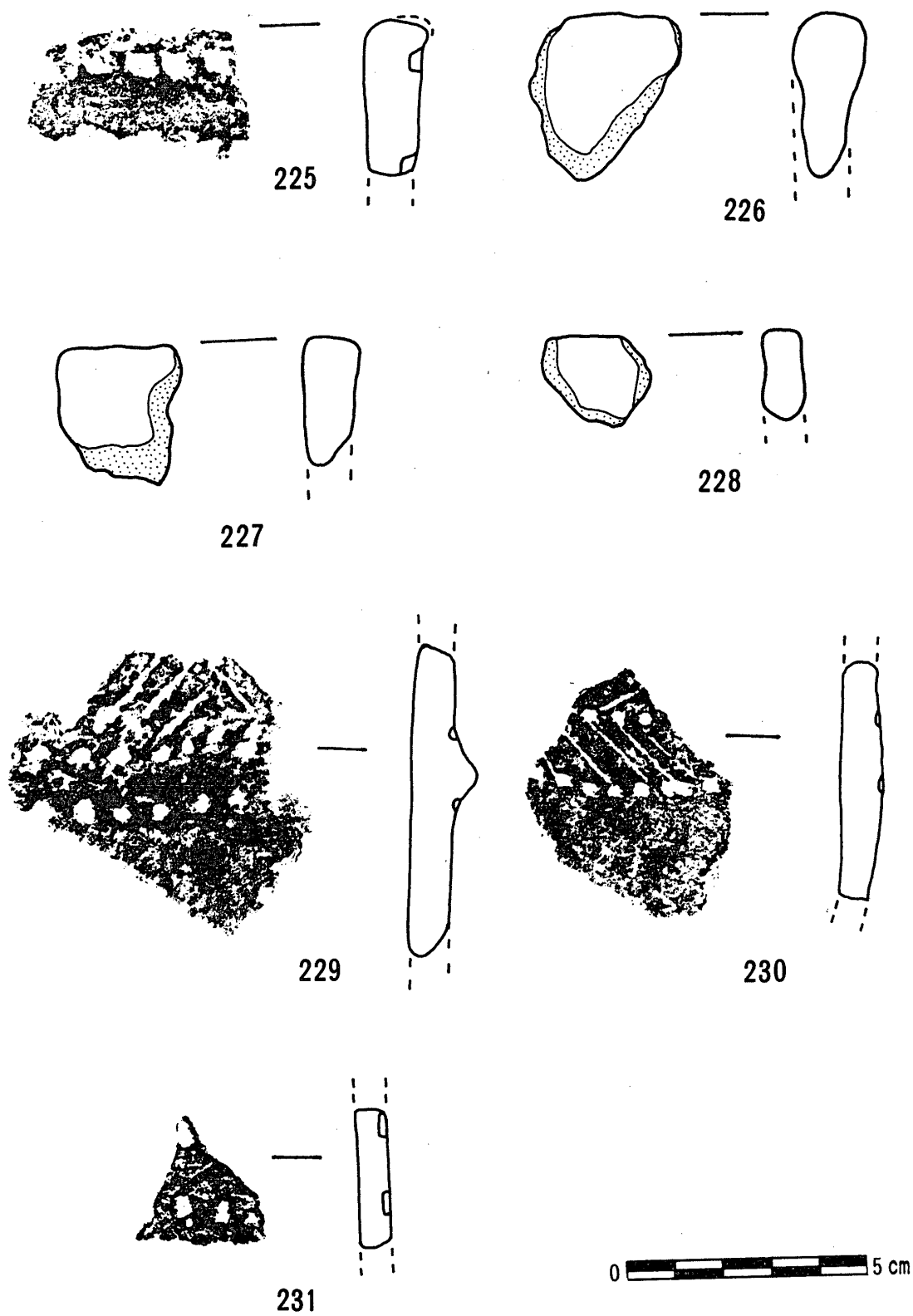
- 同図224(第30図版8)は本トレンチ出土の室川B式土器の中では、唯一の山形口縁土器である。口唇は特に強調されず、直口状の器形を示す。口唇部と頸部に1条ずつ、横捺刻文が施されている。いずれも施文は浅く、かつ器面摩耗のため文様は消えかかっている。第5層10~20センチ・レベルよりの出土。

第33図225(第31図版1)は口唇の断面形式がjに属するとみられる土器で、口唇と同外縁部が破損し、したがって確かな断面形を把握し得ない。頸部の上下に2条の横捺刻文が認められる。施文は深く左から右の方向である。第6層30~40センチ・レベルよりの出土。

同図231(第31図版7)は胴部の破片で2条の横捺刻文が認められる。施文は浅く、左から右の方向で描かれている。第5層20~30センチ・レベルよりの出土。

横捺刻文と沈線文を組み合わせる例は、第32図218(第30図版2)と第33図230(第31図版6)の2点である。

第32図218(第30図版2)は口縁が軽く外反する土器で、口唇の断面形状は前記分類から外れるがiの変形とみることもできよう。口唇部は広く、外傾しており、1条の横捺刻文を施すが、一部に刺突文的文様も見受けられる。施文は深く、左から右の方向である。頸部には2条の横捺刻文が施され、右端に



第33図 室川 B 式 土 器

も縦位の刻文の一部が見受けられる。両者に挟まれる部分に斜沈線を組み合わせた格子状の文様を描く。横捺刻文は左から右の方向、縦位のものは下から上の方向で描かれ、施文は深い。しかし、斜格子文は浅く、文様は消えかかっている。第5層30～40センチ・レベルの出土。

第33図 230（第31図版6）は胴部の破片で、羽状沈線を描き、軸の部分と下端に横捺刻文をそれぞれ1条配する。文様はまず横捺刻文を左から右の方向へ描き、その後に沈線で羽状文を描いている。第3層60～70センチ・レベルよりの出土。

同図 229（第31図版5）も胴部の破片で、凸帯と組み合わせる例である。凸帯の両端には横捺刻文を1列ずつ配し、上位には左傾の沈線文がほぼ平行に4条、右端では右傾の沈線が1条認められる。鋸歯文か組帯文のような文様を施文したものであると思われる。第6層20～30センチ・レベルよりの出土。

次に5点（第32図 219、223、第33図 226、227、228）の無文例についてみていく。

第32図 219（第30図版3）は口縁の軽く外反する土器で、外反は曲線的であり、その断面形式はh型とみていいであろう。前面よりみると肥厚口縁のようにみえる。第5層10～20センチ・レベルよりの出土。

同図 223（第30図版7）の口唇部はやや水平方向を保ち、その断面形式はaを小型化したようなものだが、退化している点を重視するとiのグループになる。第5層10～20センチ・レベルよりの出土。

第33図 226、227（第31図版2、3）の2点は口唇の断面形式がiに属する資料で、同図 228（第31図版4）はjのタイプである。いずれも焼成は悪く、器面の破損が著しい。226は第5層10～20、227は第3層40～50、

228は第3層70～80センチ・レベルよりの出土。

第57表 室川B式土器における擦痕（口縁部）の残存状況

擦痕 残存部 層序	両面 あり	外面 のみ	内面 のみ	両面 なし	不明	合計
表面採集						
第1層						
2						
3				1	2	3
4						
5	1	2		2	5	10
6				1	1	2
7						
8						
9						
10						
11					1	1
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
合計	1	2		4	9	16

サブ・タイプBにおいても器面調整の方法はタイプAと同じく、ナデと擦痕の2通り認められる。しかし、擦痕を残すものはきわめて稀で、図示した16点についてみると（第57表）、第33図 229（第31図版5）は裏面に、同図 231（同図版7）は表裏に施しているものの、他はナデ調整を行っており、後者が一般的な調整法だと思われる。

胎土混入物

このサブ・タイプの胎土混入物の種類（それらの組み合わせ）および層位的出土状況を

第58表に示した。

混入物の種類およびそれらの組み合わせは
 ㊸石灰質砂粒>貝片>石英、㊹石灰質砂粒>
 貝片、㊺石灰質砂粒のみ、の3通りである。
 各出土量は㊸10点、㊹4点、㊺2点であった。

前項のタイプAでは、石英や磁鉄鉱もかなりみうけられたが、タイプBにおいては石英が少量認められ、これはタイプBの特徴とみていいかと思う。

第58表 室川B式土器の混入物とその出土状況

混入物 層 序	石灰質砂粒>貝片>石英	石灰質砂粒>貝片	石灰質砂粒のみ	合 計
表面採集				
第 1 層				
2				
3	2	1		3
4				
5	5	3	2	10
6	2			2
7				
8				
9				
10				
11	1			1
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
合 計	10	4	2	16

器色・焼成

器色についてみると、前項のタイプAにおいては暗褐色を帯びた資料が圧倒的に多かった。それに比べるとタイプBでは明るい

赤褐色を呈する資料が過半数を占めており、この土器の一般的な器色といえるかと思う。

尚、焼成については先にも触れたが、普通あるいはやや不良なものが多く、タイプAに比べて脆く、かつ吸水性も強いようである。

f 室川上層式土器

本トレンチでは67点の室川上層式土器が得られた。これらはすべて破片で、完形の出土はなかった。比較的まとまって出土した口縁破片5点については、推定復元を試みた。

なお、室川上層式土器は、焼成の良好なもの(A)と、不良なもの(B)の2つのサブ・タイプに分類でき、本トレンチにおけるそれぞれの出土量はAが11点、Bが56点であった(第59表参照)。

以下、タイプAより記述する。

第59表 室川上層式土器の出土状況

タイプ 種 類 層 序	A			B			合 計
	口縁部 有文	有文 無文	胴部	口縁部 有文	有文 無文	胴部	
表面採集							
第 1 層				1			1
2				1	1		2
3	2	6	2	19	31	1	61
4							
5		1				1	2
6				1			1
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							
16							
17							
18							
合 計	2	7	2	22	32	2	67
	11			56			

室川上層式土器サブ・タイプ A

このサブ・タイプに属する11点のうち、口縁部は9点（有文2点、無文7点）、他は有文の胴部破片である。

口縁破片の中で、比較的大きな資料3点については推定復元を試みた。

器 形

推定復元を行った3点（第34図232・第32図版1、第35図233、234・第33図版1、2）および器形の窺える他の口縁破片でみると、すべて深鉢形で、これはさらに次の2種に分けられる。すなわち、径の最大が(A)胴部にあるものと、(B)口縁部にあるもの、の2種である。(A)に属するものは第36図240（第34図版6）の1点で、(B)は5点であった（第60表）。いずれの場合も口縁はわずかに外反する。

第60表 室川上層 A 式土器の器形別出土状況

層序	器形	A	B	不明	合計
表面採集					
第1層					
2					
3		1	4	3	8
4					
5			1		1
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
合計		1	5	3	9

室川上層式土器も室川式土器同様、口縁部の断面形状にいくつかのヴァリエーションがあり、これらを分類すると、第34図上段のように12種のタイプ（a～l）が認められた。

それぞれの特徴を簡単に説明すると、次の通りである。

- 口唇が水平方向に幅広く造形されるもの。
- 幅広い口唇はやや鋭く内傾し、口唇外縁が尖るもの。
- bと同様の内傾を示すが、口唇外縁部がやや厚みをもつもの。
- 断面形態はcに類似するが、内傾の斜度がゆるやかなもの。
- 外傾するもので、口唇が丸味を持つものや水平なものなどがある。
- 断面が方形の肥厚を呈すもの。
- 口縁を「く」の字状に角度をもって屈折させるもの。
- 上記gと同様の屈折を示すが、屈折部が短小なもの。
- 口縁部が大きく弧状に外反するもの。
- 軽微な外反を示すもので、外見的には肥厚口縁にみえる。
- 口唇部をわずかに誇張するもので、内傾するものと外傾するものの2つのタイプがある。
- 肥厚や誇張の全くみられないもの。

タイプAにおける出土状況は第61表のとおりで、jが3点、iが2点でその他は1点ずつの出土であるが、b・c・e・g・h・lのグループは検出されなかった。

底部は底径の小さい平底が6点検出されており、中には底面が凹面を形成するものなどもあるが、詳しくは後項（底部の項）を参照

第61表 室川上層 A 式土器における口縁断面形態とその出土状況

断面形態 文様の有無 層 序	a		b		c		d		e		f		g		h		i		j		k		l		合 計
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集																									
第 1 層																									
2																									
3	1						1				1						1		3		1				8
4																									
5																	1								1
6																									
7																									
8																									
9																									
10																									
11																									
12																									
13																									
14																									
15																									
16																									
17																									
18																									
合 計	1						1				1						2		3		1				9
	1						1				1						2		3		1				

されたい。

大きさ

完形品がないので確実な資料を呈示し得ないが、復元を試みた3点についてみると、第35図 233（第33図版1）は口径約20.4センチ、器高推算24センチ。同図 234（同図版2）は口径約15.4センチ、器高推算20.5センチ。第34図 232（第32図版1）は口径約17.4センチ、器高推算21センチで、それぞれ中～大型の部類に属するが、器高の推定できるのはこの3点だけである。

第62表 室川上層 A 式土器の推算口径

番号	図 版 番 号	推算口径
1	第34図 232（第32図版1）	17.4
2	第35図 233（第33図版1）	20.4
3	“ 234（ “ 2）	15.4
4	第36図 239（第34図版5）	21.0
5	“ 240（ “ 6）	18.5
6	“ 241（ “ 7）	11.0

次に口径だけについてみると推算可能なものが6点あり、最小は11.0センチ、最大は21.0センチで、それぞれの計測を第62表に記したが、口径11センチの1例を除くと他は中～大型の部類に入る。

文 様

文様の施されたものは、4点検出された。これらを施文部位について観察したところ、下記の2通りの組み合わせが見受けられた。

- ㊦ 口唇部と肥厚部外面および頸部に施文するもの。
- ㊧ 肥厚部外面に施文するもの。
- ㊨ 破損による不明品。

それぞれの出土量は第63表に記したが、㊦が2点で、他は1点ずつである。

第63表 室川上層 A 式土器の施文部位とその出土状況

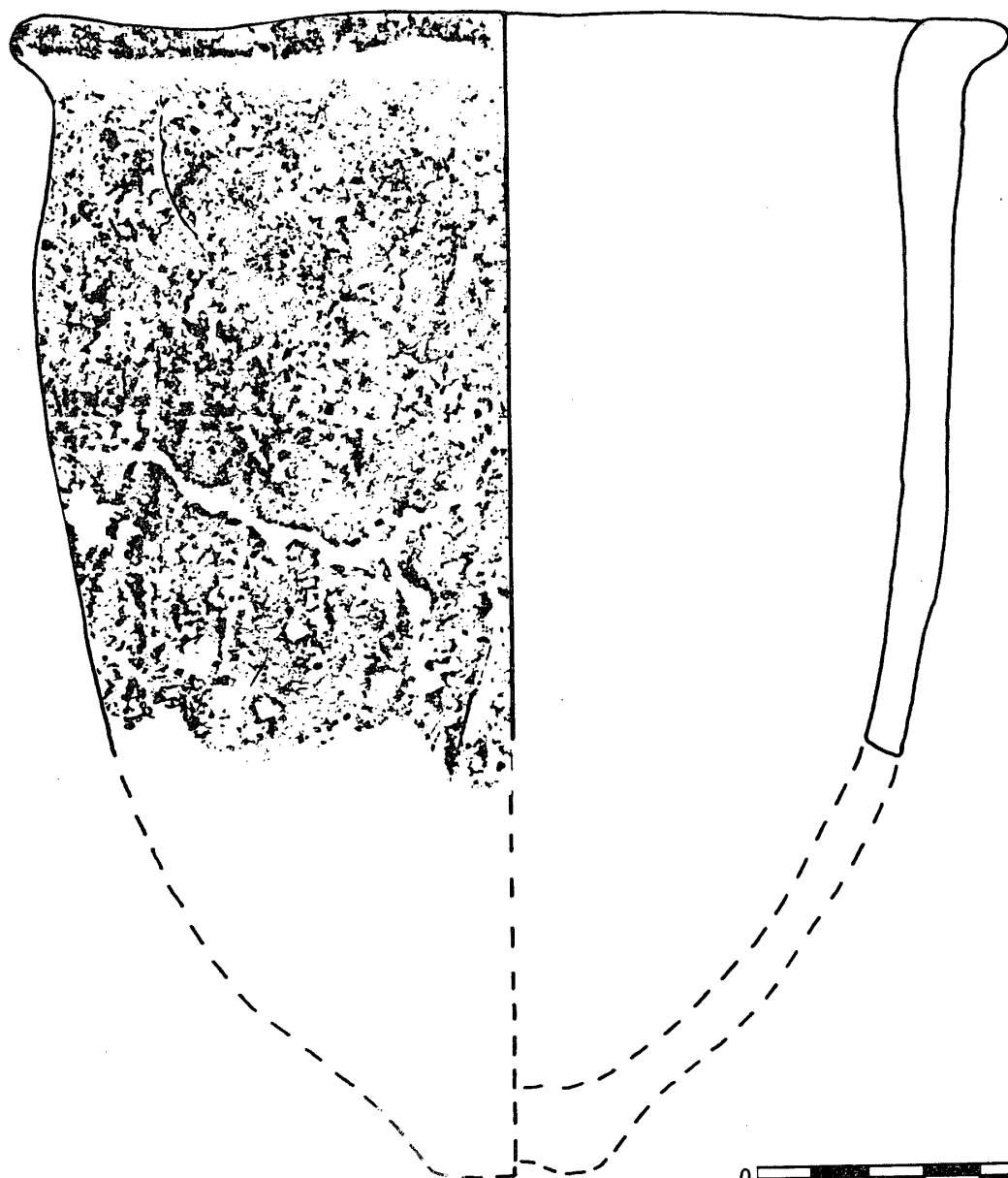
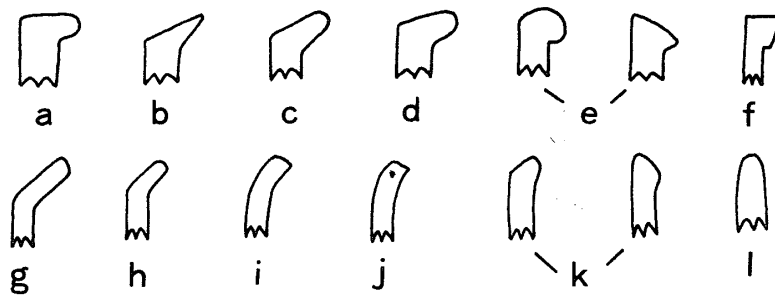
施文部位 層 序	口 唇 部 肥厚部外面 頸 部	肥厚部外面のみ	不明	合計
表面採集				
第 1 層				
2				
3	1	1	2	4
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
合 計	1	1	2	4

次に施文具の面からみてみると、㊦又状工具と、㊧単篋工具の2種類認められ、㊦が2点、㊧が2点であった（第64表参照）。

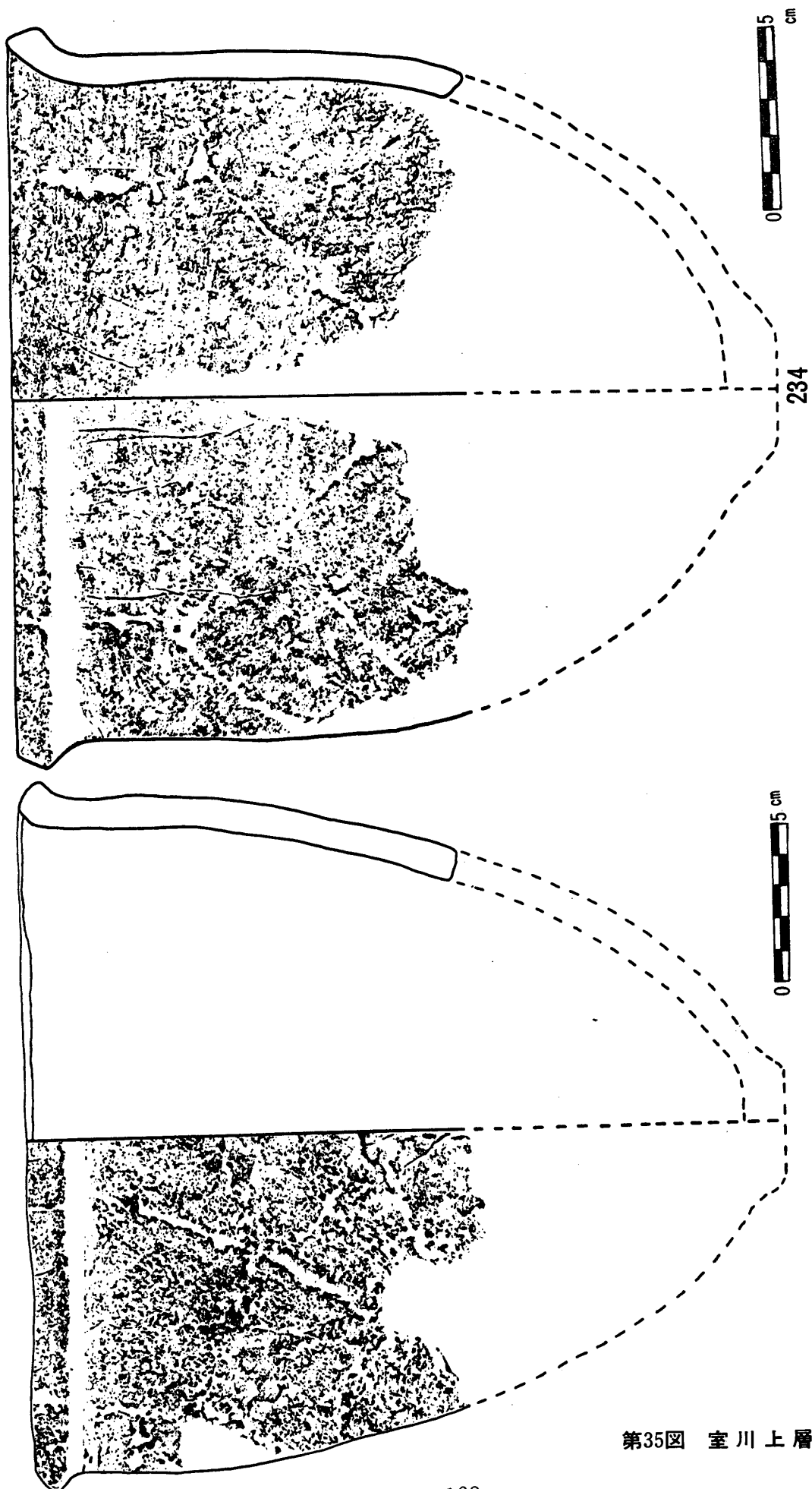
以下、施文具を中心に有文土器について記述する。

又状工具を用いたものは、第36図 237、238（第34図版3、4）の2点である。いずれも頸胴部の破片である。

第36図 237（第34図版3）は、2条1組の



第34図 室川上層A式土器(下)と室川上層式の口縁断面形態の模式図(上)



第35図 室川上層 A 式土器

の長沈線が縦位に2組認められ、その下方にやはり2条1組の沈線を1組横位に施している。この横位沈線は縦位沈線の直下にのみ施されるのか、あるいは断続しながら土器を圍繞するのか、その点は明らかでない。なお、文様帯上方の様子も不明である。第3層10～20センチ・レベルよりの出土。

同図238(第34図版4)は、2条1組の沈線文が縦位に1組認められる。表面はナデられ滑らかで、かつ多量の石灰質砂粒が見受けられるが、裏面は室川上層式特有の多孔質の器面となり、混入物も稀にしか見られない。第3層70～80センチ・レベルよりの出土。

第64表 室川上層A式土器に使用された施文
具および文様別出土状況

施文 具	文様	単 箆 工 具		合 計
		叉状工具 沈 線 文	押し引き文 横捺刻文	
表面採集				
第 1 層				
2				
3		2	1	4
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
合 計		2	1	4

単箆工具を用いたものは2点であった。

第36図235(第34図版1)は口縁の断面形態がfに属するもので、方形の肥厚を示す。口唇部と肥厚部外面、頸部に押し引き文がそ

れぞれ1条認められるが、破片が小さいため頸下方における施文の範囲は不明。押し引き文はいずれも左から右の方向で描かれ、比較的鮮明である。第3層20～30センチ・レベルよりの出土。

同図236(第34図版2)は口縁の断面形態がdに属するもので、肥厚部外面に横捺刻文が1条施されている。施文はやや深く、左から右の方向へ描いている。第3層70～80センチ・レベルよりの出土。

次に無文の口縁破片について記述する。

無文の口縁破片は7点(第34図232、第35図233、234、第36図239～242)得られており、うち大形の破片3点(第34図232、第35図233、234・第32図版1、第33図版1、2)については推定復元を試みた。

第35図233(第33図版1)は口縁が軽く外反するもので、同部の断面形式はjに含めてよいであろう。底部から口縁へゆるやかな脹らみをもちながら徐々に開く器形で、径の最大は口径(約20.5センチ)にある。器高は推算24センチ。第3層0～10センチ・レベルよりの出土。

第34図232(第32図版1)は口唇が水平方向に幅広くなったもので、断面形式はaに属する。やや円筒形の器形で、この方も径の最大は口縁(約17.6センチ)にある。器高は推算20.5センチ。第3層0～10センチ・レベルの出土。

第35図234(第33図版2)は口縁部がやや大きく外反するもので、同部の断面形式はiに属する。これもやや円筒状の器形をとり、径の最大が口縁(17.4センチ)にくるタイプで、器高は推算21センチ。第5層0～10センチ・レベルの出土。

第36図239(第34図版5)は深鉢形の口縁破片とみられるもので、同部の断面形式はkに含めてよいであろう。口径は推算21センチ。

第3層20～30センチ・レベルの出土。

同図240（同図版6）も深鉢形の口縁破片で、同部の断面形式はiに属する。胴に径の最大がくる唯一の資料である。口径は推算18.5センチ。第3層30～40センチ・レベルの出土。

同図241（同図版7）は口径推算11センチの小形の深鉢形に属する口縁破片で、同部の断面形態はjに属し、口縁は軽く外反する。第3層30～40センチ・レベルの出土。

同図242（同図版8）の口縁断面は一見宇佐浜式に似たところもあるが、外反の仕方は基本的にはjに属している。第3層30～40センチ・レベルの出土。

第65表 室川上層A式土器の擦痕（口縁部）の残存状況

擦痕残存部 層序	両面 あり	外面 のみ	内面 のみ	両面 なし	不明	合計
表面採集						
第1層						
2						
3	3	3		2	2	10
4						
5			1			1
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
合計	3	3	1	2	2	11

器面調整

器面の調整方法は擦痕、指ナデ、あるいは箆ナデなどが認められる。擦痕は横方向に施

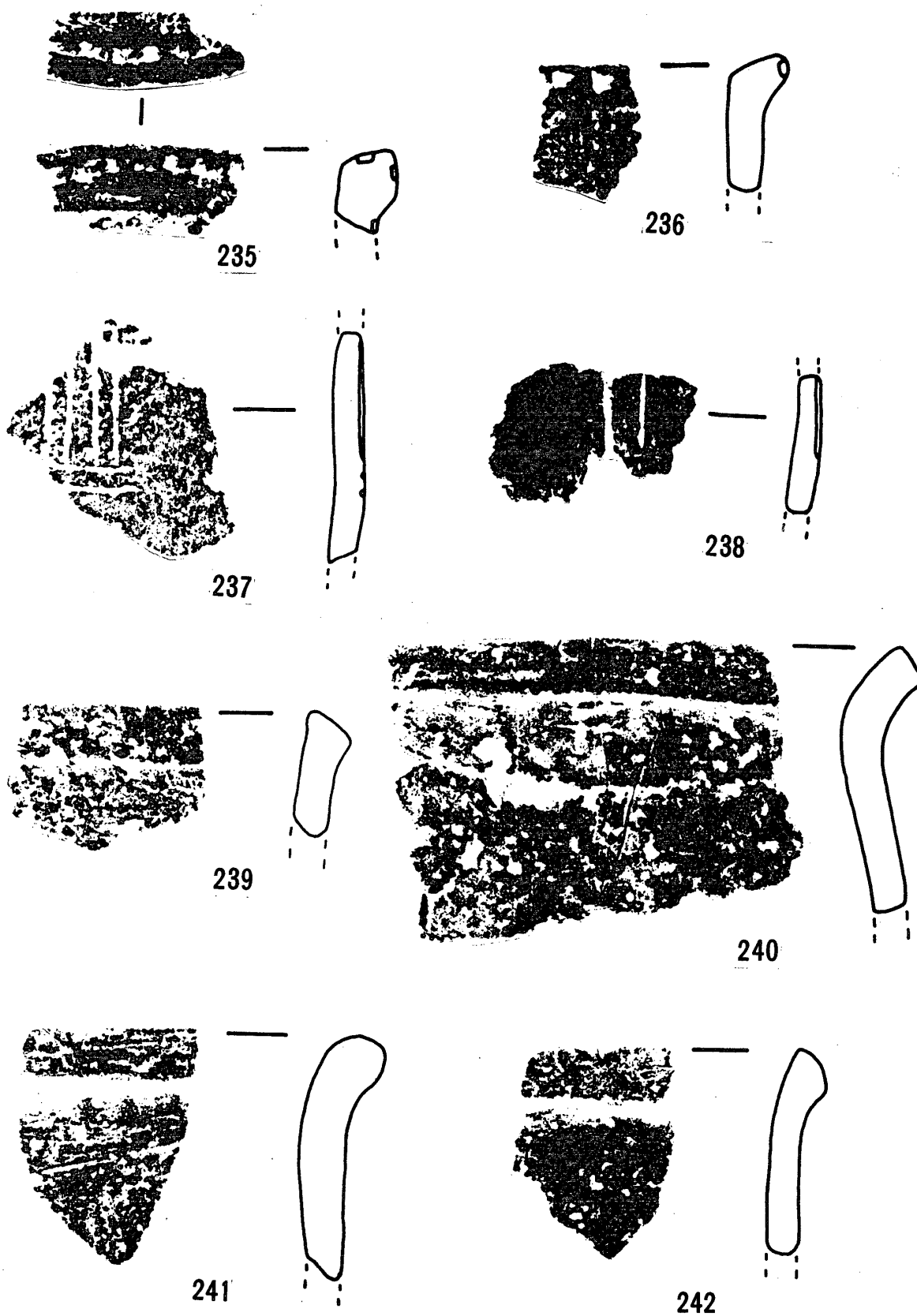
すものが多く、箆ナデは縦（斜め）、横の両方が認められる。しかし、いずれの場合も部分的で、これらが全面に及ぶことはない。擦痕の残存状況については第65表に記した。

混入物

室川上層式土器は器面がポーラスになっており、混入物の観察が困難であるが、本トレンチ出土のものについてみると、石灰質砂粒・石英・磁鉄鉱などが含まれている。第66表はその結果を表示したものである。三通りの組み合わせが認められるが、いずれの場合も石灰質砂粒を主体とするところに特徴がある。

第66表 室川上層A式土器混入物別出土状況

混入物 層序	石灰質砂粒 > 石英	石灰質砂粒 > 石英 > 磁鉄鉱	石灰質砂粒 のみ	合計
表面採集				
第1層				
2				
3	5	5		10
4				
5			1	1
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
合計	5	5	1	11



第36図 室川上層 A 式土器

器色および焼成

タイプAの器色は茶褐色のものも認められるが、暗褐色を呈するのが一般的である。

室川上層式土器は他の土器に比べ焼成が悪く、吸水性の強いのが特徴であるが、サブ・タイプのAはBに比べると焼成ははるかによく、焼成時の器面を残すものが多い。

室川上層式サブ・タイプB

このサブ・タイプのうち口縁や有文破片など特徴のある資料は56点で、そのうち口縁部は54点（有文22点、無文32点）、有文の胴部破片は2点である（第59表参照）。

口縁破片の中で、まとまって出土した2例については推定復元を試みた。

第67表 室川上層B式土器の器形別出土状況

層序	器形		合計
	壺形	深鉢形 a b	
表面採集			
第1層			
2			
3	1	5	7
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
合計	1	5	7

器種・器形

推定復元を行った2点（第37図243、244、

・第35図版1、2）および器形の窺える他の口縁破片でみると、器種は壺形と深鉢形の2種に分けられる。前者は1点で後者は12点であった。深鉢形はさらに2つのタイプに分けることができる。すなわち、径の最大が(a)胴部にあるものと、(b)口縁部にあるもの、の2種である（第67表参照）。確実なものは(a)が5点、(b)が7点であった。口縁形態を第34図上段の分類に従って分けると、第68表のようにiが最も多く15点、次にkの7点、eの6点と続いている。b、cは検出されていない。

第38図245（第36図版1）は壺形の口縁で、口唇は若干幅広く形成され、口縁を上からみると、角張った箇所が一部認められるから、上面観は方形を呈していたかと思われる。口径は不明だが、頸径は8センチ前後である。

大きさ

完形品が検出されておらず、したがって破片から推測に頼らざるを得ない。まず、口径についてみると、54点の口縁破片のうち16点が推算可能である。個々の推算口径は第69表の通りである。

第69表 室川上層B式土器の推算口径

[単位：cm]

	図版番号	推算口径
1	第37図243（第35図版1）	17.0
2	" 244（" 2）	20.8
3	第38図247（第36図版4）	14.0
4	" 249（" 5）	19.0
5	" 251（" 7）	13.0
6	第39図253（第37図版1）	17.2
7	" 259（" 8）	13.0
8	" 263（" 12）	13.0
9	第40図270（第38図版2）	18.8
10	" 278（" 10）	23.0
11	" 279（" 11）	23.0
12	第41図283（第39図版1）	12.4
13	" 289（" 4）	11.6
14	" 293（" 8）	18.4
15	" 296（" 12）	14.0
16	" 297（" 13）	10.0

第68表 室川上層B式土器の口縁断面形態とその出土状況

断面 形態 文様 層序	a		b		c		d		e		f		g		h		i		j		k		l		合計
	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	
表面採集																									
第1層																							1		1
2													1									1			2
3	5						1	3	3	3	1		1	1	1	4	5	10	1	3	1	5	3		50
4																									
5																									
6																						1			1
7																									
8																									
9																									
10																									
11																									
12																									
13																									
14																									
15																									
16																									
17																									
18																									
合計	5						1	3	3	3	1	1	1	1	1	4	5	10	1	3	1	6	2	3	54

深鉢形土器における口径の最大は23.0センチ、最小は10.0センチである。これらをさらに詳しくみると、小型（10～12.9センチ）3点、中型（13～17.9センチ）7点、大型（18センチ以上）6点であるが、20センチを越すものは3点にすぎない。

器高についても、先述のように完形のものがないため確実性に欠けるが、復元した2点はそれぞれ20.8・23.5センチで、サブ・タイプAと類似の器高を示している。

文 様

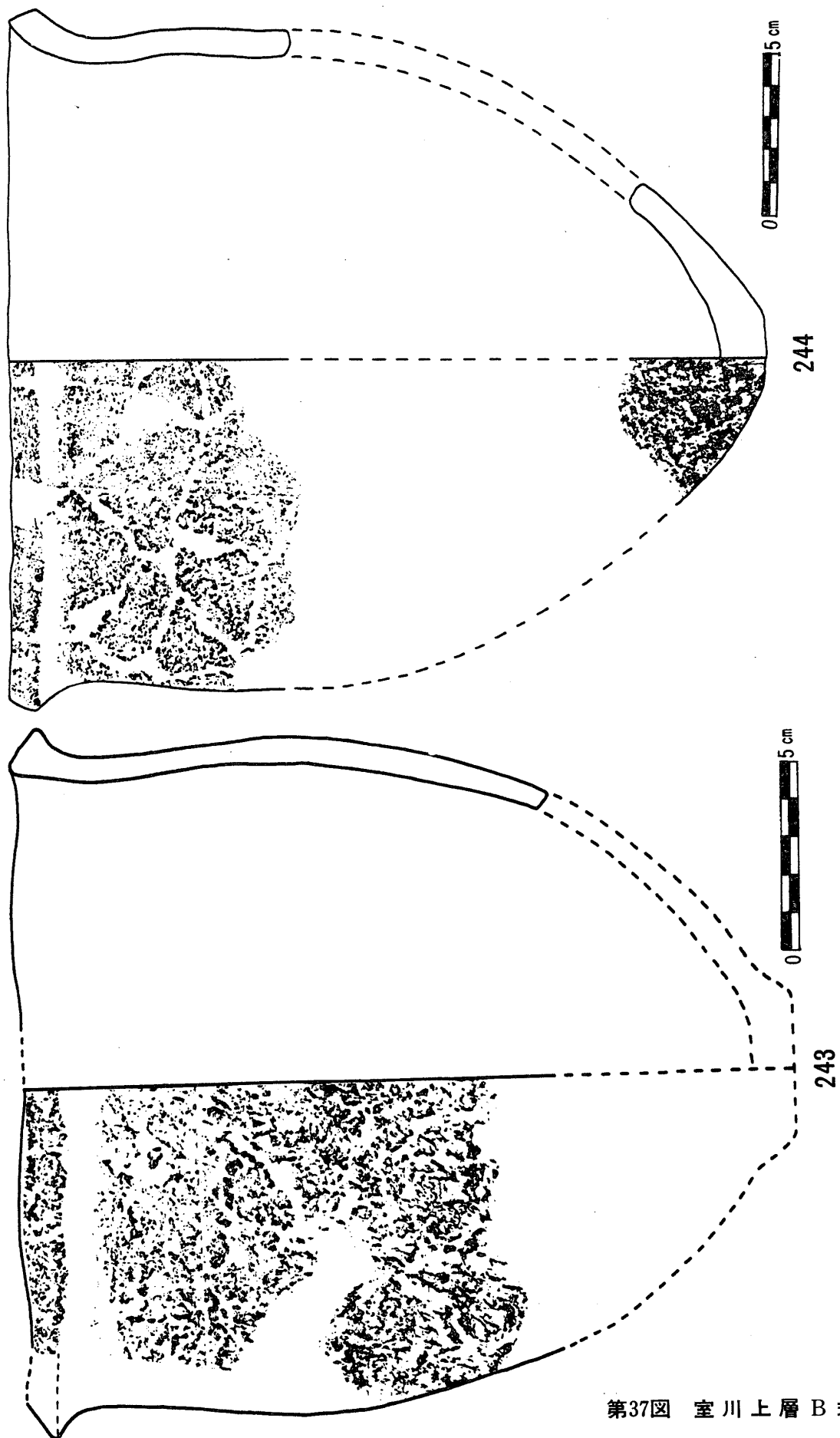
文様の施されたものは24点検出された。施文部位について観察したところ、口唇部、肥

厚部外面、頸部の3箇所が施文の対象となっており、下記の6種の組み合わせが認められた。

- ① 口唇部にのみ施文するもの
- ② 口唇部・肥厚部外面（上端は口唇に及ぶ）・頸部に施文するもの
- ③ 口唇部と頸部に施文するもの
- ④ 肥厚部外面にのみ施文するもの
- ⑤ 肥厚部外面と頸部に施文するもの
- ⑥ 頸部にのみ施文するもの
- ⑦ 小破片のため、施文範囲の把握できないもの

第70表 室川上層B式土器における施文部位とその出土状況

施文部位 層序	口唇部	口唇部+肥厚部+頸部	口唇部+頸部	肥厚部外面	肥厚部+頸部	頸部	不明	合計
表面採集								
第1層						1		1
2			1					1
3	6	1	3	1	2	3	4	20
4								
5							1	1
6							1	1
7								
8								
9								
10								
11								
12								
13								
14								
15								
16								
17								
18								
計	6	1	4	1	2	4	6	24



第37図 室川上層 B 式土器

上記各種の出土状況は第70表の通りで、㊦、㊧が6点ずつ、㊨、㊩が4点、㊪は2点、他は1点ずつの出土であった。

次に施文具についてみると、㊫半截竹管と、㊬単篋工具の2種が認められる。調査の結果を第71表に記したが、㊫が4点、㊬が20点で、単篋工具を多く使用している。

次に施文具を中心に、文様の種類や特徴について記述する。

半截竹管使用のものは4点（第38図252、第39図254、256、263・第36図版8、第37図版2、4、12）検出された。文様は次の2種に分けられる。

- a) 横捺刻文のみを施文するもの
- b) 押し引き文を施すもの

a) は3点（第37図252、第38図254、

256）検出された。

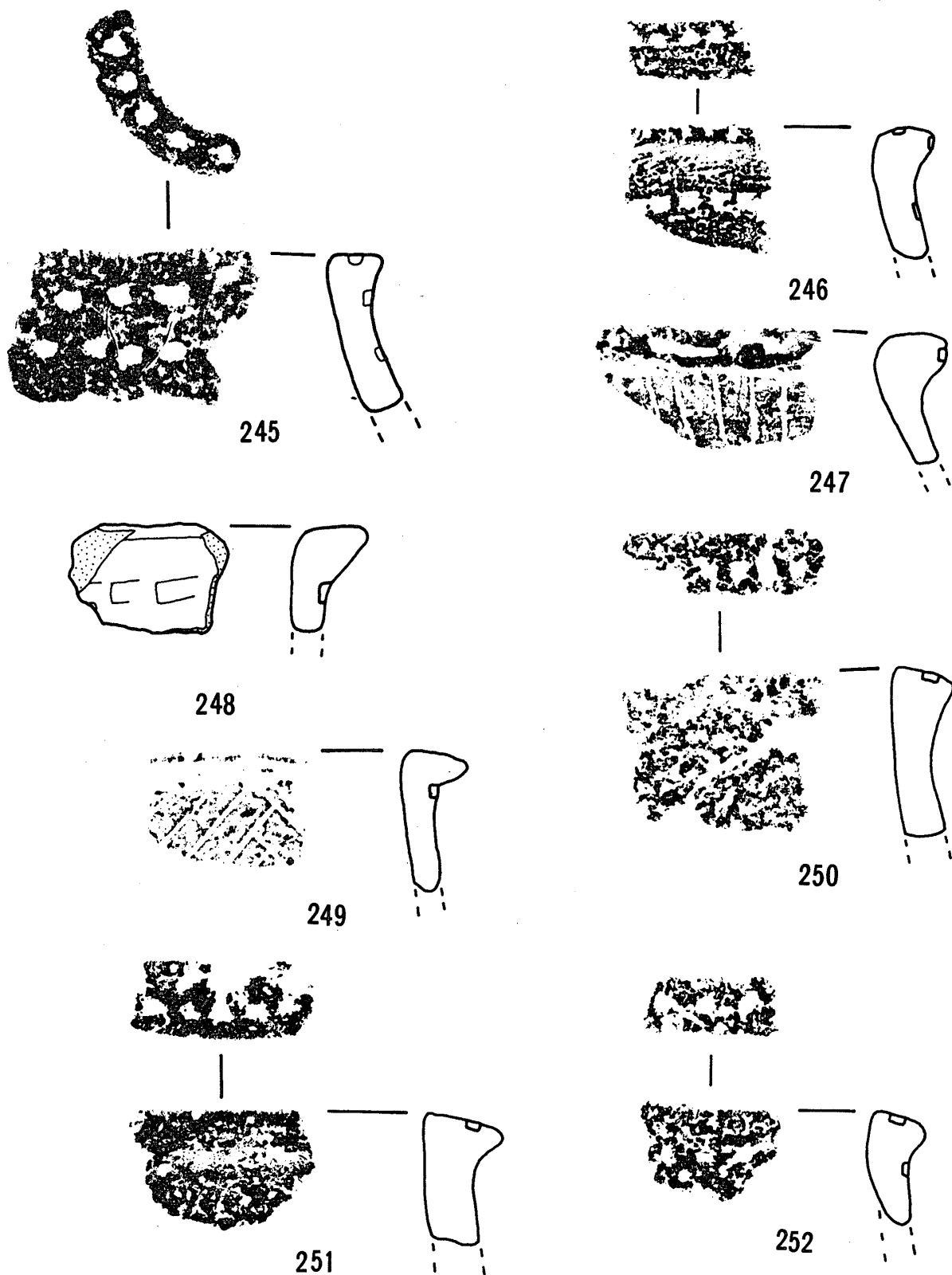
第38図252（第36図版8）は口唇部の断面形態がeに属するもので、口唇と頸部に横捺刻文を施す。施文は刺突的で深い。施文は左から右の方向である。破片が小さいため、頸部における文様の数は不明。第3層10～20センチ・レベルの出土。

第39図254（第37図版2）は口縁部の断面形態がfに属するもので、肥厚部外面に横捺刻文が1条施されている。刻文は刺突的で深く、左から右の方向へ描いている。第3層50～60センチ・レベルの出土。

同図256（第37図版4）は口縁部を強く屈折させたもので、断面形態はgに属する。口唇部に1条、頸部では2条の横捺刻文が認められるが、頸部の方は摩耗が著しいため文様は不鮮明である。施文はいずれも左から右の方向である。第2層の出土。

第71表 室川上層B式土器に使用された施文具および文様別出土状況

施文具 文様 層序	半 截 竹 管		単 篋 工 具					不明	合計
	横捺刻文	押し引き文	押し引き文	押し引き文 + 横捺刻文	押し引き文 + 沈 線 文	横捺刻文	凹線文 + 沈線文		
表面採集									
第 1 層						1			1
2	1								1
3	2	1	2	1	2	7	1	4	20
4									
5								1	1
6								1	1
7									
8									
9									
10									
11									
12									
13									
14									
15									
16									
17									
18									
計	3	1	2	1	2	8	1	6	24



第38図 室川上層 B 式土器

b) の押し引き文を施すものは、第39図263 (第37図版12) の1点である。口縁が軽く外反するもので、同部の断面形式は i に属する。口唇部に1条、頸部に2条の押し引き文を施すが、下段のものは施文が浅く文様は甚だ不鮮明。施文は、いずれも左から右の方向である。第3層30~40センチ・レベルの出土。

次に単篋工具使用例についてみると、次の5種類の組み合わせが認められた。

- a) 押し引き文を施文するもの
- b) 押し引き文と横捺刻文を施文するもの
- c) 押し引き文と沈線文を施文するもの
- d) 横捺刻文を施文するもの
- e) 凹線文と沈線文を施文するもの
- f) 不明

a) は第38図248、251 (第36図版3、7) の2点得られた。

248 は口縁の断面形態が a グループの変形ととらえられるもので、口唇部は広く、若干内傾している。頸部に1条の押し引き文が浅く左から右の方向へ施されている。第3層40~50センチ・レベルの出土。

同図251 (同図版7) は口唇部がゆるやかに外傾するもので、その断面形式は e に属するが、a の変形とみることもできる。口唇の外縁よりに押し引き文が1条施されている。施文は浅く、左から右の方向で描かれている。第3層30~40センチ・レベルよりの出土。

b) は第38図246 (第36図版2) の1点である。口唇部の断面形態は a に属するものだが、全体的に小型化している。口唇部の内縁沿いに1条の押し引き文、また、肥厚部外面と頸部に横捺刻文が1条ずつ施文されている。第3層20~30センチ・レベルの出土。

c) は第38図249 (第36図版5) と第39図253 (第37図版1) の2点である。

第38図249 (第36図版5) は口唇部が平坦で広くつくられ、口唇外縁部は突出する形態で、断面形式は a の変形とみられるものである。頸上部に幅2.5ミリの工具による押し引き文を1条施し、その下方に斜行沈線文を施す。斜行沈線文は方向の異なるものがみられ、組帯文か鋸歯文のような形になるかと思われる。押し引き文は左から右の方向である。施文はいずれも浅いが文様は鮮明。ただし、文様帯下端の状況は不明。焼成は比較的良い。第3層20~30センチ・レベルよりの出土。

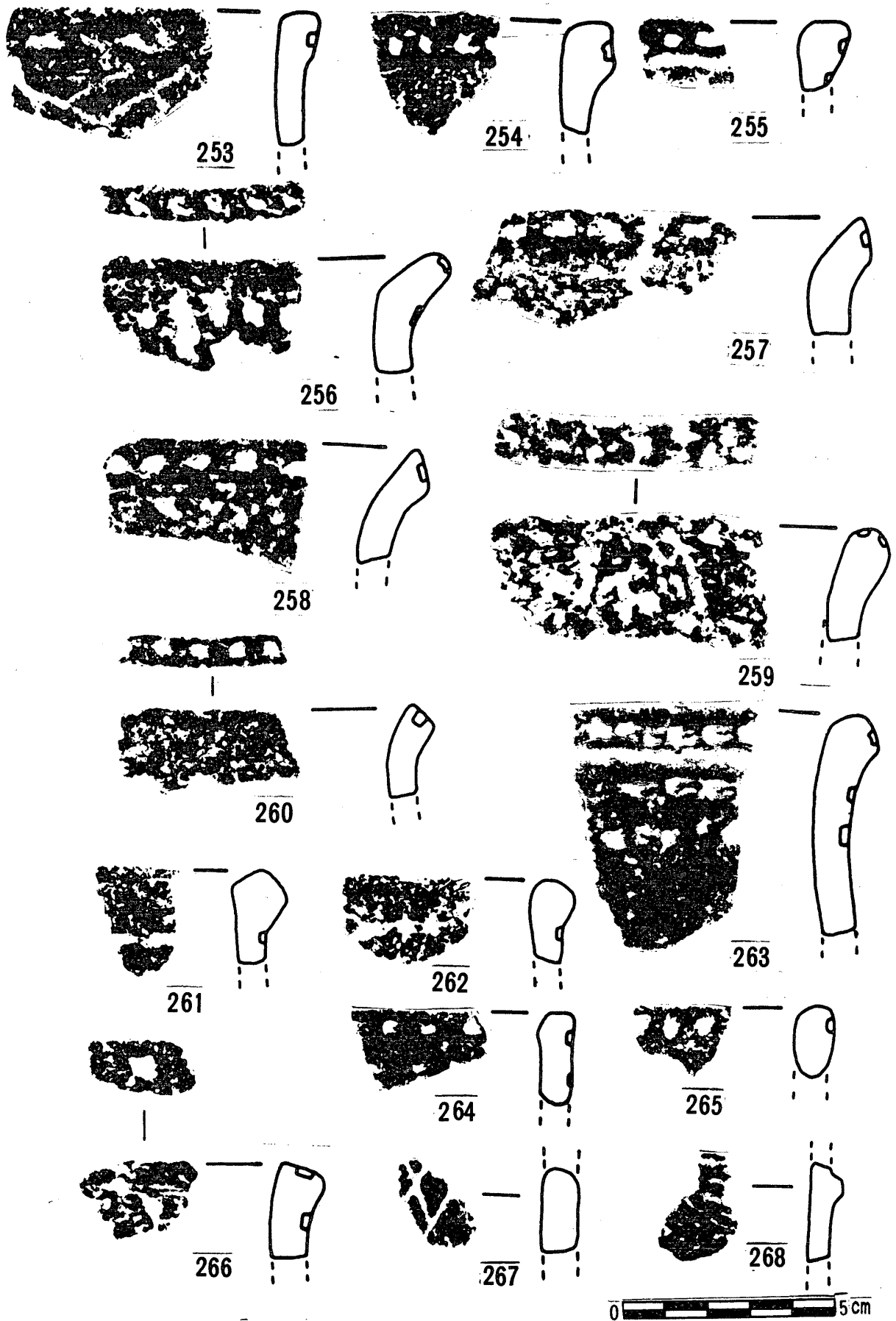
第39図253 (第37図版1) は口縁部がわずかに肥厚するもので、その断面形式は f タイプである。肥厚部外面に押し引き文を1条施し、頸部では左傾の沈線文が2条、右傾のものが1条見受けられる。押し引き文は深く刻まれ、施文の方向は左から右である。頸部の文様は浅く描かれ、不鮮明であるが、鋸歯文か組帯文に属するものであろう。第3層20~30センチ・レベルの出土。

d) は最も多く8点検出された (第38図245、250、第39図257~260、262、266)。

第38図245 (第36図版1) は今回検出された中で唯一の壺形土器である。文様は口唇部に1条、頸部では2条の横捺刻文が認められ、先端の幅約3ミリの工具を使用している。施文は深く文様は明瞭だが、頸部の施文は雑で文様は整然としてない。断面形態は小型の a 型で、第3層の10~20センチ・レベルよりの出土。

同図250 (第36図版6) は、ゆるやかな外反を示す土器で口唇部は外傾しており、その断面形態は e 型である。口唇部に横捺刻文が1条施されている。器面摩耗のため文様は不鮮明。第3層30~40センチ・レベルの出土。

第39図257、258 (第37図版5、6) は口縁部の断面形式が共に i に属するもので、口唇部に1条の横捺刻文を施す。いずれも施文



第39図 室川上層 B 式土器

の方向は右から左で、比較的力強く描かれている。257 は第3層0～10、258 は第3層30～40センチ・レベルよりの出土。

同図259、260（第37図版8、9）は口縁部が大きく外反するもので、両者ともその断面形式はiに属する。

259（第37図版8）は、口唇部に2条（1条は同外縁沿い）横捺刻文を施すが、施文が浅い上、器面がかなり摩耗していて、文様は不鮮明。第3層40～50センチ・レベルよりの出土。

同図260（第37図版9）は口唇部に1条横捺刻文を施すもので、施文はかなり深い。施文は左から右の方向とみられる。第3層0～10センチ・レベルよりの出土。

同図262（同図版7）は、頸部に横捺刻文が1条認められるもので断面形態はjに属する。施文は左から右の方向である。裏面は破損が著しい。第3層40～50センチ・レベルよりの出土。

同図264（同図版11）は直口状の器形になるかとみられるもので、口縁の断面形態は1である。頸部に2条の横捺刻文が左から右の方向で施されている。施文は浅く、文様は不鮮明。第1層よりの出土。

e）は第38図247（第36図版4）に示す1点である。この土器は口唇部の断面形式がaに属するもので、肥厚部外面に単篋工具で斜めに短凹線文を描いている。この凹線は1.5センチ前後で2本認められる。頸部には縦型の斜沈線を等間隔で描いている。凹線はやや力強く描かれているが、斜沈線は浅い。しかし、文様はいずれも鮮明である。第3層10～20センチ・レベルよりの出土。

f）は破片が小さく、文様の全体像のつかめないものである。6点の出土があった（第39図255、261、265、266、267、268）。

第39図255（第37図版3）は、口縁部の断面形式がfに属するもので、肥厚部外面と頸部に横捺刻文がそれぞれ1条認められ、前者の文様はかなり深く、刺突文的である。いずれも左から右へ施文する。頸部以下における文様の有無は不明。第3層0～10センチ・レベルの出土。

同図261（同図版10）は、口縁部がh型の断面形式を有するもので、頸部には1条の横捺刻文が認められる。その下方にも刻文の痕跡らしいものが見受けられる。以下、不詳。文様は左から右の方向に描いている。第3層10～20センチ・レベルの出土。

同図266（同図版14）は口縁部の断面形式がkに属するもので、口唇部と頸部に横捺刻文の一部が残っている。施文は深い。頸部における文様の展開状況は不明。第3層50～60センチ・レベルの出土。

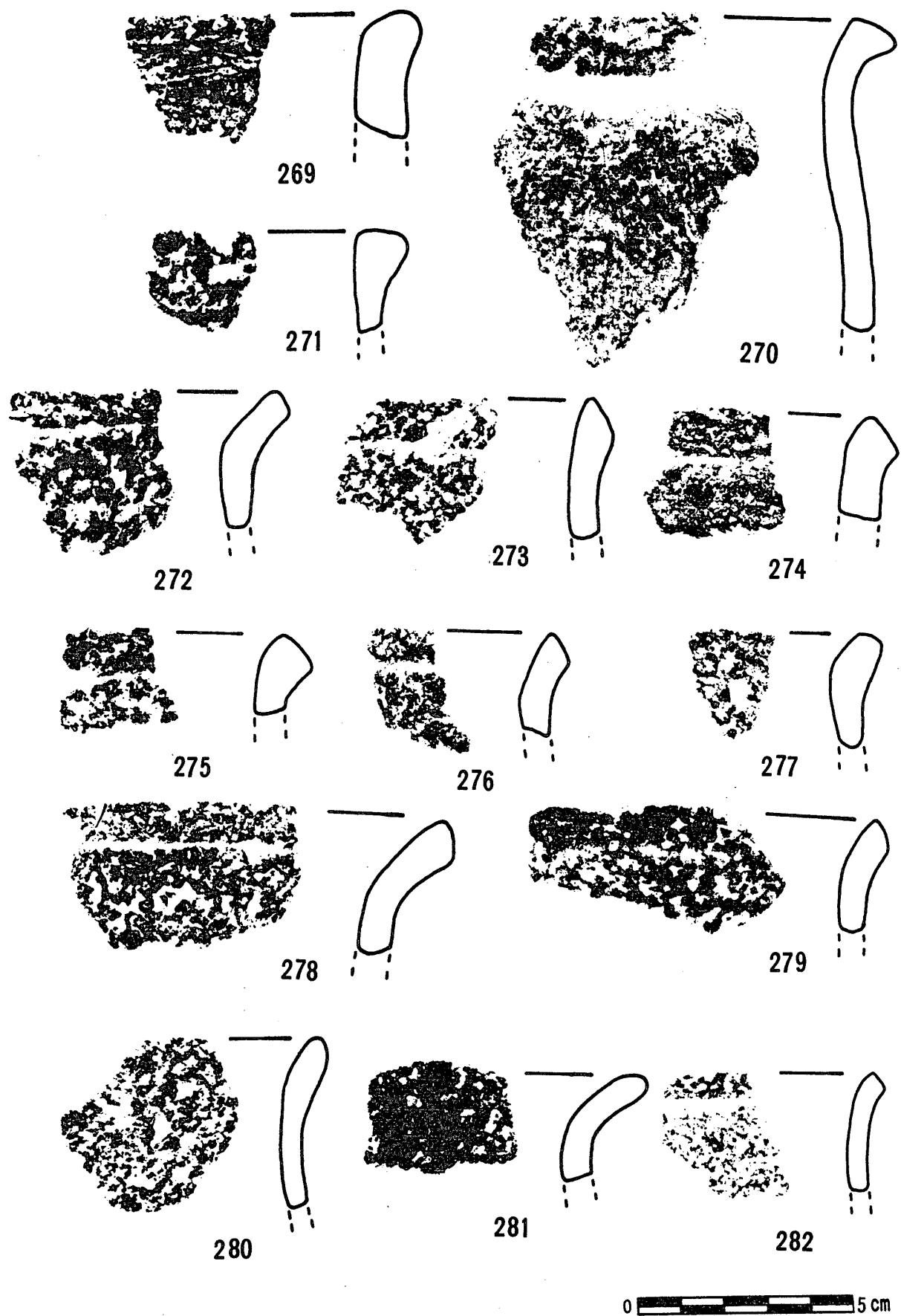
同図265（同図版13）は1型の断面形態をもつもので、頸上部には1条の横捺刻文が認められる。文様は左から右の方向へ、力強く描いている。頸部における文様の有無は不明。第6層0～10センチ・レベルの出土。

同図267（同図版15）は胴部の破片である。斜格子の一部が見受けられる。施文は浅い。第5層0～10センチ・レベルの出土。

同図268（同図版16）は胴部の破片で、1条の凸帯の下方に羽状文を配している。凸帯は断面方形を呈し、小型である。羽状文は浅く施文され、不鮮明。第3層30～40センチ・レベルの出土。

次に無文の口縁破片について説明する。32点検出された。第37図243、244（第35図版1、2）の2点は推定復元を試みたものである。

同図243（第35図版1）は頸部が若干しまり、胴部でわずかに脹み、そして、ゆるやか



第40図 室川上層B式土器

に底部へ至る形の土器で、口縁部の断面形態はe型に属する。底部は小型の平底が想定される。口径は推算 17.0 センチ。器高は約 20.8 センチ。第3層0～10センチ・レベルの出土。

同図244（同図版2）は口縁の外反が強いもので、同部の断面形態はiに属する。径の最大が口縁（20.8センチ）にあるタイプで、胴部がわずかにふくらみ、ゆるやかに底部へ移行する。第3層0～10センチ・レベルの出土。なお、この土器の底部は、第3層30～40センチ出土のうち特徴の一致するものを選び、復元した。この資料は、尖底を故意に平たくしたような平面をもつ。底径は約2.5センチ。器高は推算23.5センチ。

さて次に、無文の口縁破片についてみていくことにする。断面形態は概ね6種見受けられた。

第40図269（第38図版1）は口唇がゆるやかな内傾を示すもので、断面形式はdの変形と考えられるものである。第3層10～20センチ・レベルの出土。

同図270（同図版2）は、口縁の外反がやや強いもので、幅広い口唇部は外傾し、断面形式はeに属する。第3層20～30センチ・レベルの出土。

第41図283（第39図版1）も断面形式がeに属するもので、第3層0～10センチ・レベルの出土。

第40図271（第38図版3）は口縁を肥厚させるが、雑で形態ははっきりしない。しかし、fの変形と考えることもできる。第3層20～30センチ・レベルの出土。

同図272（同図版4）は口縁が大きく屈曲するタイプで、断面形式はgに属する。第3層10～20センチ・レベルの出土。同図273（同図版5）は第3層40～50センチ・レベルよりの出土で断面形式はiに属する。

同図274～277（同図版6～9）の4点は口縁が軽い屈折を示すもので、断面形式はh

に属する。274は第3層70～80、275・276は第3層40～50、277は第3層30～40センチ・レベルよりの出土。

第40図278～282（第38図版10～14）および第41図284～286（第39図版2～5）の8点は、いずれも口縁が大きく弧を描くような外反を示すもので、断面形式はiに属する。279は第3層0～10、282は同層の10～20、285は同層の20～30、280・281・286は同層の30～40、284は同層の40～50、288は同層の60～70センチ・レベルの出土。

第41図287～289（第39図版7、4、6）は口縁が軽く外反するもので、断面形式はjに属する。287は第3層30～40、288は第3層20～30、289は第3層40～50センチ・レベルよりの出土。

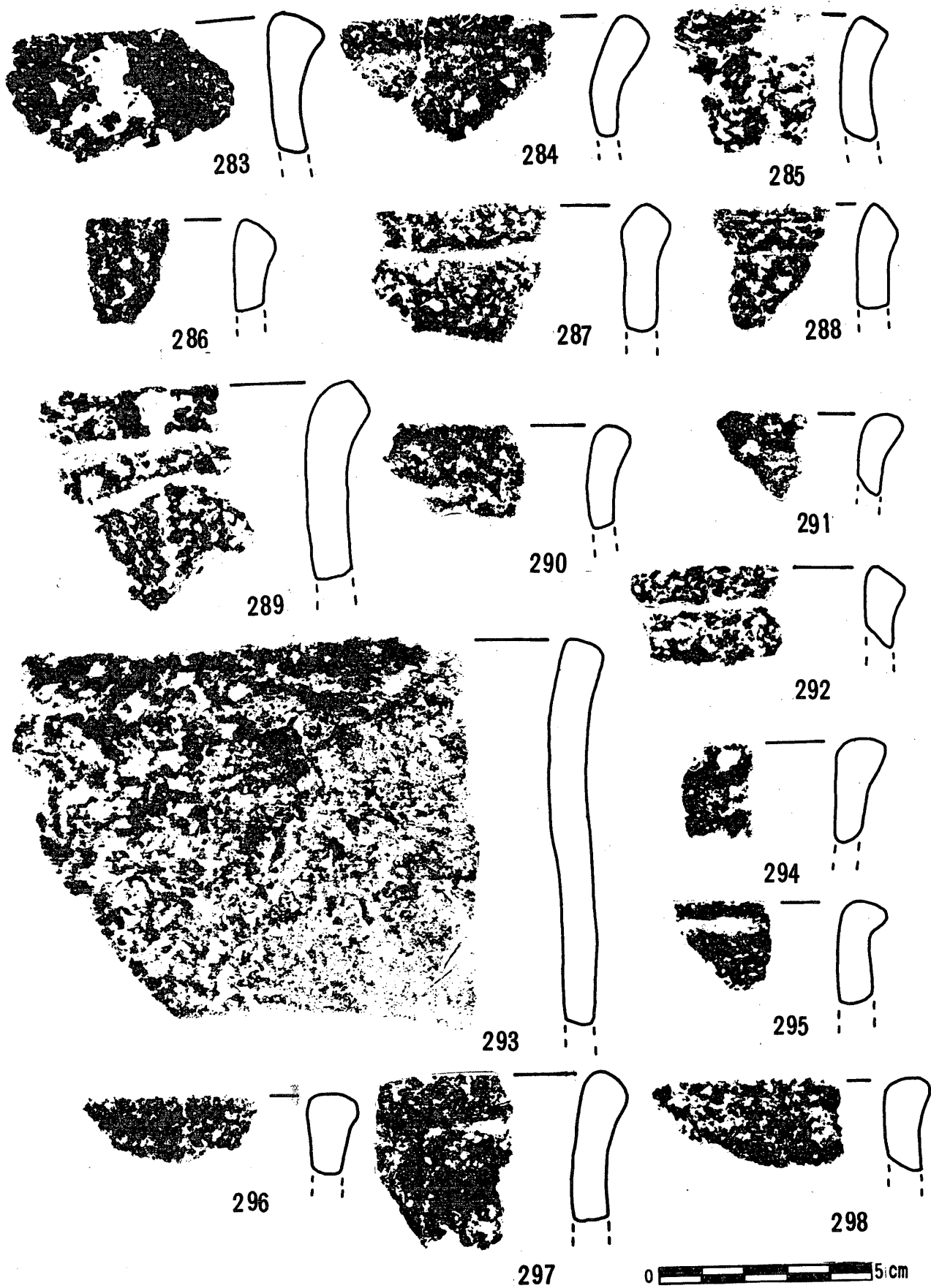
第41図290～292、294～296（第39図版8、9、11、12～14）の6点は、口唇をわずかに誇張するもので、いずれも断面形式はkに属する。294は第2層、292は第3層10～20、290は同層20～30、295は同層30～40、291は同層40～50、296は同層70～80センチ・レベルよりの出土。

第41図293、297、298（第39図版10、15、16）の3点は、口縁がゆるやかに外反するもので、断面形式はlに相当する。293は第3層60～70、297は第3層50～60、298は第3層10～20センチ・レベルよりの出土。

器面調整

器面の調整方法は、擦痕と指ナデの2通り認められる。

擦痕の残存状況を第72表に記した。このグループは焼成が悪く、器面の摩耗したものが多く、その中で擦痕を有するものを9点検出することができたが、ナデ調整を行ったものがむしろ多かった。



第41図 室川上層B式土器

第72表 室川上層B式土器における擦痕（口縁部）の残存状況

擦痕残存部 層序	両面あり	外面のみ	内面のみ	両面なし	不明	合計
表面採集						
第1層					1	1
2					2	2
3	2	6		1	42	51
4						
5					1	1
6					1	1
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
計	2	6		1	47	56

混入物

胎土の混入物およびそれらの組み合わせは下記の通りである。

特に貝片の目立つものは、石灰質砂粒から分離して「貝片」と示した。

- ㊶ 石灰質砂粒＞貝片＞石英＞磁鉄鉱
- ㊷ 石灰質砂粒＞石英＞磁鉄鉱
- ㊸ 石灰質砂粒＞石英
- ㊹ 石灰質砂粒のみ

第73表 室川上層B式の混入物とその出土状況

層序	混入物 石灰質砂粒＞ 貝片＞石英＞ 磁鉄鉱	石灰質砂粒＞ 石英＞磁鉄鉱	石灰質砂粒＞ 石英	石灰質砂粒 のみ	合計
表面採集					
第1層			1		1
2		1	1		2
3	2	6	41	2	51
4					
5				1	1
6		1			1
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
計	2	8	43	3	56

前記各項の層位的出土状況を調べたのが第73表である。その中では、cが43点と圧倒的に多く、他は数点ずつの出土であったが、石灰質砂粒を主体としていることが、本型式土器の特徴といえる。

器色・焼成

器色を観察すると、黄褐色および橙色を呈するのが一般的で、特徴のある器色を有している。

焼成は一部に良好なものもみられるが、一般には不良で、吸水性が強く脆弱なものが多い。

g 宇佐浜式土器

本トレンチでは42点の宇佐浜式土器が検出された。この土器も、前項のカウチバンタ式土器と同様、それぞれの特徴により大山期から宇佐浜期に位置づけることができる。本トレンチでは、大山期1点、室川期5点、室川上層期6点、宇佐浜期30点の出土があり、第42図（第40図版）から第45図（第43図版）

に図示した。完形品あるいは推定復元が可能な資料は得られなかった。

各期別の出土量を第74表に示した。以下、古い方の資料から記述する。

第74表 宇佐浜式土器の時期別出土状況

層序	時期	大山期		室川期		室川上層期	宇佐浜期		計
		有文	無文	有文	無文	無文	有文	無文	
表面採集									
第1層									
2							1	1	
3		1		3	5	5	21	35	
4									
5			1		1		3	5	
6			1					1	
7									
8									
9									
10									
11									
12									
13									
14									
15									
16									
17									
18									
計		1	2	3	6	5	25	42	

大山期の資料

本トレンチのもので大山期に属するとみられるものが1点ある。胎土・混入物・器色・焼成等が大山式土器と一致し、口縁が宇佐浜式のように三角形に肥厚するものである。

第42図299（第40図版1）がこれで、口縁の形状から深鉢形とみられるものである。口径推算15センチ。口縁部はやや規格的な三角形の肥厚を示し、肥厚部の外面に単篋による押捺刻文を1列深く施文している。肥厚部直下には施文していないようである。器面は両面ともナデ調整を行っているが、表面はより入念である。また、裏面には整形時の篋痕も見受けられる。器色は赤褐色。胎土は細かく、石英の微砂粒を多量混入する。焼成は普通。第3層の出土。

第75表 宇佐浜式土器の口径と大きさ

図	口径 (センチ)	時期	大きさ	図	口径 (センチ)	時期	大きさ
第42図 299	15	大山期	中	第44図 324	21.4	宇佐浜期	大
“ 300	16	室川A期	中	“ 325	16	“	中
“ 303	14	“ A期	中	“ 327	26	“	大
“ 305	18	“ B期	大	“ 332	15.8	“	中
“ 306	9.8	室川上層A期	小	第45図 333	18.2	“	大
第43図 316	12.6	宇佐浜期	小	“ 334	20	“	大
“ 322	13	“	小	“ 335	19.4	“	大

この口縁破片は本トレンチ出土の宇佐浜式土器のなかでは、最も古式の様相を帯びているものであるが、出土層位は他の宇佐浜式とほぼ同じである。つまり、第3層の出土で、そこでは伊波式、萩堂式、大山式土器も出土していることから、これらの土器と同様にカヤウチバンタ期の末か室川期のころに攪乱を受けた際、下方から上方に持ち上げられた可能性が考えられる。

室川期の宇佐浜式土器

本トレンチでは6点出土した。室川期の土器は胎土・混入物・器色・焼成等からA・Bの2種に大別されているので（詳細は本誌第3号を参考）、本項でもA・Bの二つにわけて記述することにする。

室川A期の資料

室川A期の土器は室川期の中で、古い時期を代表する特徴を有するもので、暗褐色の器色を有し、微砂粒を混入する。本トレンチでは有文と無文の口縁がそれぞれ1点検出された。

第76表 室川期の宇佐浜式土器の
口縁形態別出土表

層位 時期	a		b		計
	A	B	A	B	
表面採集					
第1層					
2					
3	1			2	3
4					
5				1	1
6	1				1
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
計	2			3	5

注。口縁形態は後述の宇佐浜期を参考
・Aは室川A期、Bは室川B期

器形

器形は2点（第42図300・303）（第40図版2・5）とも深鉢形と想定され、1点は平口縁、他の1点は山形口縁の破片である。2点とも小破片で、器形を明示し得ないが、同図300（第40図版2）はやや外反の強い器形で、同図303（第40図版5）は口径と胴径がほぼ等しいものであろう。口縁の形状についてみると、同図303は直口状である。肥厚の形態は2点とも三角形であるが、同図300はやや円味を帯び、同図303は幾らか規格的である。

大きさ

口径については幸い2点とも推算が可能である。

第42図300（第40図版2）は約16センチで、同図303（第40図版5）は約14センチである。したがって、いずれも中型の土器とみることができる。器高は不明である。

文様

文様を施文するものは同図300（第40図版2）の1点だけで、肥厚部外面に単篋を用いて刺突文を2列横位に配する。横捺刻文の1種であるが、施文は深く、文様は鮮明である。

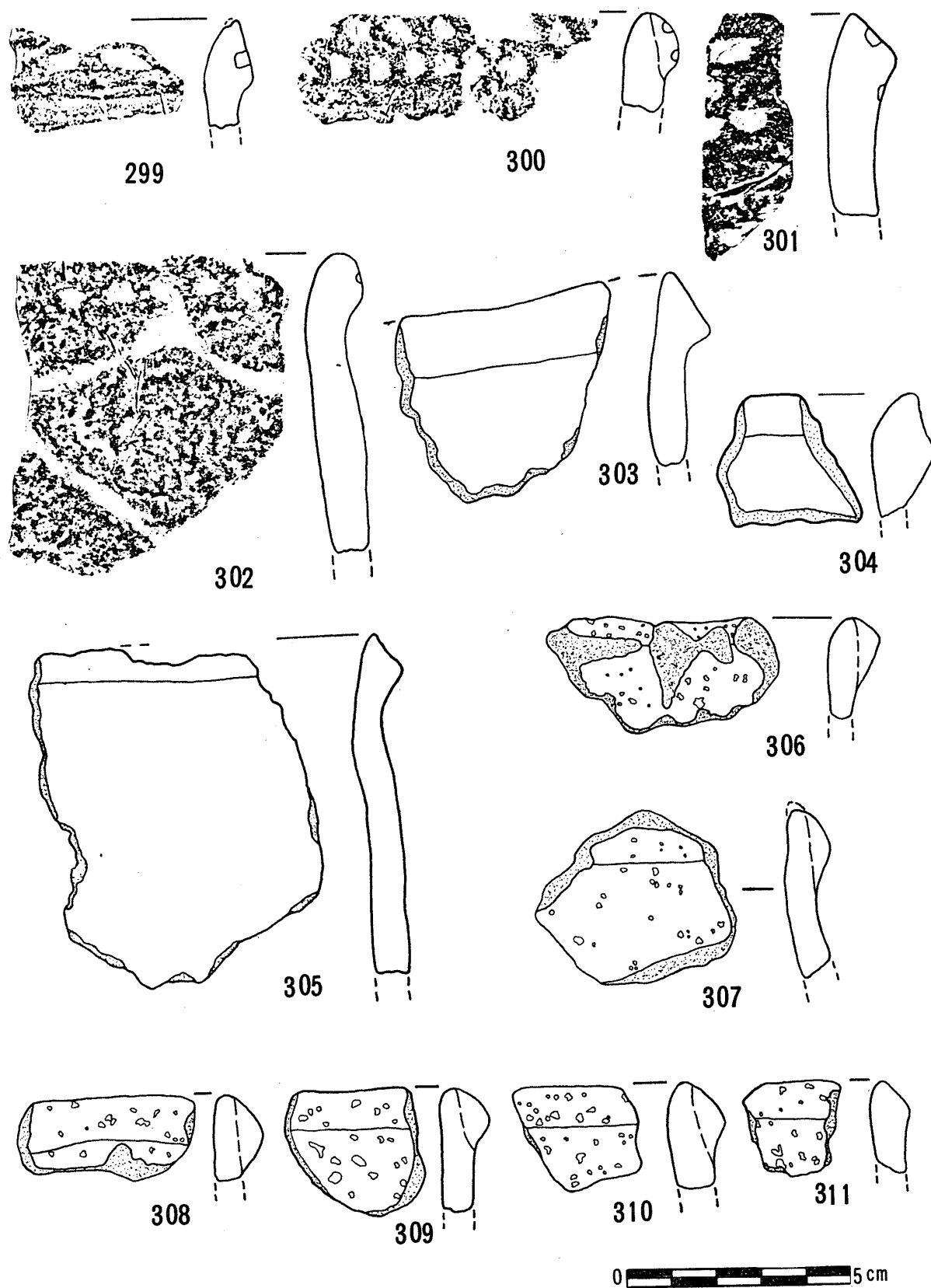
器面調整

2点ともナデ調整を行っているが、いずれも表面は入念で、裏面は雑である。同図303（第40図版2）の裏面では横位・斜位の擦痕も見受けられる。

器色・混入物・焼成

器色は2点とも大山式的な赤褐色で部分的に暗褐色を呈する箇所もある。

混入物は両者とも石灰質砂粒を主体とし、



第42図 室川B式土器(302)

および各期の宇佐浜式土器

(299は大山期、300・303は室川A期、301・304・305は室川B期)
306～308は室川上層A期、309～311は室川上層B期。

それにわずかながら石英を含む。混入量は第42図300（第40図版2）が多く肉眼観察も容易である。

焼成は2点とも普通だが、同図303（第40図版5）は幾らか焼きが堅い。

出土層位

同図300（第40図版2）は第6層、同図303（第40図版5）は第3層の出土である。この2点に関する限り有文が先行しているが、これが一般的状況を示すかどうかについては、当分保留しておく。

第77表 室川期の宇佐浜式土器の施文部位

層序	施文部位 時期	肥厚部外面		肥厚部外面+ 肥厚部直下		計
		A	B	A	B	
表面採集						
第1層						
2						
3						
4						
5					1	1
6		1				1
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
計		1			1	2

注、Aは室川A期、Bは室川B期

第78表 室川期の宇佐浜式土器の施文具と文様

層序	施文具 文様と 時期	単 籠 工 具				計
		押捺刻文		刺 突 文		
		A	B	A	B	
表面採集						
第 1 層						
2						
3						
4						
5			1		1	
6				1	1	
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
計			1	1	2	

注、Aは室川A期、Bは室川A期

室川B期の資料

室川B期のものは同A期に後続すると思われるもので、本トレンチでは3点の出土があった。

器形

器形を推察できる資料は2点あり、すべて深鉢形である。口縁は平口縁に属すると思われる、確実な山形口縁はみられなかった。器形の推定できる2点(第42図301・305)についてみると、

いずれも胴から上は垂直の立ち上りをみせ、頸部でわずかにくびれ、そして微弱な外反を示す器形に属している。

口縁部の肥厚の形態は第42図 301・304・305（第40図版 3・6・7）の3点とも三角形で、第44図の模式図によれば、いずれもbの形態である。

大きさ

口径の推算可能なものは1点である。第42図 305（第40図版 7）に図示したもので、口径は推算18センチ。口径の大きさからすれば中型の資料である。器高の判明あるいは推算可能なものは得られなかった。

文様

文様を施文するものは1点である。施文具は単篋工具を用い、施文の方向は左から右の方向である。

第42図 301（第40図版 3）は押捺刻文を2列深く刺突するように施文するもので、口唇下の文様は下段の文様よりもやや深い。文様は鮮明で力強い。施文具の幅は約4ミリ。

施文部位は肥厚部外面と同直下のようで、これまでのこの種資料からすると頸部以下は無文になると思う。

胎土および混入物

胎土は3点ともやや粗い。いずれも吸水性の強い土器であるが、その中で同図 305は幾分堅緻である。他は泥胎である。

混入物は石灰質砂粒（含貝片）を主体とするが、わずかながら石英も認められる。石灰質砂粒は細かいものとやや粗い礫状のものがあり、同図 304は微砂粒、301は微砂粒と礫状のもの、305は礫状の粗粒を含む。混入量はいずれも多い。

第79表 室川期の宇佐浜式土器の混入物の種類とその出土状況

混入物 時 期 層序	石灰質砂粒 >石英		貝片>石灰 質砂粒>石英		計
	A	B	A	B	
表面採集					
第 1 層					
2					
3	1	1		1	3
4					
5				1	1
6	1				1
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
計	2	1		2	5

注、Aは室川A期、Bは室川B期

焼成・器色

焼成は第42図305がやや良く、301・304の2点は普通。器色は黄褐色と赤褐色の2種が認められ、出土量は後者（同図 301・304・305）が多い。

器面調整

器面の調整は両面ともナデを行っており、擦痕を施すものは見受けられなかった。

出土状況

室川B期の宇佐浜式は第3層で2点（第42図304・305）、第5層で1点（同図301）検出された。有文の1点は第5層の出土であり、室川B期の中では古い方に属するかもしれない。

室川上層期の宇佐浜式土器

本期に属する宇佐浜式土器は6点検出された。室川上層式は胎土・混入物・器色・焼成等からA・Bの2種に分けられ、AはBに先行するものと考えられている。本期の宇佐浜式土器もこれに対応する特徴をもち、A・Bに細分される。本トレンチでは両者とも、それぞれ3点の出土であった。いずれも口縁の小破片である。

第80表 室川上層期の宇佐浜式土器の口縁形態とその出土状況

層序	口縁形態と時期	a	b		計
			A	B	
表面採集					
第1層					
2					
3			2	3	5
4					
5			1		1
6					
7					
8					
9					
10					
11					
12					
13					
14					
15					
16					
17					
18					
計			3	3	6

注。口縁形態は後述の宇佐浜期を参考

・Aは室川上層A期、Bは室川上層B期

室川上層A期の資料

第42図306～308（第40図版8～10）の3点がこれに属する。同図306（同図版8）は深鉢形の平口縁とみられるもので、頸部が若干しまり、胴部がわずかに張るタイプであろう。口縁断面にみる肥厚の形態は三角形だが、全体的に円味を持つ。口径は推算13センチ。器面は両面ともナデ調整を行っており、器色は茶褐色、焼成は悪い。混入物は石灰質砂粒を主に少量の石英を含む。混入量は多いが、器面に露出していない。第3層の出土。

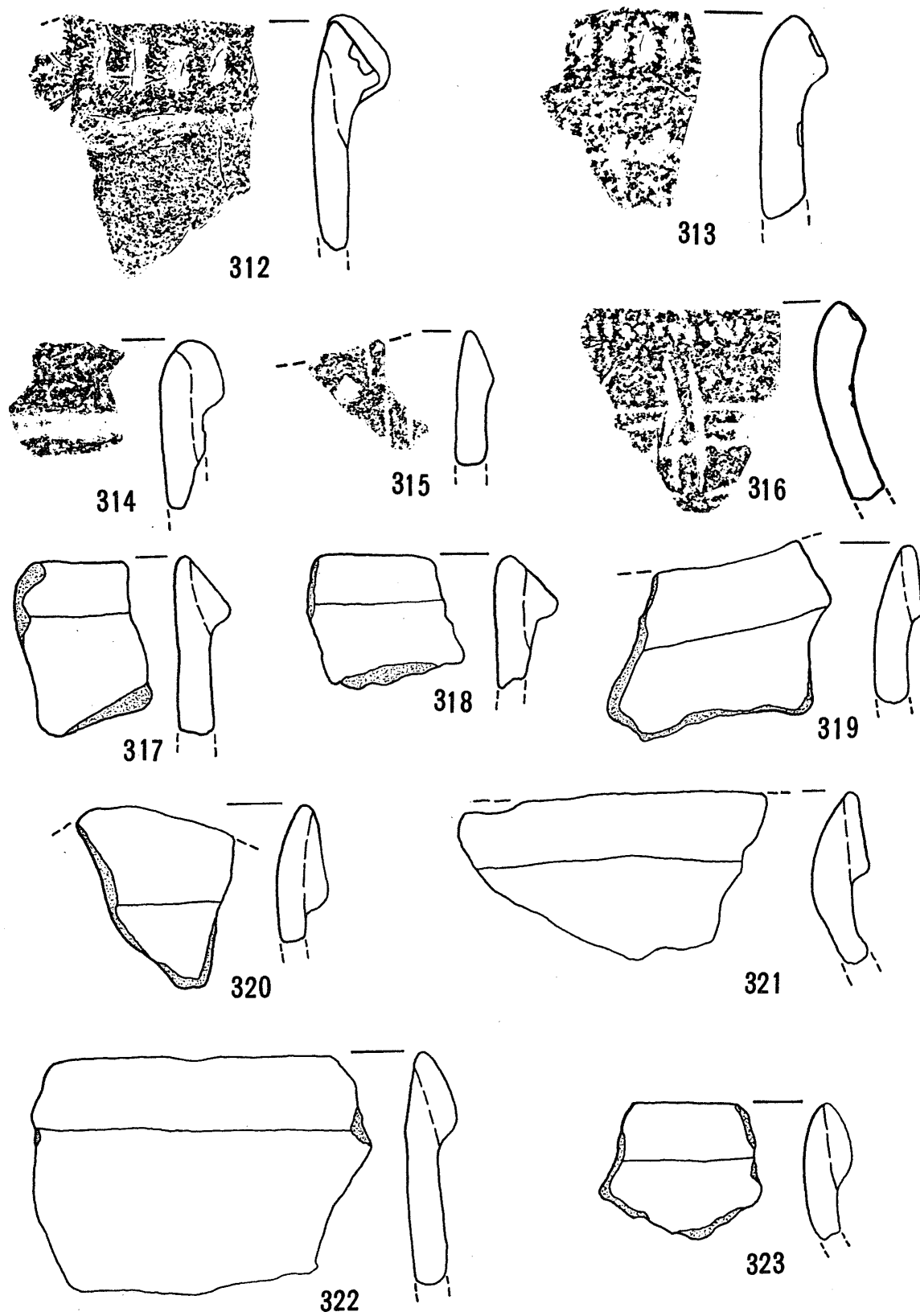
同図307（同図版9）の口縁断面形態は、やや規格的な三角形である。口縁の上端を欠くため、同部の詳しい特徴は不明だが、これも胴の若干張るタイプかと見られる。口径は推算9.8センチで小型の部類に入る。器面は両面ともナデ調整を行っており、器色は茶褐色。焼成は普通で、混入物は石英のみであるが、混入量は非常に少なく、器面での肉眼観察は困難である。第5層の出土。

同図308（同図版10）も深鉢形の平口縁と思われる資料である。口縁の断面形態は三角形に属する。口径は約16センチ。器面は両面ともナデ調整を行っており、器色は茶褐色。焼成は普通。混入物は石灰質砂粒＞石英で、混入量は少ない。第3層の出土。

室川上層B期の資料

これに属するものは第42図309～311（第40図版11～13）に示す3点で、すべて深鉢形の平口縁と思われる資料である。

同図309（同図版11）は頸部が僅かにしまり、胴が若干張る器形に属し、口縁の断面は三角形の肥厚で、やや円味を帯びている。器面調整は両面ともナデを行っており、器色はやや黄味を帯びた褐色を呈する。焼成は普通。混入物は石灰質砂粒＞貝片＞石英の状況を示



0 5cm

第43図 宇佐浜式土器

し、混入量は少ない。第3層の出土。

第81表 室川上層期の宇佐浜式土器の混入物の種類とその出土状況

混入物 時 期 層序	石英のみ		石英>石灰質砂粒		石灰質砂粒>石英		石灰質砂粒>貝片>石英		計
	A	B	A	B	A	B	A	B	
表面採集									
第1層									
2									
3				1	2	1		1	5
4									
5	1								1
6									
7									
8									
9									
10									
11									
12									
13									
14									
15									
16									
17									
18									
計	1			1	2	1		1	6

注、Aは室川A期、Bは室川B期

同図310（同図版12）の口縁の断面形態はやや規格的な三角形に属する。器面は両面ともナデ調整を行っており、器色は赤褐色。焼成は普通。混入物としては石灰質砂粒>石英を含むが、混入量は少ない。第3層の出土。

同図311（同図版13）の口縁断面は三角形を呈するが、三角形は扁平に近い。器面調整は両面とも摩耗が著しいため定かではないが、ナデ調整をうかがわせる部分もある。器色は黄褐色で、焼成は悪い。胎土には石英>石灰質砂粒を混じえる。混入量は少ない。第3層の出土。

本期の宇佐浜式は以上の6点だが、室川上層期の影響を受け、器面はポーラスになっており、石灰質の砂粒を混入の主体とするところに特徴がある。

宇佐浜期の資料

本トレンチでは宇佐浜期の資料は30点得られた。前述したように完形品は皆無であるがそのうち9点は口径の推算が可能であった。

器 形

完形品がないので、大型の口縁破片から推察を試みることにする。器種についていえば、確実な壺形は見当らず、口縁の若干すばまるものはあっても、すべて深鉢形に含めてよいと考えられるものである。山形口縁（3点）や瘤状突起（1点）を有するものも検出された。

口径と胴径の大きさについて、両者の関係を知り得る資料について調べてみたところ、①口径より胴径が大きく、胴が張るもの、②口径と胴径がほぼ等しいもの、の2種に大別でき、①が2点、②が11点、不明17点となり、②が多かった。有文5点についてみると確実なものは第43図316（第41図版5）の1点だけで、これは①に属する。

口縁の形状はa) 外反するもの、b) 直口状のもの、の2種がみられ、それぞれ半々の出土であった。有文のものは外反するものが

少々多い。

第82表 宇佐浜期の口縁形態別出土状況

口縁形態 層序	a	b	c	d	e	f	計
表面採集							
第 1 層							
2	1						1
3	6	10	3	5	1	1	26
4							
5	1	2					3
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							
16							
17							
18							
計	8	12	3	5	1	1	30

注、第43図の口縁形態を参照

口縁部

本トレンチ出土の宇佐浜期の口縁形態には6種ほどのヴァリエーションがみられた。口縁の肥厚形態を模式化したものが第44図下段である。次に各ヴァリエーションについて略述する。

a) 肥厚部底面が明瞭な段を作るもので、底面は水平方向をとり、そのため直角三角形に近い形状となるもの。肥厚部における最大厚と肥厚部外面の幅がほぼ等しいものが多い。

b) 肥厚部底面が水平方向をとらず、下方

へ傾斜をもって移行するもの。したがって、下方は底辺とはなりえず、スムーズに頸部に移行する。肥厚部外面の幅が肥厚部の最大厚より大きくなる場合が多い。

c) 肥厚部の形態がカマボコ状を呈するグループで、肥厚部の幅と厚さがほぼ等しいものが多い。

d) 前記cを縦に細くしたようなタイプで、肥厚の形態はルーズとなる。

e) 肥厚の形態が室川式に近似するもの。したがって典型的な宇佐浜式の肥厚形態からはずれる。

f) 全く肥厚を示さない宇佐浜式土器。

以上の6種であるが、出土量は82表のとおりである。

有文の肥厚形態はaあるいはbに近似する。第43図312～314（第41図版1～3）はそれほど明確ではないがaに近いもの、同図315・316（同図版4・5）の2点はbに含めてよいであろう。

無文の口縁は、第43図317～321（第41図版6～10）の5点がaに近いもの、同図322・323、第44図324～331（第41図11・12、第42図版1～8）の10点はb、第44図332（第42図版9）と第45図333・334（第43図版1・2）の3点はc、同図335・337・338・340・341（第43図版3・5・6・8・9）の5点はd、同図339（第43図版7）はe、同図336（第43図版4）はfに含めてよいであろう。

大きさ

完形あるいは推定復元の可能な資料がないため、大きさは明示できないが、口径については推算可能なものが9点あった。

口径の最大は約26センチで、最小は約12.6センチである。それをもう少し具体的にみて

みると、大型（18センチ以上）5点、中型（13～18センチ）2点、小型（10～13センチ）2点となり、大型が多かった（第75表）。

第83表 宇佐浜期の施文具と文様

施文具 文 様 層序	単 篋 工 具				又 状 工 具	計
	押 捺 刻 文	凹 線 状 文	沈 線 文 + 列 点 文	沈 線 文	押 捺 刻 文	
表面採集						
第 1 層						
2						
3	1	1	1	1	1	5
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
計	1	1	1	1	1	5

文 様

文様の施文されたものは5点出土した。施

文具は単篋工具（4点）と又状工具（1点）の2種が認められ、前者が多い。

施文部位についてみると、肥厚部外面にのみ施すものは1点、肥厚部外面と頸部に施文するもの3点、肥厚部直下に施文するもの1点の計5点である。口縁の内面に施文する例は見受けられなかった。

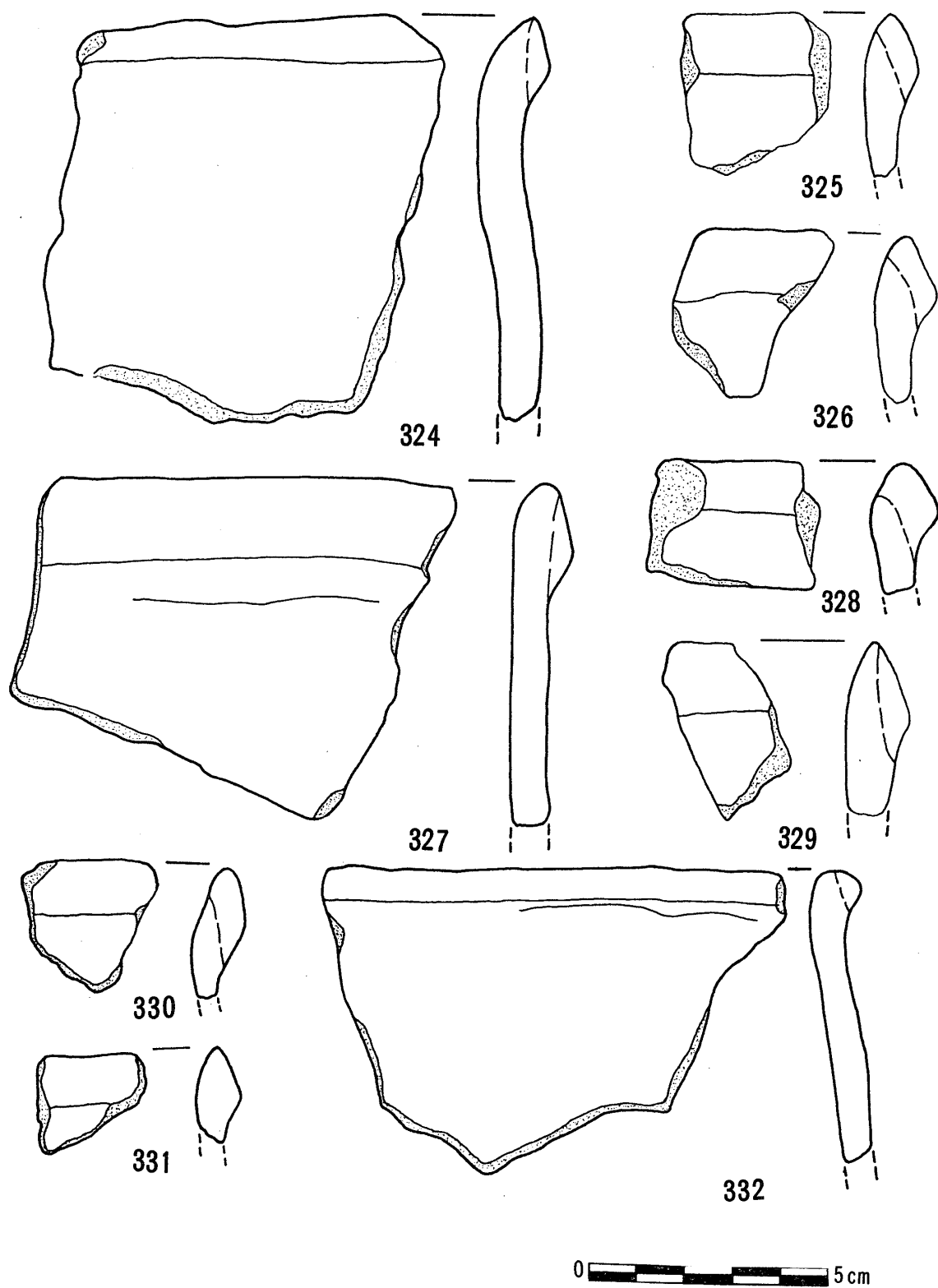
文様は押捺刻文（2点）、沈線文（1点）、凹線状文（1点）、列点文+沈線文（1点）の4種が検出された。

第43図312・313（第41図版1・2）は押捺刻文を施文するもので、同図312は瘤状突起を貼付する。肥厚部外面に、篋の中央に刻みを入れたような又状工具を用いて押捺刻文を描く。施文は深く、したがって拓影では又状工具のイメージを出しにくい。第3層の出土。同図313は縦長の刻文を押捺する資料で、肥厚部外面では力強く施文され、文様は明瞭だが、頸部の施文は浅く、不明瞭である。第3層の出土。

同図314（同図版3）は肥厚部直下に幅約3ミリの単篋を用いて凹線を施文したもので、施文は浅く、文様は不鮮明。そのことから、文様というよりも肥厚部下端の整形痕とみた方がいかもしれない。第3層の出土。

同図315（同図版4）は山形口縁の左半部の資料で、肥厚部外面と頸部に沈線文を施している。沈線は浅いが、文様ははっきりしている。拓影では肥厚部外面に文様状のくぼみがみられるが、その形態や位置からして文様というよりも偶然の傷とみた方がよさそうだ。第3層の出土。

同図316（同図版5）は沈線文と列点文を単篋で施文したものである。口縁外面に列点文を1条密に施す。施文は浅い。口縁直下から頸部に2条1組の沈線でクロス状の文様を



	a	b	c	d	e	f
口縁肥厚						

第44図 宇佐浜式土器と同型式の口縁断面形態 (a～f)

描いている。沈線は比較的深く刻まれ、シャープである。また、クロス縦位沈線の下端では左右にわかれる別の沈線がそれぞれ1条認められ、文様帯の下端を示すものと思われる。第3層の出土。

第84表 宇佐浜期の施文部位

施文部位 層序	肥厚部外 面のみ	肥厚部外 面+頸部	肥厚部 直下のみ	計
表面採集				
第1層				
2				
3	1	3	1	5
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				
15				
16				
17				
18				
計	1	3	1	5

混入物

宇佐浜期の混入物は第85表に示すように6種認められた。石英のみを含むもの5点、石英>千枚岩質砂粒9点、石英>石灰質砂粒8点、石灰質砂粒>石英2点、石英>石灰質砂粒>千枚岩質砂粒4点、石英>千枚岩質砂粒>石灰質砂粒2点となっており、石英だけのものよりも石英と他の混入物を混ぜたものが多い。混入量は一般に多い方に属する。

第85表 宇佐浜期の混入物の種類とその出土状況

混入物 層序	石 英 の み	千 枚 岩 質 砂 粒	石 灰 質 砂 粒	石 英 英	石 灰 質 砂 粒	千 枚 岩 質 砂 粒	石 灰 質 砂 粒	石 英 英	石 灰 質 砂 粒	千 枚 岩 質 砂 粒	石 英 英	計
表面採集												
第1層												
2							1					1
3	5	8	6	2	3				2			26
4												
5		1	2									3
6												
7												
8												
9												
10												
11												
12												
13												
14												
15												
16												
17												
18												
計	5	9	8	2	4				2			30

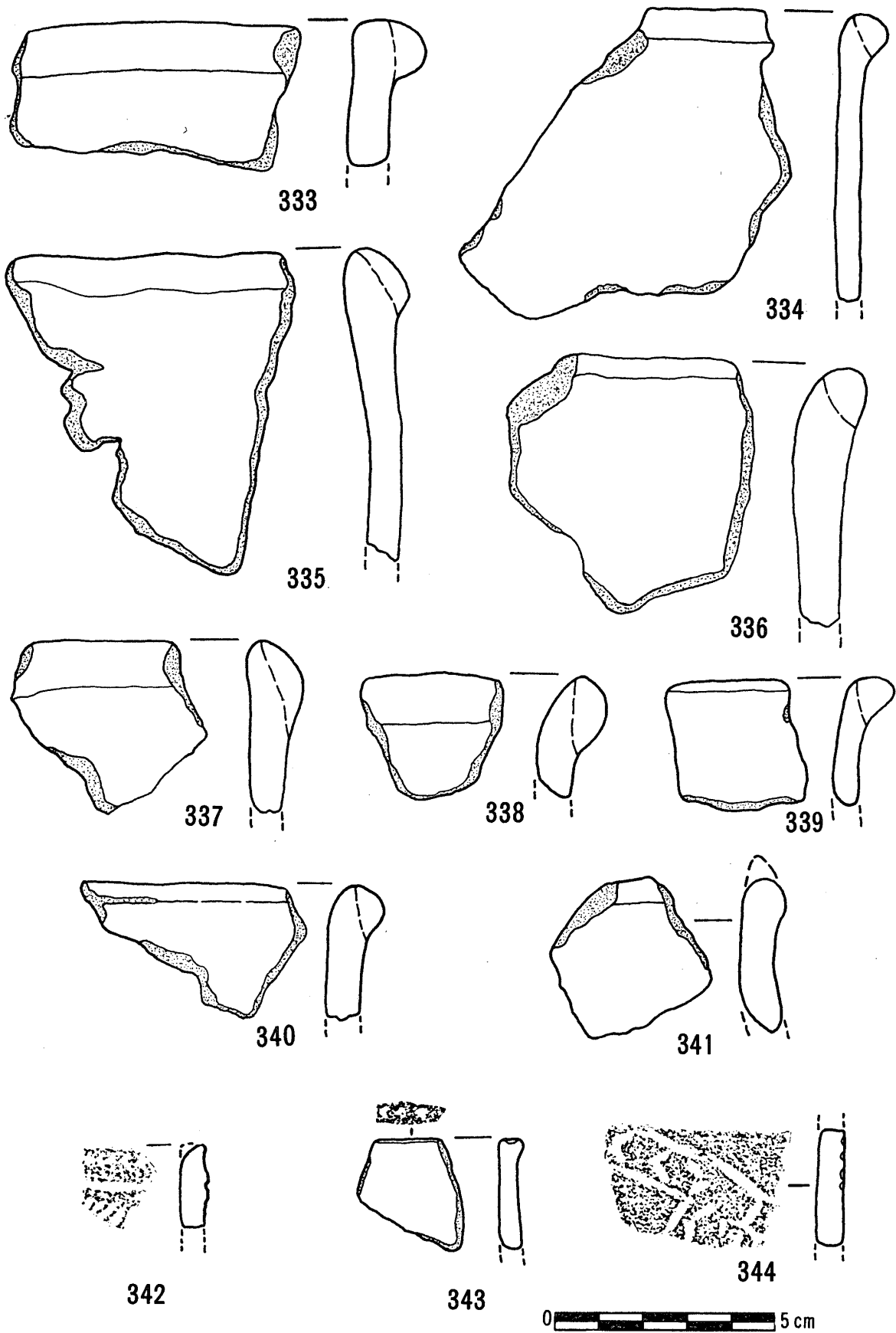
焼成・器色

本トレンチ出土の宇佐浜期の資料は焼成が普通のものや、やや悪いのが一般的で、良好といえるものはきわめて少ない。

器色は赤褐色・明るい茶褐色・灰色の3種がみられるが、茶褐色のものが圧倒的に多かった。

器面調整

宇佐浜期の口縁部について擦痕の有無を調べてみた。擦痕がみられたのは第44図324（第42図版1）の1点だけで内面に施されている。しかし、内面全体に及ぶわけではなく口縁のちかくではナデ消されている。他の29点は両面ともナデ調整を行っているが、徹底せず、宇佐浜特有の器面のザラザラしたものが多い。



第45図 宇佐浜式土器 (333~341) および奄美系土器 (342~344)

第86表 宇佐浜式土器の擦痕の残存状況

時 期	擦痕の残存 状況		両面 あり	外面 のみ	内面 のみ	両面 なし	計
大 山 期						1	1
室 川 期	A				1	1	2
	B					3	3
室川上層期	A					3	3
	B					3	3
宇 佐 浜 期					1	29	30
計					2	40	42

注、室川期と室川上層期のA・BはそれぞれのA期・B期

出土状況

本トレンチ出土の前記30点の宇佐浜期の資料は第5層以上の層に限られ、第2層で1点、第3層で26点、第5層で3点の出土となっている。また、第3層に集中していることは注目してよいと思われる。

h 奄美系土器

本トレンチでは奄美系の土器が3点出土した。いずれも小破片である。型式分類は河口貞徳氏による『鹿児島考古第13号』(註13)記載の基準に従うことにするが、型式が明確に一致するものはみられなかった。以下、3片について記述する。

第45図342・343(第43図版10・11)は口縁の破片で、胎土は砂質で細かく、焼成は良く、器壁は薄い。いずれも奄美の土器の特徴と一致する。

同図342(同図版10)は嘉徳IA式土器に類似するもので、三角形刺突文と沈線を組み合わせる文様を施文する。刺突文は比較的幅のある、先端の尖った篋を用いて連続的に施

文する。施文の方向は左から右で、本標品では2列認められる。また、刺突文の間に沈線を二本横走させている。横線も三角形刺突文も施文は浅く、しかも器面が摩耗しているため、文様は不鮮明である。口唇は内面側が破損しており、施文したかどうか確認できない。薄手の、焼成の良い土器で器色は表裏とも暗褐色。混入物は石英を主体に磁鉄鉱や石灰質砂粒を少量、含む。第3層の出土。

同図343(同図版11)は口唇部に先端が三角形に尖った篋を用いて押し引き文を施すもので、施文は浅く、文様は消えかかっている。施文はおそらく左から右であろう。口唇はやや平坦に整形され、水平方向である。口唇部以外は無文で、全体的に摩耗が著しい。薄手の土器で、焼成は比較的よい。色調は表裏とも暗褐色である。混入物としては石英が少量認められる。第13層の出土。

同図344(同図版12)は単篋で「ハ」の字状文をいくつか描き、それを沈線で縁どりしたものである。この種の文様構図は沖縄諸島の土器にはみられず、奄美的色彩の濃いものである。器色や整形技法からすると奄美の面縄西洞式か宇宿上層式期のいずれかに該当するものであろう。施文は力強く、文様は明瞭である。器色は表裏ともやや黄味がかった赤褐色。混入物は石英と千枚岩質砂粒が半々の割合で見受けられる。器面は手触りがザラザラしたものである。器色は薄く、焼成は良い。第3層の出土。

以上、本トレンチ出土の奄美系土器について述べた。層位でみると第3層で2点、第13層で1点検出され、口頸部無文のものが下方から検出されたが、この資料は口唇部に三角形刺突文を施文することから、あるいは嘉徳IA式に近い資料かと考える。

i 無文胴部

無文の胴部破片は3247点得られた。これらはすべて口縁部や有文胴部あるいは底部との接合が不可能なもので、どの型式に属するか決定困難なものが多い。しかし、前述した各型式の諸特徴（胎土・混入物・焼成・器色）からある程度、型式の推定は可能である。本トレンチの無文胴部に含まれるテンパーの種類およびそれらの組み合わせは下記のA～Hの13種である。尚、室川式と室川上層式は器面の特徴によって識別が可能である。

A = 石英>チャート 伊波・荻堂期
と大山期の一部を含む。

B = a) 石英>磁鉄鉱
b) 石英>石灰質砂粒>磁鉄鉱
c) 石灰質砂粒>石英
大山期（大山式とカヤウチバンタ式の一部を含む。）

C = a) 石灰質砂粒>石英 室川A期

b) 石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱

D = a) 石灰質砂粒>石英 室川B期

b) 石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱

E = a) 石灰質砂粒>石英 室川上層A期

b) 石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱

F = 石灰質砂粒>石英 室川上層B期

G = 石英>石灰質砂粒 宇佐浜期

H = 石英>金雲母 奄美系土器

上記の基準に従って分類したのが、第87表である。これによるとFタイプ（室川上層B期）が最も多く609点、次にGタイプ（宇佐浜期）が515点、以下Daタイプ（室川B期）466点、Eaタイプ（室川上層A期）442点、Caタイプ（室川A期）422点、Aタイプ（伊波・荻堂期、大山期の一部）366点、Bcタイプ（大山期）317点となり、室川～宇佐浜期のものが相対的に多い。

第87表 無文胴部の混入物の種類とその出土状況

層序	種類	A	B			C		D		E		F	G	H	計
			a	b	c	a	b	a	b	a	b				
表面採集		10		1	2	5	1	6		9	1	1	8		44
第 1 層		7	1	2	5	7		2			2	2	27		55
2		6	1		3			2		23	3	15	36		89
3		196	15	32	160	113	5	175	6	334	20	518	415	1	1990
4															
5		49		3	17	187	7	171		76	1	66	15	2	594
6		8		1	12	24	4	53	1			1	11		115
7		1		3	2	24		4					3		37
8				6	1	9		1							17
9					1	6									7
10				2	2			2							6
11		24		2	57	35		47				6			171
12		31	2	15	53	12		3							116
13		1			2										3
14		2													2
15		1													1
16															
17															
18															
計		336	19	67	317	422	17	466	7	442	27	609	515	3	3247

層位的にみると伊波・萩堂期と大山期の一部（Aタイプ）は、おおよそ2カ所に集中する傾向がみられた。すなわち、第7層以上の部分と第11層から第16層の部分である。しかし、第3層で最も多かった（196点）。以上の状況からこれらの土器の大部分は下層から持ち上げられたものであろうと推察している。

大山期のB aタイプは第12層と第3層以上で採集され、総数も19点と少なかった。磁鉄鉱を混入するのは大山期も後半以後かと考えていたが、昭和53年の調査では萩堂期のカヤウチバンタ式（註14）に磁鉄鉱を含む例のあることが確かめられ、類例は稀少だが、磁鉄鉱を混ぜる製法は比較的古くからあったことになる。しかし、次の大山式についてみると、古い部分では全く報告例がなく、この部分が埋まるかどうか、今後の課題ということになる。B bタイプ（大山期）は第12層以上で検出され、第3層で最も多かった。B cタイプ（大山期）は第13層以上で検出され、第3層（160点）、第11層（57点）、第12層（53点）の3層に比較的集中している。後者の2種は大山期後半のものともてよいかと思う。

C aタイプ（室川A期）も第12層以上で検出され、第5層（187点）と第3層（113点）で比較的多かった。C bタイプ（室川A期）は第3層から第6層の間で17点検出された。

室川B期のD aタイプは第12層以上で出土し、第3層（175点）、第5層（171点）、第6層（53点）、第11層（47点）にやや集中していた。D bタイプ（室川B期）は第3層と第6層で検出され、総数は7点と少ない。

室川上層A期のE aタイプは第5層以上で出土し、第3層（334点）で最も多かった。E bタイプ（室川上層A期）も第5層以上に限られ、同様に第3層で最も多かった。

室川上層B期のFタイプは第11層の6点を除くと第6層以上に集中し、これも第3層（518点）で最も多かった。第11層の6点をどう解釈すべきか、つまり、第11層のものとみるか、あるいは混入とみるか、いずれかであろうが、後者の可能性が強い。

宇佐浜期のGタイプは第7層以上で出土し、第3層（415点）に集中している。このような出土状況から宇佐浜式は新しいタイプの土器といえる。

Hタイプ（奄美系土器）の出土は3点と非常に少なかった。第3層で1点、第5層で2点検出され、第6層以下では見受けられなかった。

以上、各タイプの出土状況は第7表の土器型式の層位的出土状況とほぼ一致している。

j 底部

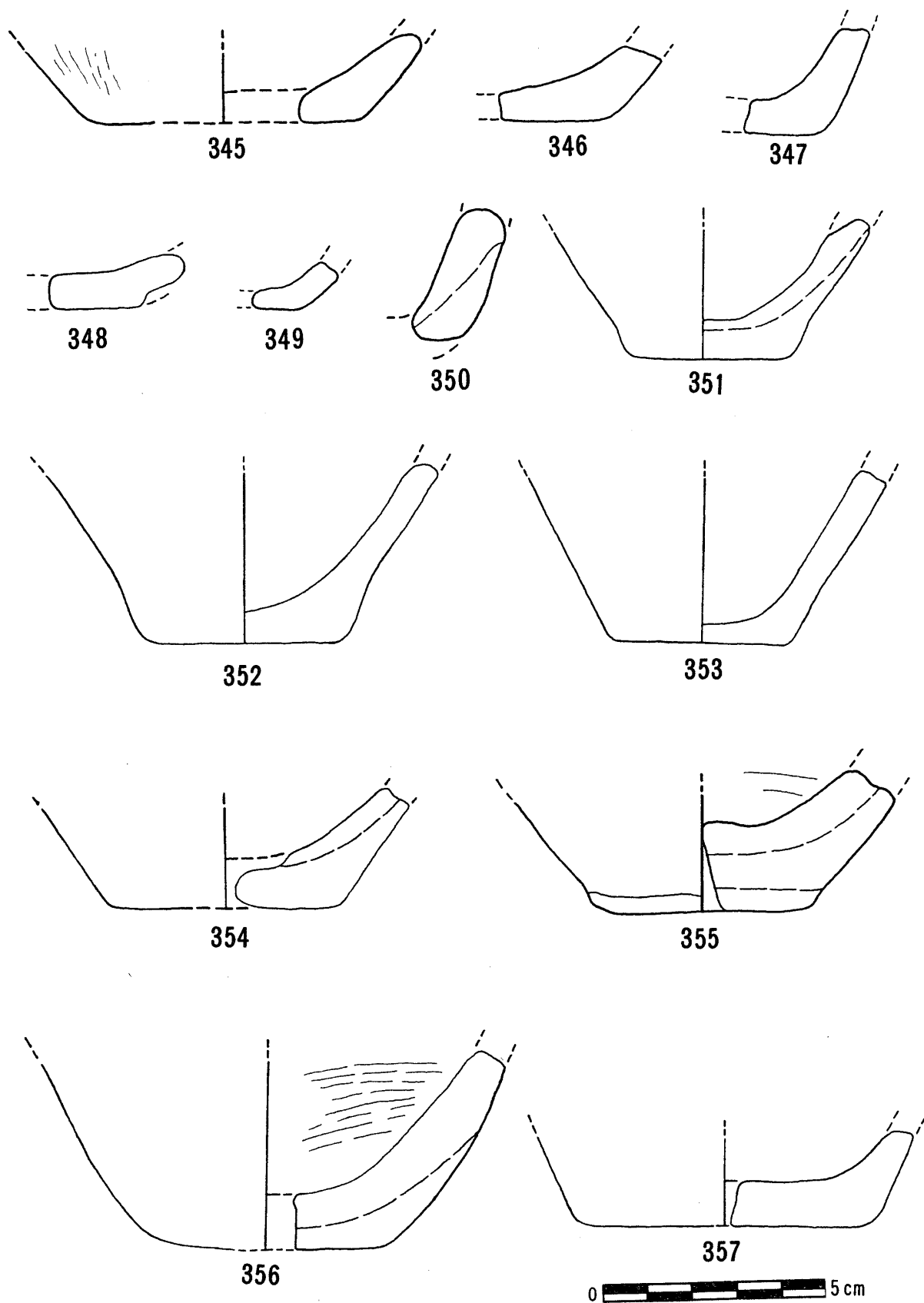
本トレンチでは41点の底部が検出された。これらを胎土・混入物・焼成・器色等の特徴から、型式別あるいは時期別に分類してみた。分類が困難なものは「不明」として扱った。それぞれの出土量は、伊波・萩堂・大山期7点、室川A期9点、同B期6点、室川上層A期6点、同B期6点、宇佐浜期4点、不明3点の出土となっている。層位的出土状況を第88表に記した。

次に、各期別に概述する。

伊波・萩堂・大山期の資料

第46図345～350・第47図383（第44図版1～6・第46図版14）がこれに属し、すべて平底で、器色、混入物の種類、焼成等の特徴から伊波・萩堂・大山期の所産と認められるものである。

立ち上がりの形状は①胴部へ移行する部分が僅かに外彎するもの、②胴部へ直線的に移



第46図 底部（345～350は伊波～大山期、351～357は室川A期）

行するもの、の2種に大別される。同図349（第44図版5）は前者に属し、同図345～347・350（同図版1～3・6）は後者のグループと考えられる。同図348（同図版4）は外部破損のため不明。

第88表 底部の各期別出土状況

層序	時期	伊波 ・大山 期	室川 A 期	室川 B 期	室川 上層 A 期	室川 上層 B 期	宇 佐 浜 期	不 明	計
表面採集								1	1
第1層					1				1
2									
3		5	2		5	5	4	1	22
4									
5			3	2	1				6
6			1	3					4
7								1	1
8			1	1					2
9			1						1
10		1							1
11									
12			1						1
13									
14		1							1
15									
16									
17									
18									
計		7	9	6	6	6	4	3	41

底径を推算できるものは3点あり、第46図345（第44図版1）は約6センチ、同図346（同図版2）は約7センチ、同図347（同図版3）は約6.3センチで、伊波・荻堂・大山

期のものとしては普通かあるいは若干大きい方に属する。

器面は内外面ともナデ調整を行っているが、全体的に外面は入念で、内面はやや雑である。また、中には第46図345（第44図版1）のように外面に擦痕を残すものもあるが、他の5点には認められない。

器色は茶褐色・赤褐色・黄褐色の3種が認められ、前記の順に出土量は少くなる。焼成は第46図345～347（第44図版1～3）の3点はやや良く、他は不良である。

混入物は石英のみを含むもの4点、石灰質砂粒＞石英＞磁鉄鉱を含むもの2点（第46図346・350、第44図版2・6）、石灰質砂粒＞石英を含むもの1点（同図345、同図版1）の、3種認めることができた。

出土量は第3層で5点、第10層で1点（第46図350・第44図版6）の計6点である。第46図349（第44図版5）は器壁がきわめて薄く奄美産の可能性も考えられる。

以上のほか第48図383も本項に含めてよいかと考える。大破していて立ち上りの部分を欠き、原形を復元し得ないが、平底であり、かつ諸特徴が、伊波・荻堂期のものに一致する。第14層の出土。

室川A期の資料

室川A期に属するものは第46図351～357（第44図版7～13）と第47図358・359（第45図版1・2）に示す9点で、すべて平底である。器色・胎土・混入物・器形などの特徴から室川A期の底部と判断できるものである。

立ち上りの形状から①胴部に移行する部分が僅かに外彎するもの、②胴部へ直線的に移行するもの、③立ち上りの部分が内彎するものの、の3種に分けられる。出土量は③が比較

的多かった。(第46図358 は形状不明のため、前記の数から除いた)。

第89表 底部の形態と時期別出土表

形態 模式図 時期	平 底						丸 底	不 明	計
	①	②	③	④	⑤	⑥	不 明		
伊波～大山期	1	4					2		7
室 川 A 期	2	1	5				1		9
室 川 B 期		1	4				1		6
室川上層A期			2	2		1		1	6
室川上層B期	1			1	2	2			6
宇 佐 浜 期	1		2				1		4
不 明			2				1		3
計	5	6	15	3	2	3	4	2	41

①に属するものは第46図356 と第47図 359 (第42図版12・第45図版 2) の 2 点である。

同図356 (同図版12) は比較的厚手の底部で、平底ではあるが、全体的に円味を帯びた感じの土器である。第9層の出土。

第47図359 (第45図版 2) も厚手の底部で、全体的に円味を帯びている。第3層の出土。

②に属する資料は第46図357 (第44図版13) の 1 点で、第8層の出土。

③に属するものは第46図351 ～ 355 (第44図版 7 ～11) の 5 点である。同図352 ・ 353

(同図版 8 ・ 9) の 2 点は底部の厚さが薄く、特に後者は最も薄い部類 (約 4 ミリ) の資料である。同図351 (同図版 7) は第6層、同図352 ・ 353 (同図版 8 ・ 9) は第5層、同図354 (同図版10) は第3層の出土である。

同図355 (同図版11) は器壁が最も厚く15ミリ前後あり、底の厚さは約19ミリである。底部は何枚かの粘土を貼付け整形しており、

最後のものは雑で、若干側縁にはみ出している。第5層の出土。

底径は9点のうち8点が推算可能であった。底径は約4センチから約7センチの範囲にあり、細分すれば4センチ台が2点、5センチ台が4点、6センチ台が1点、7センチ台が1点となる。5センチ前後のものが多いのは、小型化の傾向を示すものととらえるべきかどうか、今後、注意する必要がある。

器面は表裏面ともナデ調整を行っているが、表面より裏面は雑で原形をとどめないものが多い。第46図356 (第44図版12) の内面にはわずかながら擦痕も見受けられる。擦痕は浅く、それほど明瞭ではない。

器色は黄褐色や暗褐色のものなどが見受けられ、4 : 5 の割合で後者がやや多かった。

焼成は普通か、やや悪い方に属し、良好なものは見受けられなかった。

混入物は(1)石英のみ、(2)石灰質砂粒>石英、

(3)石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱の3種が認められ、1:7:1の割合で石灰質砂粒>石英を混入するものが圧倒的に多かった。混入量は全体的に多く器面に露出していて、肉眼観察も容易である。

室川B期の資料

室川B期に含めてよいものは第47図360～365（第45図版3～8）の6点で、すべて平底である。

立ち上がりの形状の判明するのは5点あり、前記分類の②③に該当する。すなわち、②胴部へ直線的に移行するもの、③立ち上がりの部分が内彎状のカーブを示すもの、の2種である。②に属するものは同図360（同図版3）の1点で、同図361～364（同図版4～7）の4点は③の資料である。

第47図362（第45図版5）は底部の厚さが本トレンチ出土のものとしては最も厚いもので、約2.7センチを測る。また、その他にも底の厚さが1センチを越えるものが2点（第47図361・363＝第45図版4・6）ある。

底径の分るものは3点あった。いずれも径は約5～5.5センチ内で、第47図360（第45図版3）は約5センチ、同図361・362（同図版4・5）の2点は約5.5センチであった。6センチを越すものがないかどうか、今後、注意する必要がある。

器面は表裏面ともナデ調整を行っており、擦痕を施すものは見受けられなかった。

器色は暗褐色のものもあるが、茶褐色のものが多。焼成は普通で、特に不良のものは見当たらない。

混入物は(1)貝片>石英を含むもの2点のほか、(2)石灰質砂粒>石英を含むものが4点あった。混入量は全体的に多い。

出土層位は第5層で2点（第47図360・365

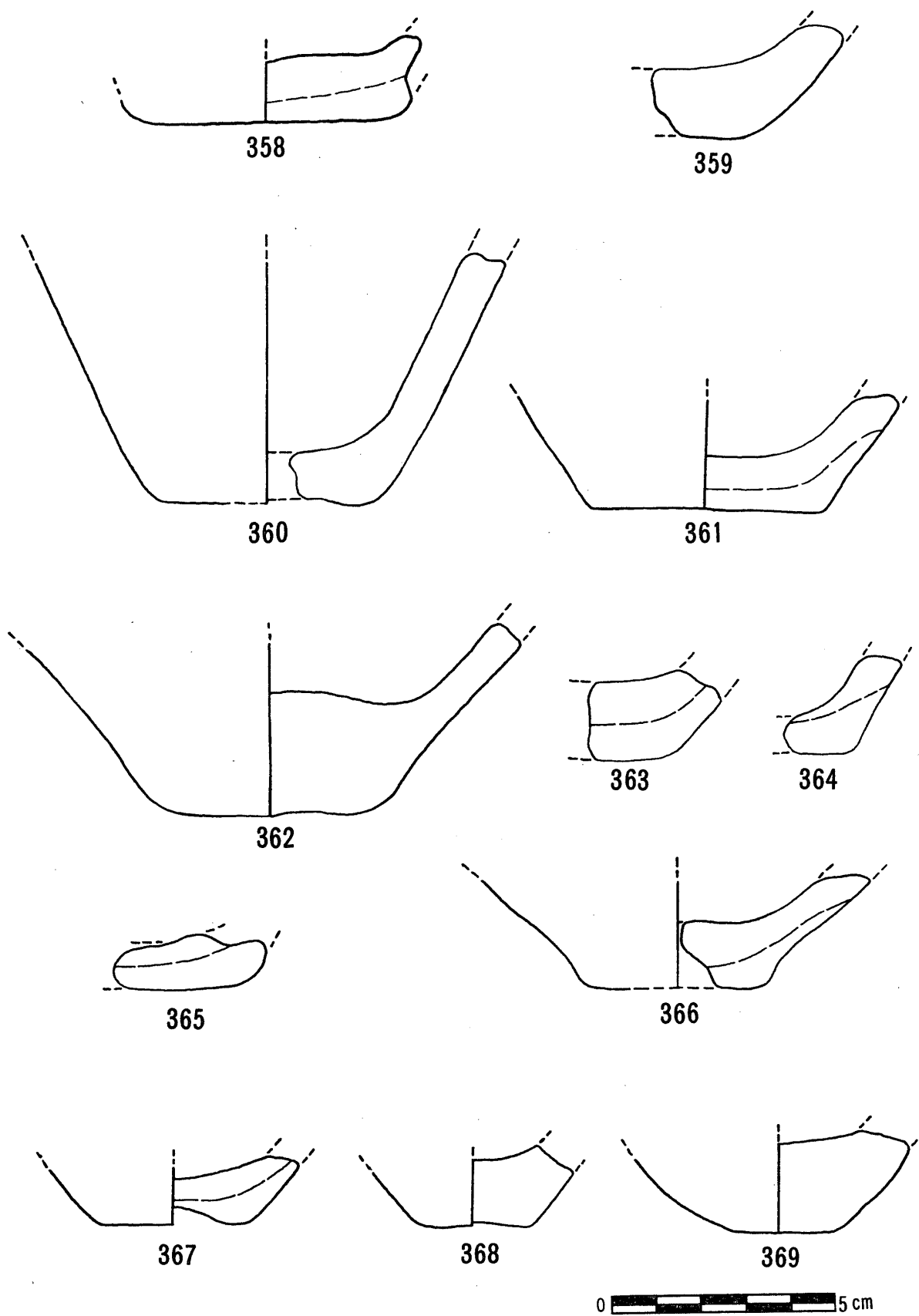
＝第45図版3・8）、第6層で3点（第47図361・362・364＝第45図版4・5・7）、第8層では1点（第47図版363＝第45図版6）検出された。

室川上層A期の資料

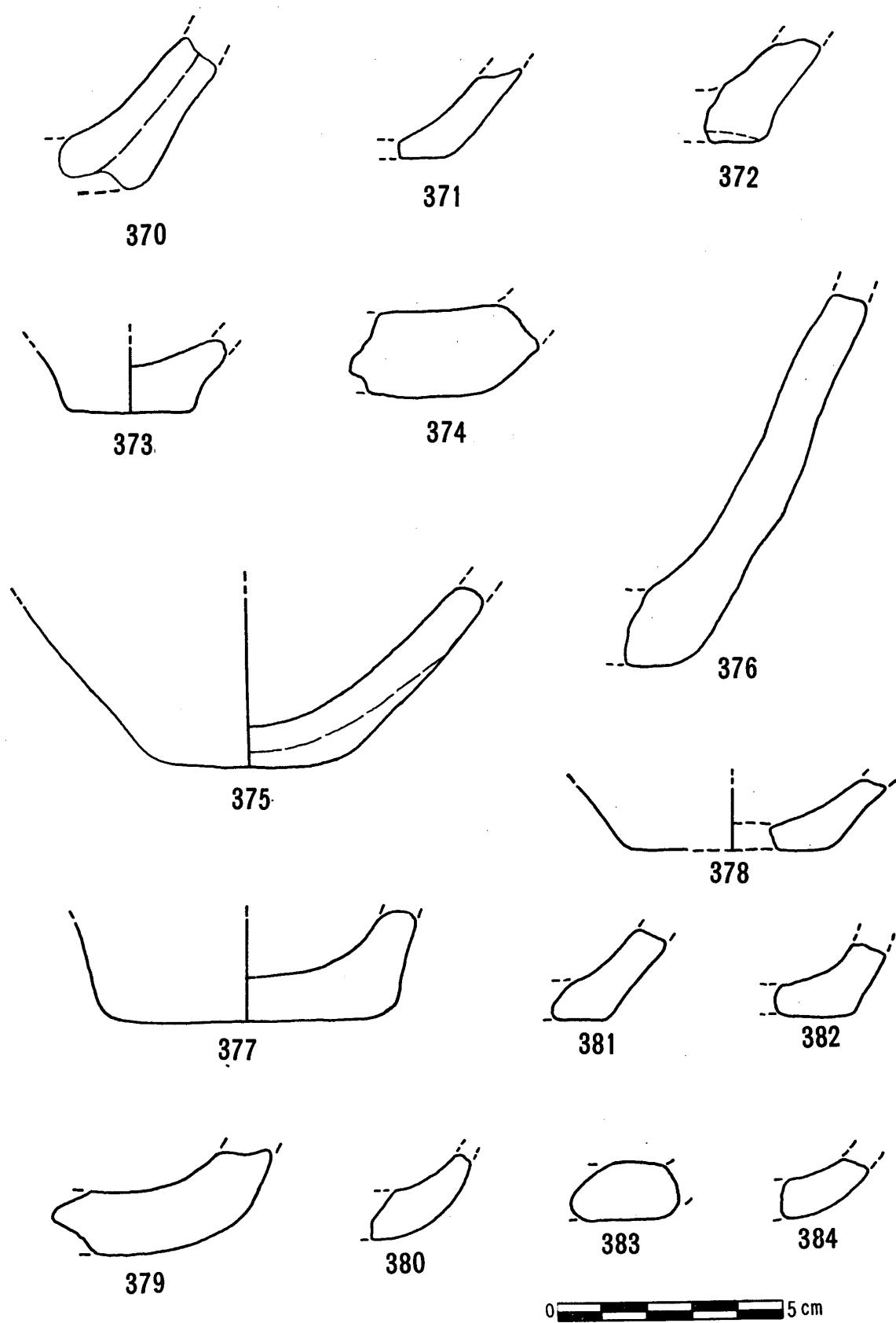
この期に属するものは6点である。そのうち、形態の判明するもの5点はいずれも径の小さい平底である。しかし、数種のバリエーションがある。すなわち、底面が平面に属するものや凹面をなすもの、底部からの立ち上がりが内彎状のカーブを示すものや、直線的に開くものなどである。

第90表 時期別にみた底径の大きさ

形態		時 期 底径 (センチ)	伊波 大山期	室川 A 期	室川 B 期	室川 上層A期	室川 上層B期	宇佐 浜期	不 明	計
平	①	5 ～5.9		1						1
		不 明	1	1			1	1		4
	②	5 ～5.9			1					1
		6 ～6.9	2	1						3
		7 ～7.9	1							1
		不 明	1							1
	③	3 ～3.9		1						1
		4 ～4.9		2		1		1		4
		5 ～5.9		2	2					4
		6 ～6.9						1		1
		不 明			2	1			2	5
④	2 ～2.9				1				1	
	3 ～3.9				1				1	
	4 ～4.9					1			1	
⑤	2 ～2.9					1			1	
	3 ～3.9									
	4 ～4.9					1			1	
⑥	2 ～2.9				1	1			2	
	不 明					1			1	
不明	6 ～6.9		1						1	
	不 明	2		1					3	
丸 底							1	1	2	
不 明					1				1	
計			7	9	6	6	6	4	3	41



第47図 底部(358・359は室川 A 期、360～365は室川 B 期、366～369は室川上層 A 期)



第48図 底部 (370・371は室川上層A期、372～376は室川上層B期377～380は宇佐浜期、381・382・384は時期不明、383は伊波～大山期)

底径を知りうるものは4点あり、2.5センチから4センチの範囲である。すなわち、約4センチのもの1点（第47図366＝第45図版9）、約3.5センチのもの1点（同図367＝同図版9）、そして約2.5センチのものが2点（同図368・369＝同図版11・12）である。

室川上層期の底部は底径4センチを越えるものがなく、小型化しているところに特徴があるようである。

器面は表裏面ともナデ調整を行っているが、雑なものが多い。擦痕を施すものは見受けられない。

器色は茶ないし赤褐色のもの4点、暗褐色のもの2点で、焼成は全体的にやや悪いが、後述の室川上層B期のものに比べると、はるかによい。

混入物は①石英のみ、②石英＞磁鉄鉱、③石英＞石灰質砂粒、④石灰質砂粒＞石英の4種が2：1：1：2の割合で認められた。混入量は全体的にやや少ない。

出土層位は第48図370の1点だけ第5層で、他の5点は第3層の出土である。

室川上層B期の資料

これに属するものは6点である。すべて底径の小さい平底で、尖底は見受けられなかった。底面についてみると、凹面を形成するとみられるものが1点（第48図372＝第46図版3）あるほかは、すべて平面のタイプである。また、底部からの立ち上がりの形状についてみると、同図374（同図版5）のように外彎状のふくらみをもつものや同図372・373・375（同図版3・4・6）のように内彎状のカーブを示すものなどがある。

底径を知りうるものが4点あり、第48図372・375（第46図版3・6）は約4センチで、他の2点（第37図244と第48図373＝第

35図版2・第46図版4）は約2.5センチであった。ここでも4センチを越すものがないのは注目してよからう。

今回採集の資料は器面の摩耗したのが多く、器面調整の方法を明確にしうるものはきわめて少ない。観察した範囲では雑なナデ調整を行ったものが、若干認められただけで、他は不明である。

器色は黄褐色（4点）と赤褐色（2点）の2種が認められた。第48図373・375（第46図版4・6）は後者に属する。

焼成はきわめて悪く、脆弱で、吸水性に富む。

混入物は石英のみと石灰質砂粒＞石英の2種に大別でき、4：2で石英のみを含むものが僅かに多かった。混入量は全体的に少なく、肉眼観察が困難なものが多い。

出土層位は第48図373（第46図版4）の1点が第1層の出土で、他は第3層の出土である。

宇佐浜期の資料

第48図377から380（第46図版8～11）に示した4点がこれに属し、器形は平底と丸底に分けられる。

第48図377～379（第46図版8～10）の3点は平底で、いずれも形状が多少異っている。

同図377（同図版8）は立ち上がりやや急で、若干内彎状のカーブをもち、同図378（同図版9）も形態は前記377と同じであるが、立ち上がりはやや開き気味である。同図379（同図版10）は全体的に円味のある平底で、立ち上がりは外彎状のカーブを示す。

底径についてみると2点は推算が可能で、第48図377（第46図版8）は約6センチ、同図378（同図版9）は約4.5センチであった。

丸底とみられるものは第48図380（第46図

版11)の1点であるが、破損が著しく、復元図を示し得ない。

器面は表裏面ともナデ調整を行ったとみられるが、宇佐浜式特有の器面のザラザラは消え切っていない。

器色は多少の相違はあるものの、すべて茶褐色の部類に含めてよい。

焼成は4点とも普通で、特に良好なもの、あるいは不良なものは見当らない。

混入物は4点ともそれぞれ異っている。すなわち、第48図377(第46図版8)は石英>磁鉄鉱、同図378(同図版9)は石英>石灰質砂粒>千枚岩質砂粒、同図379(同図版10)は石灰質砂粒>石英>磁鉄鉱、同図380(同図版11)は石英>千枚岩質砂粒であった。混入量は4点とも普通。

出土層位は全て第3層である。

時期不明の資料

型式のおさえられない資料が3点ある。3

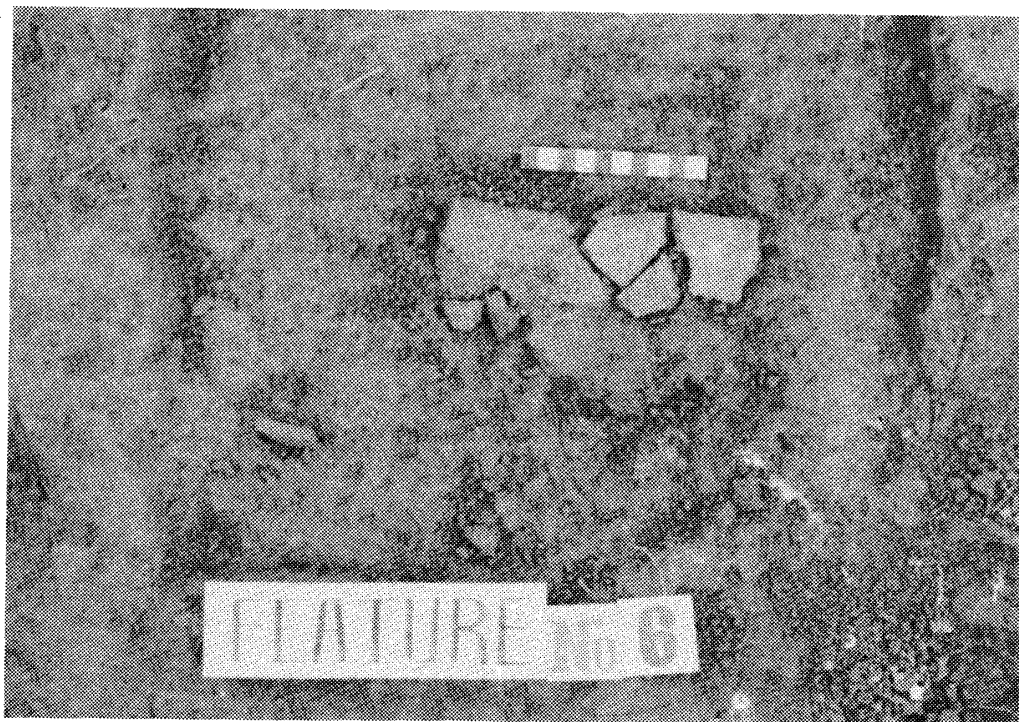
点のうち2点は平底、1点は丸底的である。

第48図381(第46図版12)は平底の破片で、底部からの立ち上がりの部分は内彎状のカーブを示す。外面はナデ調整を行っており、内面ではわずかながら擦痕も見受けられる。焼成は普通で、胎土には石英>石灰質砂粒を混入する。器形は奄美の土器に類似する。第7層の出土。

同図382(同図版13)も平底の破片で、これも立ち上がりの部分は前記381と同種の器形に属する。焼成は悪く、石英を多量混入する。これも奄美と関係する底部資料かとみられる。表面採集品。

同図384(同図版15)は丸底の破片であるが、破損が著しく、原形を復元し得ない。焼成は悪く、貝片・石英等がわずかに見受けられること、およびその他の特徴から、室川上層期の製品かとみられる。第3層の出土。

底部全体の種類や底径の大きさを第89表と第90表に記した。



室川上層B式(第37図244)の出土状況

第91表 沖縄諸島の編年（試案）

時期区分		土 器 型 式	沖縄諸島発見の 縄文・弥生式土器	その他の年代資料
前 期	I	ヤブチ式土器 東原式土器	}爪形文土器	ヤブチ式 6670±140 y. B. P. 東原式 6450±140 y. B. P.
	II	曾畑式土器 条痕文土器 室川下層式土器	曾畑式土器 条痕文土器	曾畑式（渡具知東原） 4880±130 y. B. P.
	III	?		
	IV	伊波式土器 荻堂式土器 大山式土器 室川式土器	出水系土器 市来式土器	伊波式（熱田原） 3370±80 y. B. P. 伊波式（室川） 3600±90 y. B. P.
	V	室川上層式土器 宇佐浜式土器		宇佐浜式は黒川式 並行とみられる
後 期	I	?	板付Ⅱ式 亀ノ甲類似土器	
	II	具志原式土器	山ノ口式土器	
	III	アカジャンガー式土器		アカジャンガー式は成 川式並行とみられる
	IV	フェンサ下層式土器		類 須 恵 器

VI 結 論

本トレンチは序文にも記したように、2 m × 4 mの小試掘坑ではあったが、焼土層（第4層）の露出作業、焼土層下の貝層の複雑な堆積などもあって、発掘作業に予想以上の時間をとられ、4次にわたって調査を行ったにもかかわらず、全体としては小範囲の調査にとどまらざるを得なかった。最下層まで調査を行ったのはトレンチの北半、すなわちT-8区の焼土層の消失した部分に限られ、焼土層の残る南半部は焼土面で中止せざるを得なかった。

T-8区の調査の結果、同区の北半部は大山期後半から室川期のころ人為的攪乱を受けた部分と推察されるに至った。最下部の第14層は伊波式や荻堂式を含む層で、同層は西壁側のわずかの部分に限られたが、攪乱をまねがれたプライマリーな層とみられるものである。同層直上の第13層は前述の大山期後半の土器や室川式を含むことから、同層から上は攪乱後の再堆積層と考えられる。これについては、すでに詳述したので、本項では省略する。

遺物は自然遺物と人工遺物が得られた。しかし、前者はほとんどが未同定であり、今回は報告を留保したが、同定の済み次第報告したいと考えている。人工遺物では石器や土器のほか、貝製品や骨製品なども少量得られた。

貝製品のうち用途の判明もしくは推測可能なものは6種類である。これらは装飾的なものとその他の用具類に大別できる。前者はペンダントや貝輪の2種に限られ、出土量も多くはない。後者は貝刃、貝錘、斧刃状製品（スイジガイ）、貝匙状製品のほか、形態・用途の確定できないものも数点ある。後者の中では特に貝刃と分類される製品が多く、本

遺跡のものは、この種資料の下限を示すものであろうと考えられる。この製品は本遺跡の各調査区の中では、本トレンチで最も多かった。

骨製品は少なかった。骨錐・骨針・鋸歯状刀子・装身具などが9点得られただけである。そのうち装身具関係は2点である。骨製品はいずれも第8層より上の層に限られ、土器でいえば室川～宇佐浜期に比定できる。装身具のうち簪とみられるものは本遺跡では初めての出土である。只、破損が著しく、全形のうかがえないのは残念である。第6層の出土であるから、比較的新しい時期のものであろう。

石器のうち用途の判明するのは石斧・石鏃・磨石・石皿の4種だけである。その中で特に刮目に価するのは石鏃の発見で、既に記したように、本県における層位的出土（第3層）の第1号である。これにより使用時期の一端がおさえられるようになり、本トレンチ最大の収獲となった。第14層出土の石器（1点）は伊波・荻堂期のもので、本トレンチ最古のものであるが、残念ながら破損が著しく用途が確認できない。この石器は器面の一部に磨痕を残すもので、石皿状の凹面が一部にみられ、その周縁に点々と前記磨痕がみられるものである。今のところ形態など明らかでないが、上記の形状から、あるいは石皿の未成品かとも考えられる。その他の石器は第5表のように大山期から宇佐浜期にわたっているが、量的には第3層で最も多く、そこでは各種の石器が出土している。

土器は室川下層式を除けば、前回報告した中央区とほぼ同種のものが得られた。つまり縄文後晩期該当のものである。室川下層式が得られなかったのは、最下層の地山を掘る機

会がなかったからで、もし、時間的余裕があり、地山を試掘することができたら、他の発掘区同様、室川下層式を得ることができたと思う。そのような理由で、今回報告する本トレンチの土器は伊波式以後の縄文後晩期相当期の土器ということになる。

伊波式土器は19点得られ、最下層の第14層でも2点(Na69・80)出土している。この2点は本トレンチの最古の土器である。出土量が少ないため種類も限られている。伊波式土器のうち文様帯中間(段)部に縦位区画文のみを施すものを従来は第1種(中段無文のもの)に含めていたが、厳密な意味での第1種と異なるので、今回はこれを第2種(中段に施文するもの)に移した。

荻堂式土器も出土量は少なかった。したがって種類も第1～第3種に限られ、他の発掘区にみられた第4・5種は出土がなかった。また、資料も小破片が多く、細分可能な資料もごく少数に限られた。第3種の1点(Na99)は第14層で出土しており、前記伊波式の2点とともに本トレンチ最古層の土器ということになる。

大山式土器の確実なものは第12層以上の層で得られ、第13層では出土がなかった。このような層相も第13層堆積前後の状況を示唆するものである。大山式土器も出土量は少なく、確認できたのは16点であった。文様は(1)横捺刻文や押し引き文のみのもの、(2)前記文様と横位沈線文や(3)凸帯文を組み合わせるものなど3種に限られた。これらの層位的出土状況は第16表の通りであるが、攪乱後の再堆積とみられることから、大山式内部の前後関係を示すものとは受け取れない。

カヤウチバンタ式土器は第13層以上の層にみられた。これらは、それぞれ大山期、室川期、室川上層期、宇佐浜期の4期に細分され

る。出土量は大山期のものが最も多く(25点)、室川期のものがこれに次ぎ(21点)、他は極端に少なく、室川上層期のものが3点、宇佐浜期のものが1点であった。層位的出土状況は第20表の通りで、大山・室川期のものは下方にもみられるが、室川上層・宇佐浜両期のものは第3層に限られ、前者と後者の間に時間差のあることが判る。なお、第13層出土のカヤウチバンタ式(本トレンチ最古)は大山期のものである。

室川式土器も第13層までみられた。この土器は本トレンチでは室川上層式に次いで多い型式である。この土器はA・Bに細分され、それぞれの特徴から、AはBに先行するものと推定される。本トレンチでの層位的出土状況は第45・87表の通りで、胴部の破片についてみると、両者とも第12層におよんでおり、先後関係を示すような出方はしていない。出土量はAが圧倒的に多く、Bは少なかった。器形についていえば、山形口縁を有するものが、A・Bでそれぞれ1点検出されている。

室川上層式土器は本トレンチで最も多く検出された土器(第7・87表)である。この土器もA・Bに細分され、前者は後者に先行するものと考えられる。本トレンチでは両者ともかなりの量の出土をみた。層位的にみると、B期の資料(胴部破片)は第11層で6点(第87表)検出されている。他はすべて第6層より上の層に限られている。そのことから、第11層のこの6点をどう解釈すべきか、問題となろう。つまり第11層の土器とみるべきか、あるいは調査時のミスによるものとみるべきか、いずれかであろう。第6層と第11層はT-8区の南部では何枚かの間層によって分離されている。しかし、北壁部では両層は上下に接しており、おそらく胴部における採集ミスによるものと考えられる。さもないと、

第7～10層で出土してもよいはずだが、この中間の4層では全く出土がないのである。この6点は第6層に所属するものとみて差支えないように思われる。

室川上層式土器が室川式以後のものであることは本トレンチでも確認できたが、同型式内部のA・Bサブ・タイプの先後関係については、層位上の資料を得ることはできなかった。器形はほとんどが深鉢形だが、B期のものには口縁の平面形が方形を呈するような壺形も1点含まれている。

本型式の出土層位が、第11層の前記6点を除けば次項の宇佐浜式とほぼ一致するところから、第91表に示す編年表（PP. 144）の前V期に位置付けられる型式と考えている。

宇佐浜式土器は第7層（第87表）までで、それ以下にはみられなかった。この土器もカヤウチバンタ式と同じく比較的長期間にわたって行なわれたもので、現在のところ大山、室川、室川上層、宇佐浜の4期に細分することができ、荻堂期に遡るものは未だ知られていない。そのことからカヤウチバンタ式に1時期おくれで登場するものと推察される。本トレンチでは前記4期のものがすべて検出されたが、いずれも第6層以上の層に限られ、

層位的変化をおさえるところまではいかなかった。もし、この土器の上限が大山期であり、下限が宇佐浜期であれば、宇佐浜A～D式に細分編年が可能となろう。しかし、現時点では未だその上限が確定しておらず、資料も少ないので、当分の間、様子を見ることにしたい。

奄美と関連する土器は3点だけであった。嘉徳I A式類似のものと面縄西洞式か宇宿上層式のいずれかに属するとみられるものが第3層でそれぞれ1点検出された。口唇部に三角形刺突文を施す口頸部無文のものが、第13層で1点出土している。この土器は類例がなく、明確な型式分類は困難だが、嘉徳I A式に近いものかと考えられる。以上の3点は攪乱後の再堆積層から検出されたものであり、したがって正確な時期比定は困難だが、第16図80に示す1点は伊波式の特徴を有するものの、奄美的特徴も漂わせており、もしこれが奄美圏の影響であれば、奄美との関係が伊波期に遡ることを証する資料となろう。しかし、伊波式と奄美土器との関係を示す資料は未だに少なく、これも将来の資料待ちといったところである。

註

1. 高宮廣衛・島袋優子・阿利直治・島袋 洋 「室川貝塚第3～4次発掘調査概報」 冲国大考古第3号 沖縄国際大学 1979
2. 高宮廣衛・玉城朝健・平安秀子・東江千栄子 「室川貝塚第1～3次発掘調査概報」 冲国大考古第2号 沖縄国際大学 1978
3. 高宮廣衛・湖城 清・嘉数 卓・東江千栄子・玉城初子・阿利直治・玉城朝健 「室川貝塚第2～4次発掘調査概報」 冲国大考古第4号 沖縄国際大学 1980
4. 賀川光夫・多和田真淳 「宜野湾村大山貝塚調査概要」 文化財要覧 琉球政府文化財保護委員会 1957
5. 国分直一・三島 格 「ヤブチ式土器」 水産大学校研究報告人文科学篇10号 1965
6. 西村正衛・玉口時雄・大川 清・浜名 厚 「八重山の考古学」 八重山 滝口 宏編 1960
7. 今帰仁村教育委員会 「渡喜仁浜原貝塚調査報告書(1)」 今帰仁村文化財調査報告 第1集 1977
8. 多和田真淳・外間正幸・嵩元政秀 「地荒原貝塚発掘報告」 文化財要覧 琉球政府文化財保護委員会 1962
9. 読谷村教育委員会・読谷村立歴史民俗資料館 「木綿原 沖縄県読谷村渡具知木綿原遺跡発掘調査報告書」 読谷村文化財調査報告書 第5集 1978
10. 本部町教育委員会 「兼久原貝塚発掘調査報告書」 本部町文化財報告書 第1集 1977
11. 沖縄県教育委員会 「津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書」 沖縄県文化財調査報告書 第17集 1978
12. 沖縄県教育委員会 「知花遺跡群」 沖縄県文化財調査報告書 第16集 1978
13. 河口貞徳・出口 浩・本田道輝 「宇宿貝塚」 鹿児島考古第13号 鹿児島考古学会 1979
14. 沖縄市教育委員会 「室川貝塚範囲確認調査報告書」 沖縄市文化財調査報告書 第1集 1979

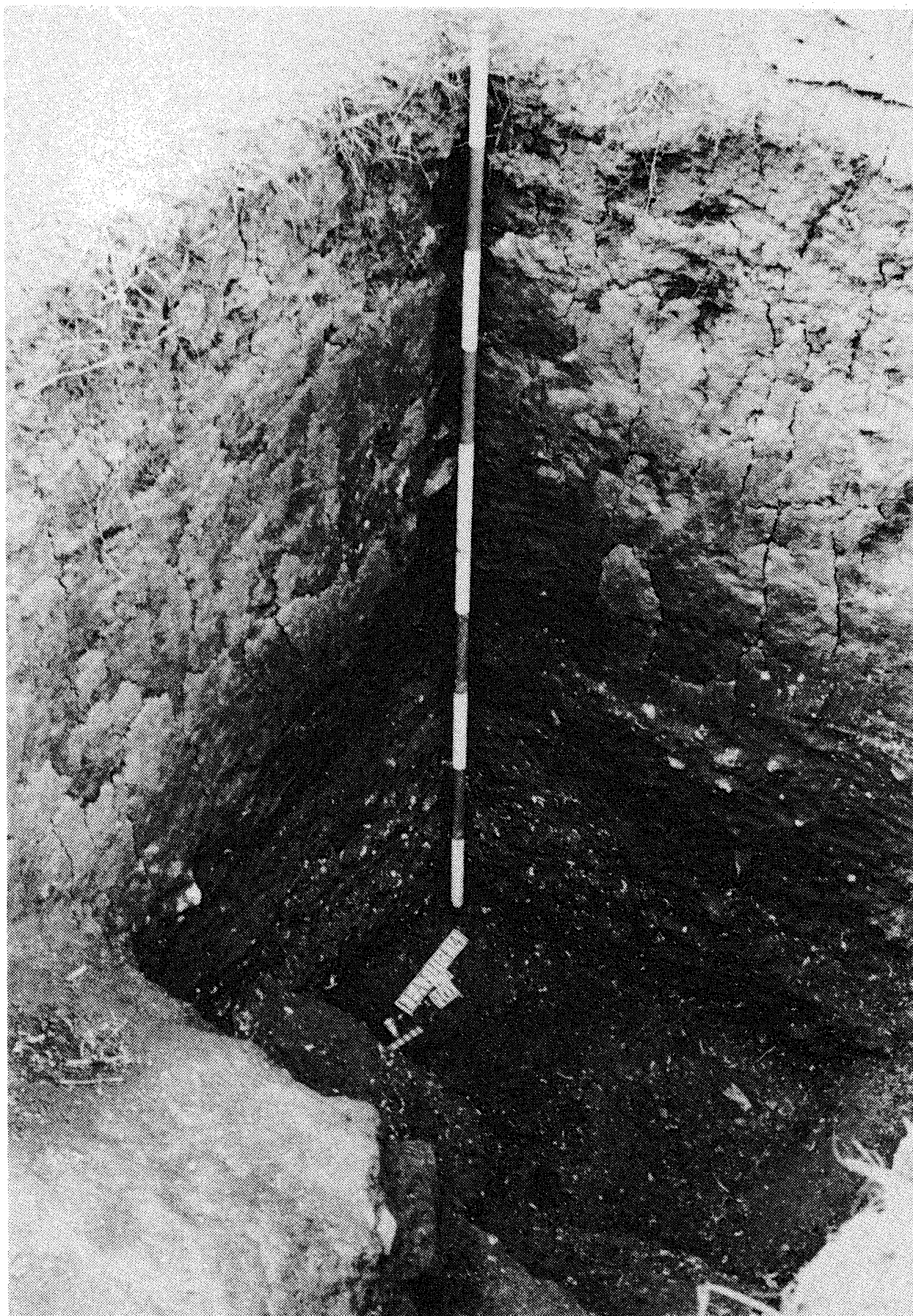


A

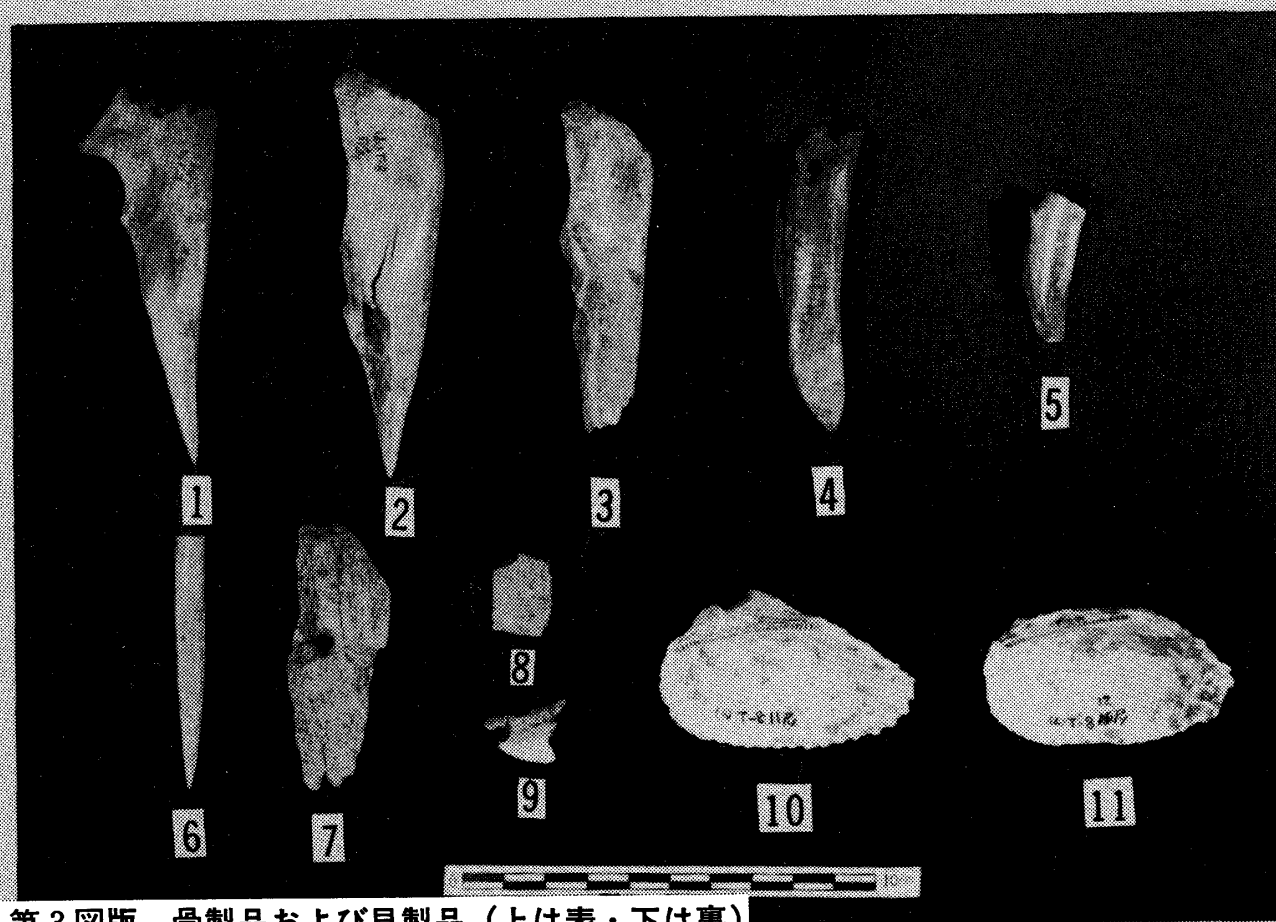
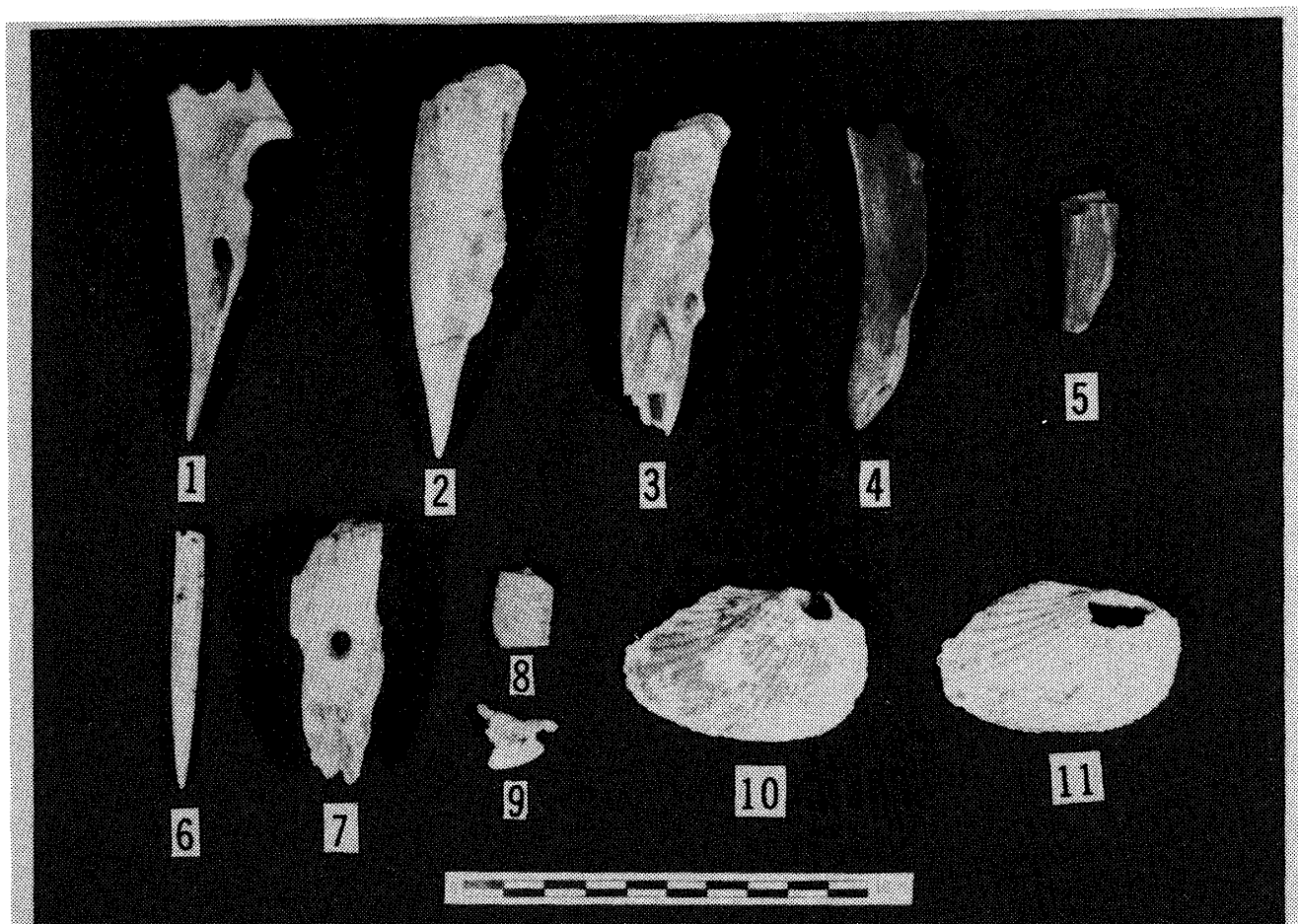


B

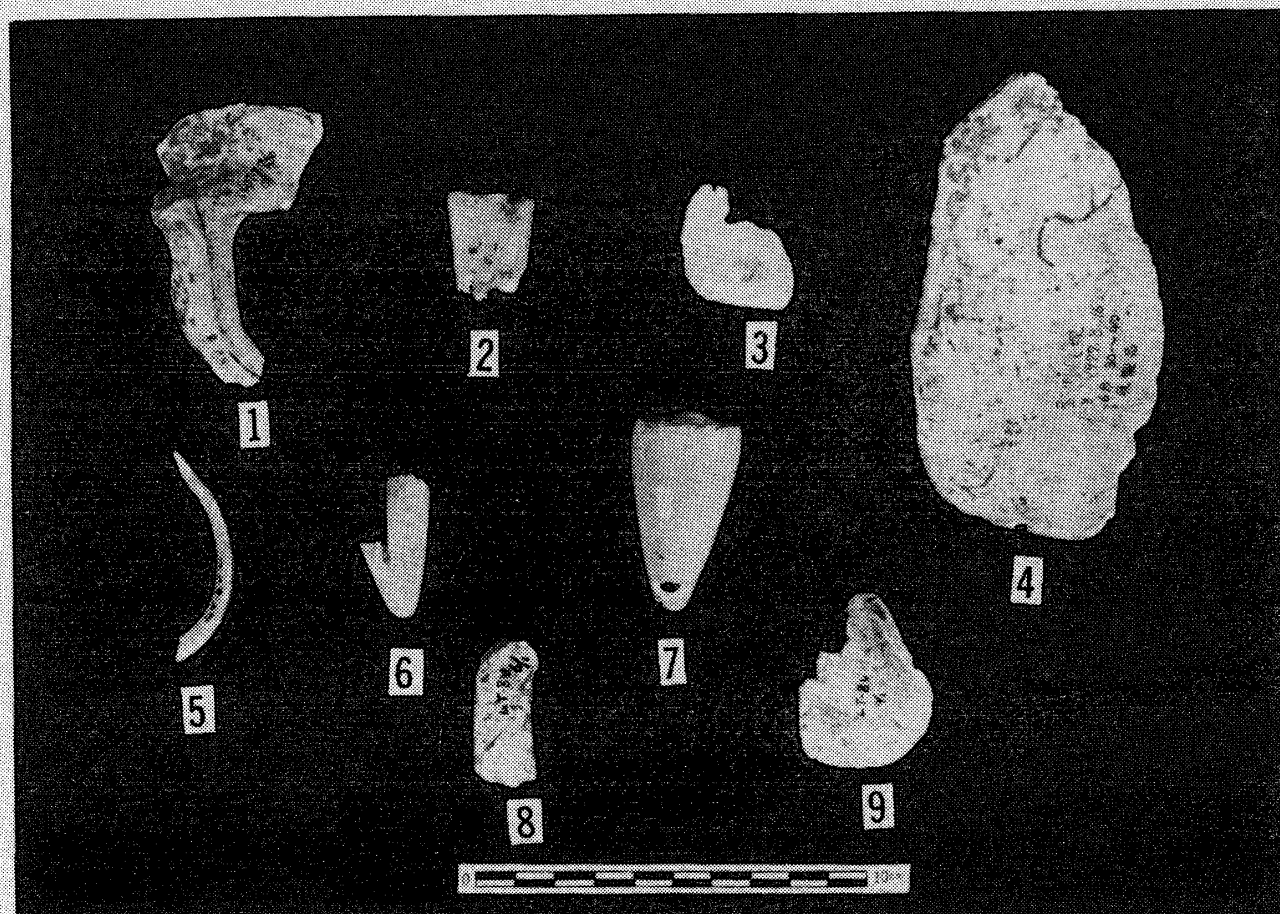
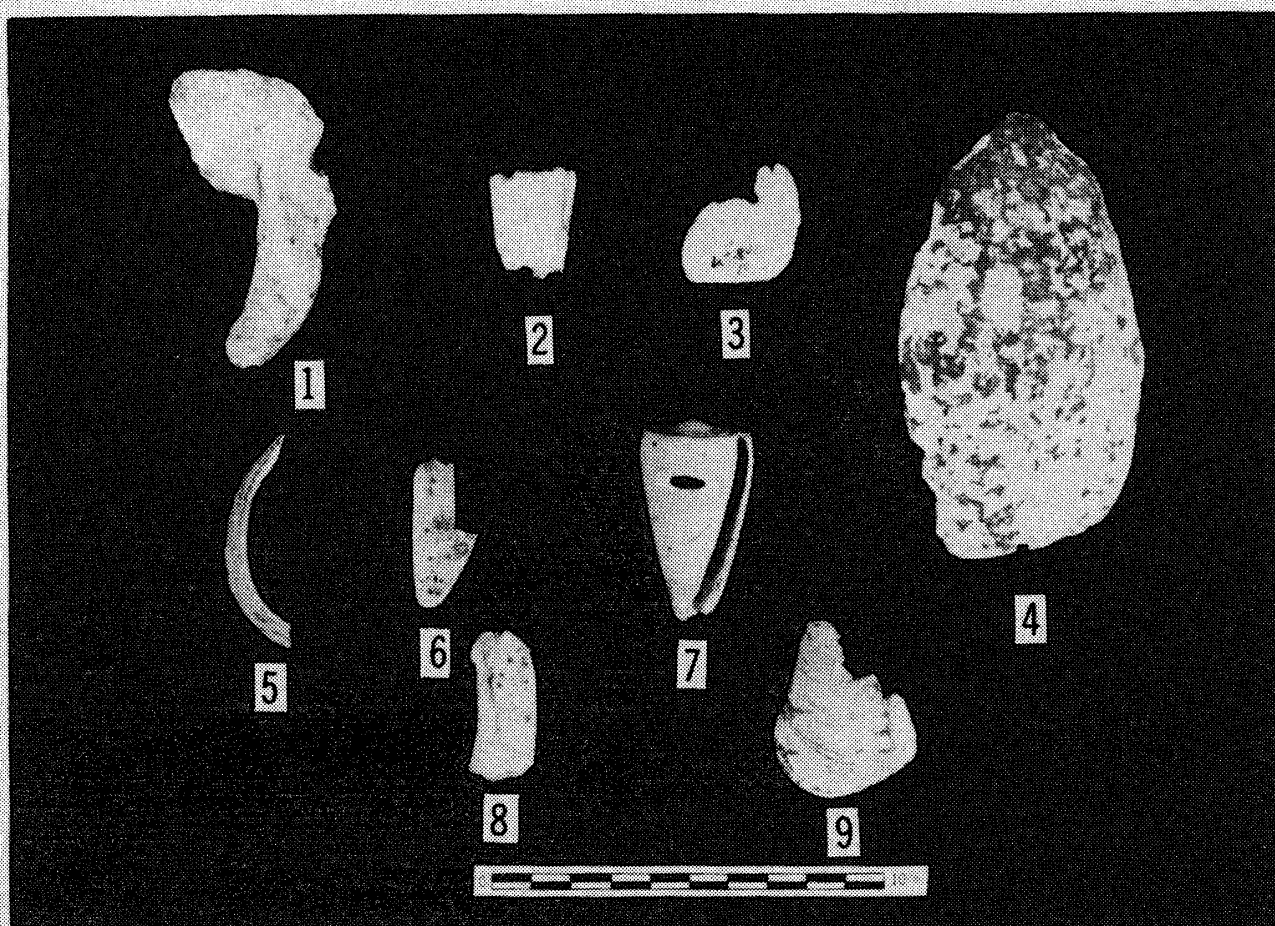
第1図版 (A)室川貝塚近景、(B)Tトレンチ



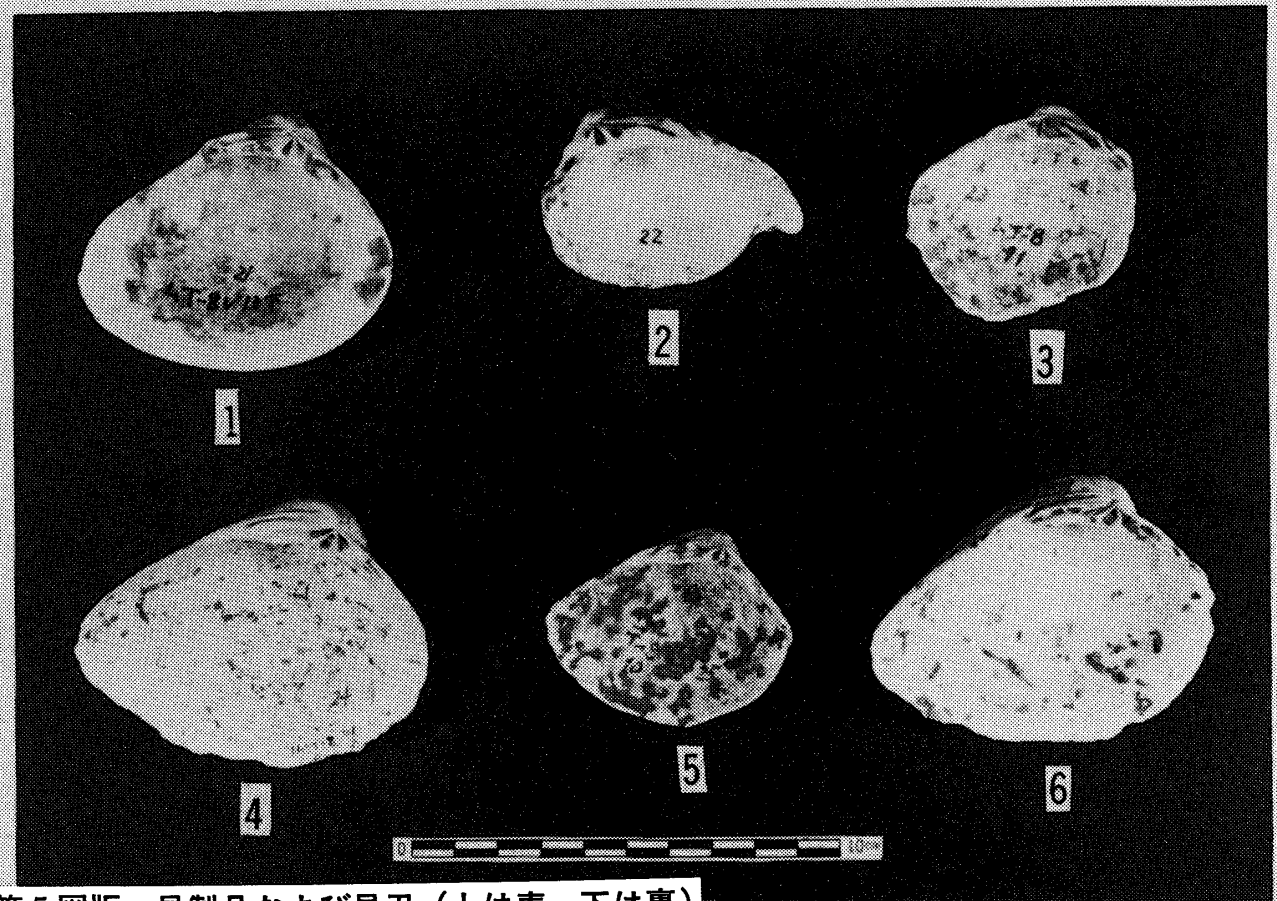
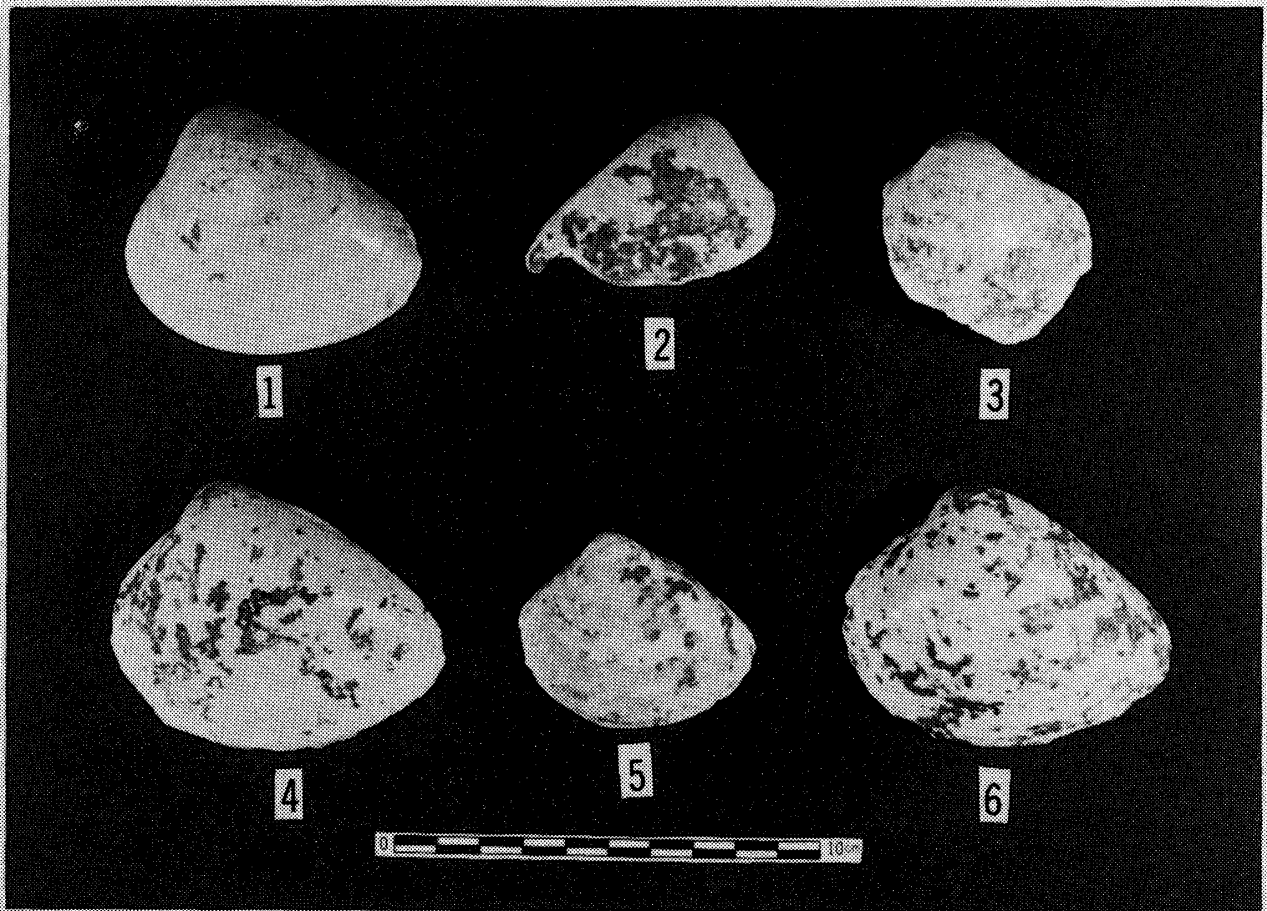
第2図版 Tトレンチ西壁および北壁



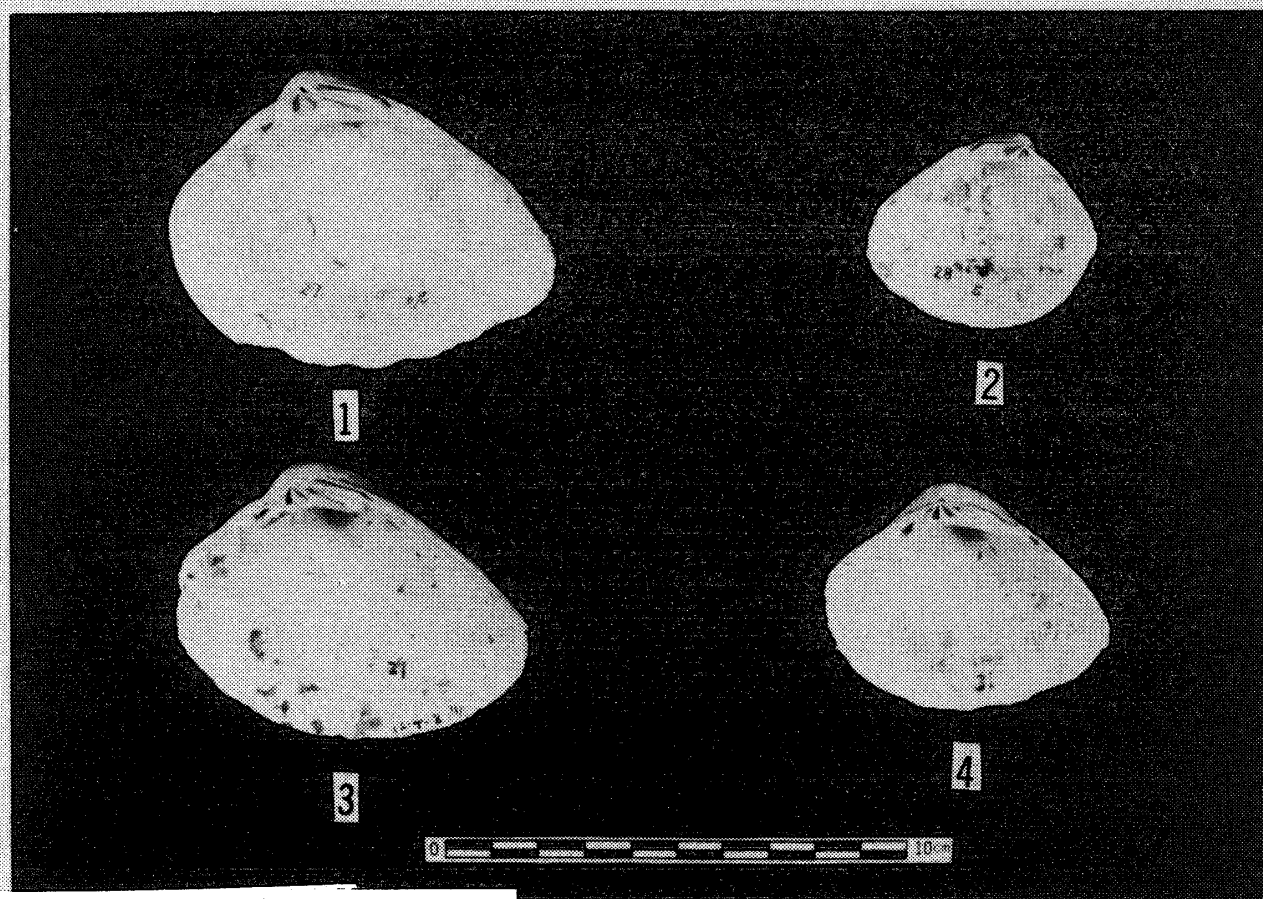
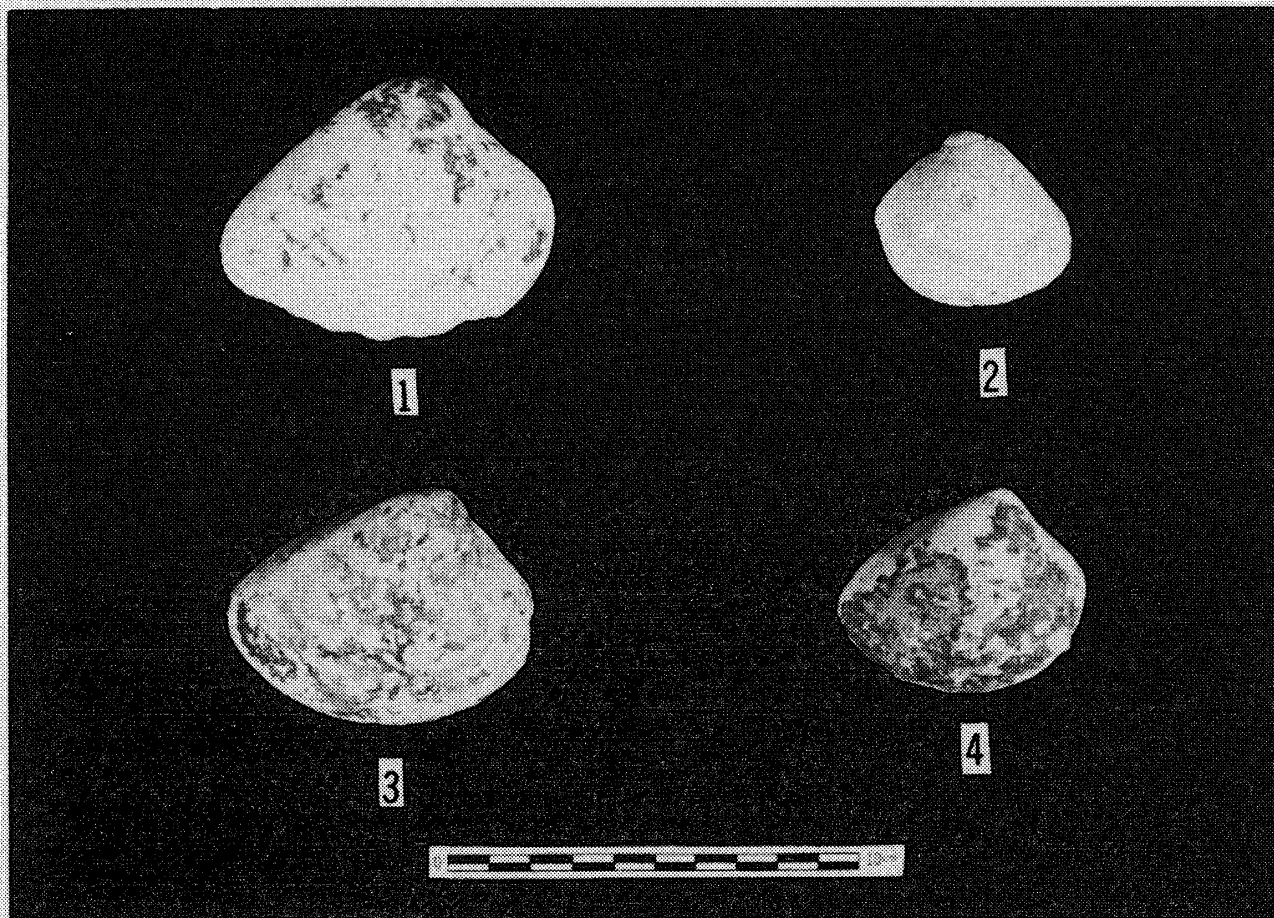
第3図版 骨製品および貝製品（上は表・下は裏）



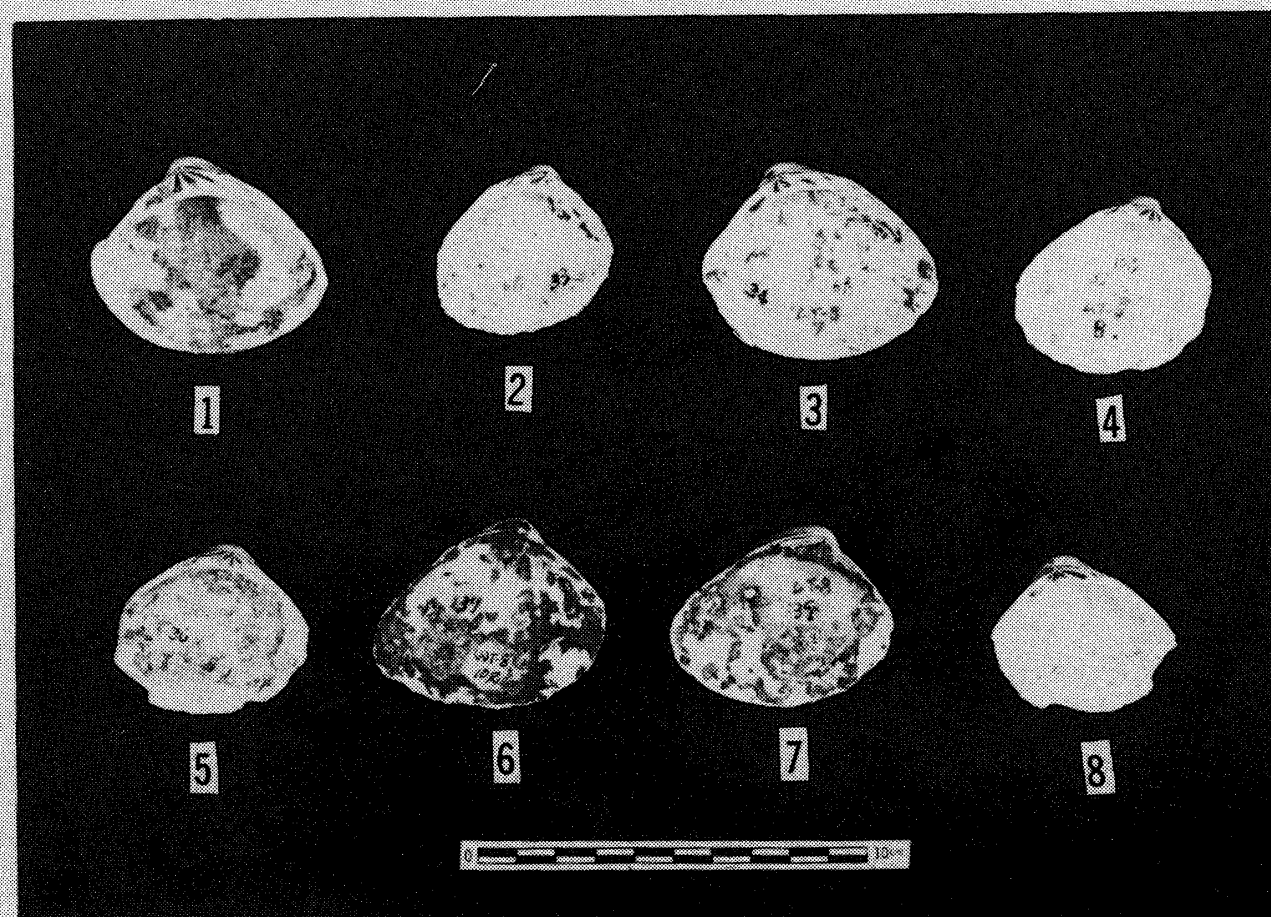
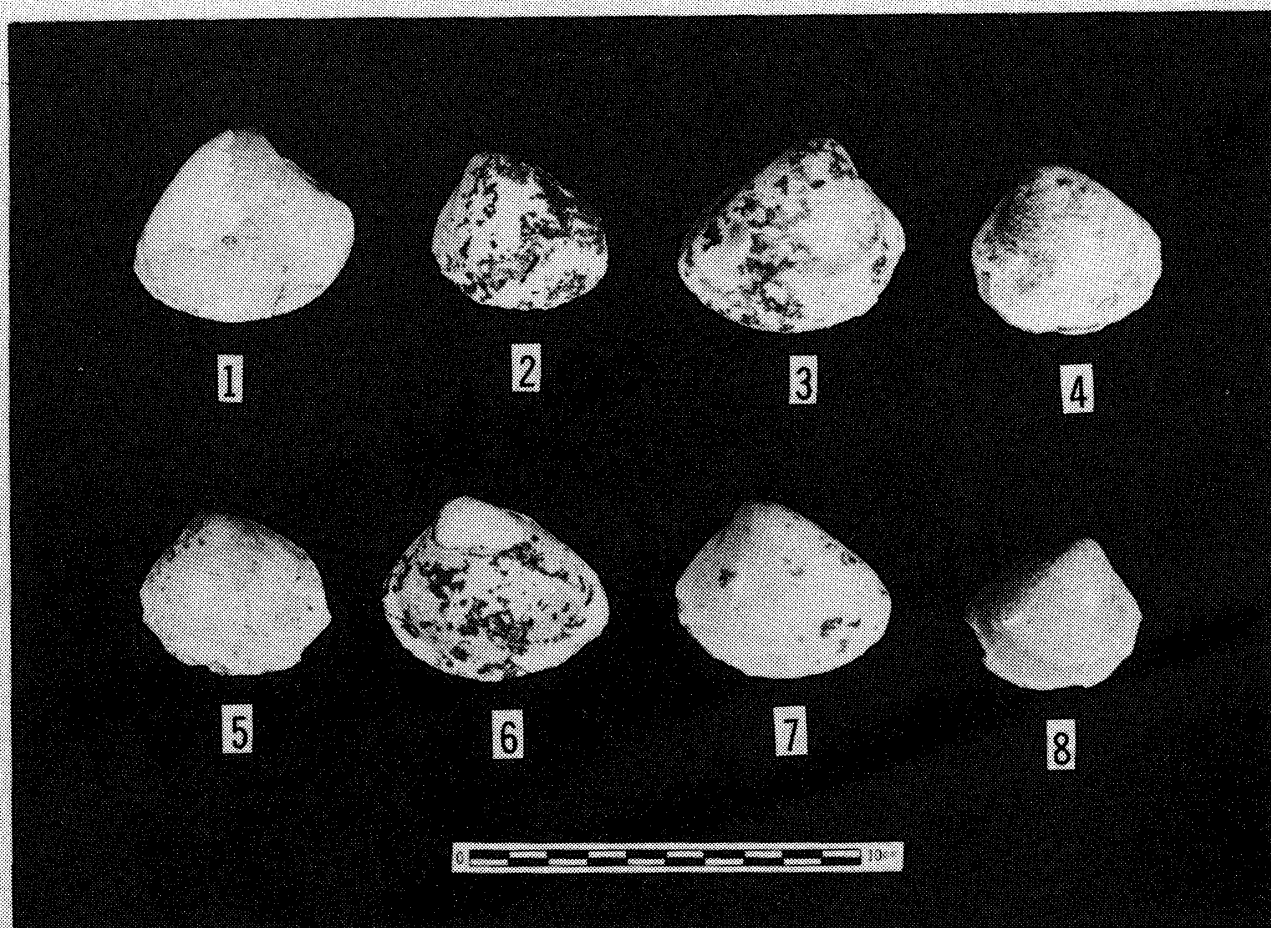
第4図版 貝製品（上は表・下は裏）



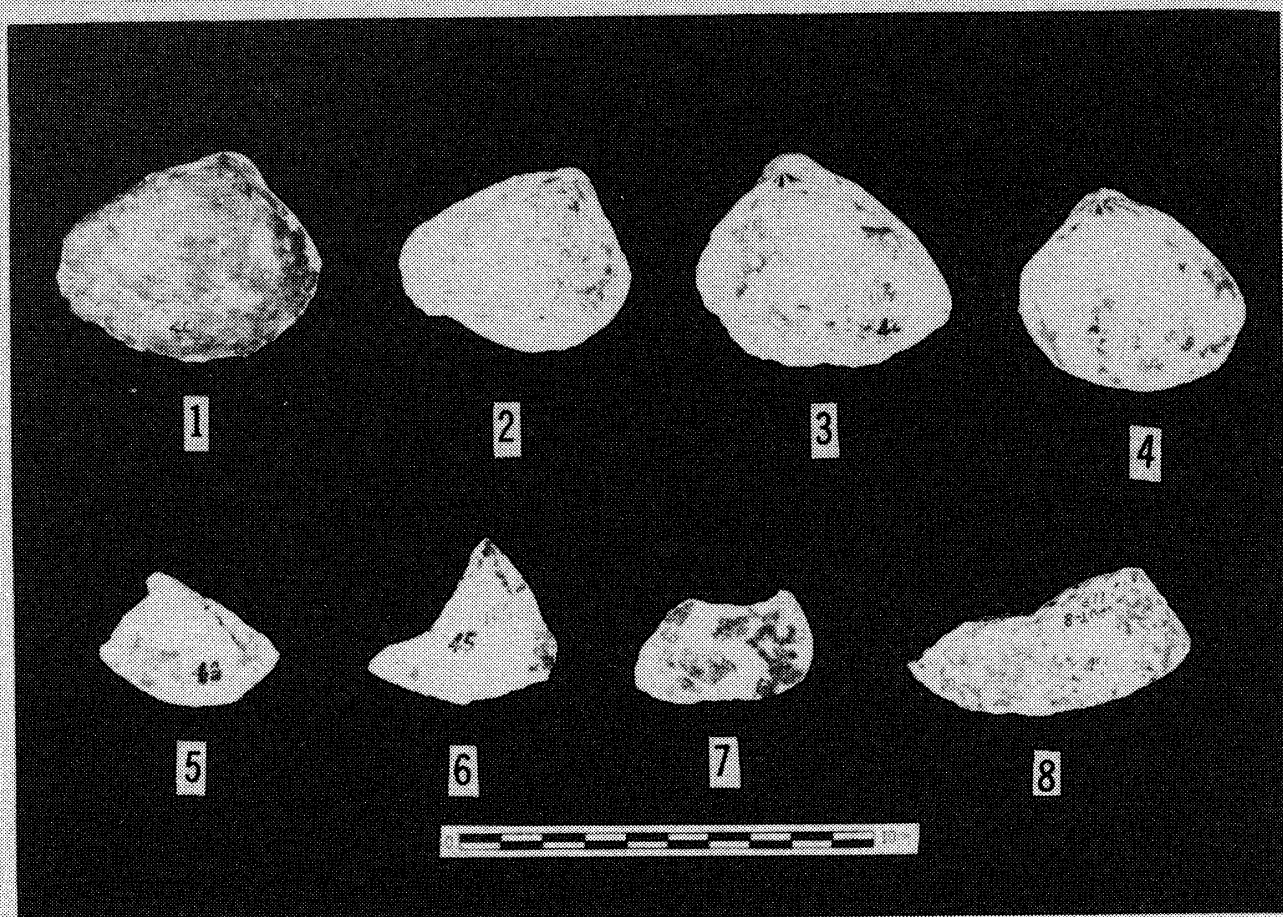
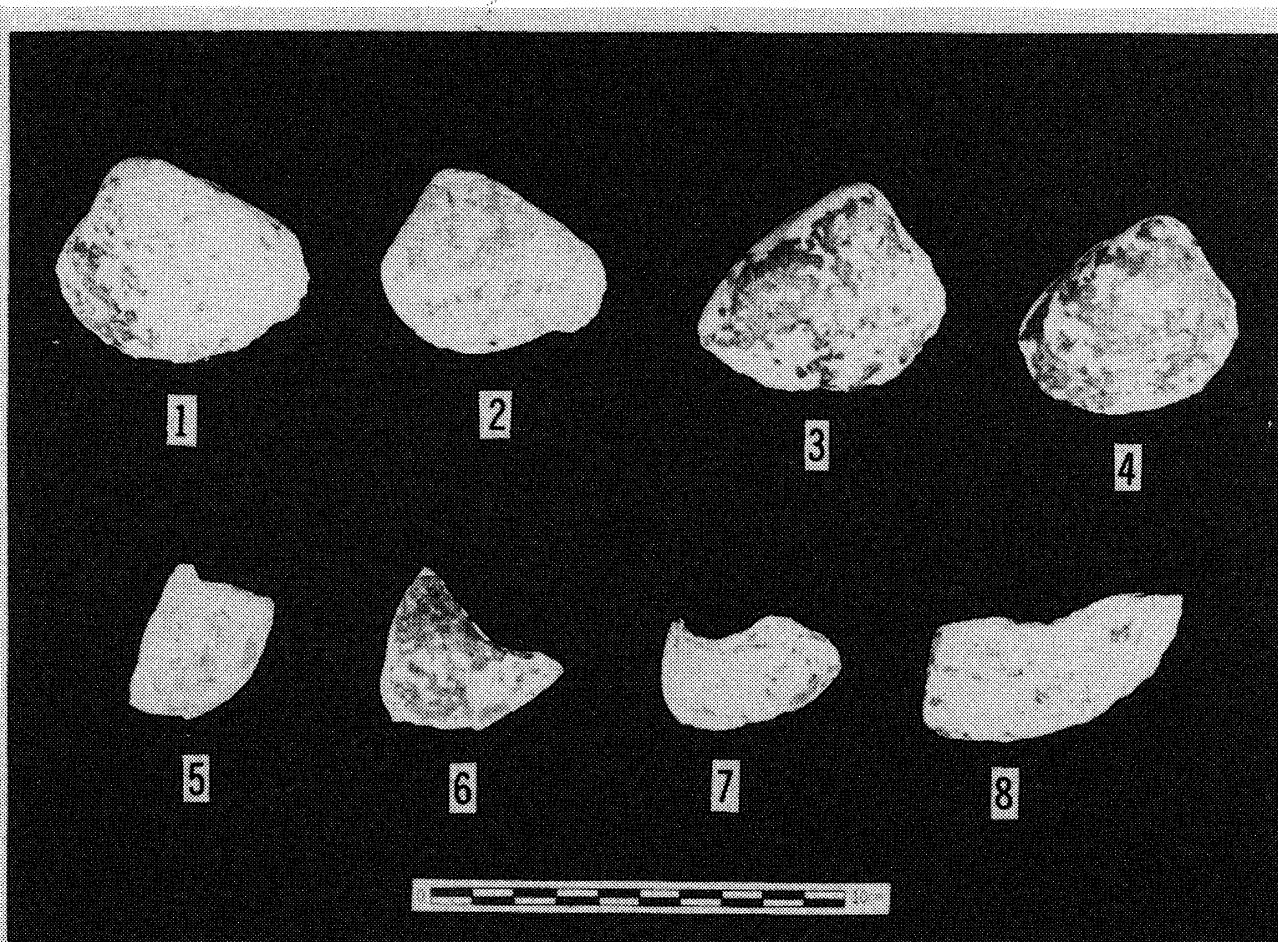
第5図版 貝製品および貝刃（上は表・下は裏）



第6図版 貝 刃 (上は表・下は裏)



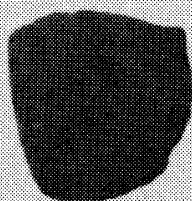
第7図版 貝 刃 (上は表・下は裏)



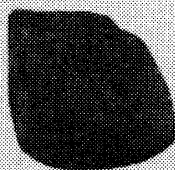
第8図版 貝 刃（上は表・下は裏）



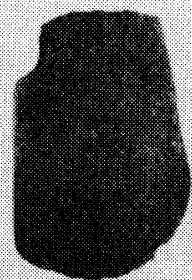
1



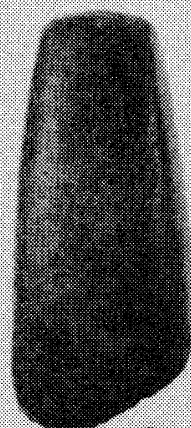
2



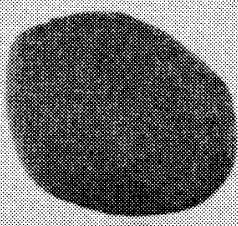
3



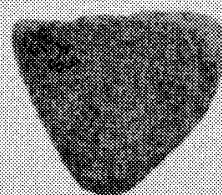
4



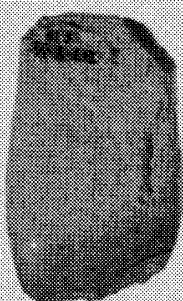
5



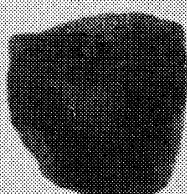
6



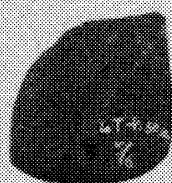
7



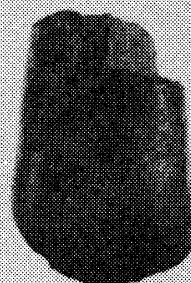
1



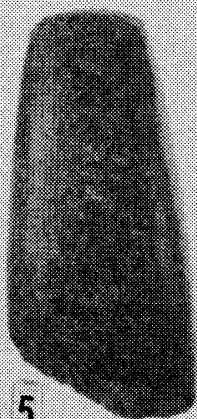
2



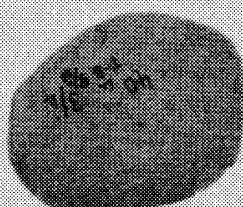
3



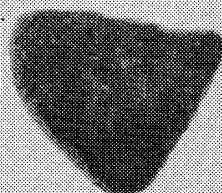
4



5



6

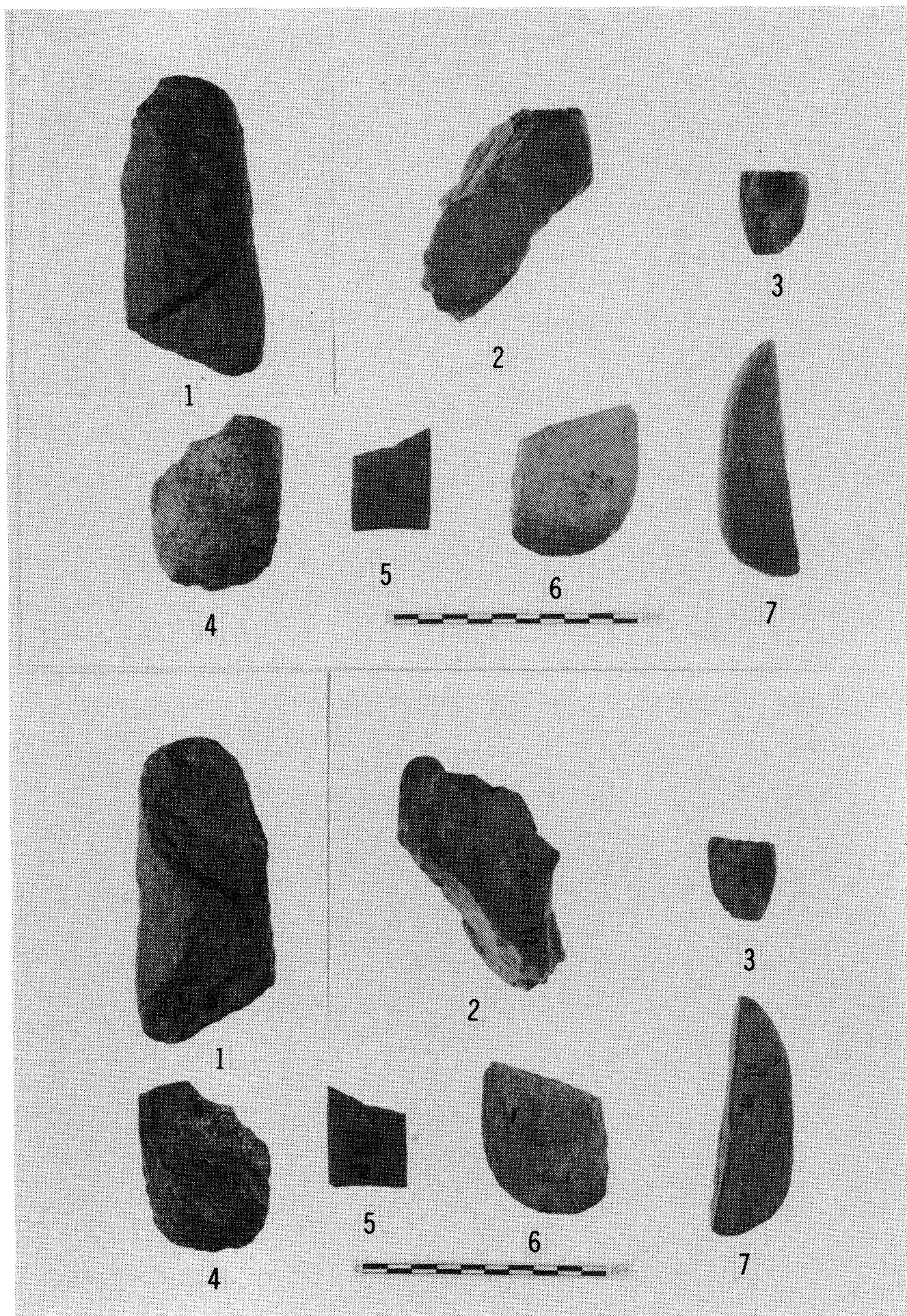


7



第9図版 石 器（上は表・下は裏）

（1～5は石斧、6はその他の石器・7は石皿）

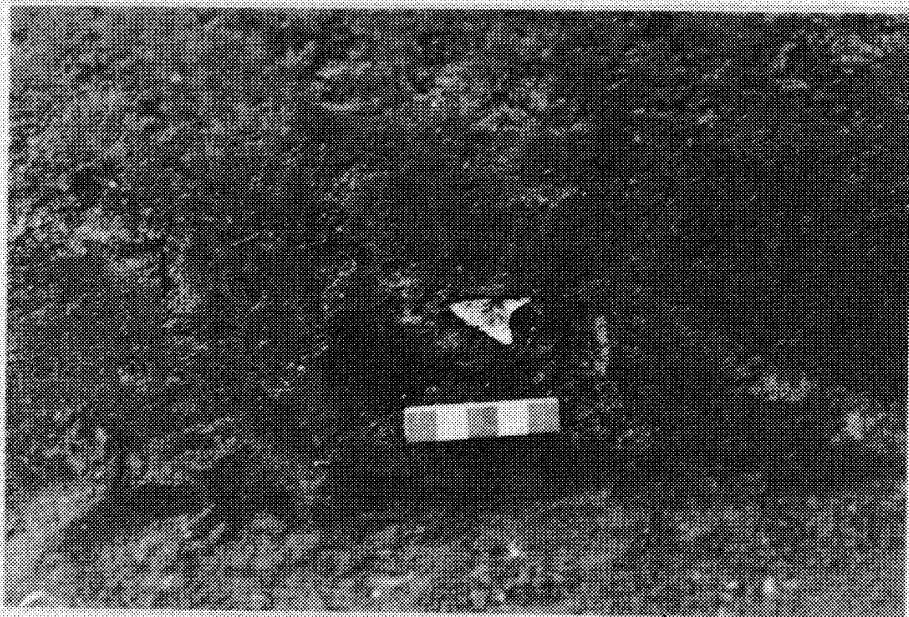


第10図版 石 器（上は表・下は裏）

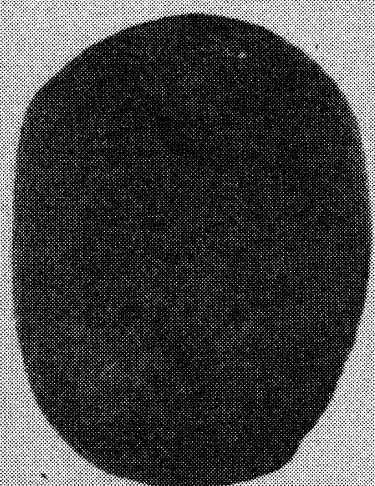
（ 1 ・ 3 ・ 4 は石斧 ・ 2 は石皿 ・ 5 ・ 6 はその他の石器）



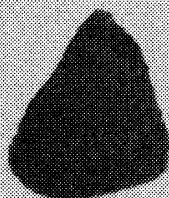
1



2



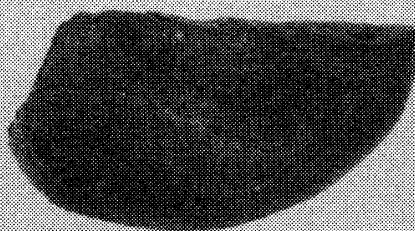
1



2



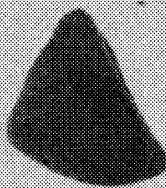
3



4



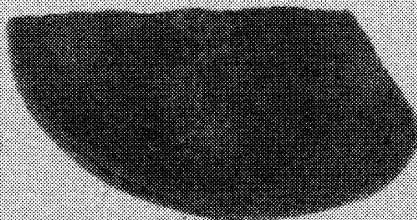
1



2



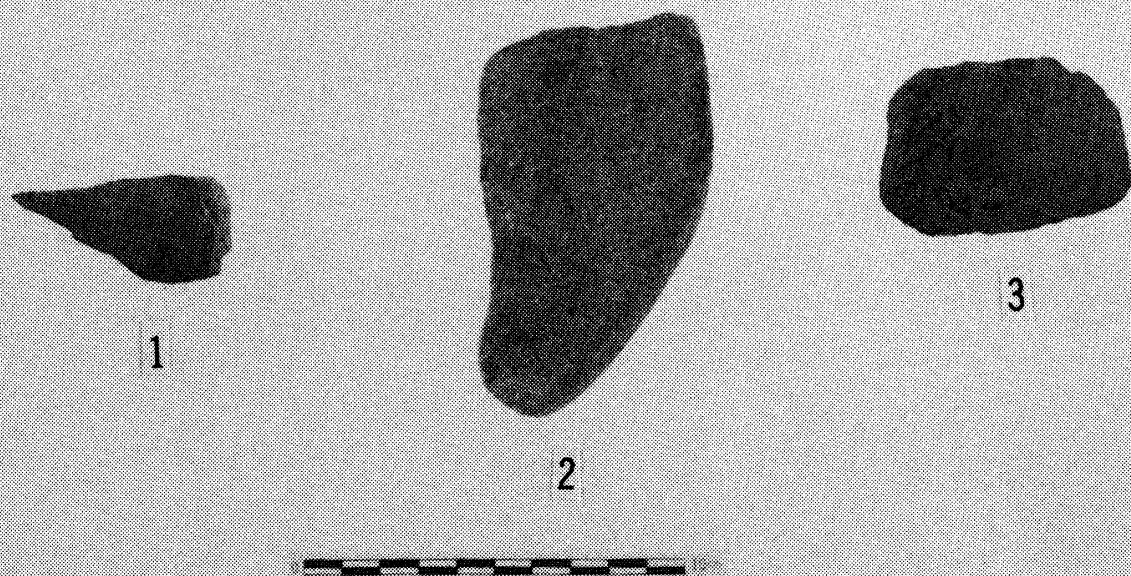
3



4

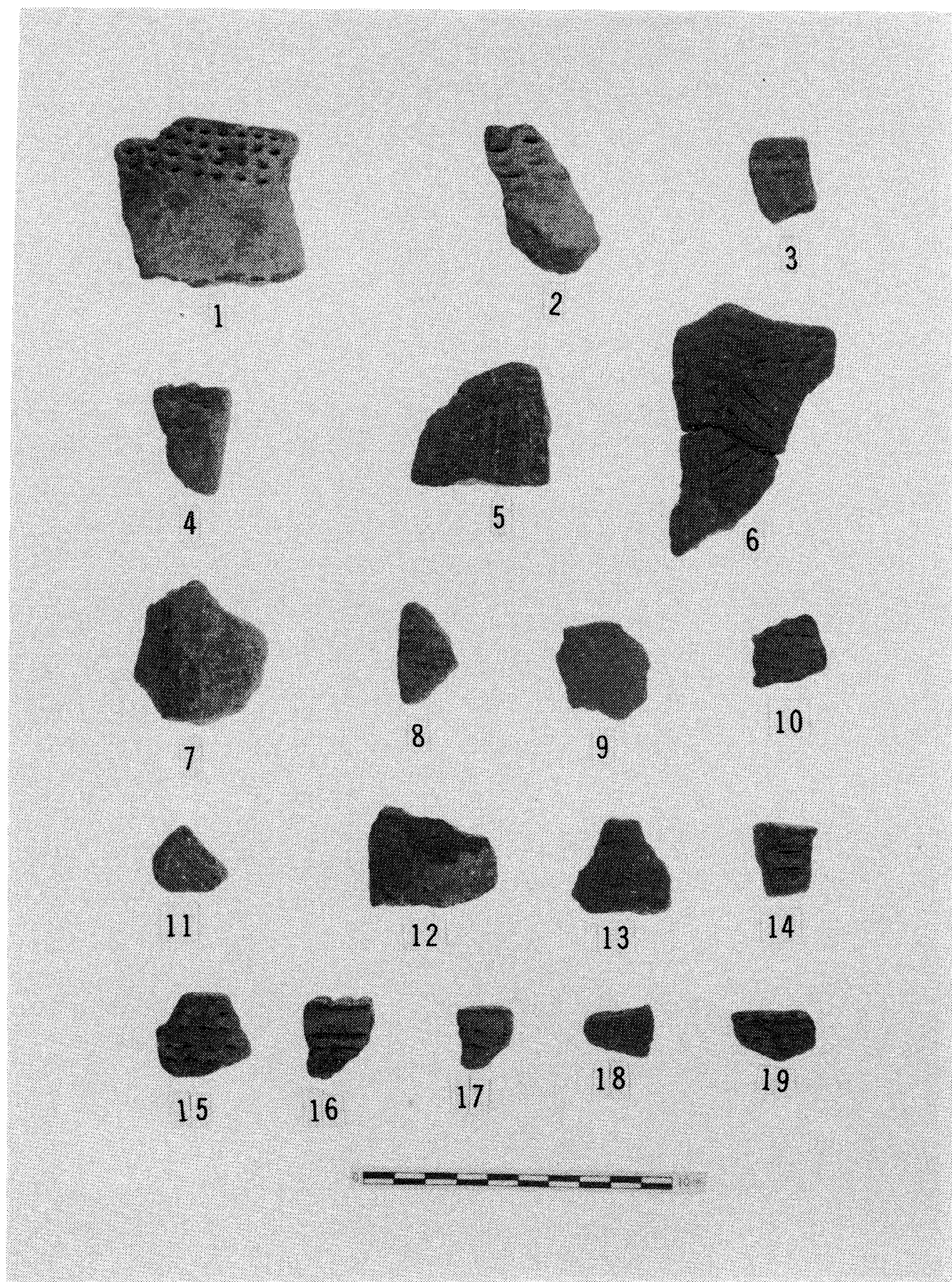


第12図版 石 器（上は表・下は裏）
（1・2・4は磨石、3は石皿）

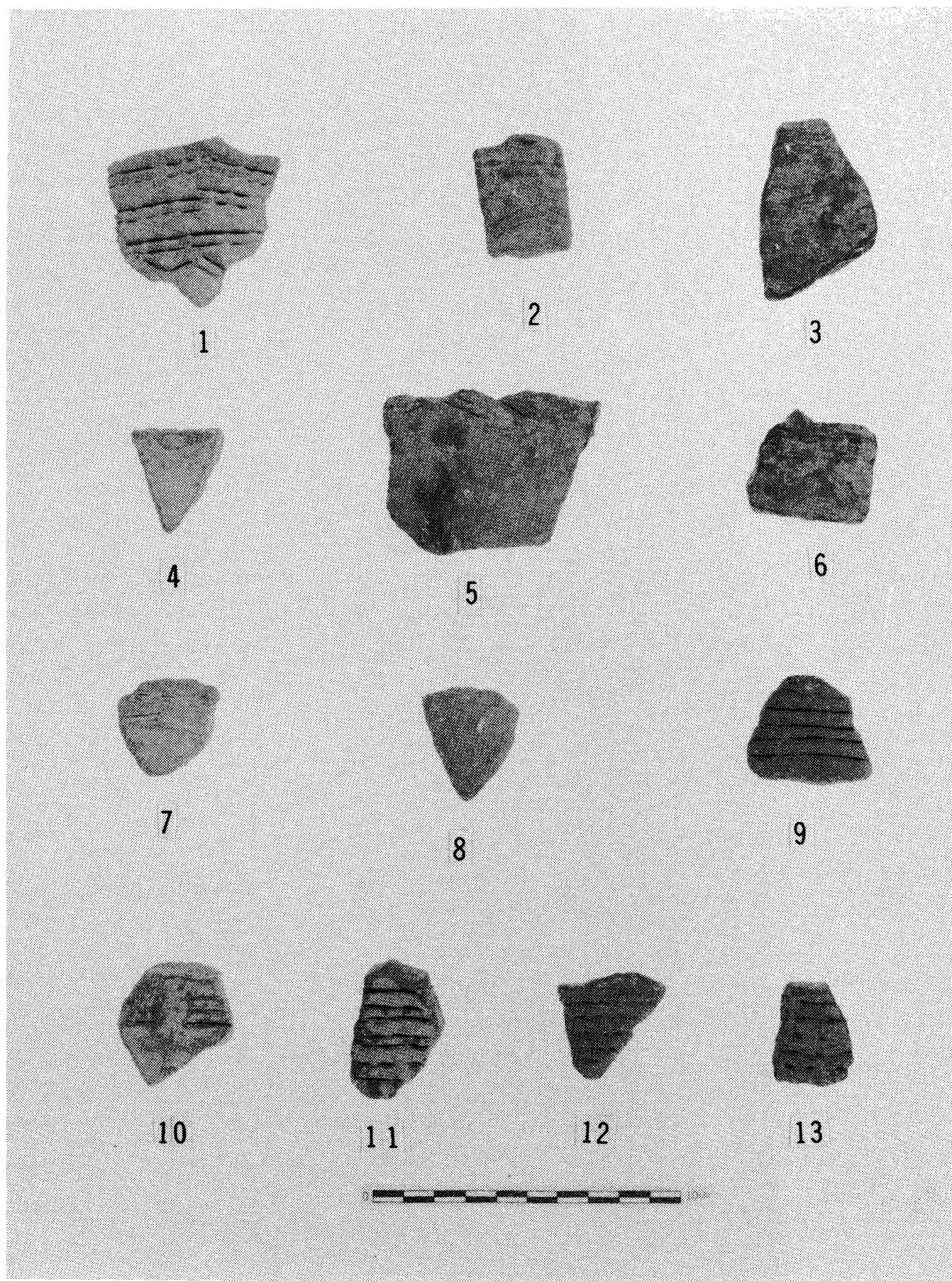


第13図版 石 器（上は表・下は裏）

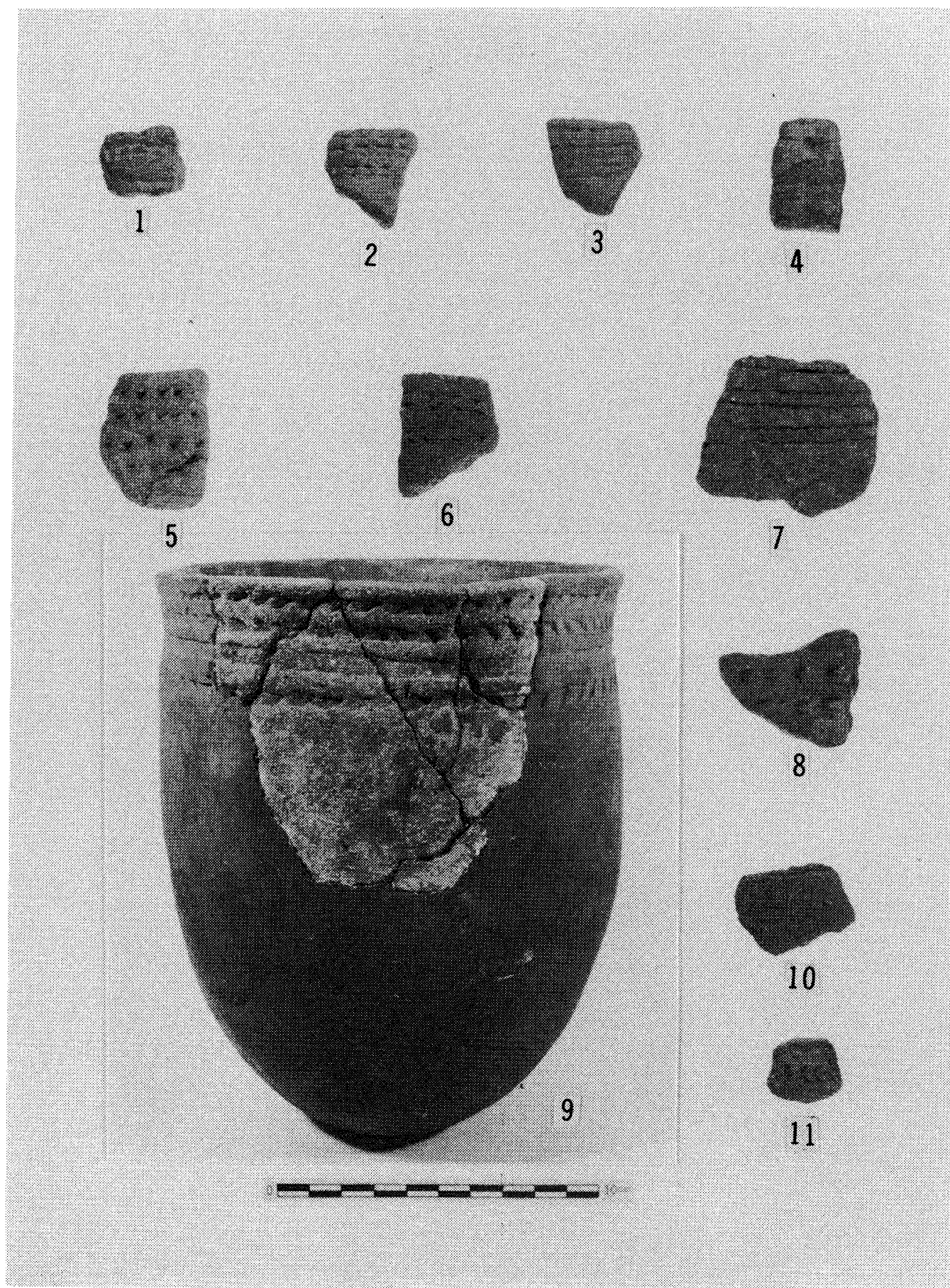
（1は磨石、2は石皿、3はその他の石器）



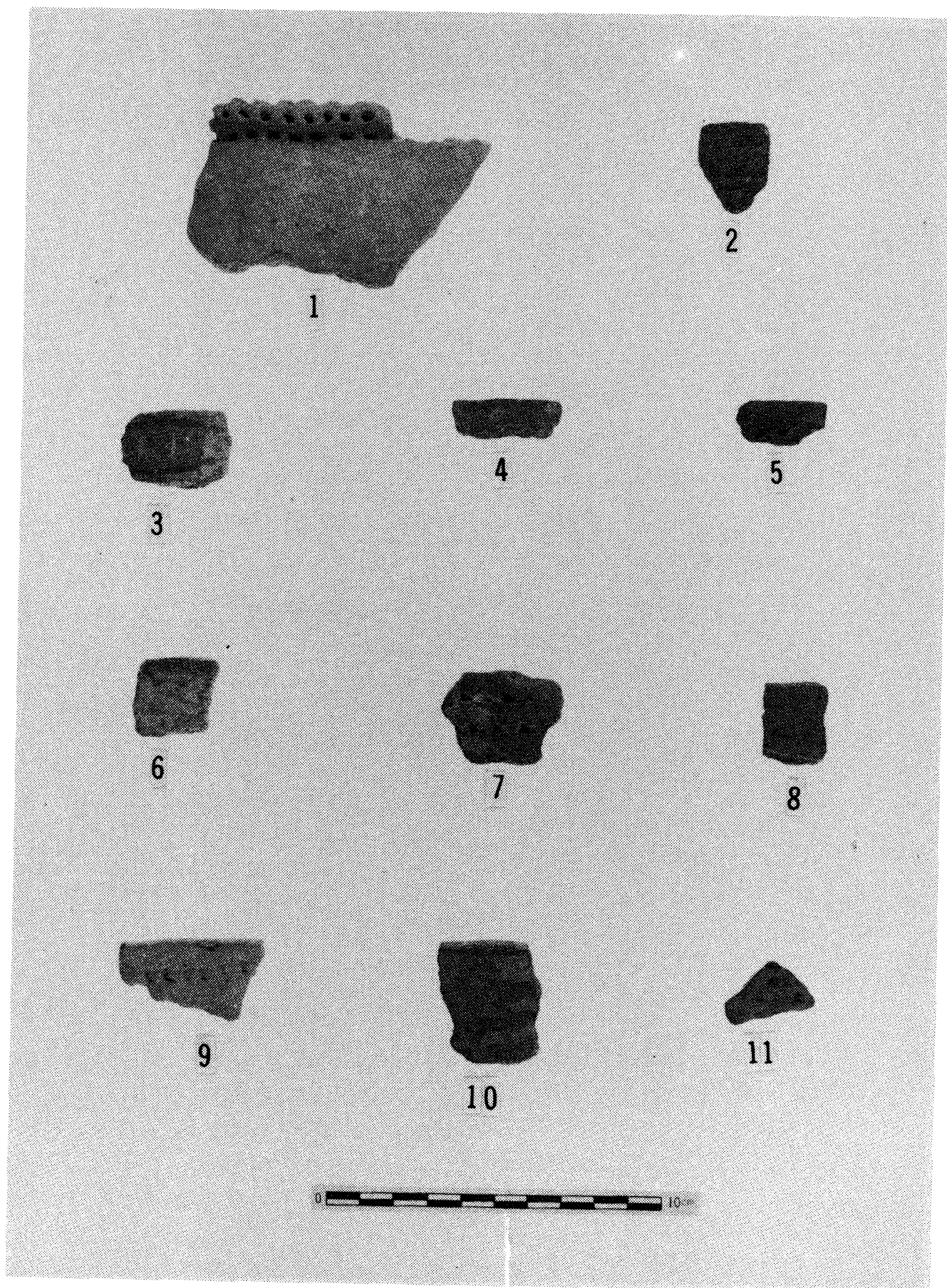
第14図版 伊波式土器



第15图版 荻 堂 式 土 器



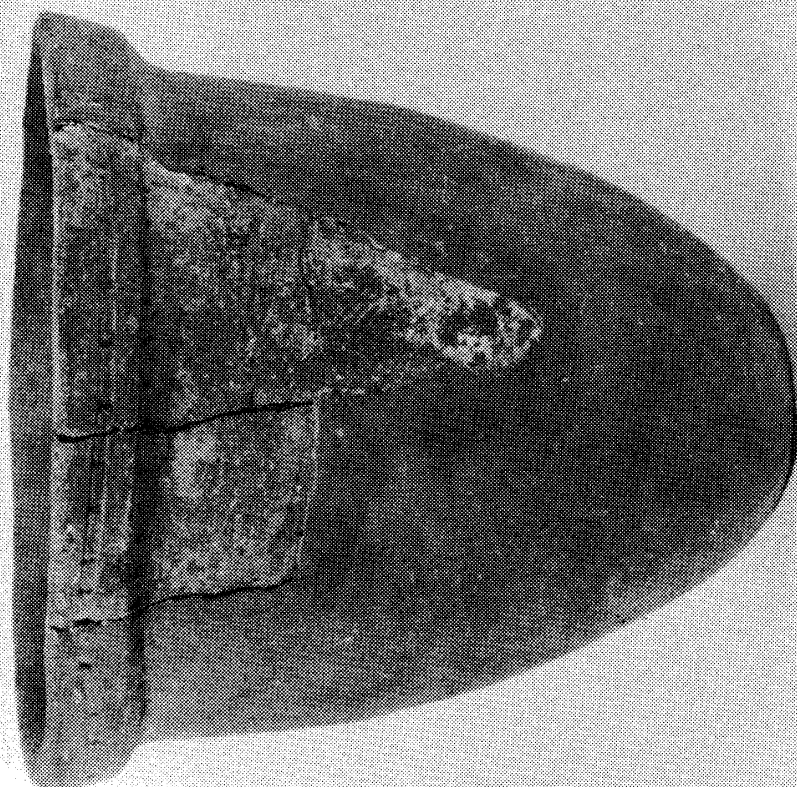
第16図版 荻堂式土器（1～6）と大山式土器（7～11）



第17図版 大山式土器

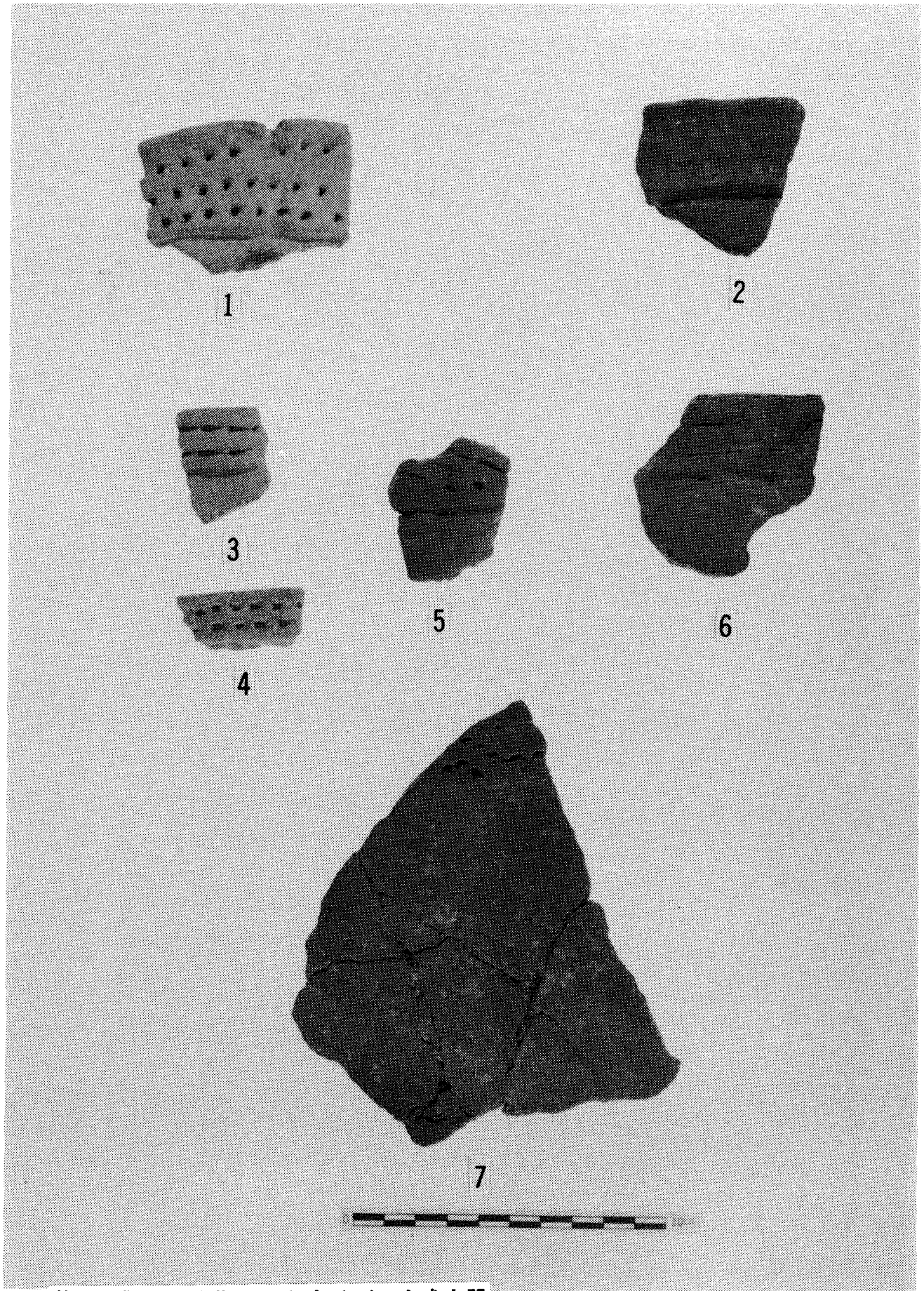


2

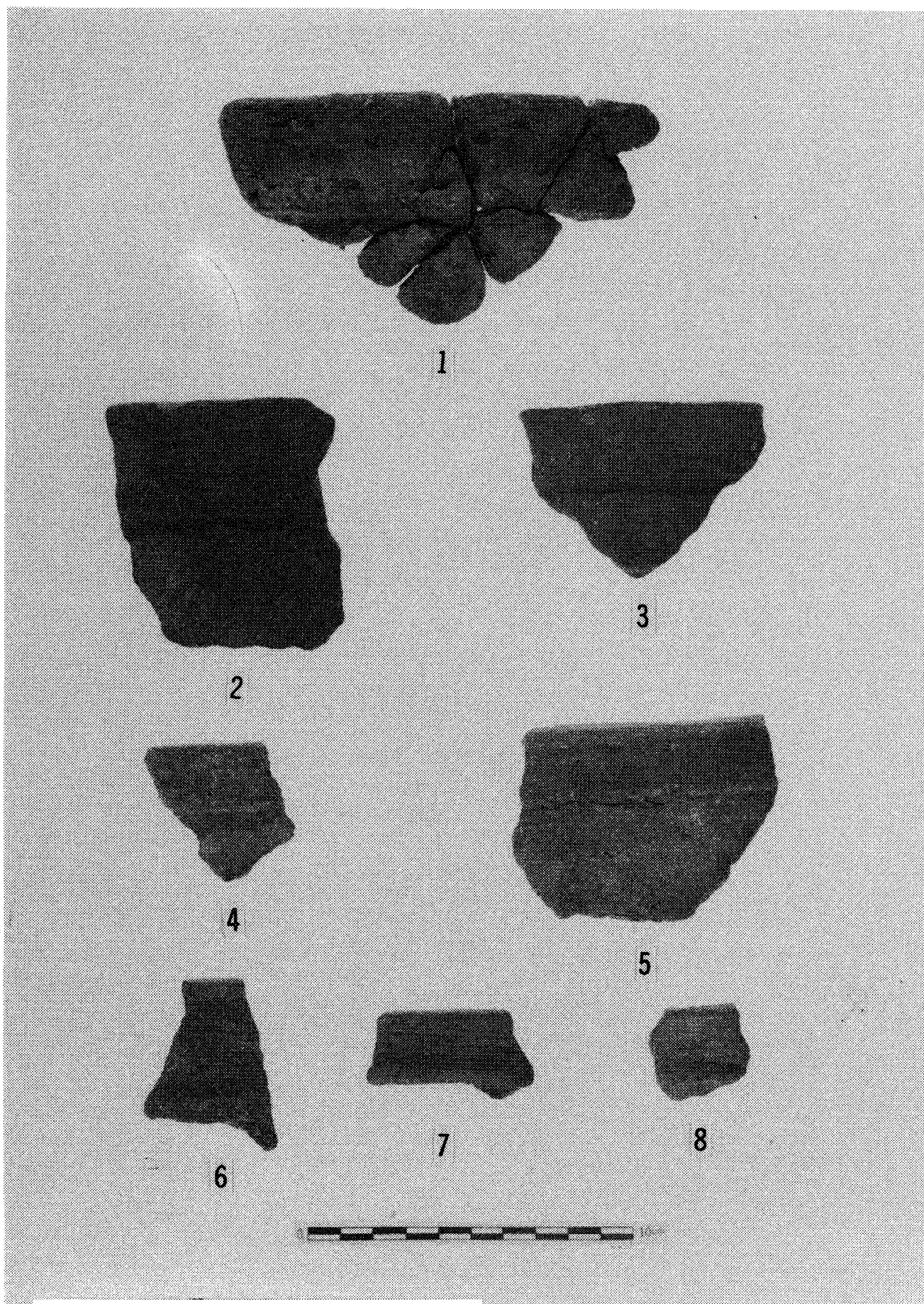


1

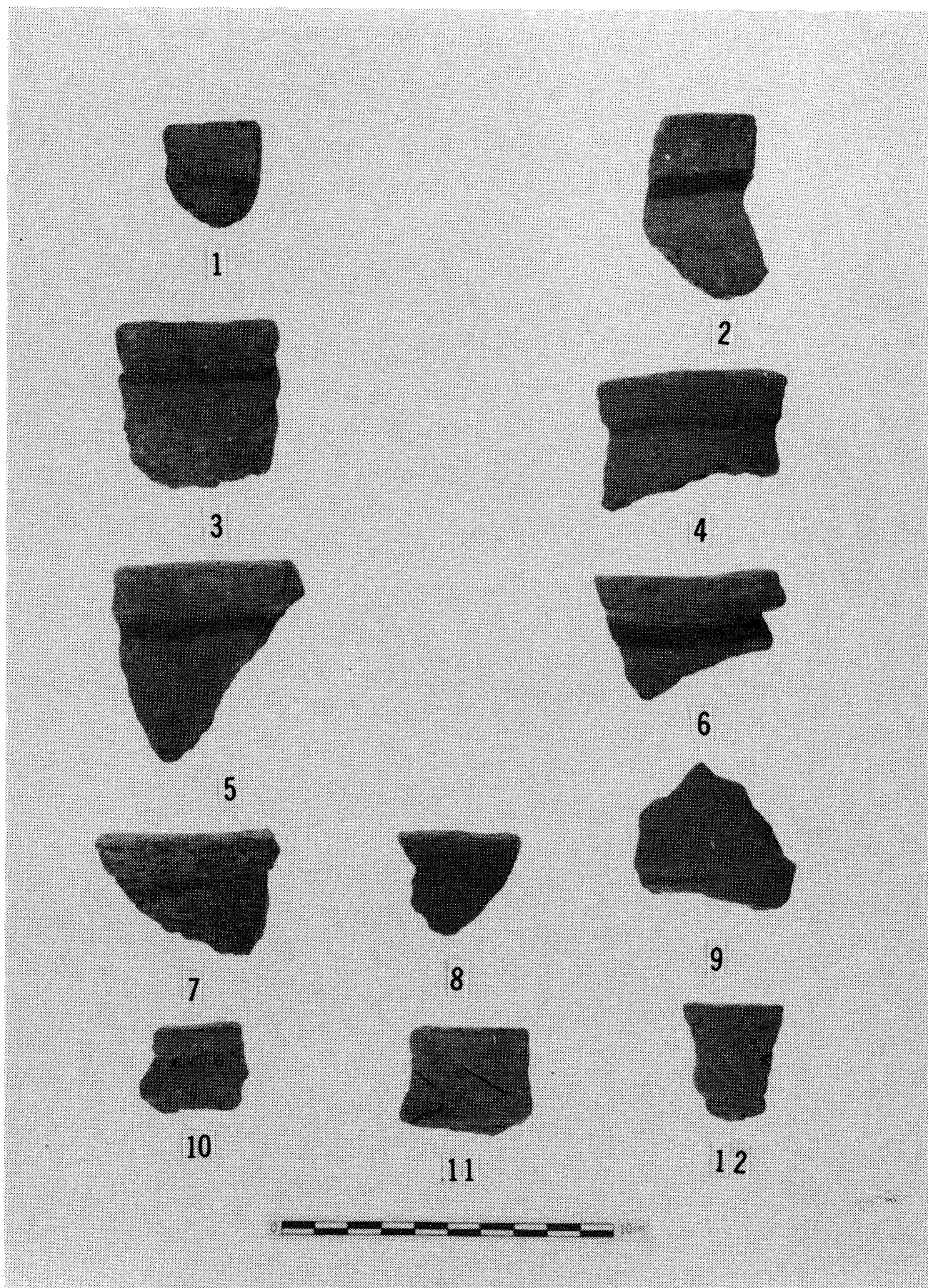
第18図版 大山期のカヤウチバンタ式土器(1)および室川A期の
カヤウチバンタ式土器(2)



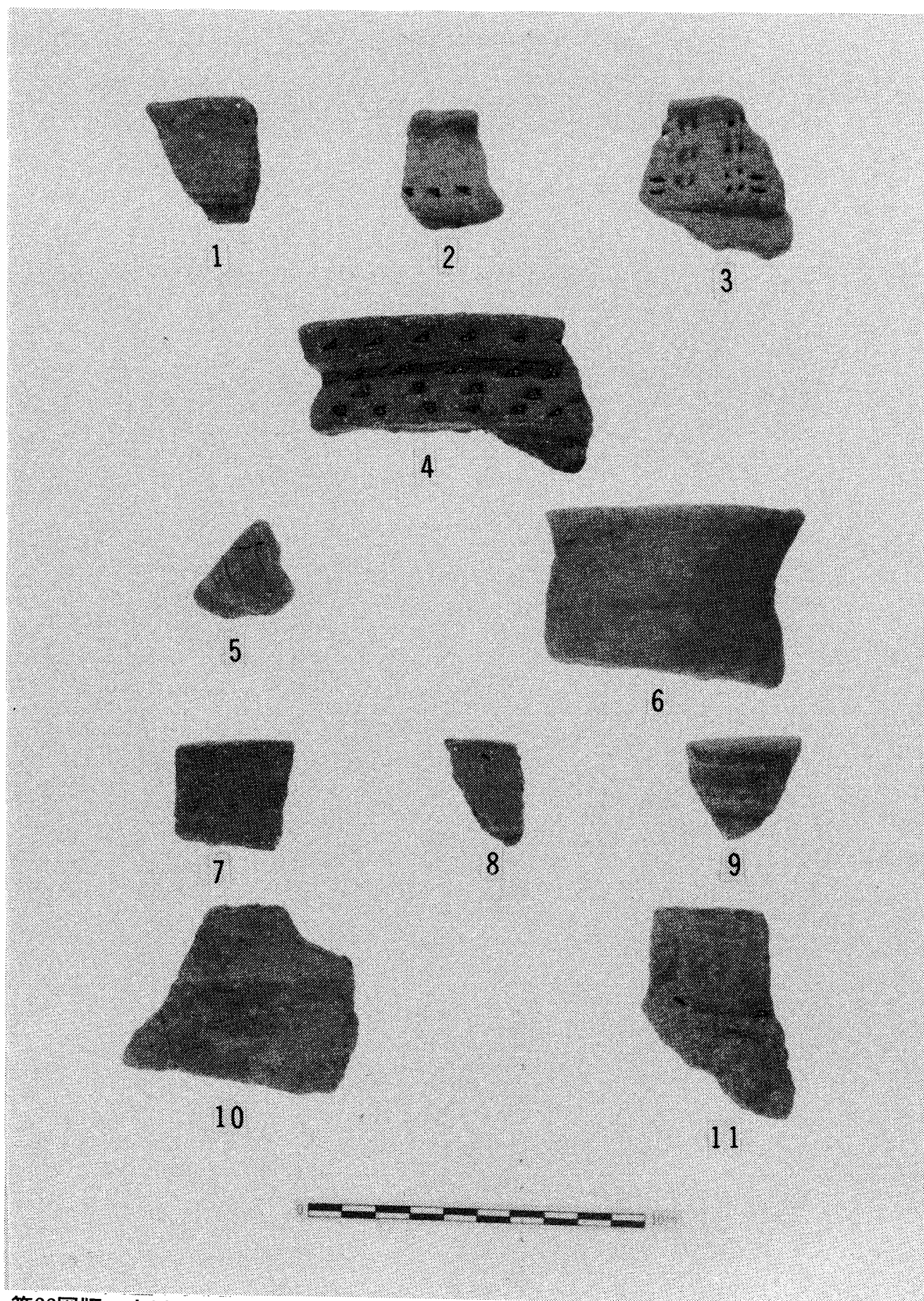
第19図版 大山期のカヤウチバンタ式土器



第20図版 大山期のカヤウチバンタ式土器



1図版 大山期のカヤウチバンタ式（1～9）および室川A期のカヤウチバンタ式土器（10～12）



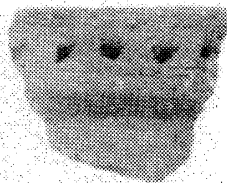
第22図版 室川A期のカヤウチバンタ式土器



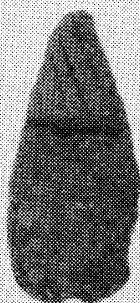
1



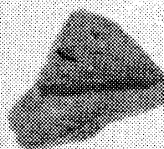
2



3



4



5



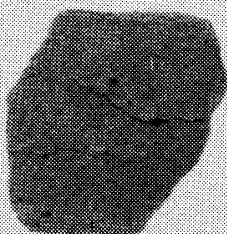
6



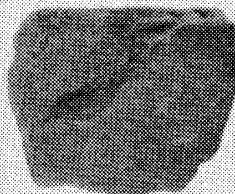
7



8



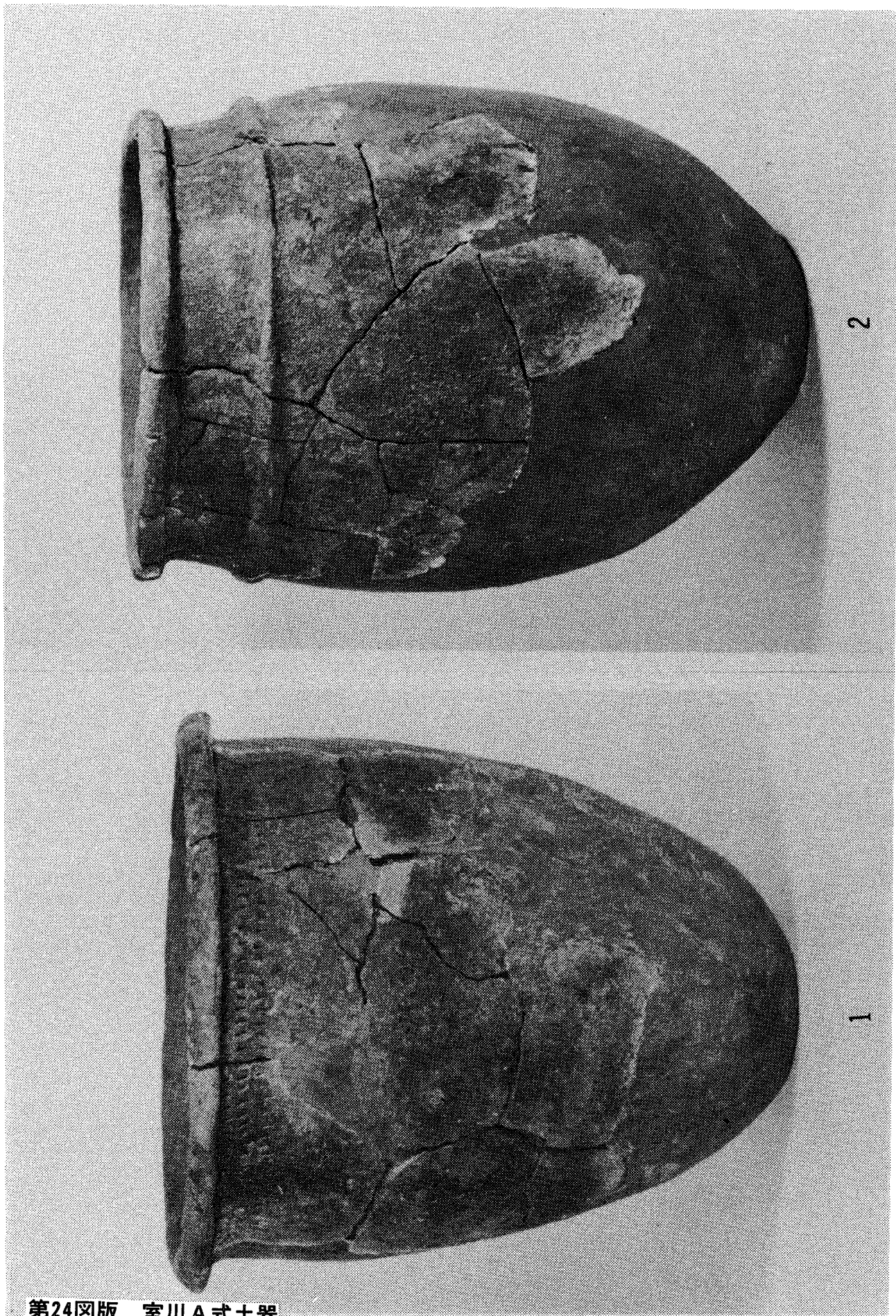
9



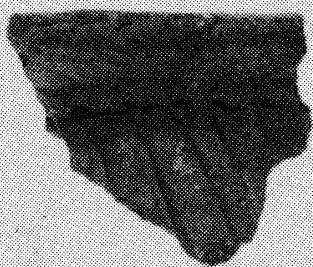
10



第23図版 室川B期のカヤウチバンタ式（1～6）および室川上層期のカヤウチバンタ式（7～9）と宇佐浜期のカヤウチバンタ式土器（10）



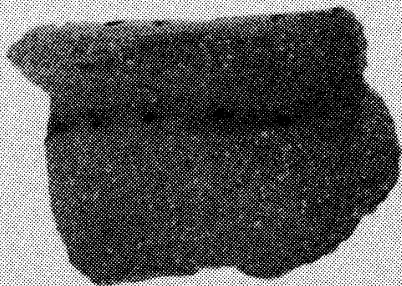
第24図版 室川A式土器



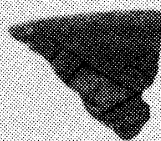
1



2



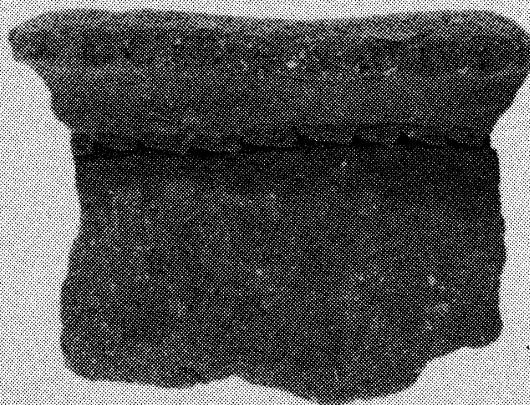
3



4



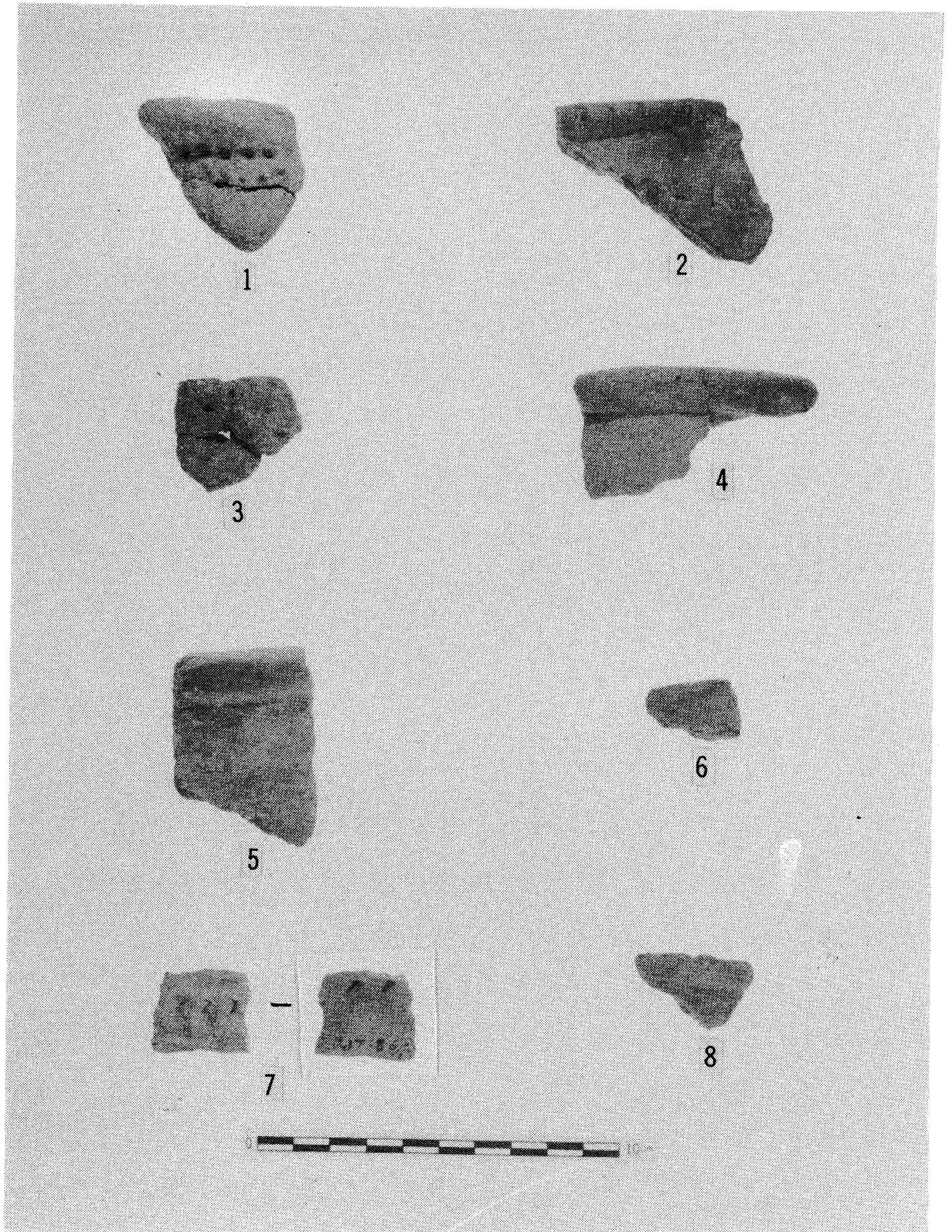
5



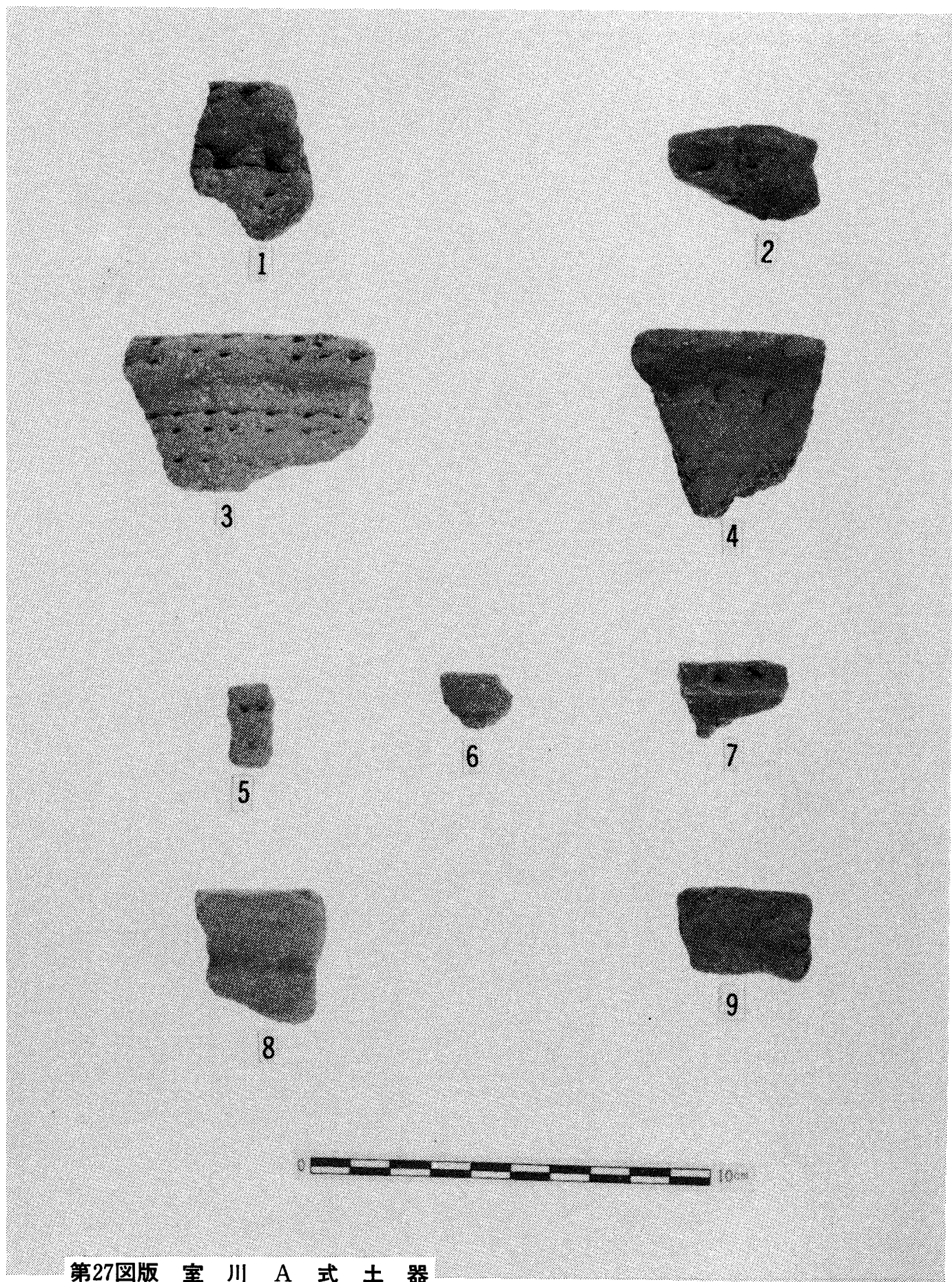
6



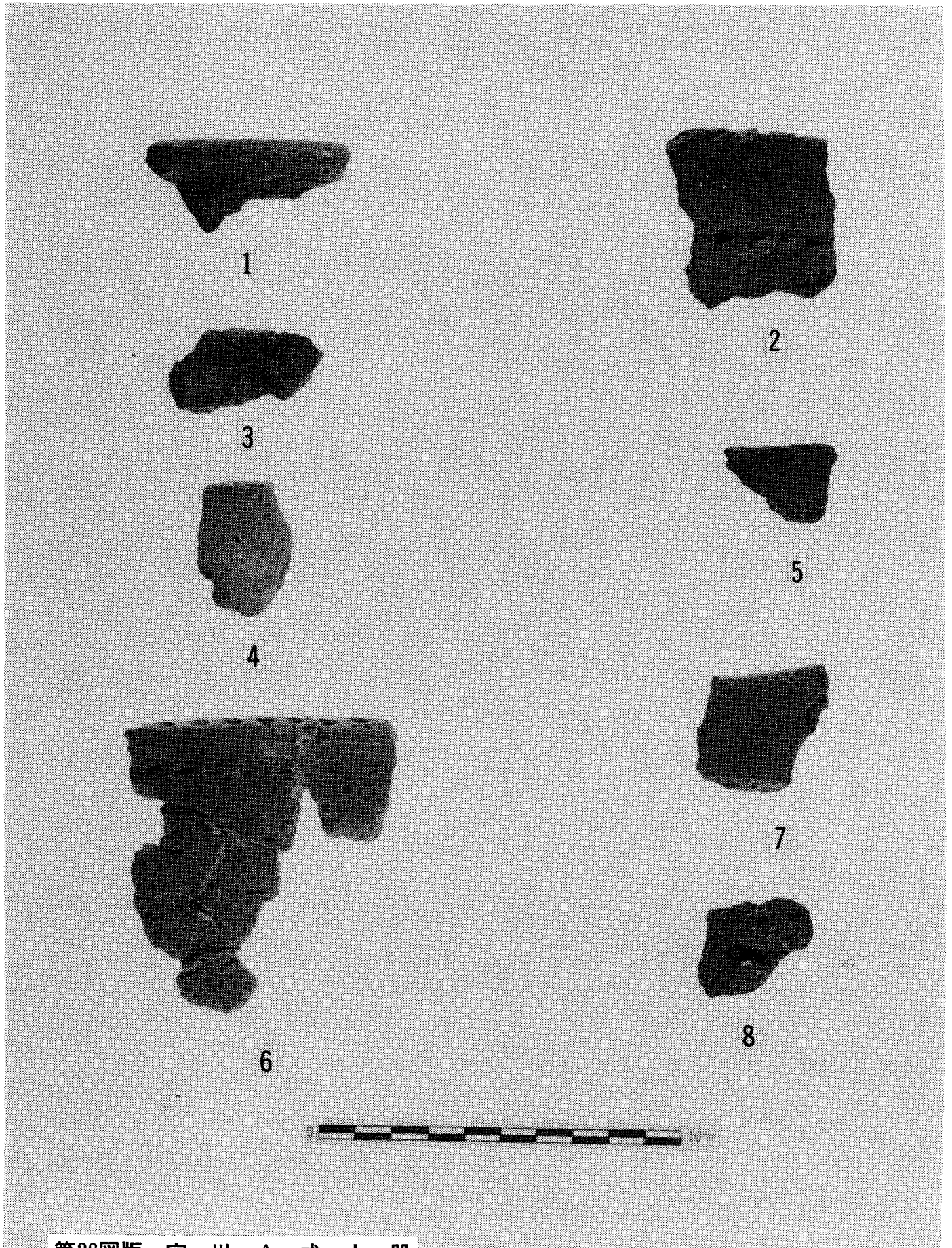
第25図版 室川 A 式 土 器



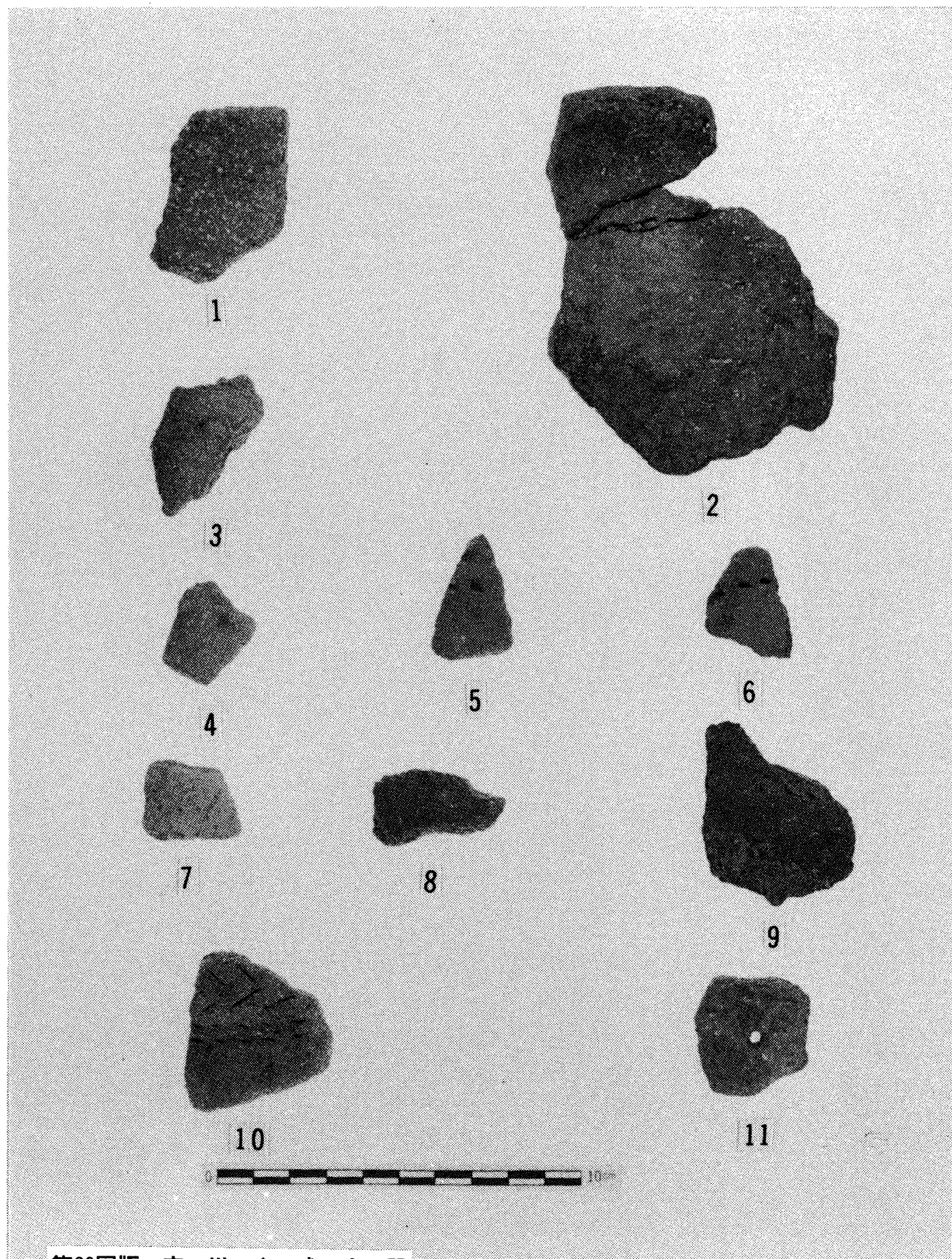
第26図版 室川 A 式 土 器



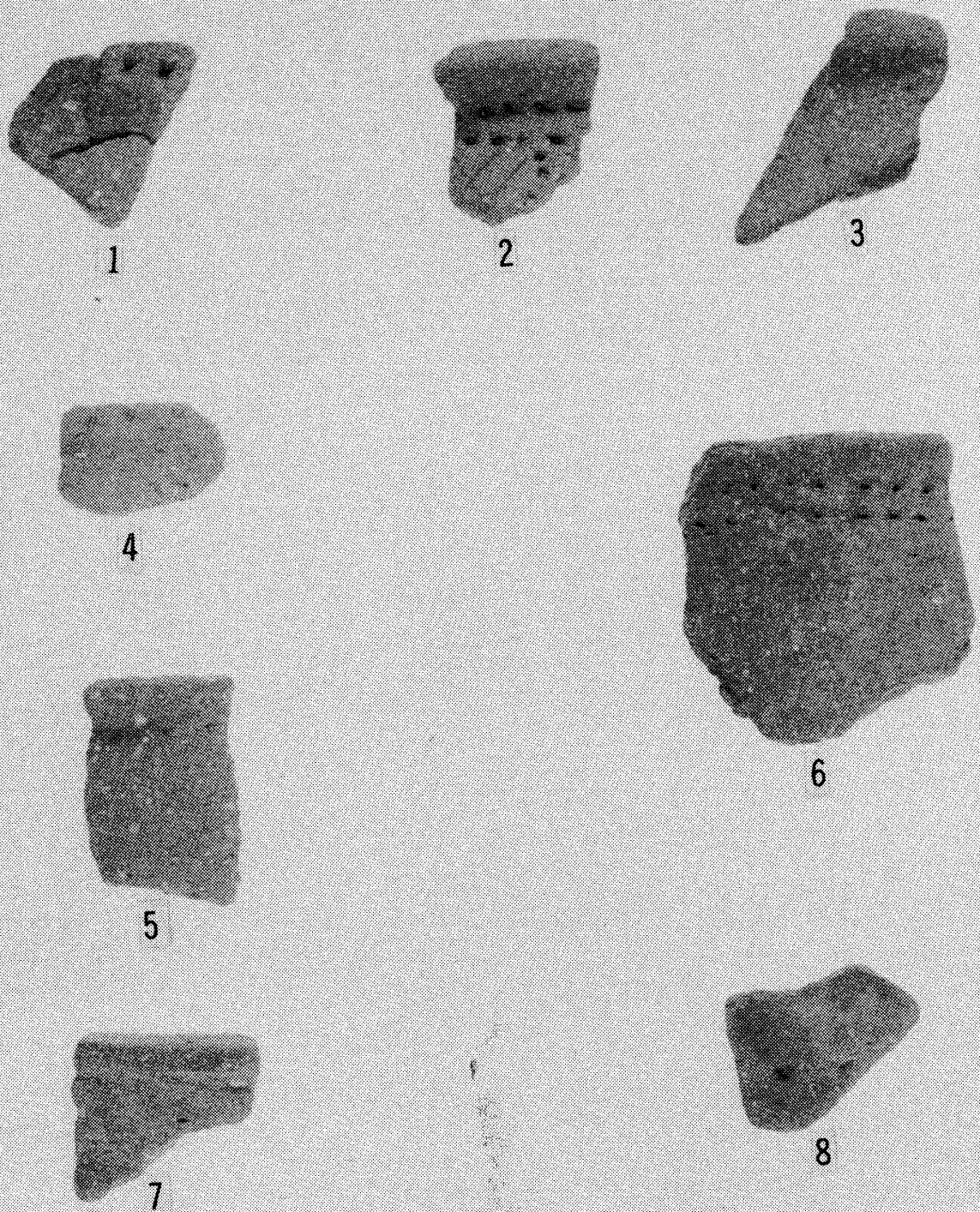
第27図版 室川 A 式 土 器



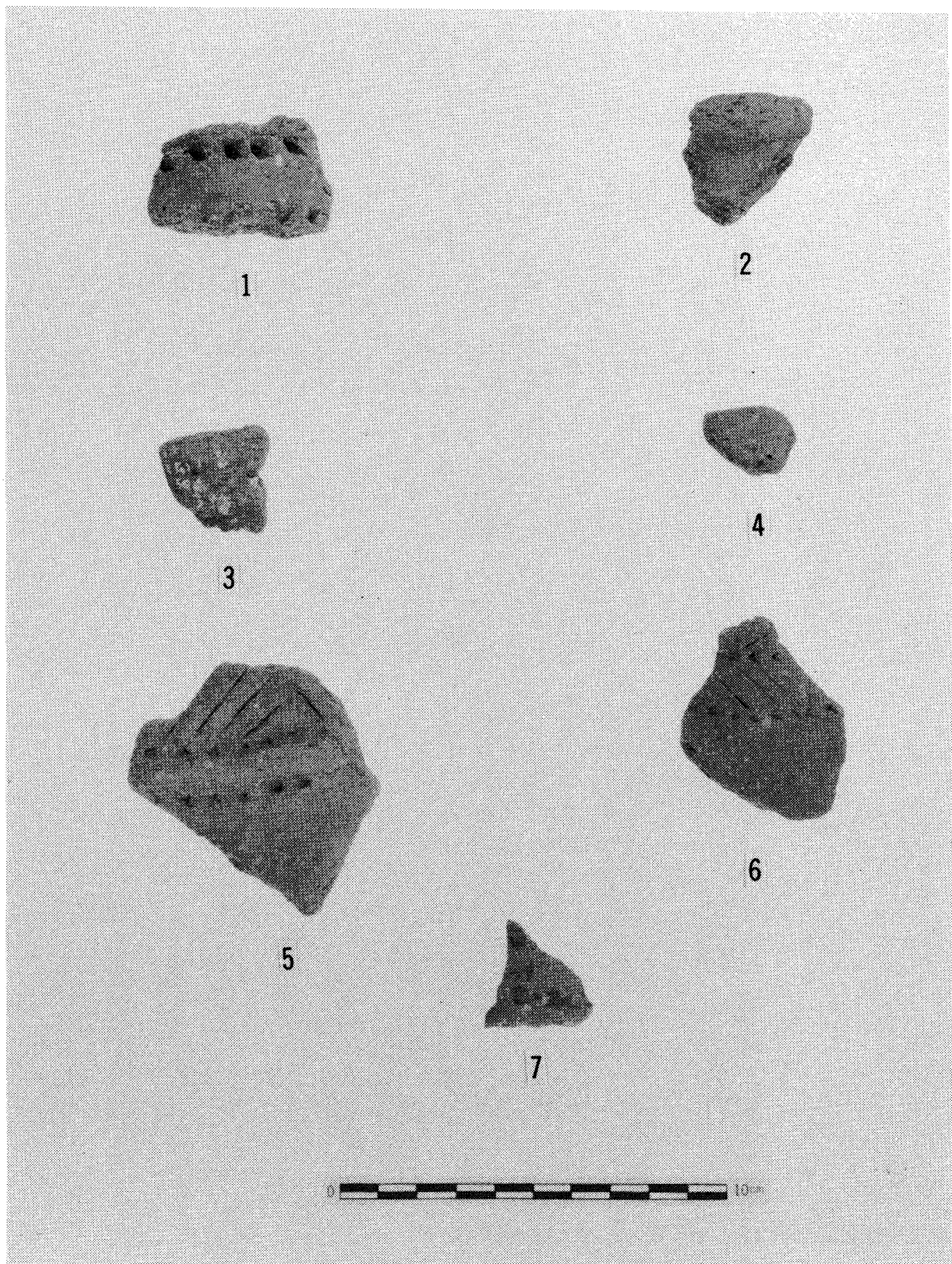
第28図版 室川 A 式 土 器



第29図版 室川 A 式 土 器



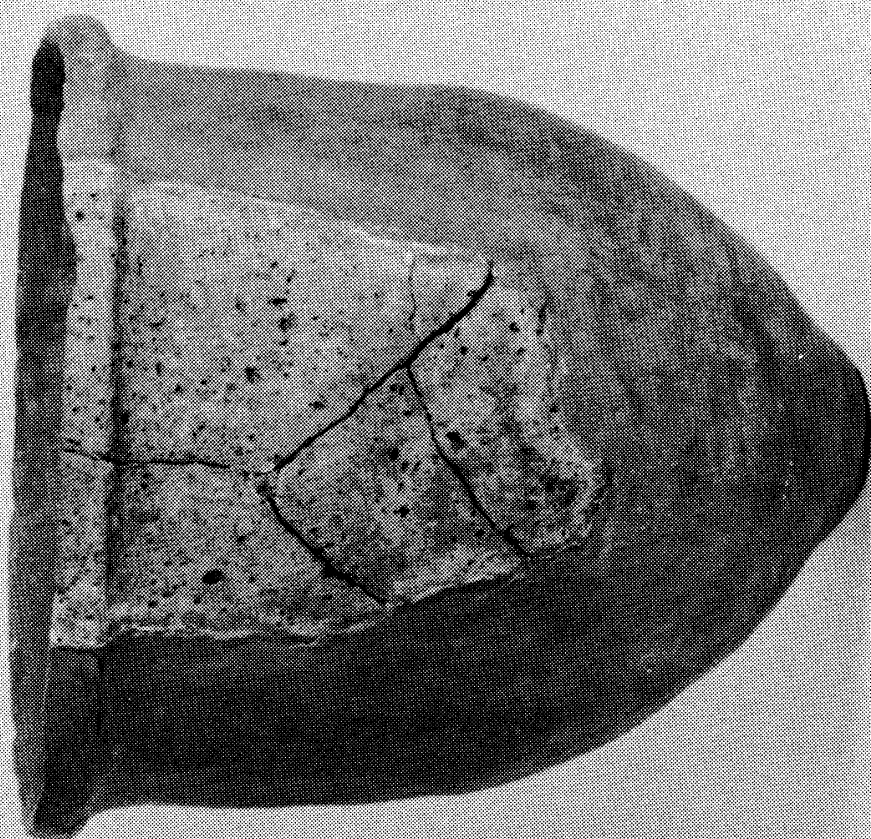
第30図版 室川 B 式 土 器



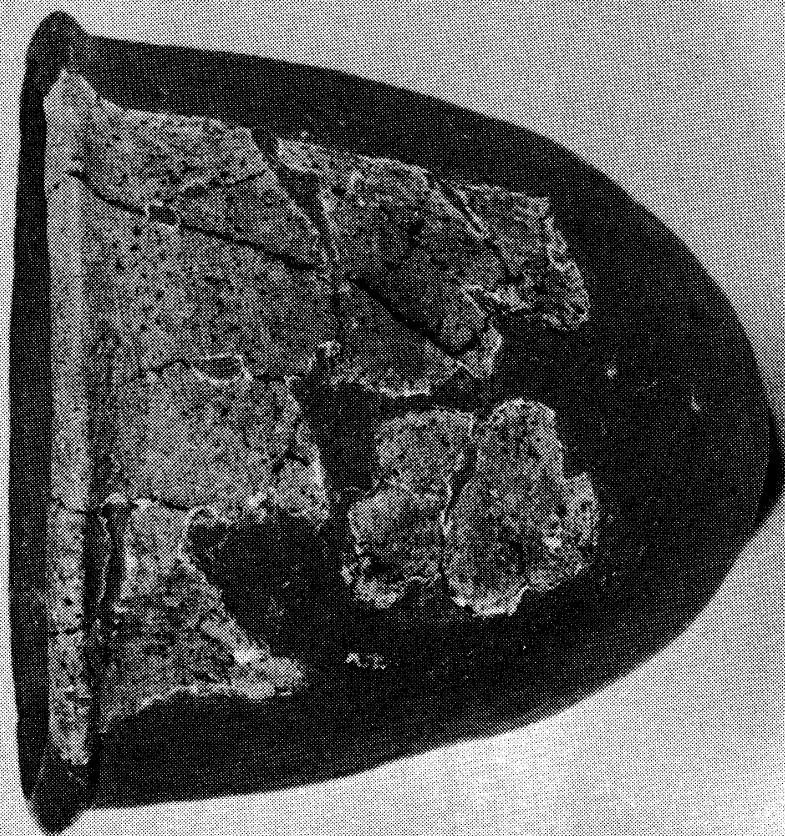
第31図版 室川 B 式 土 器



第32図版 室川上層 A 式 土器

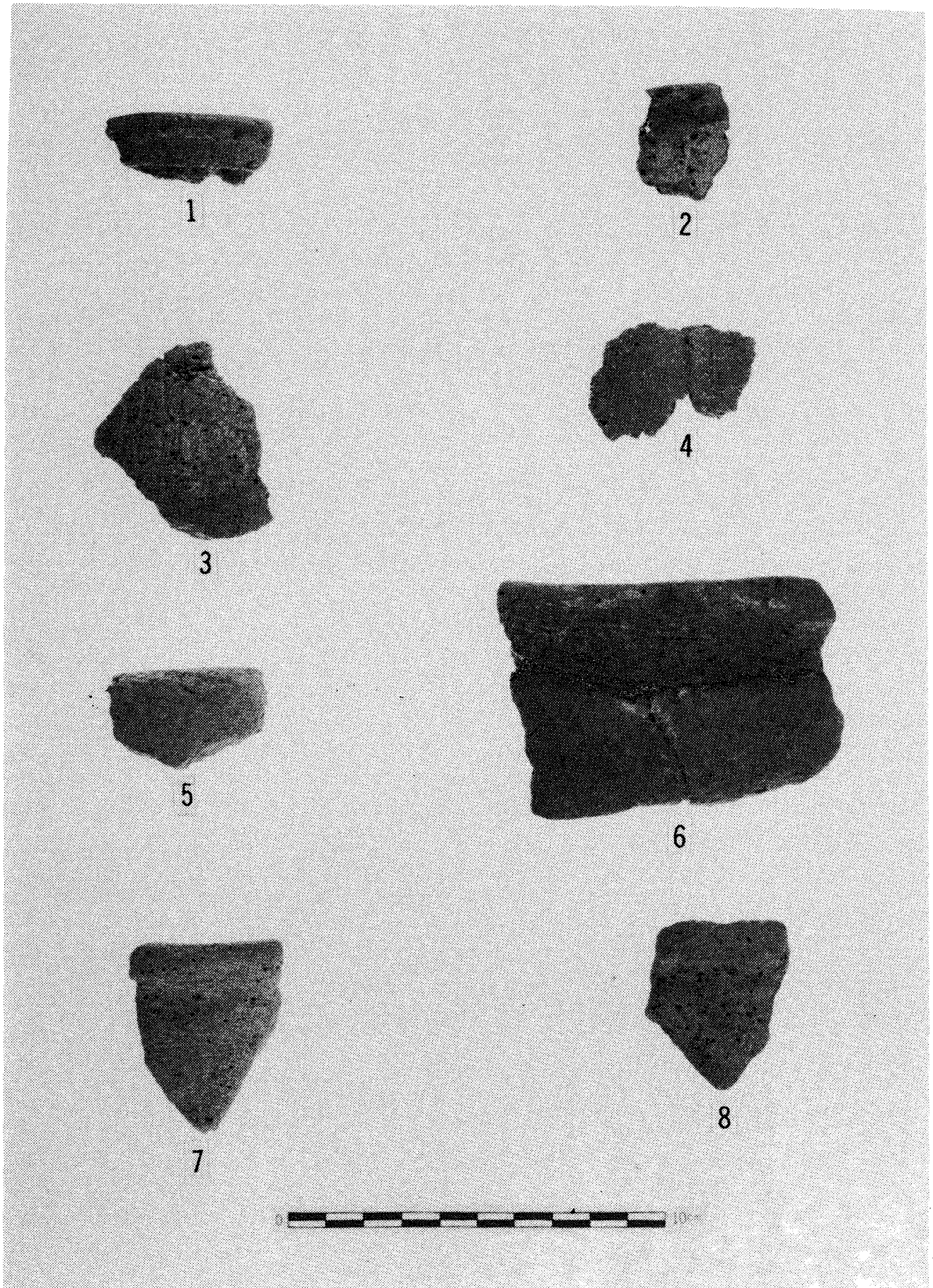


2

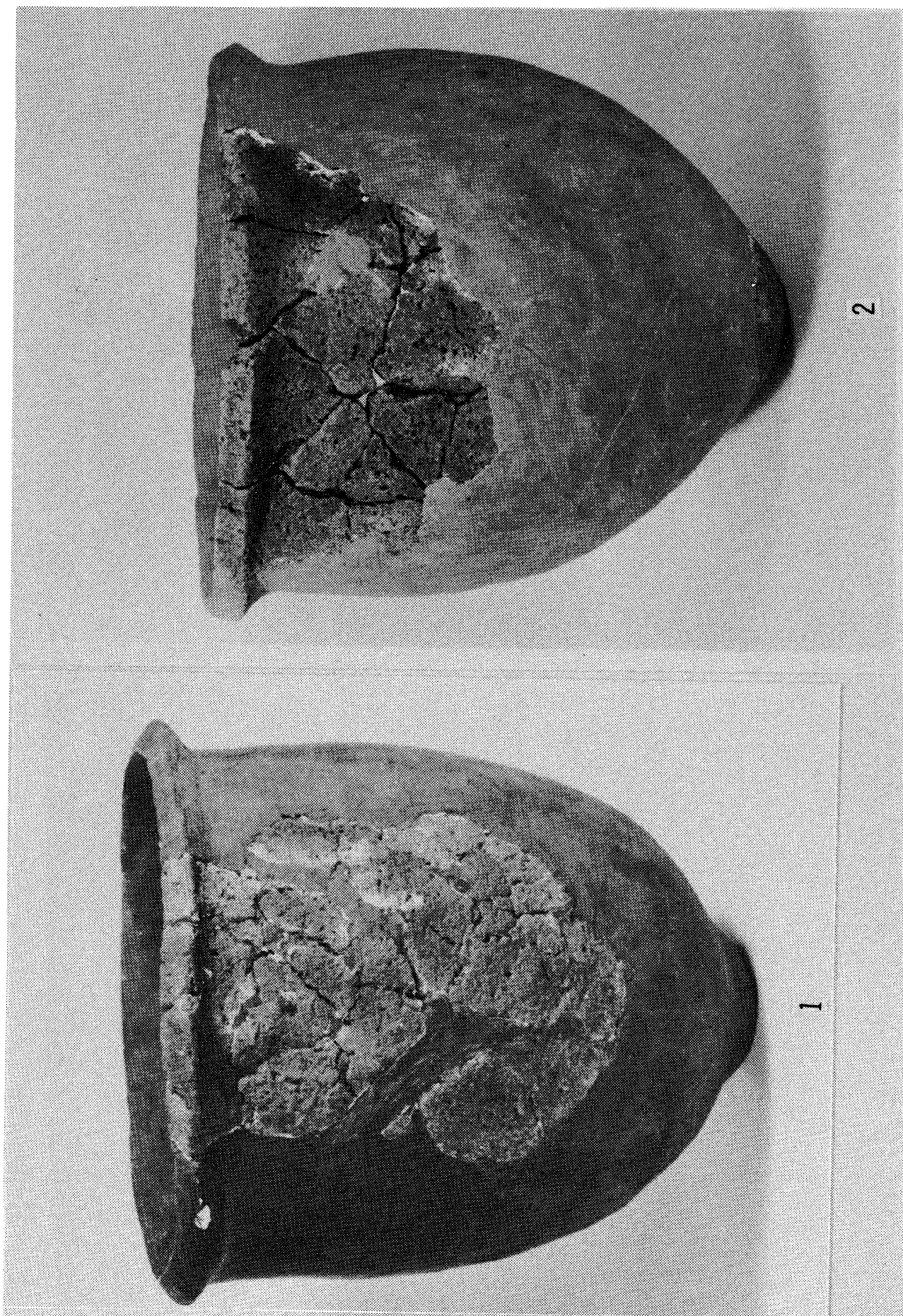


1

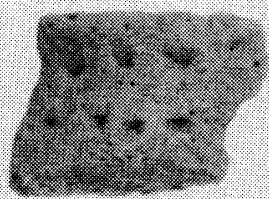
第33図版 室川上層A式土器



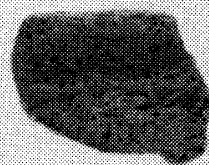
第34図版 室川上層 A 式土器



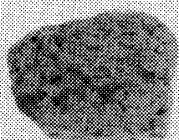
第35図版 室川上層 B 式土器



1



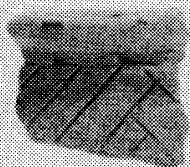
2



3



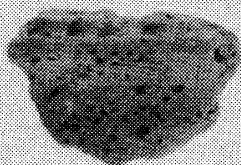
4



5



6



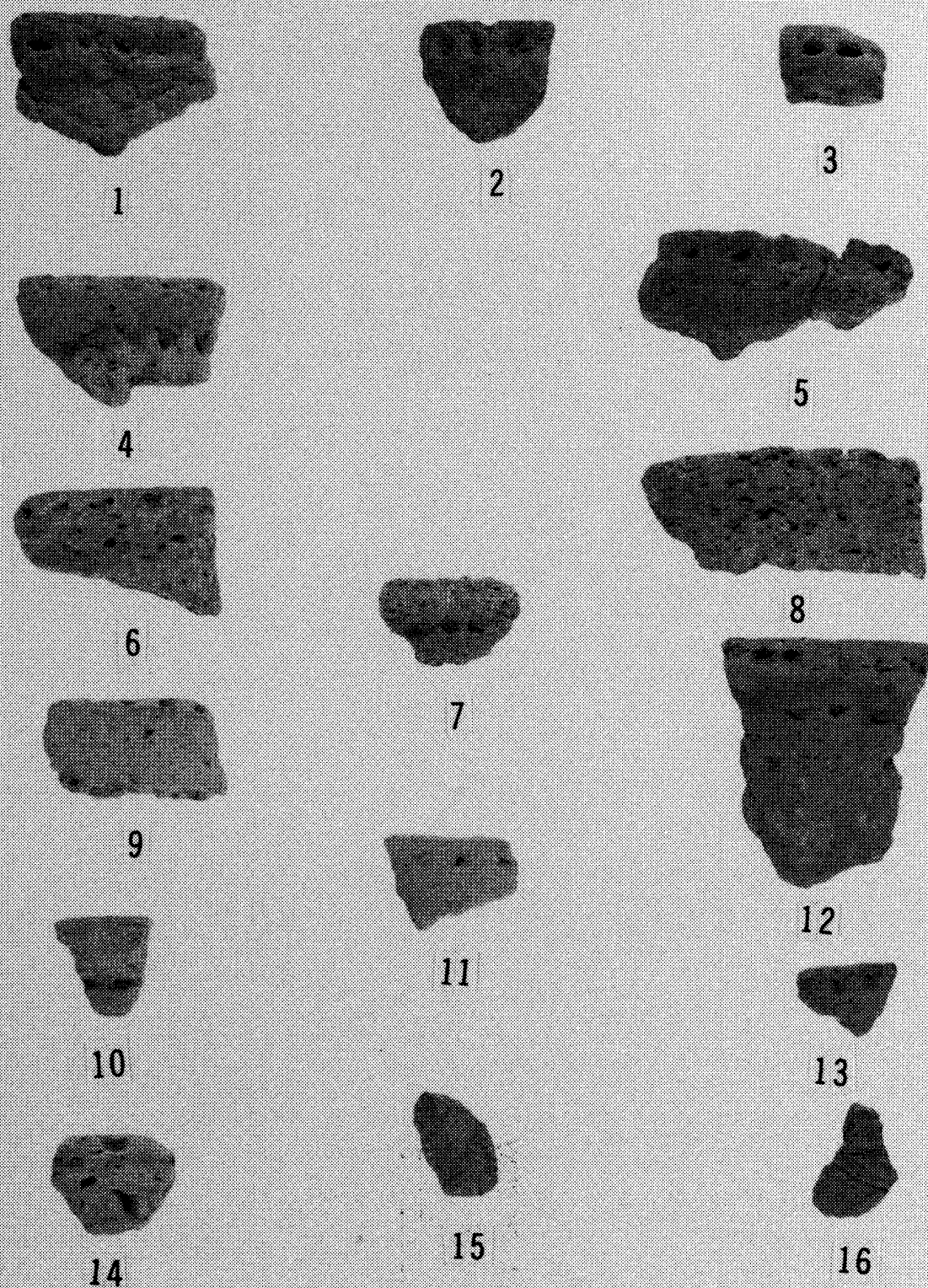
7



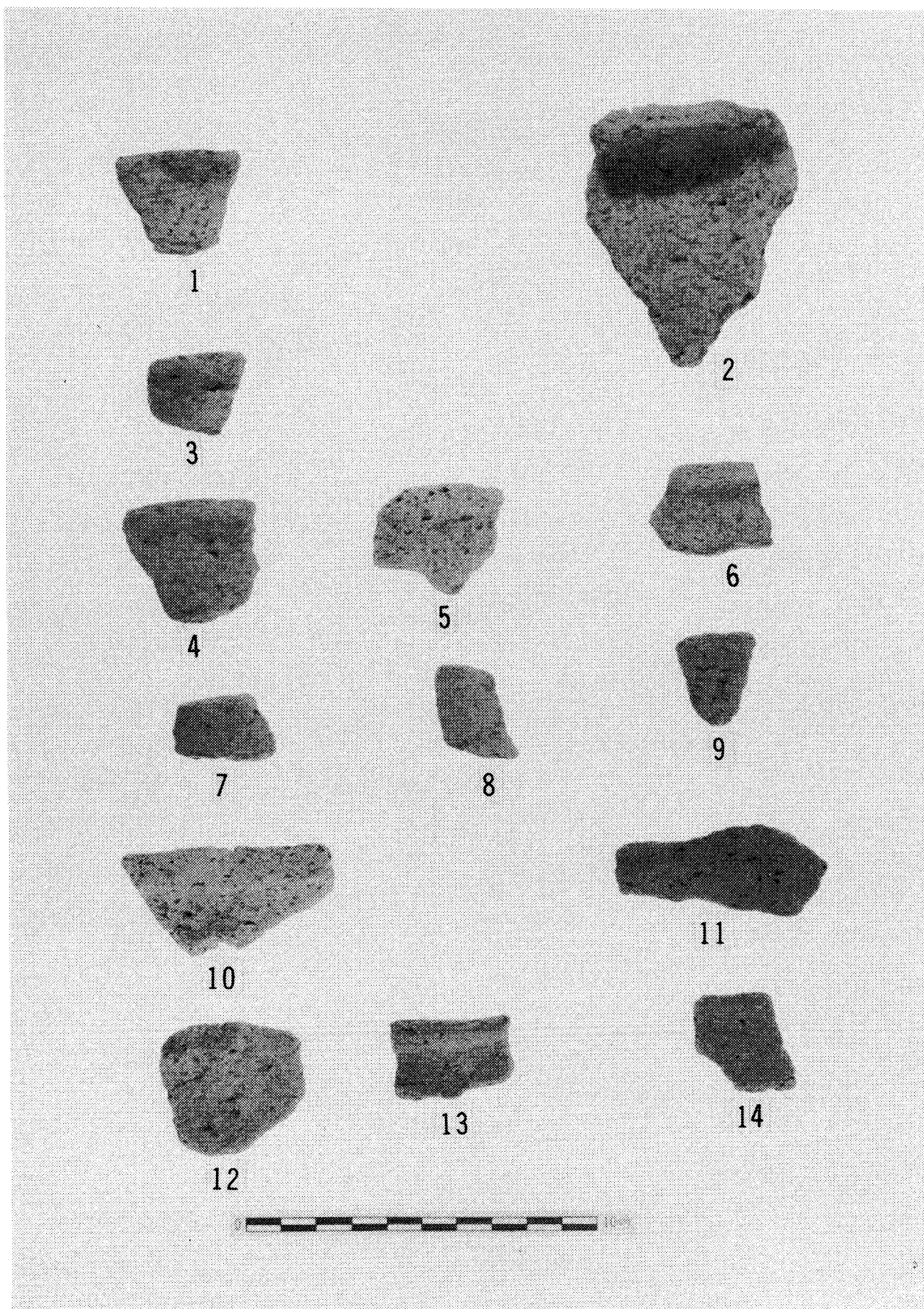
8



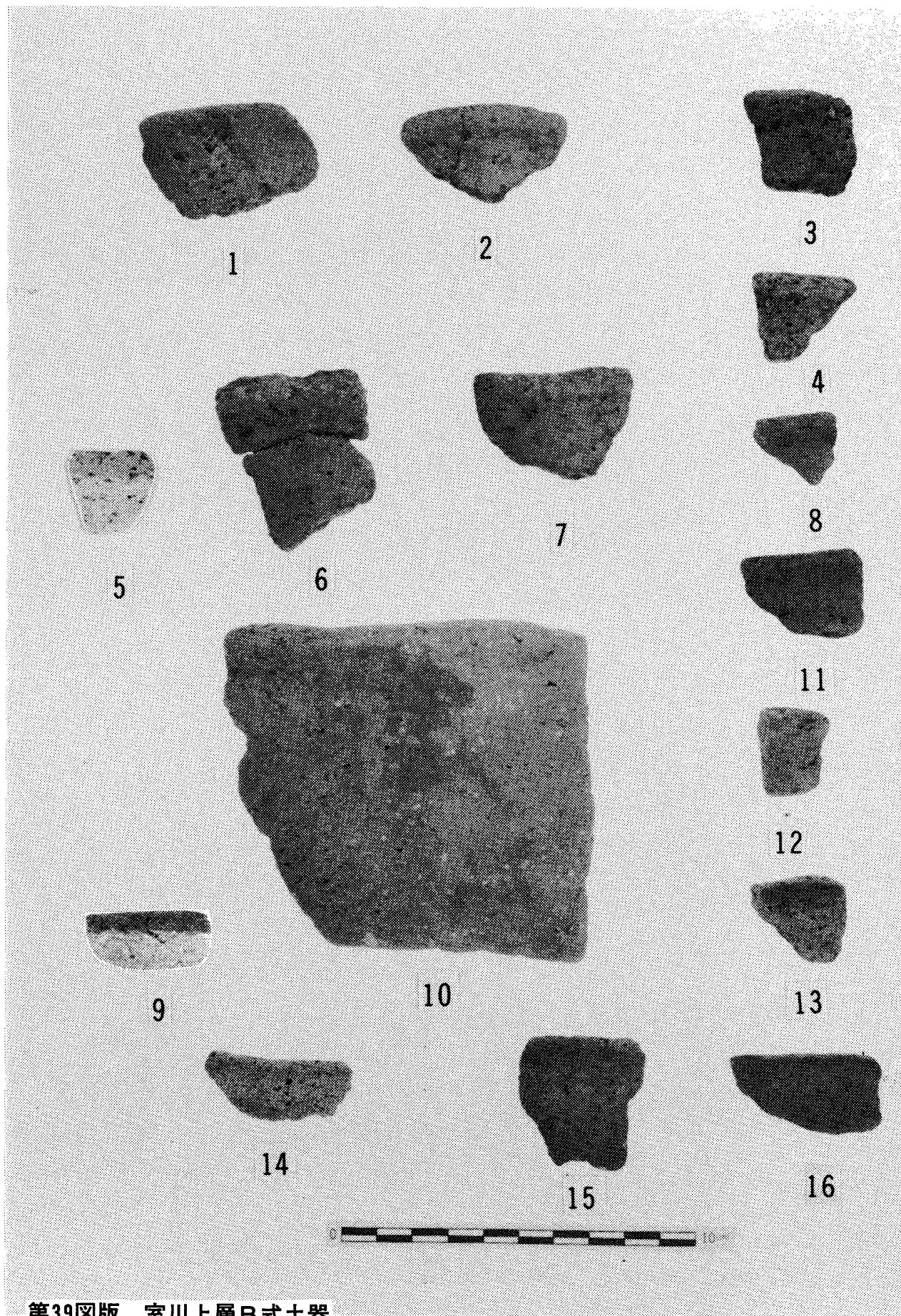
第36図版 室川上層 B 式土器

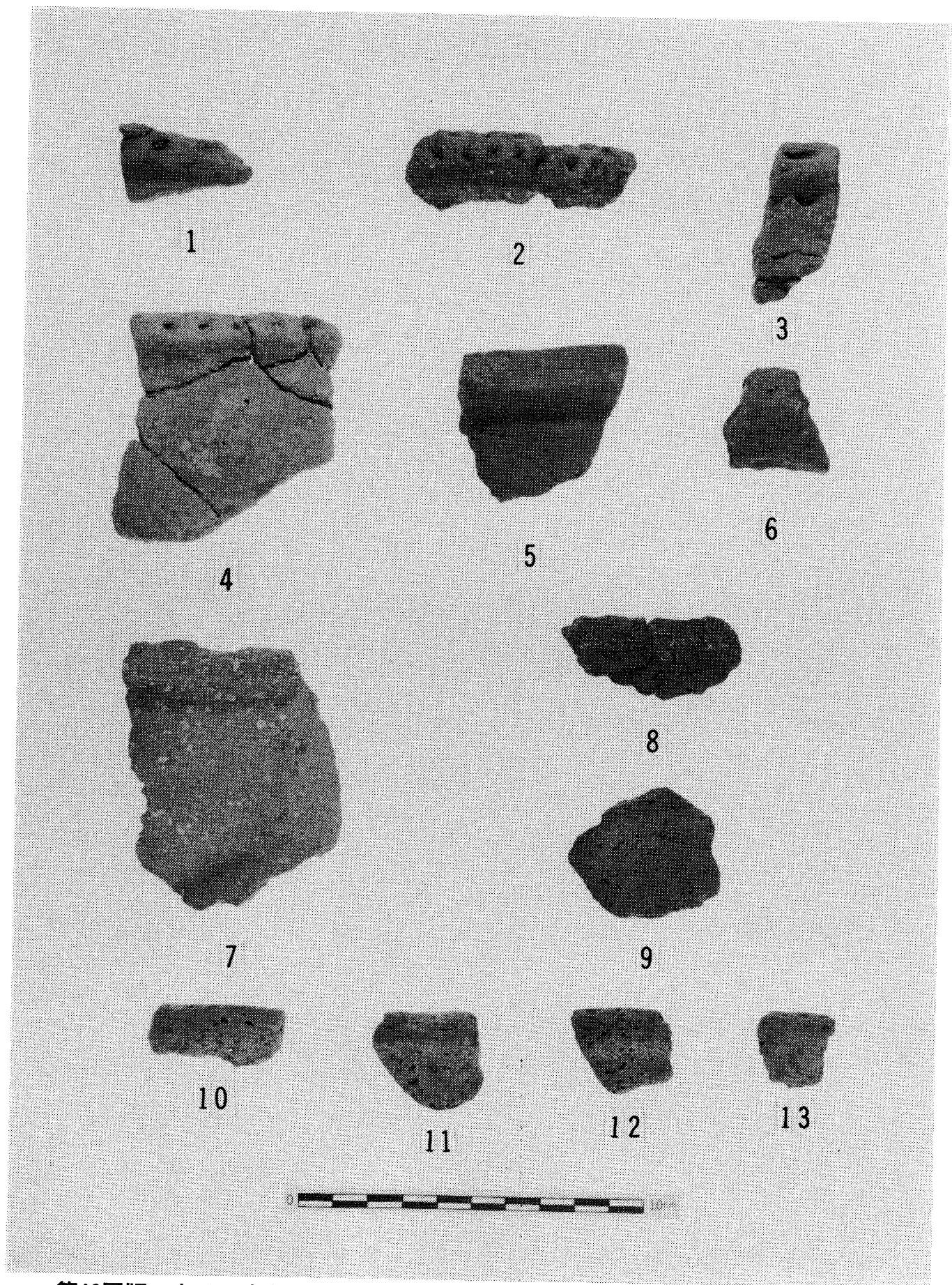


第37図版 室川上層 B 式土器

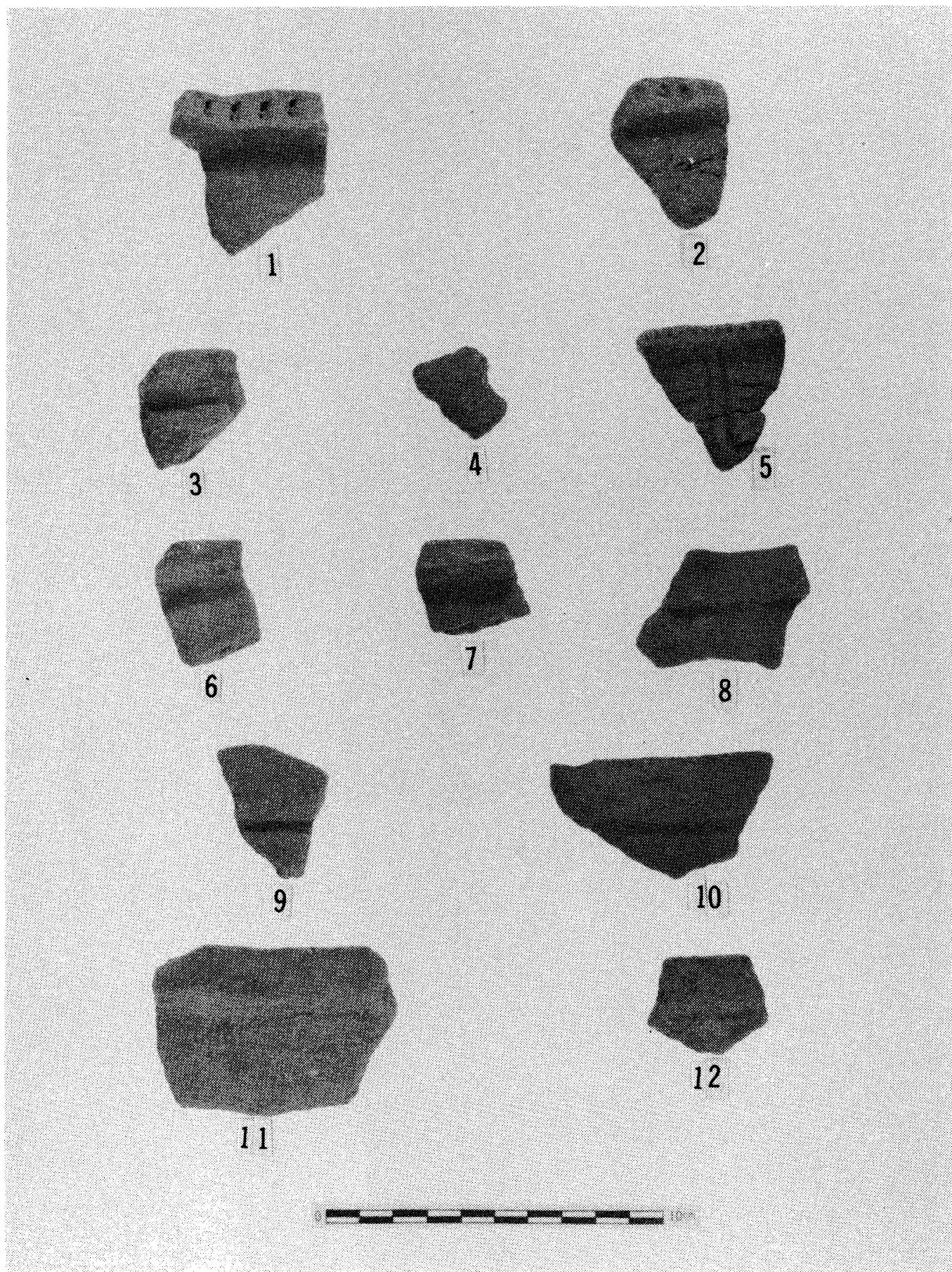


第38図版 室川上層 B 式土器

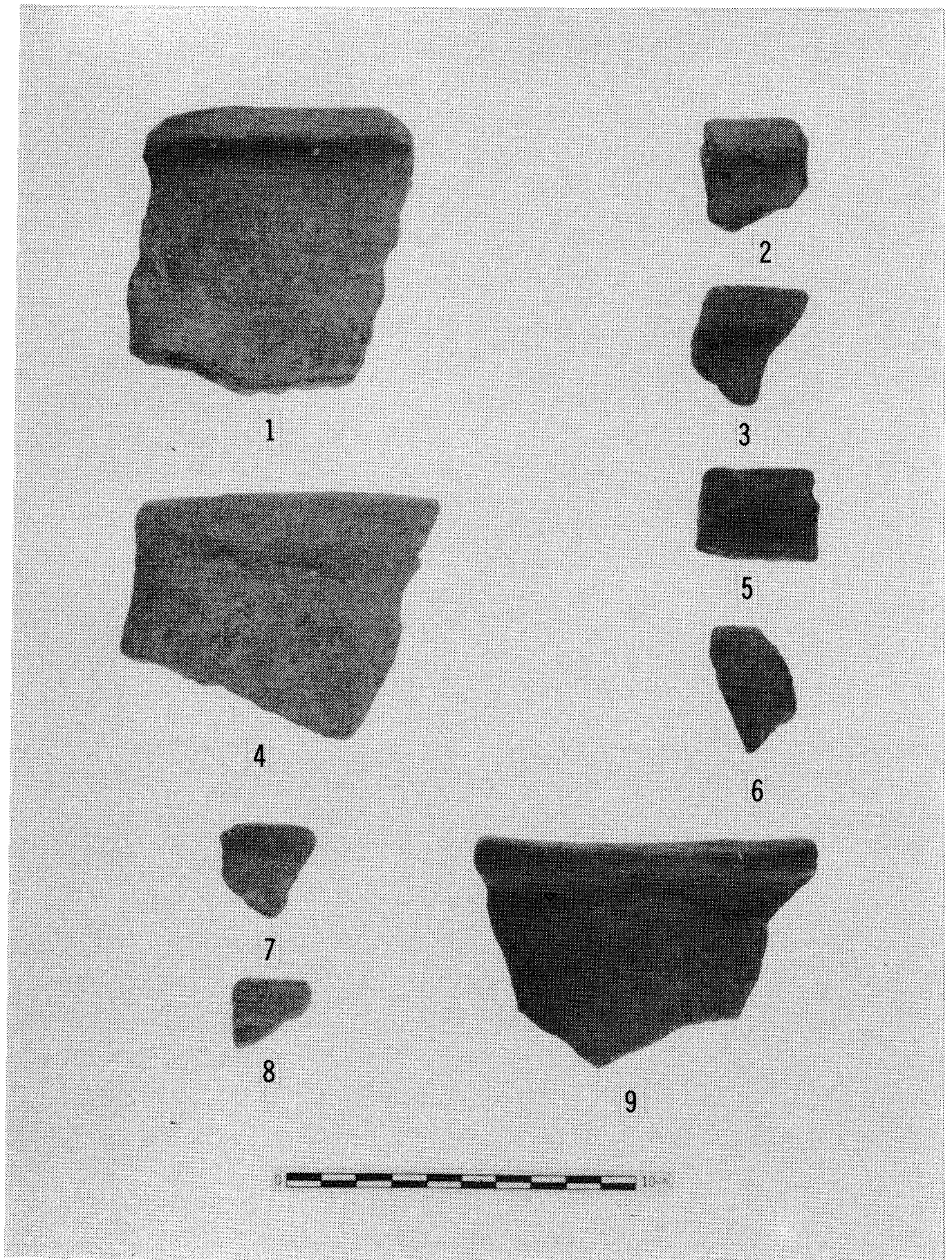




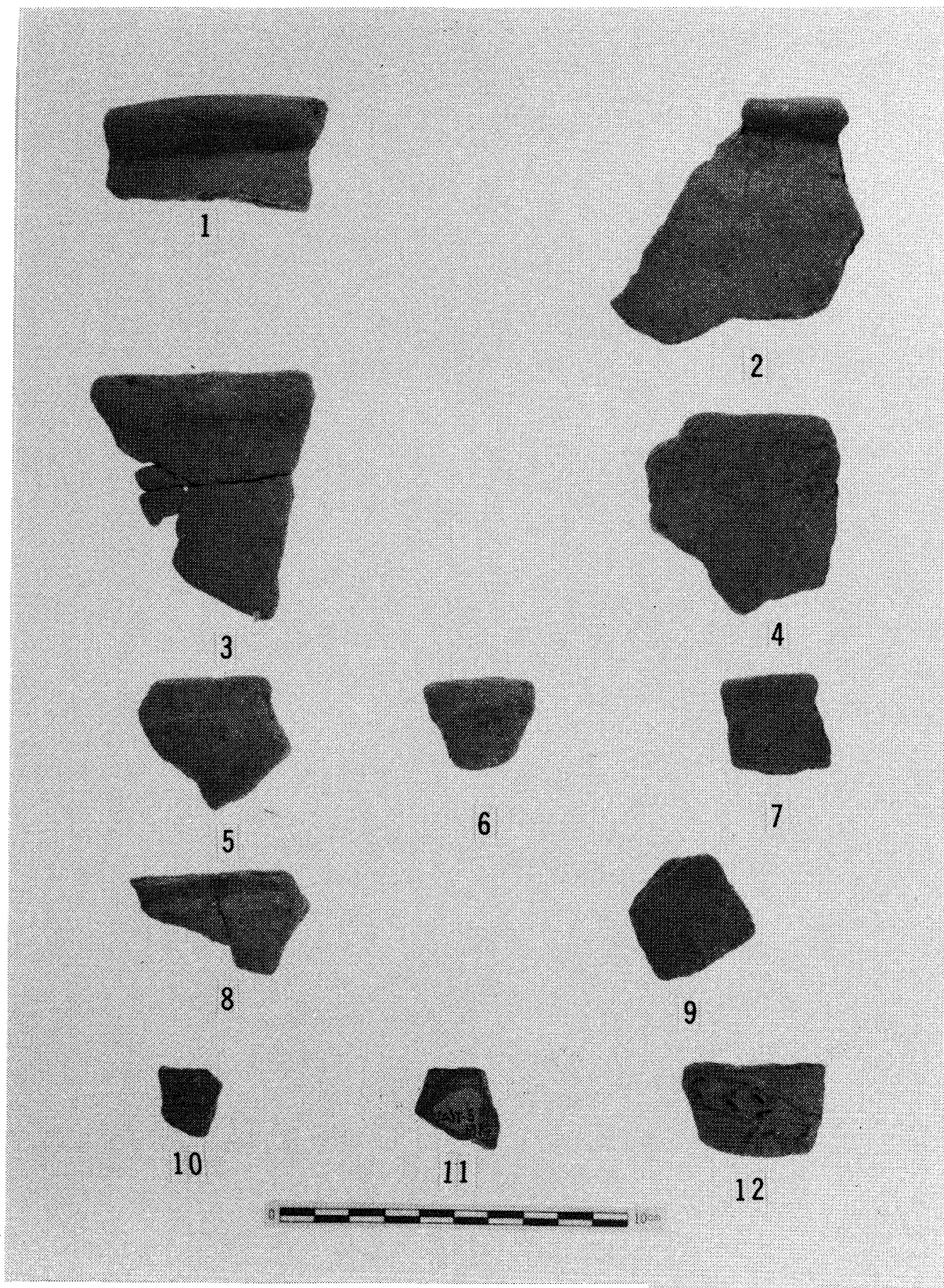
第40図版 室川B式土器および各期の宇佐浜式土器



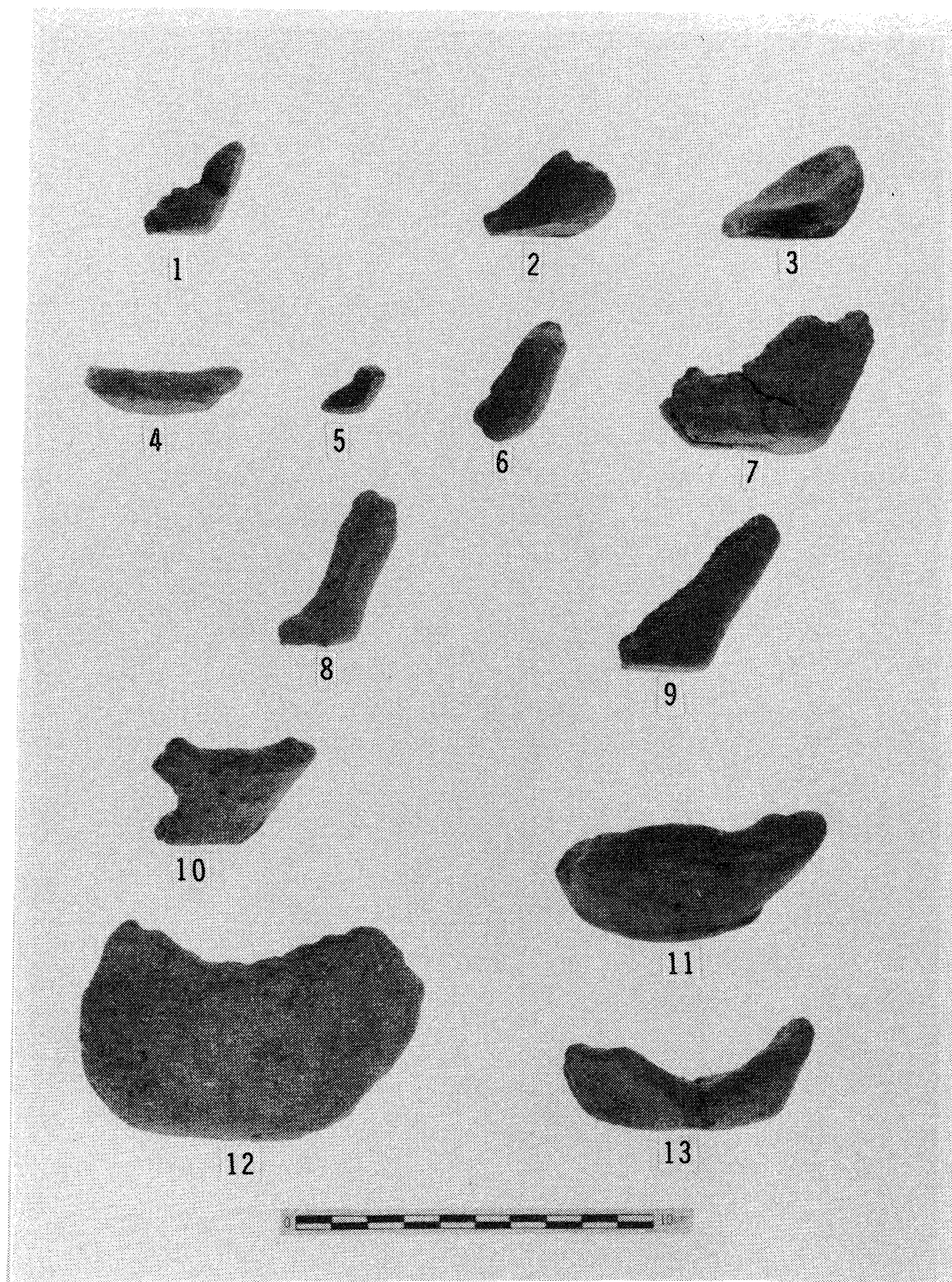
第41図版 宇佐浜式土器



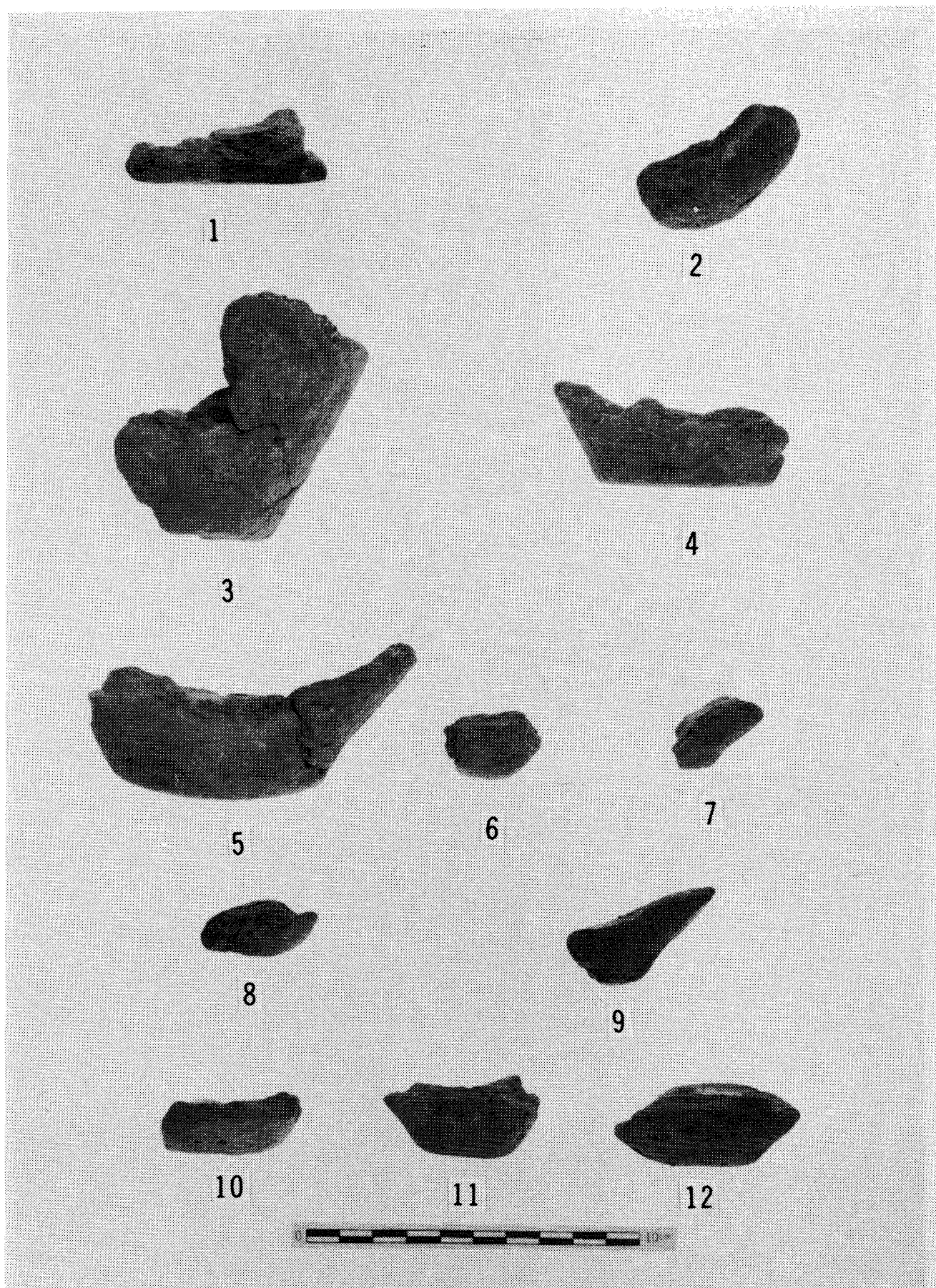
第42図版 宇佐浜式土器



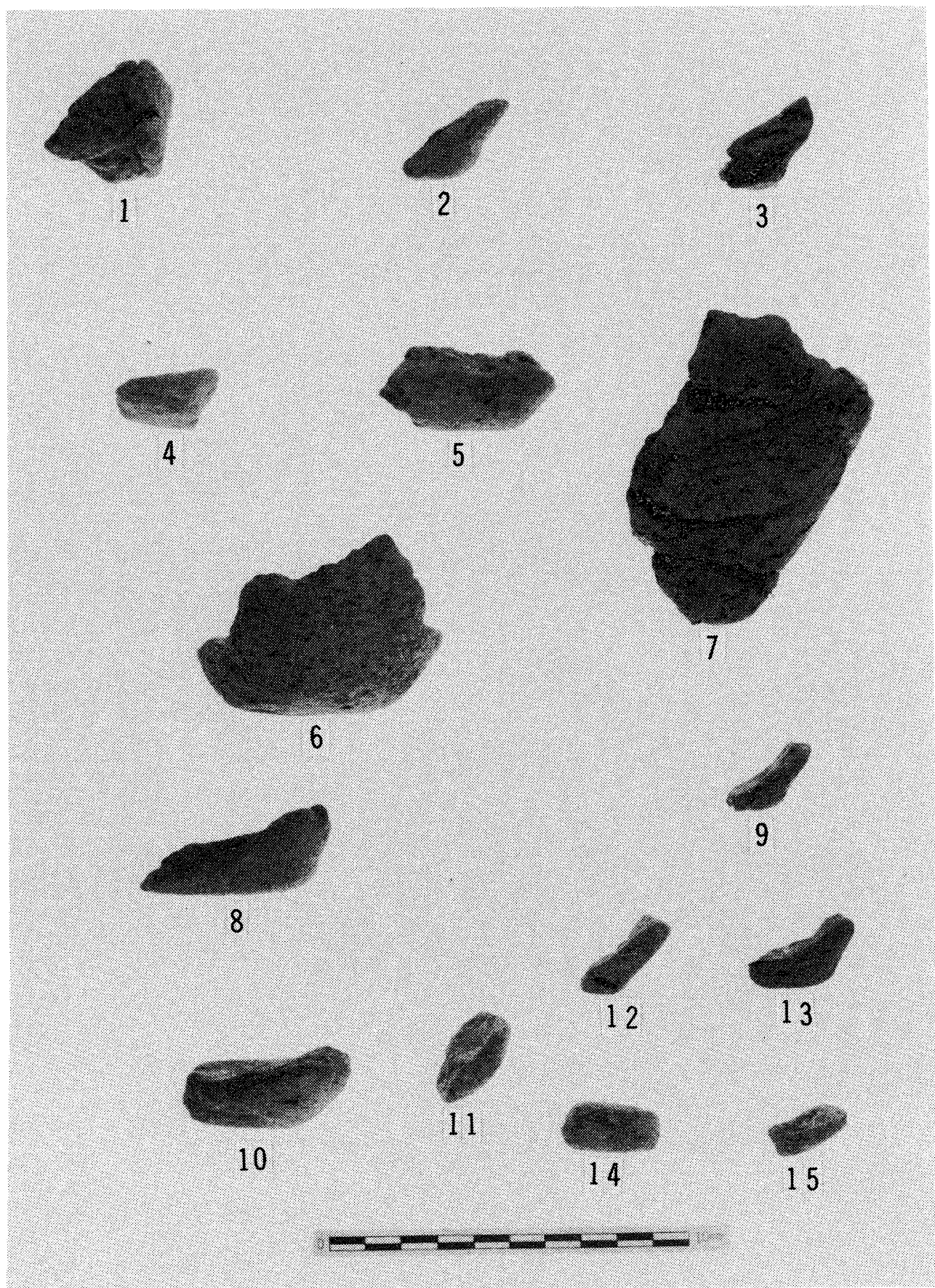
第43図版 宇佐浜式土器(1～9)および奄美系土器(10～12)



第44図版 底部（1～6は伊波～大山期、7～13は室川A期）



第45図版 底部 (1・2は室川A期、3～8は室川B期)
(9～12は室川上層A期)



第46図版 底部 (1・2 室川上層 A 期、3～7 は室川上層 B 期、8～11 宇佐浜期)
(12・13・15 は時期不明、14 は伊波～大山期)